

## 第IV章 考察

### 第1節 検出遺構

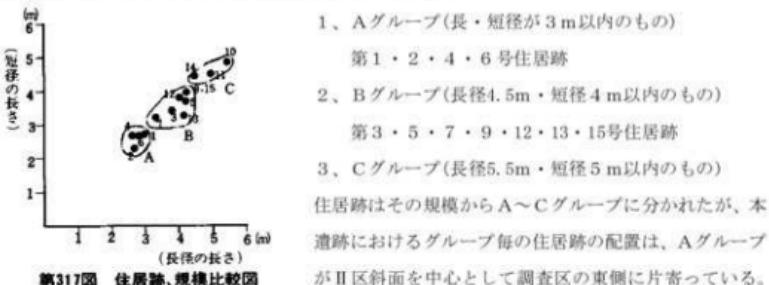
#### (1) 繩文時代

##### ア、竪穴住居跡

検出した繩文時代の住居跡は、I区で1軒、II区で11軒、III区で4軒の総数16軒で、特にII区から多く検出している。これらの住居跡を(平面形・規模)・(炉の位置・形態)・(出入口)・(柱穴)・(構築年代)の順で分析していきたい。

(平面形態・規模) 第317図

16軒の住居跡の平面形態は、円形・楕円形・不整円形・不整楕円形の四つに分類することができる。第4号住居跡のはば円形の形態をのぞき、不整形のものが主体を占める。次に住居跡の規模は、第8・16号住居跡の壁が不明なため除外し、14軒の住居跡についてみると最大の規模をもつものは第10号住居跡で、最小のものは第2号住居跡である。住居跡の長・短径の関係を表にすると三つのグループに分類することができる。



Bグループは散在している。Cグループは、II区平坦面の東北区2軒、III区平坦面に1軒配置している。住居跡の規模から区分けすると、Aグループが小形な住居跡、Bグループが中形住居跡、Cグループが大形住居跡といえる。

住居跡の規模から繩文時代後期における時期毎の県内の遺跡と比較したい、その際に時期を十腰内I式を前段階と後段階に二分して比較検討する。前段階としては<sup>註11</sup>、螢沢遺跡(青森県1984)の長径7.7mをはかる第10号住居跡を除くと、繩文時代後期初頭～前半の牛ヶ沢<sup>註12</sup>遺跡(青森県1984)、中ノ沢西張遺跡(青森県1976)、十腰内I式の一ノ瀬遺跡(青森県1984)、妻の神遺跡(青森県1976)、鶴塚遺跡(青森県1983)等の遺跡で検出した住居跡は、長径が4.5m以内で本遺跡の分類したA、Bグループの中に収まる。一方、十腰内I式以降では、十腰内III式の

高尾根山遺跡（弘前市1981）・中宇田遺跡（青森県1974）、十腰内IV式の馬塚漸<sup>(1)</sup>遺跡（青森県1982）など長径が5m以上で、Aグループのより大形な住居跡が多い。このことは十腰内I式以前は小形・中形が主体であった住居跡が、十腰内I式以降に大形に推移していくのではないかと思われる。

#### （炉の形態・位置）

本遺跡で検出した炉の形態は、地床炉・単独縄炉・石組炉の三つの形態に分かれる。

地床炉——4軒……………第1・2・14・16号住居跡

単独縄炉——4軒……………第3・4・5・8号住居跡

石組炉——7軒……………第7・9・10・11・12・13・15号住居跡

地床炉は床面を掘りくぼめて構築したものである。単独縄炉は、炉の長軸方向に大形の縄がみられるもので第3・5号住居跡などは縄の掘り方もみられる。この単独縄炉は、本県の縄文時代後期の住居跡の例でみると、後期前半の鶴平<sup>(2)</sup>遺跡（青森県1984）、十腰内I式の鶴庭遺跡（青森県1982）で検出されており、検出例が少ない炉である。石組炉は、丸味のある安山岩を使用して円形に配置している。第7号住居跡は、縄を有していないが縄の抜き取り痕の跡があり石組炉に分類した。

炉の位置は、地床炉及び単独縄炉が住居跡のほぼ中央に位置する。石組炉は、第7・11号住居跡がほぼ中央に位置するが、他の石組炉は住居跡の長軸のどちらかに片寄る傾向がみられる。このような現象は、本県の縄文時代中期末葉の大木10式の土器を作出する住居跡を検出した田ノ上遺跡（青森県1982）・山崎遺跡（青森県1983）にもみられる。

#### （出入口）

本遺跡の住居跡で出入口の部分の構造が判明した住居跡は第5・8号住居跡の2軒である。第5号住居跡は、「11」状の形で第8号住居跡は「U-」状の形状を呈している。この様な出入口をもつものは、十腰内III式の神明町遺跡（青森県1980）で検出され、出入口の部分を住居の中に構築している。また、縄文時代晚期大洞C<sup>(3)</sup>式期の右工門次郎庭遺跡（青森県1982）では、出入口の部分が外に構築され、縄文時代後、晩期では様相が異なっている。第3・7号住居跡では、出入口の部分はないが柱穴間の間隔も広く、その間を出入口として使用したと思われる。また、第2・14号住居跡では西壁寄りに一段高い盛り土を検出した。これらは、住居跡の出入口としての踏み台なのか、祭壇等に使用したかどうかは不明である。

柱穴配置は、主柱穴が2個のもの（第2号住居跡）、主柱穴4本を配置しているもの（第5・10号住居跡）があり床面中央寄りの主柱穴を基本としたものと、壁柱穴を壁際に配置して（第6・7号住居跡）、壁寄りに配置するもの（第3・15号住居跡）がみられる。第4・14号住居跡は、壁柱穴を検出しなかった住居跡である。また、第8・9・11・12・13・16号住居跡は、

柱穴配置が不明なものである。

（構築年代）

本遺跡から検出した16軒の住居跡で床面・床直から土器がセットとして出土したのは、第3号住居跡の1軒である。したがって本住居跡の時代は、床面、床直の遺物と住居跡内の覆土の遺物から決定し第I～IV期に区分した。

（第I期）	縄文時代中期末葉（大木10式）	第9・10号住居跡
（第II期）	縄文時代後期初頭～前半（末命名型式）	第11・15号住居跡
（第III期）	縄文時代後期（十腰内1式・第IV群1段階）	第1・2・5・8・13・14・16号 住居跡
（第IV期）	縄文時代後期（十腰内1式・第IV群2段階）	第3・4・6・7・12号住居跡

（第I期）

本期に属するものは、第9・10号住居跡の2軒である。第9号住居跡は覆土から大木10式の土器が出土し、第10号住居跡は床面から、縄文施文後に継ぐ綾絡文を施文した精製の土器を出土し、この種の文様は多く大木10式の時期のものに施文されており本期に含めた。2軒の住居跡の配置は、第II区の西側地区の傾斜面に位置し、それぞれの距離は約8mである。

（第II期）

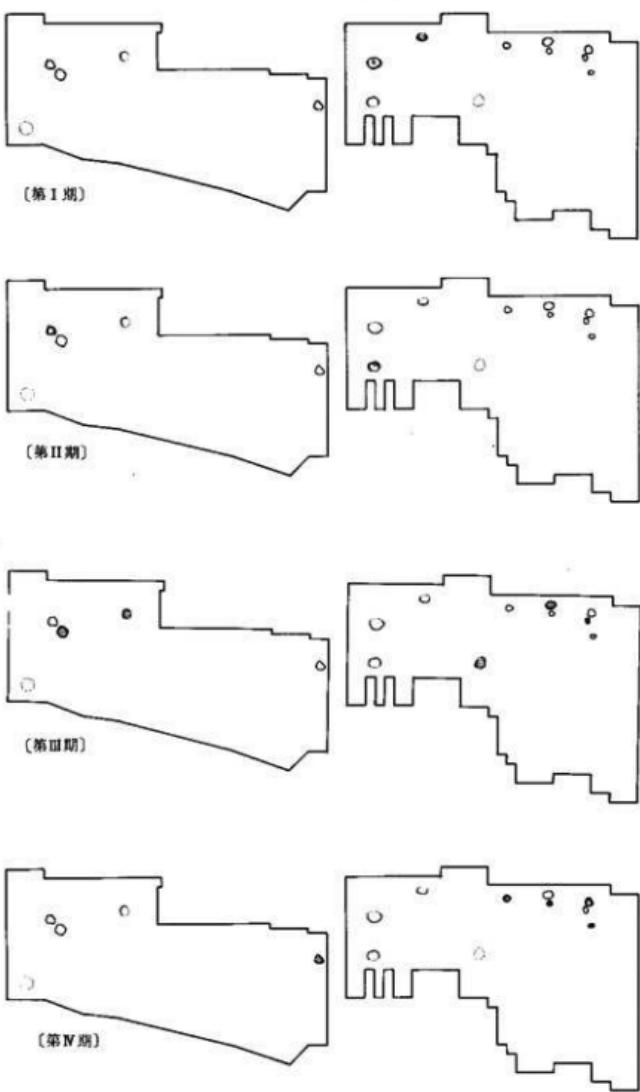
本期に属するものは、第11・15号住居跡の2軒である。第11号住居跡は床面から遺物が出土しなかつたが、覆土から螢沢第2群土器（青森市1979）が出土している。また、第15号住居跡では、床面・床直から縄文のみの精製土器が出土し、覆土からは第IV群1段階の土器が出土している。このことから第IV群1段階の以前に構築されたと考え、本期に含めた。本期の住居跡の配置は、II区平坦面の西側とIII区平坦面の西側に各々1軒配置している。

（第III期）

本期に属するものは、第1・2・5・8・13・14・16号住居跡の7軒である。第1・13・14号住居跡の3軒からは、床面・床直から第IV群1段階の土器が出土した。第2・5・8・16号住居跡の4軒は覆土から第IV群2段階の土器が出土したので、第IV群2段階以前の本期に含めたものである。第III期の住居跡の配置は、I区に1軒、II区斜面に2軒、II区平坦面に1軒、III区に3軒と分かれて配置している。

（第IV期）

本期に属するものは、第3・4・6・7・12号住居跡の5軒である。第3・4・12号住居跡の3軒からは、床面、床直から第IV群2段階の土器が出土した。第3号住居跡は土器が4個体出土し、良好なセット関係を示す資料である。第6・7号住居跡の2軒は覆土から第IV群3段階の土器が出土して、それ以前と考え本期に含めた。第IV期の住居跡は、II区からのみ検出し



第318図 縄文時代住居跡変遷図

第82表 繩文時代住居跡一覧表

住居跡番号	平面形	長径	短径	床面積	かの位置・形態	出入口	施設	時期
第1号住居跡	不整円形	2.9m	2.26m	4.2m <sup>2</sup>	中央から東寄り 地床か	無	無	床面-Ⅳ-1
第2号住居跡	不整円形	2.7m	2.3m	4.2m <sup>2</sup>	中央部 地床か	無	西壁に一段高い 土	覆土-Ⅳ-2
第3号住居跡	不整円形	3.75m	3.45m	8.6m <sup>2</sup>	中央部 単独煙突	?	無	床面-Ⅳ-2
第4号住居跡	円形	2.7m	2.7m	4.3m <sup>2</sup>	中央から西寄り 単独煙突	無	無	覆土-Ⅳ-3 床面直-Ⅳ-2
第5号住居跡	椭円形	4.2m	3.7m	11.5m <sup>2</sup>	中央部 単独煙突	北東壁に位置	無	覆土-Ⅳ-2・3
第6号住居跡	不整円形	2.8m	2.7m	5.2m <sup>2</sup>	無	無	無	覆土-Ⅳ-3 床面直-?
第7号住居跡	不整円形	3.3m	3.2m	7.9m <sup>2</sup>	中央部 石調か	?	無	床面直-?
第8号住居跡	椭円形	(5)m	(4)m	(3.1)m <sup>2</sup>	中央部 単独煙突	南東側に位置	北側で一部埋没 が巡る	覆土-Ⅳ-2・3
第9号住居跡	不整円形	4.2m	(3.9)m	(11.0)m <sup>2</sup>	中央から北側寄り 石選炉	無	無	覆土大木10式 床面直根製繩文
第10号住居跡	不整円形	5.4m	(4.8)m	(17.1)m <sup>2</sup>	中央から北寄り 石選炉	無	土壌を一基検出	覆土-Ⅳ-1 床面直根製繩文
第11号住居跡	不整円形	5m	(4.5)m	(15.3)m <sup>2</sup>	中央部 石調か	無	上層2基検出	覆土-密沢
第12号住居跡	不整円形	4.1m	3.7m	11.1m <sup>2</sup>	中央から西寄り 石調か	無	上層1基検出	覆土-Ⅳ-2 床面直-Ⅳ-2
第13号住居跡	椭円形	4.2m	(3.3)m	(8.1)m <sup>2</sup>	中央から南寄り 石調か	無	無	覆土-Ⅳ-1 床面直-Ⅳ-1
第14号住居跡	不整円形	4.5m	4.4m	14.7m <sup>2</sup>	中央部 地床か	?	西側に一段高い 盛上、土壌1基	覆土-Ⅳ-1 床面直-Ⅳ-1
第15号住居跡	円形	4.2m	3.9m	11.7m <sup>2</sup>	中央から北寄り 石調か	無	土壌2基検出	覆土-Ⅳ-1・2・3 床面直根製繩文
第16号住居跡	椭円形	(6)m	(5.2)m	(24.7)m <sup>2</sup>	中央部 地床か	無	土壌1基検出	覆土-Ⅳ-2・3

ている。

以上、第I期～IV期までの変遷をとらえることができた。これらの遺構の時期と配置関係を総括すると、第I期は相互に近いところに配置しているが、第II期ではそれぞれ離れて配置している。第III期においては3軒を一単位とした二つのグループと単独の住居跡との三つのグループに分かれ、分散化の傾向がみられる。しかし、第IV期においては第II・III期でみられた分散化の傾向ではなく一つのグループになる。I～III区に至る調査結果では、このような集落の変遷をとらえることができた。

註①繩文時代後期初頭～前半にかけては型式が定まっていないため型式名を用いなかった。

註②今回、礎を1個有する炉を単独煙突という名称を用いた。

註③神明町遺跡では、信仰的な強い特殊施設と記載しているが、出入口の部分と思われる。

(成田滋彦)

#### イ、土壌

本遺跡から検出した土壌数は405基と多量である。I区で1基、II区で136基、III区で268基

である。II区とIII区の土壤の分布状況は、II区が平坦面に散在し、土壤と土壤の切り合い関係が少ないので対して、III区の土壤は、平坦面の西側に集中している。

これらの土壤と他の遺構との配置関係をみると、II区において住居跡が北側の斜面に分布し南側の平坦面には土壤群が配置して住居跡群と土壤群が分離している。この傾向は、III区にもみられ斜面の捨て場からは土壤を検出しておらず捨て場、住居跡、土壤の三つの場が存在することが考えられる。

土壤の構築時期は、土壤内の遺物から縄文時代早期のものは、第375号土壤1基で縄文時代前期のものが第144・153・293・302号土壤の4基で、縄文時代晩期のものは、第141号土壤1基で、縄文時代早、前、晩期の土壤は少ない。これらの土壤は、他の時期の遺物が出土しておらず当該時期のものと思われる。他の土壤では、ほとんど第IV群土器が出土しており、縄文時代後期（十腰内1式）のものと考えられる。しかし、調査区第III区での土壤の切り合いが激しいことながら、土壤の構築時間に幅があることは充分考えられる。



第319図 フラスコ状ピット遺物出土状態実測図

0 2m

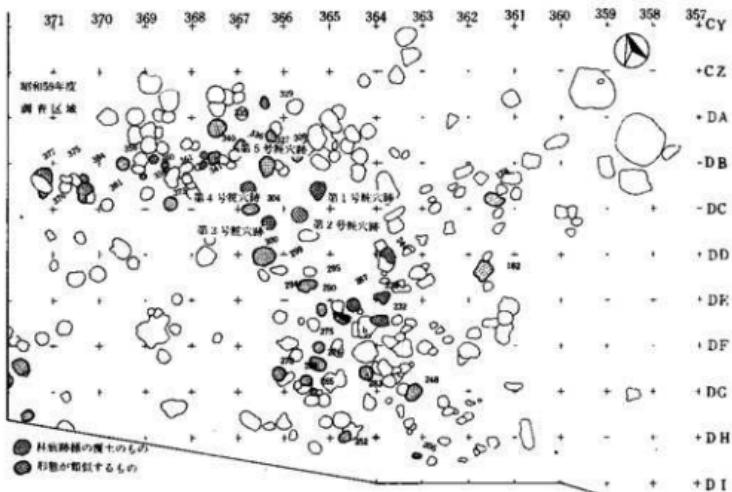
土壤での遺物出土状況をみると、土製品が出土した土壤が多いので、土壤内の土製品について記載する。これらの土壤は405基のうち、37基で土製品が出土した。ある。II区で3基・III区で34基で、IV区の土壤から多く出土した。その種類は、動物形土製品・鐸形土製品・耳栓・靴形土製品・カメ形土製品・円盤状土製品の6種類で、土製品の種類としては少ない。また、円盤状土製品の出土頻度が高いのが特徴的である。II区の土壤からは、動物形土製品・鐸形土製品・靴形土製品が出土し、IV区では、円盤状土製品・カメ形土製品・鐸形土製品・耳栓と、II・III区において土製品の種類・様相が異なることが指摘できる。円盤状土製品は、第178・219号土壤の底面及び床直から出土して土壤が埋没する際に混入したとは考えられず意識的に置いたと考えられる。また、197号土壤では、7個の円盤状土製品が覆土から出土しており、単なる遺物の廃棄ではなく、儀礼的な要素を含んでいるものと思われる。

(成田滋彦)

#### ウ、柱穴跡

IV区平坦面で発見された柱穴は、縄文時代の遺構としては類例の少ないものである。この遺構がどのような性格をもつものであるか、他県の類例をふまえながら検討してみたい。

まず、本遺跡で発見された柱穴についてその特徴をあげると以下のようになる。



第320図 柱穴跡分布図

第83表 柱穴跡計測表

番号	本主痕跡種	掘り方 cm		深さ cm	底面
		開口部長	底部長		
第1号	62×52	140×123	118×110	150	酸化して堅い
第2号	68×56	145×136	155×140	148	しまっておちこむ
第3号	74×62	131×119	127×106	154	
第4号	40	131×129	123×121	144	酸化して堅い
第5号		152×136	138×112	150	
第6号	39(開口部) 26(底部)	79×69	68×58	164	10cmほどの厚さに変色

- ・堅穴遺構内にあるのではなく、平地に直接掘り込まれている。
- ・掘り方の形態が円筒形で、第6号を除いて開口部径・底径・深さとも150cm前後の大型のものである。
- ・柱痕跡は、径が40~70cm前後の円筒形である。
- ・柱痕跡は、第1号を除いて掘り方の中央にある。
- ・柱痕跡の底面は、赤褐色に変色して堅くしまった部分がみられるものが多く、柱の重量を受けたための土の変化と考えられる。
- ・埋土や柱痕跡の最下部には、黒色土の蓄積がある。これは有機質のものの腐植土であり何らかの根固めなどが行われ、それが腐植したために生じたもの可能性もある。
- ・これらの柱穴は、6基のうち規模の似ている第1~5号までの5基が、楕円形又は六角形に配置されているようである。
- ・この配置の内側には他の遺構や、炉を思わせるような焼土などはみられない。

次に本遺構の構築時期であるが、埋土と柱痕跡に含まれる土器は、いずれも縄文時代後期IV群のうち、J類以外のもの、つまり後期前半のものである。また、第1号の確認面上で出土したほぼ完形の壺形土器第250図1は、縄文時代後期中葉のものである。第1~5号の5基は近接して配置され、同時期のものである可能性が強い。このためこれらはいずれも後期前半のものであろうと思われる。なお、第1号は第305号土壤を切って構築されているため、第305号土壤よりは後のものである。また、第3号の埋土上面には、石の抜き取り痕らしい落ち込みがあったが、この抜き取り痕が配石遺構のものとすれば、本遺構の構築時期は少なくとも配石遺構の構築以前のもの（同時存在も含めて）と考えられる。

このほかに土壤としたものの中に柱痕跡はみられないが、掘り方が形態的に類似するものがみられる。これを第320図に示した。

これらをみると、III区西側の配石遺構の外側に何基もの柱穴が分布しているようにみえる。第1~5号のように、楕円形に配置している部分は見当たらないが、土壤が多数密着している部分にはそのような配列があるのかも知れない。また、調査時に見のがしたことも考えられ

る。 次に、他の遺跡でのこのような柱穴の例についてみたい。

岩手県西田遺跡では、大木8a式期のものであるが、柱穴が「長方形（実際には、短辺が外側三角形状に張り出す六角形状のものが多い）」に配置され、さらにそれらが何組も環状に遺跡中央の墓拵群をとりまくという配列を示している。これは平地式の建物とし、遺物が出土しないことから遺体を仮に安置して祭を行う靈送りの場所と考えている（岩手県教育委員会：1980）、石井は関東地方の後期前半の長方形柱穴列についてまとめ、これを平地式住居としている（坂上、石井：1976）。

長野県阿久遺跡においては、縄文時代前期の多数の柱穴列が発見され、方形配列のA・B類型を土間あるいは床をもつ掘立柱建物と推測しているが、円形の配列の可能性のあるC類型については埋葬儀礼と関連するものとらえている。（長野県教育委員会：1982）鈴木は西田遺跡や関東の長方形柱穴列を紹介し、それらについて平地式の掘立柱建物址という考えをとっている（鈴木保彦：1984）。また、水野は同じものについて掘立柱建物や祭棧敷としている（水野：1984）。南は、石川県の晩期のチカモリ遺跡の例について紹介し、これを有覆屋の建物と推定し、「①環状木擁説、②柱を立てる祭祀説（トーテムポール説）、③神社祖形説、④若者宿のような集会所的な機能をもった大家屋説」を有力な説とし、「⑤櫛説、⑥呪術的舞台説、⑦高床式風葬説」を、可能性のあるものとしてあげている（南：1982）。これと同様のものとしては、石川県真脇遺跡の晩期のもの（能都町教育委員会：1984）が知られる。近野遺跡では、縄文時代中期の大形の竪穴住居跡が発見されたが同時にこの住居跡と同様の規模で壁や戸のない柱穴群をもつ遺構が検出された（青森県教育委員会：1978）。

以上のような類例があるが、本遺跡の例は、岩手県西田遺跡や、関東地方での多数の例がある長方形柱穴列に比べると、配置が長方形ではなく梢円形で、それぞれの柱穴や柱痕跡の規模も大きく、各々の配列を構成する柱穴の数も少ない。規模や配置の点では、むしろ石川県のチカモリ遺跡や、真脇遺跡の例に類似するものと思われる。ただ、これらの例も列を構成する柱穴が十数基と多いことや、南側に門扉や出入口らしい遺構が伴う点では異なっている。

先に述べたように縄文時代の柱穴列の構造や用途については様々な考えがあるが、本遺跡の場合も確定的なことはいえない。建物跡と考えるにはその規模に比べ柱痕跡が大きすぎるという西田遺跡の報告での指摘（岩手県教育委員会：1980）が本例の場合はより強く意識されるのである。そして柱によりさえられた上部の構造があったのではなく、配列された太い柱自体が構築物であったのではないかと思われる。いずれにしても本遺跡のⅢ区の西側という礫や土壙が環状に配置される場所にあり、配石遺構の外側に位置していることから、水野の各地の分析（水野：1984）にみられるように集落構造の中に組みこまれ、当時の社会にとって重要な意味をもっていた施設と思われる。

（坂本洋一）

## エ、焼土状遺構

本遺跡では、総数17基の焼土状遺構を検出した。II区で12基、III区から5基検出している。II区における焼土状遺構の配置は、II区斜面にやや集中して分布している他は全体的に「コ」状に散在して分布している。III区では、平坦面の西側にやや固まった状態で分布している。焼土の範囲は、第9号焼土状遺構の直径が141cmが最大で、他は同じく約1m以内の小規模の範囲である。不整形と円形を呈するが規則性を有さない不整形の形状が主体を占める。断面形は丸底状を呈するものが多く、底面は軟弱である。焼土の堆積の厚さは、第9号焼土状遺構が最高で、他は10cm内外の厚さが一般的である。他の遺構と切り合っている焼土状遺構は、17基の内で第4、13、15号焼土状遺構の4基である。新旧関係は、第13号焼土状遺構が土壤より古く他の焼土状遺構はすべて土壤より新しい。

遺物が出土したものは、第4・8・9・10・14・15・21号焼土状遺構の7基である。そのうち3基は土器が細片のため、図化は省略した第9号焼土状遺構では土器以外に礫、フレイクなどが出土している。覆土からの出土が多かったがまとった状態での出土はみられなかった。また、土器自体も二次火熱を受けておらず、外部から混入した可能性が考えられる。

用途性格に関しては、この遺構の底面及び壁があり火熱を受けておらず、長期間使用したとは考えられない。このことから短時間に使用した屋外炉的な性格を持つ遺構ではないかと考えられる。

(成田滋彦)

## (2) 弥生時代

弥生時代の検出遺構は、堅穴住居跡6軒、堅穴遺構7軒、土壤4基、焼土状遺構2基、埋設土器遺構1基、計20遺構である。この中には時期を明確に決定できない遺構も含まれてある。第23号住居跡、第9号土壤、第26号焼土状遺構がそれである。伴出遺物の出土状況が、時期を決定するにあたり、多少疑問が残る遺構である。

### ア、遺構の確認面と基本土層

遺構の規模によって、遺構の落ち込み確認面は、分かれている。第3号埋設土器遺構は、基本土層の第II層で、埋設土器の底部がすでに現われている。住居跡は、平坦地に立地している類（第18、20、22、23号）も、緩斜面に立地している類（第12、13号）もII～IV層で、住居跡の場合には、壁の高さが、確認面の土層と関係がある。この傾向は、堅穴遺構にもみられ、この類の確認面はすべて第III層上面である。土壤も同様である。

### イ、遺構の重複、建て替え

遺構の重複（牧場との切り合いを除く）は、第12号住居跡が縄文時代の土壤の上部に床面を構築している。第13号a住居跡は、第13号b堅穴遺構を掘り下げて構築している。まだ炉が2基検出されて、その新旧は判然としているが、少なくとも1度は建て替えが行われた可能性が

第84表 幼生時代堅穴住居跡一覽表

注(1)測定した位置実績、即ち床の中心からみた位置

強い。しかし、建て替えの前の住居跡が第13号 b 壁穴遺構を切り下げるか、建て替え後に切り下げるかは不明である。柱穴状ピットの配置と炉の関係は判然としない。第22号住居跡ではどの炉がどの柱穴状ピットの配置と結びつくか、その相関関係を明らかにすることができた。第15号壁穴遺構は、a、b、が重複して、第15号 b 壁穴遺構が新しいことは、後者の壁が、前者の床面を掘り下げてつくられたことによって判別された。土壤では、第7号 A、B が重複して、第7号 B 土壤が第7号 A 土壤を切って、その前後関係は、明らかである。遺構の重複は、以上の5遺構で認められた。

## ウ、竇穴住居跡

堅穴住居跡の一覧表は、第81表にまとめてある。ここではその表を整理してみる。

## A. 形態と規模

平面プランについては、壁面が残存しない住居跡や擾乱を受けた住居跡などがあって、良好な状態で発掘調査ができた住居跡は少ないため、推定の部分も加味してある。

**a**、平面プランがほぼ完全に近い住居跡は、第13号 a、20、22、23号で、第12、18号はその2分の1ほどを欠失している。**b**、平面形は第13号 a が円形で、その他の 5 軒は楕円形である。楕円形の住居跡の長軸は、東西方向 1 軒（第18号）のみで、その他の 4 軒はほぼ南北である。**c**、長軸方向の径は、470~696cm、400cm台 2 軒、500cm台 3 軒である。これらの床面積は、推定を含め 12.89~30.86m<sup>2</sup>である。12~19m<sup>2</sup>が 4 軒、25~30m<sup>2</sup>台 2 軒である。**d**、住民跡の配

置は、その住居跡間の距離からグループ化すれば、第12、13a、18号住居跡の3軒は弥生遺構群の北東部に三角状をなして並ぶ。この1群（仮にA群とする）は、床面積が約20~30m<sup>2</sup>の規模がある。この床面積から1軒当たりの居住人数を算出する方法はよく知られているところである。本遺跡のなかでは大型に組み入れられる住居跡で構成されている。他の1群（B群とする）は第20、22、23号住居跡の3軒で構成される。このB群は、弥生遺構群の南西部に立地して、東西方向で直線状に並んでいる。それらの床面積は12~16m<sup>2</sup>の小型住居跡で占められている。A群の第13号a住居跡とB群第20号住居跡の距離は10m、また、A群の第18号とB群の第22号との距離も10mほどである。A群のなかの住居跡間の距離は第12号と第13号aは1m、第13号aと第18号は約6m、第18号と第12号は約4mで、第12号と第13号aは、同時期に建てられた可能性は薄い。B群の住居跡間の距離は、第20号と第22号が約5m、第22号と第23号の距離は、1.5mでこの2軒が、同時期に建てられた可能性は薄い。住居跡の配置がこのように前後関係があるとすれば、A群では、第12号と18号が同時期または単独、あるいは第13号aと第18号が同時または単独あるいは各軒が断続的に建てられた可能性がある。A群とB群のなかの1、2軒と同時期または単独で併存したことも考えられる。またA群からB群に変遷したか、B群からA群へ変遷して建てられたと考えることも可能である。B群では、第20号と22号が同時期か単独、第23号と第20号が同時期または単独あるいは各軒が断続的に建てられた可能もある。

住居跡については前記のような住居跡の変遷が考えられるが、住居跡の建てられた時期とともに、堅穴造構と称した建物状の遺構についても考える必要がある。第13号a住居跡と第13号b堅穴造構は、後者が古い遺構である。第12号住居跡と第28号堅穴造構の新旧関係は不明であるが同時に建てられていた可能性はない。第19号堅穴造構と第20号、第22号住居跡の距離も約2mで、これも同時存在はないと考えられる。e 壁 壁は一周している例が少なく、途切れ、しかも壁が3~30cmほどで10cm台が多く、地山のローム層（IV~VI層）と第III層を併用した例が多い。地山で壁面を構築した例とは別に、ローム混じりの黒褐色土を盛土してつきかためて壁の代用にした（壁堤）例が第22号住居跡東側で発見されたことから、地山を利用した低い壁のある住居跡では、盛土による壁堤の構築も行われていたが、この遺構（周堤と仮称）は、現地表面に近く、耕作等によって早くから擾乱されてしまっていたことが考えられる。f 床面は、多くの場合地山のローム層（第IV~VI層）を利用して、地床炉の地熱がその周辺に伝わり赤変した床が認められた住居跡もある。

#### g、柱穴状ピット

柱穴状ピットの配置は、次のように分類した。

A類 主柱穴を壁面と床面に配して、全体が不整な“回”字状をなす類。第13号a跡…1軒

B類	主柱穴1個が壁面に接して、全体配置が不規則な六角形をなす類。第12、18、22号跡（建て替えの最新期、中期）	4軒
C類①	主柱穴の1個が壁際に接して不整な五角形をなし、その長辺が東側にある類。第20号跡	1軒
C類②	主柱穴の1個が壁際に接して不整な五角形をなし、その長辺が西側にある類。第23号跡	1軒

ピットの数は、A類19箇、B類9～15箇、C類① 8箇、C類② 10箇で、A類、B類の1軒は建て替え、そして第22号中期から最新期への建て替えは次の炉の位置との関係から拡張ではなく縮小である。

#### h 炉跡

- (7) 構造 A類 地床炉の類。第12号、第18号、第20号、第22号の2、3号炉 ..... 6基  
 B類 石囲炉の掘り方残存の類。第13号a 1A、1B炉、第22号の1号炉（最古期）4基

明確な石囲炉は、調査した時点の住居跡には伴っていない。建て替え前の古い住居跡第13号a、第22号（最古期）、第23号跡では、石囲炉を使用した可能性はあるが、炉縁石は、地床炉に変化した時点（建て替え時）に撤去された。そして、その頃、石囲炉から地床炉に変えなければならない。気候、社会情勢、生産活動などに変化が起こったことも考えられる。

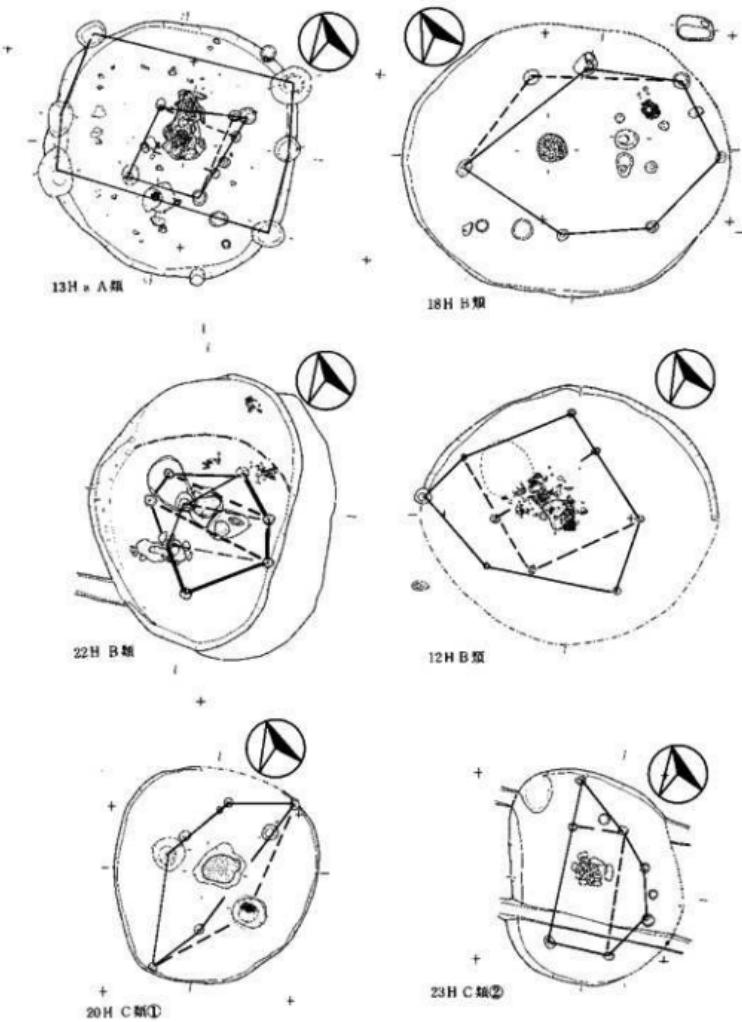
#### (8) 炉の位置

住居跡

柱穴の配置 A類——炉の構造 A類	なし	
" B類——第13号a、1A、1B号	北寄り	
柱穴の配置 B類——炉の構造 A類——第12号跡	中央	
" 第18号跡	西寄り	
" 第22号2号炉	東寄り	
" 第22号3号炉	北寄り	
" B類——第22号1号炉	南西寄り	
柱穴の配置 C類①——炉の構造 A類——第20号跡	北東寄り	
柱穴の配置 C類②——炉の構造 B類——第23号跡	中央	

#### (9) 炉の平面形

構造 A類——（地床炉）	① 不整円～円形	第12号、第18号	2基
	② 不整橢円～橢円形	第20号、第22号跡2号炉、同3号炉	
	③ 方形なし		3基



第321図 弥生時代竪穴住居主柱穴分類図

構造B類一（石開炉掘り方炉）	① 不整円～円形	第13号 a 1 B炉	1基
	② 不整椭円～椭円形	第22号 1号炉、第23号炉	
	③ 方形	第13号 a 1 A炉	1基

(x) 炉の規模

構造A類① 不整円～円形	第12号—70×55cm、第18号—65×60cm
② 不整椭円～椭円形	第20号—112×92cm、第22号跡 2号炉—90×60cm、第22号跡 3号炉—90×75cm
③ なし	

構造B類① 不整円～円形	第13号 a 1 B炉—90×85cm
② 不整椭円～椭円形	第22号跡 1号炉—130×60cm、第23号—90×60cm
③ 方形	第13号 a 1 A炉—60×55cm

(t) 炉の長軸方向

構造A類② 南一北（第13号 a）1基 東西（第20号、第22号跡 3号炉）2基 北東—南西（第22号跡 2号炉）1基。（第20号、22号の住居跡の長軸方向は南北である。）
構造B類② 東一西 （第22号跡 1号炉、第23号） 2基（第22号、第23号住居跡の長軸の長軸方向は南北である。）
③ 南一北 （第13号 a 炉） 1基（住宅跡の長軸なし。）

(t) 炉の新旧関係

住居跡内に炉が1基以上あった類は、第13号 a と第22号で、それぞれ2基と3基検出した。他の4軒はそれぞれ1基である。新旧関係は次のとおりである。

13号 a 跡 1 A炉は、1 B炉よりも古い。1 A路に伴う屋内の柱穴配置プランは不明である。

1 B炉は、1 A炉よりも新しい。A炉に伴う柱穴配置は明確である。

22号跡 1号炉は、2号炉を切って最新期の炉である。住居跡の平面プランは2号炉を縮小）している。

2号炉は、1号炉に切られて、1号炉をもつ住居跡よりも古い（中期）住居跡の炉である。その平面プランは、1号炉をもつ住居跡よりも大型である。

3号炉は、柱穴との切り合いから、1、2号炉よりも古い時期（最古期）の炉である、その柱穴配置、平面プランは確認できない。

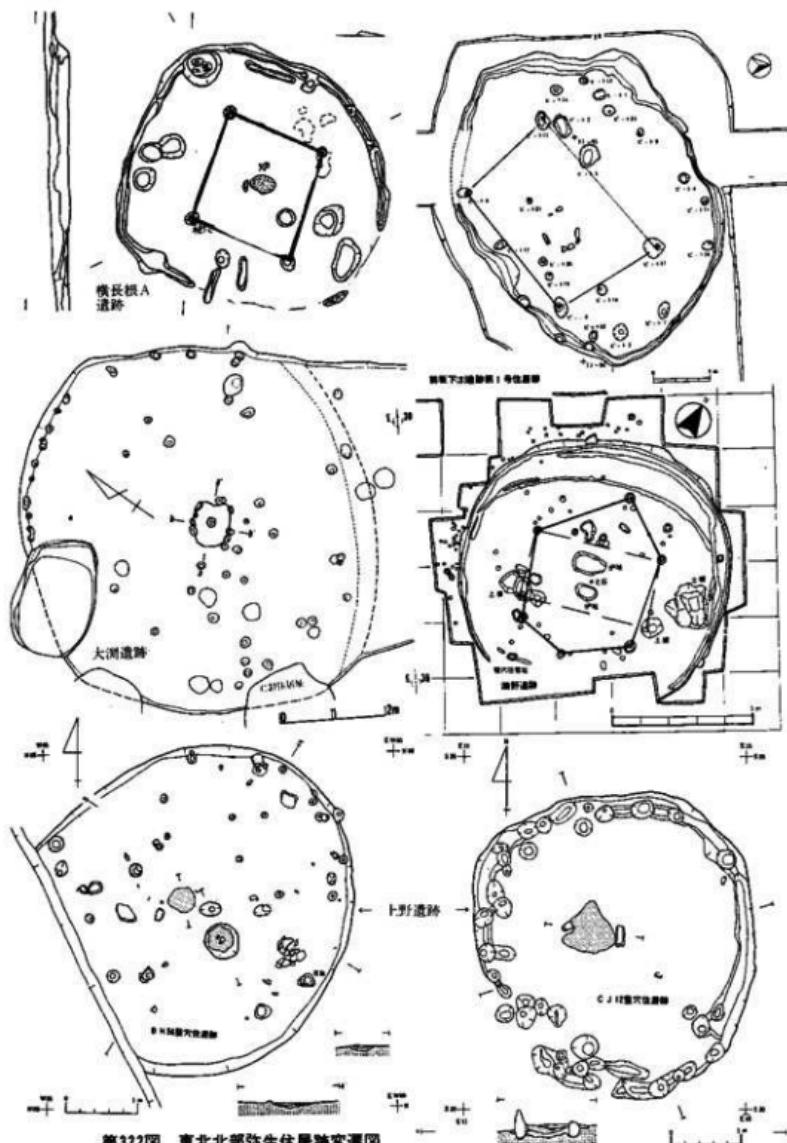
i その他の施設

盛土状の周堤については、壁のところでもふれたが、第22号住居跡の東壁上に最長580cm、

第85表 東北地方北部竪穴住居跡集成表

時代 紀 文 系	時代名 代 名	遺跡名 跡 名	住居跡 番 号	平面形 形	規模 m	床面積 m <sup>2</sup>	柱穴	炉				壁高 4×8cm	備考
								構造	平面	位置	規模		
縄 文 系	沙 川 (3)	前原下	1	格 円	西北 4.7×	15.00	主柱穴4 壁柱穴12 押石 (抜去)	石 圓 炉 格 円	南北	40×37			2号炉は一部沃掘、県 用文71集：1982、下北 郡東通村(2軒)
I	二枚塙 森 井	日 期	1期	格 円	9.5× 7.0	51.21	主柱穴4	↑	1号 不 要 格円形	北 偏 76	N-10° -E		伊東、須藤：1982「無野 道路」
			2期	円	9.5× 9.0	65.10	主柱穴6	地 床 炉	2号 不 要 格円形	中 央	82×60		壁溝60cm
			3期	円	9.5× ( )	71.11	主柱穴6	↓					
II	谷起路 大 瀬	C 37	扇張り 方 形	X	6.95			石 圓 炉 開道に附 える	格 圓形	中 央	85×70	10~30cm	N-53°-E、二ノ市BP 通鑑「大瀬」古手理文23 集
					6.70								
								(燒 土)				15cm内外	葛西、高橋：1984「泊 遺跡」平賀町埋文15 集
III	井 沢 勝 治	2号 (引) + (焼門)	1号 (引)										
			2号 (引)	2.5× 3.0			(2間)						15cm内外
IV	志賀沢 横長根 A	1号 (引)	1号 (引)	円	6.8× 6.8		主柱穴4	地 床 炉	格 円	中 央	(記載 なし)	出入口 東 側	壁溝は出 人口を除 きめぐら 秋田県若美町教育委員 会：1983「横長根A道 跡卷2・3次発掘調査 略報」、南東にかあり、 別棟か、炭化木37枚床 面。
			B D 56	(引)	2.3× 2.3		(主柱穴 不詳明記 していな い)	地 床 炉	格 円	( )	58×52	±後出 24cm	小田野、高田：1983「上 野遺跡、岩手県」、 B、P関係文書。 一戸町文化財愛護協会 59年度の調査で1新出 上、報告書は59年度刊 行
			B H 56	円	4.5× 4.5		( + )	地 床 炉	格 円	北 中央	30×40 46×52	なし 20cm以下	
V	上野 上野A	C J 12	上野 上野A	円	4.24 × 3.96	14.00	( + ) 豊溝穴の み	掘込み地 床の東西 に石 同理設	不整形	西寄り	60×70	出入口 南東の 内傾？ 高33cm	豊溝を除 き一層壁 高33cm
			C A 71	不 整 格 円	東西 5.95 × 4.20		北側に片 寄る	格 円		西寄り	75×30	7~14cm	高田和徳、上野遺跡一 昭和58年度免掘調査報 告書：1984、岩手県 戸高、一戸町教育委員会

最大幅105cm、高さ18cmの付属施設が出土した。炉の切り合（新旧）関係から2号炉を伴う時期の施設である。（壁全体が周堤の例はあるようだ→登呂遺跡）。出入口については、明確な形跡は検出できなかったが、床面が特別通路状にかたくなつた床～壁面は、第20号と第22号の壁面が途切れた箇所がそれに該当する。いずれも北側である点に再考の余地がある。



第322図 東北北部弥生住居跡実測図

### j 住居跡出土の土器

住居跡出土の土器は、第13号aは壁高が最高30cmほどあったことから比較的、覆土の土器と床面上の土器とは区別できたが、そのほかの覆土の堆積土の浅い住居跡では覆土が床直上、床面の土器で、それらを厳密に区分するよりも、共伴性が強いとみた方が妥当であると思う。そこでここでは各住居跡から出土した完形、復原、大型破片を土器の分類基準によって集成する。小破片を除くと住居跡からは、大石平第1群土器だけを出土しているが、第23号跡については、復原できた土器ではなく、しかも小破片が少量出土しただけで、住居跡の年代決定の決め手となる土器とは認められない。住居跡の土器は、第1群土器のみなので、第1群を付けることは省略する。また、施文、器形については、後述してあるので、ここでは割愛する。

#### 第12号跡（第263、264図）

深鉢形（IA類a）1、鉢形（IIA類a）1、壺形（IVA類b=深鉢形の可能性もある土器）1、IVB類b-1) 2、小型土器（VC類a）1。

#### 第13号a跡（第266～272図）

出土数量が多く、器種も多彩である。床面の土器は、覆土中の土器と接合した類がある。

深鉢形（IA類b-1、同IB類-2、同IC類a-1）4、鉢形（IID類b）1、台付鉢形（III A類）1、壺形（IVB類a-1、同IVC類a、b-2）3、小型土器（VA群b-1、VC類a-1、VD類a、b-2）4。

#### 第18号跡（第274、275図）

深鉢形（IA類b）1、鉢形（IID類a）1。

#### 第20号跡（第277、278図）

鉢形（IIA類a-1、II F類a-1）2、小型土器（VC類a）2。

#### 第22号跡（第280、281図）

深鉢形（IB類a）1、鉢形（IIA類b-1、IIB類d-1、IIE類a-1）3、小型土器（VC類a-1、同b-1）2。

#### 第23号跡（第283図）

図化した土器片は数点である。

前述のように、同一住居跡における変遷は、炉、柱穴の配置によって確認できるが、今のところ土器の文様構成、器形器種の変化から第1群土器の時期的細分ができるところまで進んでいないので、住居跡間の新旧関係は第1群土器の細分によってまだ確実な例を指摘できない。第1群土器は、1型式を成立させうる要素をもっていることから時期については、大略一時間に含まれると思う。第23号住居跡については、時期決定資料が欠けていることから、第1群土器よりも古い時期の住居跡とも考えられる。

#### k 住居跡の出土例

東北地方北部における住居跡の出土例は、最近になって、急増の傾向にあるが、その実態は、大石平遺跡出土を含めても20軒にみたない。北海道渡島半島における出土例は、瀬棚町瀬棚南川遺跡だけで20数軒ある。北海道のこの時代の住居跡には、舌状の張り出し部が付属していることが一つの特徴となっている。これは、北海道地方統繩文時代の住居跡と弥生時代の東北地方北部におけるそれと大きな形態的相違点となっている。

東北地方北部の弥生時代の住居跡については、第82表にその概要をまとめてある。

この地方における弥生時代の文化は、亀ヶ岡文化を基盤としている。住居跡の形状を理解するため砂沢式土器を伴出した住居跡から列挙した。砂沢式が、繩文時代終末期か、弥生時代の初期に相当するかは別問題として、この時期の住居跡は、下北郡東通村前坂下（3）遺跡から2軒検出して1軒完掘されている。弥生時代Ⅰ期では下北郡瀬野町遺跡から1軒出土している。この住居跡は2回建て替えがあったもので、この地方最大の規模をもっている。その床面積はⅠ期51m<sup>2</sup>からⅢ期71m<sup>2</sup>である。特殊な性格をもつ住居跡で、二枚橋式土器を伴出した。Ⅰ期と併行期にあたる谷起島式土器を伴出した住居跡は、岩手県二戸市大瀬遺跡に1軒ある。Ⅱ期の井沢式土器を伴った住居跡は、青森県平賀町駒泊遺跡から2軒検出されているが、いずれも完掘されていない。弥生時代Ⅲ期では、秋田県若美町横長根A遺跡から志藤沢式土器を伴う住居跡が1軒検出され、炭化した米が床面から37粒出土した。田舎館村垂柳遺跡と同系統の遺跡であろう。Ⅳ期は、岩手県二戸群一戸町上野遺跡から5軒検出されている。この遺跡は大石平遺跡から出土した竪穴住居跡の多くと同時期か否か今後さらに検討を要するところであるが、現時点では併行した時期の住居跡群としてとらえておきたい。

#### 工 竪穴遺構

竪穴遺構の一覧表は、第86表にまとめてある。遺構は7軒検出したが、竪穴住居跡と同様、基本土層の第Ⅲ層上面で確認した。当初は、竪穴住居跡と考えて精査したが、住居跡のA、B類のような配置を示さないこと、床面が住居跡のように堅固でないこと、平面プランを確認する壁、壁溝などの施設が、人為的に造成したものか自然に出来たくぼ(凹)地を利用したものか確認できることなど竪穴住居跡とする条件が欠けた遺構を竪穴遺構とした。炉を伴出しない建物跡と土壤の中間的遺構と称することもできよう。この種類の遺構は、東北地方北部では検出された例は知られていないようであるが北海道では瀬棚町瀬棚南川遺跡から「6個」（原文）出土している（田部、瀬棚町教育委員会：1983）。

#### A 形態 規模 重複

平面プランが残存して、その全容を把握できる遺構は、7軒中3軒である。低い壁面と、柱穴状、その他のピットが伴出しなければ、半円状のくぼ(凹)地となった地形に土壤を構築し

たような類もある。平面プランは、楕円(第13号 b、14、28号、推定を含む、以下同じ)、円？(第15、21号)、隅丸五角形(第16号)がある。長軸方向は、東西(第16号)、南北(第13号 b、14号)、その他は不明に近い。重複関係は、第13号 b が、第13号 a 住居跡に東側のプランを切られている。また、第15号 a は第15号 b に床面？を切られている。その他、周辺にある住居跡と同時期に存在できない堅穴造構について、住居跡の項でふれてある。規模を計測できる第13号 b は、385×300cm、推定床面積7.80m<sup>2</sup>である。第14号は、480×440cm、推定床面積14.95m<sup>2</sup>である。この床面積は小型の住居跡と大差ない規模である。第16号は、やや変則的な形状であるが300×248cm、床面積3.04m<sup>2</sup>である。土壌と大差のない規模を示している。

## B、壁、床、ピット

壁は残存している箇所で2~27cm、15cm以下の高さの類が多い。明らかに地山ローム層を掘り下げる類（第13号b、14、16号）、プランの2分の1は判然としているが残りがよくわからない類（第15、19、21、28号）とがある。床は、地山ローム層を利用した部分は判然としているが、確認面と同じ土層になると、そのかたさと土色で区別できない状態の床となる。しかし、推定プランの範囲外には、規模の一定していない柱穴状から土壌状のピットまで6~17個も検出されている。それらピットの配置は、住居跡の柱穴状ピット配置C類以上に規則性のない配置を示す類もあるが、第13号bのように、第13号aのピット番号17、18が第13号bの

第86表 弥生時代堅穴遺構一覽表

整穴 号	連絡 番号	真高 番号	後 方	前 方	高 度	面 積	長軸 方向	幅 度	高 度	地 盤 種 類	底 盤 種 類	備考・出土遺物	
							ダリヤF	新田開墾 形	m	m	m	cm	cm
(3)	36B	第 25	D A -354	13号と往 來する 路跡に切 られる	南	南北	西	4列	11-	新	ピット3に埴丕土器内 片、中央に埴丕土 器底4点、埴丕瓦、板瓦	ピット3は496×70、深さ26cm、復 元	
(2)	14B	第 36	D C -369	な い	南	南北	東	3列	17.80	11	45	ピット15に埴丕土器内 石器1、土製品2(粘土器底)	ピット15は80×70、深さ26cm
(2)	15B	第 36	D C -351	15a、15b (15号が 新)	北	南北	西	3列	11-	新	十蓋片81、土製品2(粘土器底)	十蓋片81、土製品2(粘土器底)	
(4)	36B	第 36	D G -349	無 く	東	南北	西	4列	9-	新	ピット4に埴丕土器内 片、10枚前後	復元上器-鋸形2、小鉢1、上器 片48、剥片多量(下手い縦刷)	
(4)	36B	第 36	D G -350	な い	西	南北	東	4列	10	新	ピット5に埴丕土器内 片、21×20、深さ94cm	土器片136、剥片少々	
(5)	19B	第 36	D C -353	な い	北	南北	東	5列	5-	新	ピット中に残る大型の ものある。	土器片136、剥片少々	
(6)	21B	第 36	D F -351	な い	東	南北	西	4列	12-	新	ピット4中に完形埴丕 土器、内封、33×36、深 さ26cm	完形埴丕土器1、被片13、削片	
(7)	28B	第 36	C X -349	な い	東	南北	西	5列	12-	新	土器片12(同一個体多い)		
			C Y -349	な い	東	南北	西	6-15	12	20			

ピットと重複して利用されたと考えれば、建物の柱穴配置となる類もある。そしてこれら7軒の堅穴遺構に伴うかどうか不明なピットも含まれているが、それらのピットのなかで床下と推定される箇所のピットのなかから、完形土器（21号）や復原することができるような土器（第13号b、14、16号）が埋設されたピットが検出された遺構が4軒あることは、何かこの遺構の性格を暗示しているようである。ピットのなかで、土器を埋設した類を列挙するとその規模は次のとおりである。

① 第13号b ピット番号3	98×71cm	確認面からの深さ	22cm
② 第14号 ピット番号15	90×70cm	"	58cm
③ 第16号 ピット番号	24×20cm	"	94cm
④ 第21号 ピット番号4	37×30cm	"	28cm

規模の点では、第13号bと第14号、第16号と第21号がそれぞれ類似している。床面の下のピットから復原できる土器が出土した住居跡（第20号）もあることから、これらのピットが、別の施設（壁、床、ピット、覆土中の焼土）とは全く別個の遺構（土壤）とは考え難い。

### C 堅穴遺構出土の土器

7軒検出した堅穴遺構のなかには、第23号住居跡出土の遺物、特に復原できる土器を多数出土している堅穴遺構もある。

ここでは主として出土した土器を遺構毎に検討するが、器形器種を決定しがたい破片だけを出土した遺構は一応除くことにしたい。分類の基準は、後述の土器分類と同じである。無文の土器を含むため、分類規準の手掛かりとなる大型土器片を添付してある。出土土器は第1群土器で占められている。以下、器形器種と個数を列記する。

第13号b 鉢形（II G類、復原1、II B類b、破片1）2、小型土器（VC類b）1。

第14号 鉢形（II E類b、破片）1、壺形（IV C類d、口縁部を欠く）1、小型土器（VB類、復原）1。

第16号 鉢形（II B類C、復原1、II C類b、復原1）2、小型土器（VA類a、復原）1。

第21号 壺形（VID類、完形）1。

土器以外の遺物では、第14号から石鐵1、土製品2、第15号から土製品2、第16号から玉ずい縦割剥片が出土している。出土した土器の多くは堅穴遺構内のピットから出土した類が多く住居跡覆土出土の土器以上にその共伴性、同時性は強いものと考えてよかろう。

### D 堅穴遺構の分布と用途

堅穴遺構の分布は、住居跡と交互に分布しているが、南側と北側は、堅穴遺構が分布している。最も南東側に第16号、次に第21号が分布して、DD-352～356ラインには第20、22、23号

住居跡が東西に並列して（これを住居跡のB群とした）いる。そして第12、13号a、18号住居跡（A群とした）との間にあるD C-348～353ラインには東から第14、15、19号堅穴遺構が直線状に、等間隔で並列している。第13号b堅穴遺構だけは、第13号a住居跡と重複して、住居跡のA群内に位置している。住居跡のA群、第12号住居跡の北東部には第28号堅穴遺構が分布している。その東側は、削平されているが、地形的には遺構が立地していてもよい環境がある。このような遺構の分布は、何か集落（住居）の場所を設定する場合、住居跡の周間に堅穴遺構、土壤、焼土状遺構、埋設土器遺構などを配置する慣習のようなものが存在したと思う。堅穴遺構は、A群、B群とした住居跡に付属した遺構で、季節的な仮小屋、作業場、物置、倉庫などの用途のほか埋甕の性格をも併せて考える必要がある。

#### オ、土壤、焼土遺構、埋設土器遺構

弥生時代の土壤とした遺構は4基であるが、うち1基については年代を決定できないものがある（第9号）。また、焼土状遺構2基のうち1基（第26号）についても同様である。これらの遺構の分布をみると、埋設土器遺構は、弥生時代の遺構群の東端に1基だけ離れて検出された。第11号焼土状遺構も、埋設土器遺構ほどではないが東端に位置している。第8号土壤は南端に、また、第4、7号土壤は北西端に位置して、いずれも住居跡、堅穴遺構の外縁に配置されている。

#### 土壤

土壤については、第4、7、8号土壤について述べる。第9号土壤を含めて、土壤の一覧表は、第87表にまとめてある。

#### A 形態、規模、重複、長軸方向

平面プランは、遺構と遺構の切り合いも少なく明確な土壤が多く第III層で落ち込みを確認して第IV、V層を掘り下げて構築している。

a類 平面形 円形 1基 （第4号）

b類 ノ 楕円形 3基 （第7A、7B、8号）

断面はいずれの類も船底状である。規模は、a類 $180 \times 165\text{cm}$ 、（深さ20cm）、b類 $162 \times 118\text{cm}$ （深さ40cm）から $310 \times 222\text{cm}$ （深さ25cm）までのタイプがある。重複は、第7A号と第7B号が切り合って、第7B号が第7A号を切って、第7B号が新しい土壤である。長軸方向のわかるのは、b類だけである。N-40°-Eが2例（第7A、8号）、N-60°-Eが1例（第7B号）である。

#### B、出土遺物

遺物が出土した土壤は、第4、7A、8号の3基である。第4号土壤からは、復原した深鉢形土器1、同鉢形土器1、破片少量、石鏃1が出土した。第7A号土壤からは、復原した鉢形

土器2と破片が出土した。第8号土壙からは復原した壺形土器1、土器片少量、石鐵1、フレーク5などが出土した。石鐵、フレークについては別項でふれてあるので、ここでは、器形器種の判別できる土器について述べる。大石平第1群土器と第2群土器が出土している。

#### 第4号土壙（第330図）

深鉢形土器（2群I A類a）1、鉢形土器（2群II A類a、底部を欠く）1、計2。

#### 第7号A土壙（第330図）

鉢形土器（1群II A類d）1、鉢形土器（1群II D類d、大型破片復原可）1、計2。

#### 第8号土壙（第330図）

壺形土器（2群IVA類a、底部を欠く）1。

これらの土器は、1～2個づつ出土した。確認面ですでに破片の一部が現われていた土壙もあるが、2点出土した土壙の土器は、セット関係を把握できる資料となる。第1群土器と第2群土器の型式的な分類については、後節でふれてあるが、第1群土器は第2群土器に後続する土器群である。第2群土器とした類は、二枚橋式土器に相当する土器である。後続する第1群土器は、念仏間・外崎式土器と呼称している土器を含み、田舎館2群と3群土器が融合したような土器群である。したがって、これまでの型式的変遷がらすると、土器を伴出した土壙群には時期的差があることが証明された。a類とした円形プランの第4号土壙からは第2群土器とした二枚橋式土器のみが出土して（小破片を除く）、この時期の土壙には、円形プランの土壙がある。また、b類とした梢円形のプランをもつ土壙（第7A、8号）からは、第1群土器を出土した。土壙（第7A号）と第2群土器を出土した土壙（第8号）に分かれることから第2群土器を伴出する土壙は、a類の円形プランの土壙と、b類の梢円形のプランをもつ土壙の二形態がある。そして第1群土器を伴出した土壙の平面プランは、現在のところ梢円形プランをもつ土壙である。これらの事実関係から、住居跡と竪穴遺構の時期は、時期不詳の住居跡1軒を除くと第1群土器の時期だけに限定されていたが、土壙群は時期に2分していることから時期不詳の住居跡、竪穴遺構のなかに第2群土器の時期のものが潜在していた可能性も考えられよう。次にこれらの土壙の類似例を県内の出土例と比較してみる。

#### C、弥生時代の土壙（墓）の出土例

手許にある資料から出土例を拾いあげた表は、第85表である。

縄文時代最終期から、弥生時代終末期までの土壙、土壙基（除く、甕棺土器墓）は、本遺跡から出土した数を除いて23基ある。このなかで、土壙墓あるいは出土状況からそれを推定した土壙は、瀬野遺跡の3基（東北大学調査分）以外の20基である。平面プランは、円、梢円、長方形とそれらの不整形をしている。瀬野遺跡の土壙は住居跡内の床面下部にあって柱穴とも切り合っており、本遺跡の住居跡、竪穴遺構に伴出した大小のピットと同じような性格、用途を

第87表 弥生時代土壙一覧表

記載番号	土質	埋設深度	写真番号	直徑	後出し	横径	形狀	長さ	幅	高さ	重複	新旧関係	付属施設	出土遺物	備考	
(1) 第4号	第3期	27	Y-4	D-C-356 4種	円 形	船底状	180	165	20	-	なし			復原長圓錐形土器 1点、石器1点	遺土4層	
(2) 第7A号	第3期	27	Y-7	D-B-355 大	楕円形	船底状	310	222	25	N-E-E	73に切 られる	ビット2箇内 1箇向右偏 1箇は新しい		復原長圓錐形土器1 点、大型破片複数	遺土5層	
(2) 第7B号	第3期	27	Y-7	D-B-355 小	楕円形	船底状	162	118	35	N-E-E	73土壙 を切る			なし、確認面に繋1 箇	遺土5層	
(3) 第8号	第3期	27	Y-8	D-B-353 船	楕円形	船底状	265	162	40	N-E-E	背後の施設 に埋たらる			復原錐形土器1点 土器片1点、石器1点 フレーク5種3	遺土5層	
(4) 第9A号	第3期	27	Y-9	D-A-353 P-2	楕円形	船底状	60	48	8	東-西	なし	8点と殆の間に 9号出土状態		遺土、4種9号焼土状5層 付帯の決定資料を火X)		
(4) 第9B号	第3期	27	Y-9	D-A-353 P-1	円 形	船底状	87	80	25	-	なし	同上		確認底と周辺グリッ F中に轟き土器片 (同上)	遺土4層 (同上)	
(4) 第9C号	第3期	27	Y-9	D-A-354 P-2	円 形	船底状	59	50	30	-	なし				なし	遺土4層 (同上)

もつ土壙の類とも考えられる。これらの出土例は、ここでは一応除外して、土壙墓と認められる土壙について概観すると、平面プランが円、不整円、略円形の類（I群）6基（30%）椭円、不整椭円形の類（II群）12基（60%）、長方形、不整長方形、隅丸長方形の類（III類）3基（15%）である。第III類の時期は縄文時代晩期1基、弥生時代III期が2基である。III群は、地域的に金木町、尾上町、田舎館村など津軽半島に位置した遺跡に認められる。その他のII群、I群は、津軽半島の東側から下北半島に分布している。時期は弥生時代のI、II、V期である。III群の規模は、170×120cm、深さ25cm、（118×75cm、深さ25～30cm、3分の1調査未了）、150×70cm、深さ50cmで、伸展葬が可能な規模である。I群は径60～80cm、深さ20～30cmの類（A類）と径130～140cm、深さ100～140cmの類（B類）に分けられる。IA群は、4個（1点は大型破片）の土器を埋設した例があり、報告者は、北関東地方の女方遺跡の埋設状態に類似（田中：1972）する（改葬墓）としている（江坂・村越：1969）。IB群は、恐らく届葬のタイプと考えられるが、幼老男女、年令、性別などを考慮すると一概には速断できない。II群は、73×52cm、深さ20cmの小型と長径、短径とも2桁の数値の類（A類）、短径だけが2桁の数値をとる中型の類（B類）と、長径、短径とも3桁の数値を示す大型の類（C類）に分けられる。I A群は、1例（8%）、II B群は4例（31%）、II C群は8例（61%）である。時期は、II A群はIII期1例、II B群はIII期3例、V期1例（千歳遺跡13）である。II C群は、I期1例、II期1例、III期4例、V期2例である。そしてこれらの土壙墓の確認面には、墓標とも考えられる完形に近い土器を埋設したり、副葬品を伴出した例もある。副葬品の種類は、ベンガラ・赤色顔料の散布、恵山文化に伴う特有の打製石器（靴形石器）、カップ形土器、ポール形土器、勾玉、管玉など弥生的遺物と統縄文的遺物が混在している土壙墓も認められ、統縄文文化圏との相互波及、伝播、交流を物語っているが、大石平遺跡出土の土壙には、積極的に土壙墓とする根拠は見当たらないに

第88表 東北地方北部弥生時代土壙(墓)集成表

時代	遺跡名	型式名	遺構番号	平面形	断面形	風 機 長 種	cm 深さ	長軸 方向	伴出遺物その他	文献(注)その他
縄 時期	全木町 神明町 五 所	移 況	不整 長 方 状	170×120	25				上器片一部復原。硬玉製垂飾1	県理文58集:「全木町神明町遺跡」 内版位裡幕
弥 生 时期	福ノ木 平	二枚機	1	円	すり	約80×80	30		縦口壺、台付甕、白付浅鉢、要城 片	江坂、村井:1967「下北郡川内町沼野 部福ノ木平遺跡」、「下北」
1	南 野	二枚機	1	不整 物 円		189×85	30		田舎館形の壺、二枚機式上器片	伊東、猪俣:1982「麻野遺跡」3基貝住居 内出土。これ以外に土器片の上塗1
2	南 野	二枚機	2	小整円		153×150	45		二枚機式上器片	昌を昭和43年東京大学で発掘した。 橋:1983「若森坂の考古学」
3	南 野	二枚機	3	不整円		70×70	20		田舎館式壺形上器片	橋:1983「若森坂発掘調査報告書」 駒野沢村(理文報)2集
		土壤易	種 円	すり	鉢	185×135	50	東北 向西	有茎石器4(底面) 要城片上器1(上面)	
II	豊山A	3号	椭 円			73×52	20	東西	上部、カップ形上器、幾形石器	指定遺伝
(+)		5号	円			(100×90)	25		カッブ形上器	岩本、大間、三宅、青森県 久慈上郡:1979「宇置目遺 跡発掘調査報告書」、測定
	田舎館	11号	不整円			103×89	18	東西	幾形石器土器裏面突起、ベンガラ	(北?)
	豊山A	12号	椭 円			197×120	45	東西	兜形上器2、ボル形兜形1。 上面	西
	宇狭Ⅱ	田舎館	13号	円		70×60	20		小笠形兜形	
III		*	14号	椭 円		187×120	30	東西	上器上部、下部管玉56点、丸 玉1、ベンガラ	西
		?	21号	6整椭円		145×92	25	33°西	土器片、石器	(南?)
	豊山A	22号	椭 円			180×118	25	東西	カップ形土器片	西
		*	24号	*		155×110	35	35°西	ボル形・カップ形土器片、石器 ・幾形石器	南
		?	27号	*		185×110	25	65°東		西
	田舎館	28号	*			132×89	25	東西	ボル形兜形土器、管玉、ベンガ ラ	東
	豊山A									
IV	井 泉	1号	円	円筒 状		140×140	140		広口直正、火炎ドングリ・クリ ・クルミ多数、③解か炭化クル ミ、第5郡上器片、有孔石製品	葛西、高橋:1984「駒泊道路、平賀町理 文15集
		2号	円	筒状		130×130	100			土器調査、1.5から20m西
V	田舎館	關九方	輪底 形	状	(118 × 75)	25		上器片147、黒曜石製石器、スク レーパー、細形管	葛西、高橋:1982「黒磯遺跡」田舎館村 郷土史研究会:調査	
生 时期	五輪野 (升盛)	田舎館	七導壺	長 方	台形	150×70	50	東西	田舎館式土器片→保原河、底面 95×30に赤色顔料散布	葛西、高橋:1983「正堀の調査(第1 次)」五輪野遺跡発掘調査報告書、尼 子町教育委員会、2種経記1基調査、 県理文27集:1976「千歳遺跡(13)」
		千歳B	天王山	椭 円	輪底 状	216×80	57	25°西	確認庄一帯土中に天王山式輪形 土器1点倒立	
	大 壱	天王山	24号	椭 円	円筒 状	198×126	102	19°西	確認庄一帯天王山式輪形、直形 小輪形2、アメリカ型石器3	県理文55集:1980「鏡ヶ関大西道跡」
VI	宝 泉	天王山	111号	椭 円	輪底 状	115×100	253±1		確認庄一帯形土器(11件計欠)1	葛西:1979「宝泉遺跡、宝泉遺跡調査 報告」

しても、屋内に設けられた大小のビット(土壙)とは性格が異なる土壙、土壙墓のような要素をもった土壙と考えられる。そして、これらの土壙は、ここで分類した土壙、土壙墓のII C群に相当するもの2基、1基は弥生時代I基、他の1基はそのIV基に該当する。別の1基(第4号土壙)は、IB類でも深さの点で新たな分類—IB'群とでも称したらとも考えている。—なお、漸棚南川遺跡では、IB'群、II A群、II C群の土壙墓が多数、(南川III群5基、同IV群

49基、同IV群2基、時期不詳1基)検出されている。そして、そのIII群期を通じて墓壙のすべてに重複関係がみられないことは、各地期の墓壙構築者間に、各墓壙の位置関係についての明確な意識の断続性が存在したと理解してよからうとしている(加藤:1983)。注目すべき点の一つである。この土壤についても、統繩文期のものとその関連性を比較追及することが必要である。

#### 焼土遺構

2基検出したが、1基は時期決定に問題が残るので、第11号焼土状遺構について、若干検討してみる。焼土面と同じ土層で、第1群土器片が多数出土しており、その時期と考えて間違いない。そしてこの時期の季節的な屋外炉(地床炉)と考えるのが妥当であろう。この種の地床炉は、駒泊遺跡から1基検出されている(葛西・高橋:1984)

#### 埋設土器遺構

埋設状況の良好な遺構を1基検出することができた。斜位倒立の状況で、第1群IVA類a(大型壺)が埋設されていた。この種の遺構では、大型の甕棺土器(田舎館式)を埋設した例が尾上町五輪野遺跡で3個(合口壺棺タイプ)出土している。2個は井沢式土器の特徴がみられ弥生時代II期の所産である。その2号甕棺土器から貝塚が出土している(葛西:1983)。これら土器の出土例は、県内では深浦町吾妻野II遺跡(三宅:1975)、八戸市小峰遺跡の出土例がまた県外では岩手県二戸市金田一川遺跡(亀沢:1958、岩手史学研究、29)がある。丑盛から昭和57年度に出土した甕棺土器は田舎館式(III期)に属し、焼成後穿孔が底部にある(器高約60cm、口径約35cm)。このような甕棺土器は、宇鉄II遺跡で2点出土しているが単甕棺のタイプである。昭和57、58年度の垂柳遺跡でも数点出土している。その1個は埋設土器遺構であったといわれている。おそらくその用途のために製作あるいは転用した甕形(壺)土器であろう。

本遺跡ではこのような大型の甕棺土器とは、別器種の埋設土器が出土したことになる。甕(壺)棺土器の埋設遺構は、主として津軽平野と津軽半島、下北半島を中心と分布しており、また、埋設土器遺構は、本遺跡のほか北海道渡島半島瀬棚南川遺跡に出土例がある。瀬棚南川遺跡では、「新生児、あるいは幼児埋葬の可能性のある小型墓壙は3基よりもないことから、新生児、または幼児埋葬の甕(壺)棺葬の存在を推定することができよう」としている。本遺跡の埋葬土器のように口頭部の細い壺形土器については未熟児の壺棺葬も推定され、今後の出土例については、この点に留意することが必要である。

#### カ、弥生時代の遺構について

住居跡その他の遺構についての特徴、出土状況、形態分類などを試みたが遺構を総括的にみて、今後の調査研究に託される問題点などについて述べておきたい。

住居跡は、大型住居跡群(A群)と小型住居跡群(B群)がある。その新旧関係については、

第1群土器の型式的分類が未確定のため、その新旧関係を見出せなかった。仮に時間差を判別できる特徴のある土器—第1群土器の中に弥生第III期に近い古手の類とそれよりも幾分でも新しい類に類別できると考えているが—（例えば第一12号、第18号はやや古いグループ、第13号aは第2群土器か？B群の住居跡のうち第20、22号住居跡は、第1群土器終末期の住居跡かななど）まだ資料の比較が不十分なことから、その目安がつくと住居跡間の変遷を図化できると考えている。これが今後の大きな課題である。第2群土器を伴う住居跡は、確実にこの住居跡と指摘できなかつたが、第1群土器を伴出した土壌が存在したことから住居跡のなかに第1群土器を伴う住居跡が含まれている可能性もある（第13号a跡、第23号跡？）。この時期は、弥生I期であるが、この頃かそれ以前から本遺跡に弥生人が定住していた（昭和59年度の調査でも住居跡が出土している）が、その後、弥生時代II～III期（宇鉄II～田舎館2・3群）は、無人の廃村と化して、第III期末～IV期初頭頃に大型住居跡に再び住み始めた？そして人口が増加して世帯が分離独立し、小型住居群（B群とした住居跡の第20、22号）～移動（住居跡の南下）した。しかし、周囲の環境、社会情勢などが悪化して住居跡を縮少（第22号跡）、人口の減少を招き、最後（第IV期末）は大石平遺跡から他所へ移動したのではないかと想像することもできよう。弥生時代IV期の住居跡群は、本県ではじめての出土例である。

竪穴遺構については、まだ確実にその用途を把握できないが、住居跡に付属した遺構である。これも住居跡に付随して移動したと思われる。

土壌は、あきらかに時期が異なることが、伴出土器によって示された。弥生時代I期の土壌は、出土例が知られているが第IV期は初例であり、これによって弥生I期からV期までの土壌（墓）は一応その変遷を知り得ることになった。そのほか、屋外炉、埋設土器施設についても新しい資料が追加された。これまで弥生文化か統繩文文化が論争され、田舎館村垂柳遺跡で水田跡が発見されたことによって弥生文化に統一されているが、第IV期の弥生文化は、それと併行する時期の統繩文文化と大同小異であったろう。恐らくその生活基盤は、稲作農耕よりむしろ畑作・漁労・狩猟活動に求められたと考えられるが、それらを裏付ける出土資料は少なく石器類、剥片石器等については弥生時代の項では触れていない。これらについては、1例をあげると、弥生時代あるいは統繩文時代特有の石器が出土しているかどうか、また石鐵については、一般的な石鐵の類か、「恵山型離頭鉗頭」（渡辺：1973）として着装する類が含まれているのか否かも不明である。今後は弥生時代の土器、石器、その他の遺物について、総合的に資料を操作する手段が必要であろう。

遺構内出土の第1群土器は、恐らく新旧の時間差があるものと予想される。

東北地方北部の弥生文化の研究は、資料も豊富だとはいえないが、八戸市郊外から弥生時代前期の被籠土器（市川、木村：1984、鈴木：1983）が出土していることや田舎館村垂柳遺跡出

土の北限の水田跡などがあり、本遺跡出土の資料も東北地方北部における弥生文化の研究のため多少なりと役立てば幸いである。

(北林)

## 第2節 遺物

### (1) 繩文時代

#### ア、第I群土器

1類 押型文を施すものである。I区東側で、同一個体の数片が出土しただけである。出土層位は、IIIa層とIV層で、CZ251のものは斜面のIV層のかなり深いところで出土した。この押型文の構成は、凹部を主体としてみると、原体の両端を縦に直線的に結び、その間に数条の右下がりの短い直線を加えてなされている。第323図は、その文様と原体の推定模式図である。

この文様と似ている文様としては、岩手県大新町遺跡で重層山形縦割文とされているもの(盛岡市教委: 1982)があげられる。山形文、楕円文、格子目文、斜葉文、市松文(佐原: 1981)などとは異なる。いずれにしても、「縦割文」の範疇に含まれるものであると思われる。このような押型文の土器は、日計式押型文土器群(柏原: 1982)の中に位置づけられるものである。

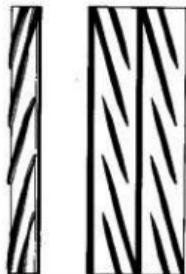
(坂本洋一)

本群の2類から6類までは貝殻文土器の時期(江坂: 1955)のものである。

2類 (第223図1) I区から出土したもので、尖底と思われる土器の底部付近の破片である。胎土・焼成・器面の様子などが白浜式に近いとされた千歳遺跡(13)(青森県教育委員会: 1975)の第1群第1類土器に似ているようにも思われる。

3類 III区第388号土壤の覆土から出土した底部付近の破片1点である。尖底のようで、貝殻腹縁の圧痕文がみられるものである。4類に用いられた貝殻よりも放射肋の幅が広い。千歳遺跡(13)第1群第2類(青森県教育委員会: 1975)、寺の沢遺跡出土土器(名久井: 1974)、螢沢遺跡の早期第1類土器(三宅: 1979)などに類似する。

4類 III区から2個体分の破片が出土した。形態は、平坦にされた口唇部をもち、隆帯が貼付けされるもので器壁が薄い。文様は、貝殻腹縁の圧痕文・押し引き文ないし条痕文と沈線によるものである。これに類する土器としては、早稲田貝塚の第1類、第2類(二本柳、角鹿、佐藤: 1957)があげられる。この中でも、特に、器壁が6mm前後と薄い点や鋸歯状の沈線がみられる点から第2類が最も近いものである。第2類は第1類とは異なる特徴があるため、資料が少ないとわかわらず、吹切沢式に近いとした第1類から分離しているものである。(二本柳、角鹿、佐藤: 前掲書)



第323-A図  
押型文模式図

**5類** 乳房状尖底を呈するものであることから、貝殻文土器の範疇に含まれるものと考えられるが、口縁から、刻み、貝殻殻頂部による刺突、波状沈線と続く文様は類例をみない。粗い胎土、良くない焼成、中厚手の器壁、直立する素分の胴部、貝殻の蝶番部によると思われる刺突などからみると北海道の住吉町遺跡出土土器の1類（児玉、大場：1953）に近いもののように思われる。

**6類** 山形口縁の器形と細い沈線と三角形の刺突による文様を特徴とするものである。このような文様は宮城県の明神裏遺跡出土器に類似する（白石市史編纂委員：1976）。なおこの土器は1974年に青森県教育委員会文化課の試掘調査で出土したもの（青森県教育委員会：1974）と同一個体のものと思われる。

（坂本洋一）

**7類** DC-256グリッド周辺にまとまって出土し、第II区・第III区にも散在していた。第III区の第375号土壤では、この類の土器だけが出土した。

器形は、明確に知り得ないが、口縁は外傾し、胴下半部でくびれ、平底になると思われる破片が多い。口唇部形状は、丸みをもち、指ナデにより滑らかに整形されているものが多いが、ヘラ状工具により平坦に整形しているものもみられる。また、口縁には、文様として縄文を施すものもみられる。

胎土には、砂粒・白色凝灰岩・沼鉄及び植物性繊維を含む。焼成は、あまり良くなく、器外面だけが茶褐色になっていて、もういものが多いが焼成良好で堅緻なものもある。器厚は、厚ぼったい感じで8～11mmである。

文様は、器面に縄文原体を羽状あるいは不規則に回転させて施文するものが多いが、口縁部かあるいは胴部に単節縄文原体を縦位に押捺して施文したものや、口縁に平行に単節撚糸を押しつけて2条ほどの撚糸文を施文したものもみられる。縄文原体は、紐を3本以上撚り合わせた0段多条がほとんどである。器内面に斜行縄文を施文したものや条痕のある土器も少量みられる。

この類と同類の土器は、八戸市和野前山遺跡で多量に出土し（三宅徹也：1984）、この時期の住居跡も検出されている。六ヶ所村内では、唐貝地遺跡（二本柳・佐藤：1961）や鷹架遺跡・発茶沢遺跡などで出土し、東北北部における早期最終末の土器に編年されている。

#### イ、第II群土器

**1類** 軸に1段の撚紐を巻きつけて回転させて、撚糸文を羽状に施文している土器である。東鉄路IV式に類似するものである。

各区域から出土しており、器形は、尖底に近い丸底深鉢形で、口縁部形状は平縁である。

胎土には砂粒・植物性繊維等が含まれているが、第1群7類より少ない。焼成は、良好で堅

緻である。器厚は、5～9mmである。器内面は、平滑に調整されているものや調整痕が擦痕として残されているものがある。

文様は、主体的要素が斜位又は羽状に施文された撚糸文である。縄文原体には、LとRの2種類みられるものが多く、それを交互に回転施文している。

この類と同類の土器は、六ヶ所村表館遺跡に多く出土し、復原できたものもある（畠山昇：1980）。この種の土器は、北海道に多く出土しているが、近年、本県からの出土例も増えている。

**2類 長七谷地Ⅲ群土器**に相当する土器で、第Ⅲ区に小量散布している。器形は、口縁が平縁で、底部が丸底である。胴上半からほぼ直立するものと、外傾するものがみられる。なお、口唇部は、上面をヘラ状工具により整形している。

胎土には、砂粒・植物性繊維が多く含まれ、焼成は悪くもろい。器厚は、8～10mmでやや厚ぼったい感じである。

文様は、器面に、O段多条によるLR、RL2本の異なる原体を帶状に交互に施文し、整然とした羽状縄文に仕上げるものである。この羽状縄文は、原体を強く押し付けて回転させるため、条がやや深くくぼんでいるものが多い。

この類は、八戸市長七谷地貝塚で多く出土し、長七谷地Ⅲ群としてまとめられ（大湯卓二：1978）、本県における前期初頭の土器に位置づけられている。

**3類 早稲田6類**（佐藤達夫：1957）に類似する土器で、文様等から2種類に分ける。

**3類a 口縁部に押し引き文が施文され、胴部に羽状縄文及びグループ文が施文されるもの**で、第Ⅱ区から第Ⅲ区にかけて散在する。器形は、口縁が波状口縁及び平縁で、底は尖底である。口唇部の形状は、ほとんど平坦で、ヘラ状工具により整形され平滑である。

胎土に細砂粒及び植物性繊維が含まれ、焼成はやや不良であるが堅緻である。器厚は、尖底部が13～16mmとやや厚ぼったいが、口縁部は、6～8mmと薄い。

文様は、口縁部文様帶を構成している土器は、波状口縁が多く口縁に沿って竹管工具により数条の押し引き文が施され、胴部は斜行縄文及びO段多条の縄文原体により方向を変えて押捺した羽状の縄文及び結束のある羽状縄文、並びにループ文が施文されている。口縁部文様帶を構成しない土器は、ほとんど平縁で、斜行縄文、羽状縄文、ループ文等の文様が施文されている。

この類は、六ヶ所村鷹架遺跡出土の第Ⅱ群土器（成田滋彦1981）に類似するもので、前期前半に位置づけられるものと思われる。

**3類b 器面全面に单一の縄文原体を回転させ縄文を施文したもの**である。第Ⅰ区では、D-B-256グリッドの周辺にまとまって出土し、ほかは、第Ⅱ区から第Ⅲ区までに散在して出土する。

器形は、口縁部が直立あるいは外反し、平縁で、底が丸みを帯びた尖底である。口唇部は、平坦なものと丸みを帯びた形状のものがある。平坦な口唇形状のものは、ヘラ状工具で整形されており、丸みを帯びた口唇形状のものは、指ナデにより整形されたものとみられる。しかし指ナデ整形後、ヘラ状工具により調整されたものもみられる。

胎土には、砂粒・植物性纖維が含まれ、焼成は、良好で、器厚も薄く堅緻なものと焼成が不良で、ややぶ厚く、もろいものがある。器厚は、5~12mmである。

文様は、文様帶を特に構成しないで、全面に繩文を施文したもので、単節斜繩文、単節0段多条のもの、複節繩文のものなどがある。

この類は、和野前山遺跡の第8群土器（三宅徹也：1984）のなかに類似するものがある。

**4類 芦野I群土器**（名久井文明：1971）に相当するもので、第I区にまばらに出土し、第III区から多数出土したものである。

器形は、口縁がほとんど平縁で、底部が平底の深鉢形である。口唇部は、平坦なものと丸みを帯びるもののがみられるが、刺突列を施すものが多い。

胎土には、石英などの細砂粒や少量の植物性纖維が含まれ、焼成は良好で堅緻なものが多くみられるが、焼成が不良で厚ぼったく、ややもろいものもみられる。器厚は、口縁部が6~10mm、底面が8~17mmである。

文様は、次のように4種に分けられる。

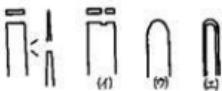
- a 終結されない原体による羽状繩文施文のもの。
- b 終結された原体による羽状施文のもの。
- c 繩文が層状に施されるが羽状をなさないもの。
- d 刺突列や連弧文が施文されるもの。

a種は、ほとんど口唇部が平坦で、刺突文が施文されている。また、c種には、刺突が口縁部にまで及ぶものもみられる。

d種は、刺突文が主体的文様要素であるが、口縁に刺突列、胴部にループ文と連弧文が施文されるものと全面に刺突文を施文するものに分けられる。また、d種に多い刺突文様は、横位に数条にわたって刺突列を配列せるもの、横位の刺突列の中間に渦巻状の刺突列を数個配列せるもの、あるいは鋸歯状に刺突文を配列せるもの、沈線を施した後、刺突文を配列せるものなどバラエティーに富んでいる。

b種、c種、d種に施文されている刺突文は、次のような工具によって施文されたものと思われる。

- (7) 平べったいもので断面でみると先が尖ったもの。  
 (8) (7)と同じようなもので、中央部分がくぼんでいるもの。  
 (9) 丸棒状のもの  
 (10) 半截竹管状のもの



第322-10図 刺突工具模式図

(7)～(10)のうち多いものは、(7)で、これも尖端がやや平べったくなっているものもある。(10)もかなりの個数に用いられているが、(9)と(10)は少數である。刺突方向は、ほぼ直角に施文されたものと斜位方向から施文されたものがあり、なかには、押し引き文と判別し難いものもみられる。4類の土器は、北海道南の石川野遺跡から出土し春日町遺跡第III群一IIとしてまとめられている(児玉・大場: 1954)もの及び表館式土器(佐藤・渡辺: 1960)と同類であるが、芦野遺跡出土の土器群と同じ種類のものが多くたため芦野I群土器の類別方法を用いた。

5類 前期の土器で数片出土したものをまとめた。

5類 a 複節及び単節の撚糸を方向を変えて押捺したもの。胎土に砂粒を含み、植物性繊維の混入がみられ、焼成良好で堅緻である。第I区に少量みられる。

5類 b 単節撚糸を全面に施文したもの。胎土に少量の砂粒を含み、植物性繊維の混入が多量にみられ、焼成は悪くもろい。第I区に少量あり、第III区にまばらに分布している。

5類 c 単節撚糸を全面に押捺しているが、口頭部に隆帶をもつもの。胎土に砂粒を含み、多量の植物性繊維が混入され、焼成も悪くもろい。円筒下層a式またはb式に相当する円筒深鉢形土器の頭部破片と思われる。第III区に少量出土している。

5類 bは、文様が石神遺跡第12層出土土器(江坂: 1970)と類似し、深郷田式(佐藤: 1965)に相当すると思われ、円筒下層式直前の土器とみられよう。

(成田誠治)

#### ウ、第III群土器

縄文時代中期の土器をまとめたもので、出土量は非常に少なく、円筒上層a式、円筒上層C式に相当するもの及び大木10式に併行するものと思われる。

1類 円筒上層a式土器に相当すると思われる破片で、第III区にまばらに出土している。波状口縁で、口頭部文様帶には粘土紐を貼付し、その上面に撚糸圧痕を縦位及び斜位に施し、更に、口唇及び隆線に沿って撚糸圧痕を施文している。胴部文様は羽状縄文である。

胎土には少量の砂粒を含むが、植物性繊維の混入はみられない。焼成は良好で堅く、外面は平滑に整形されている。器厚は6～12mmである。

2類 円筒上層C式土器に相当すると思われる破片で、第III区にまばらに分布している。胴部破片のため口縁部は知り得ないが、胴上半まで文様帶が形成され、その文様は粘土紐の隆線文及び隆線によって区画された部分に爪形状刺突文が施文されている。隆線は、6～8mmの太

さで、上面には細燃りの燃系圧痕文が施されている。

胎土には砂粒を含み、焼成は良好で堅い。器厚は6~8mmである。

3類 第I区西端から第II区にかけてまばらに分布しており、中期末に位置づけられる土器である。沈線文施文のものと、縄文だけのものに分けて記載する。

3類a 平縁の深鉢形で、縄文地に沈線文を施し、沈線により区画された部分を磨り消す文様構成のものである。大木10式に併行する土器である。口縁はやや外反ぎみで、口唇は平坦に整形されている。縄文は、単節LRの原体を横位に回転させて施文したものである。口縁部は無文で、胴上部に凹状に縄文を残して、まわりを磨り消している。この凹状文は3個配されている。

胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない、器厚は6~8mmである。

3類b 平縁の深鉢形で、縄文だけが施文されたものである。第I区のDA-279グリッドからほぼ完形で出土したものである。

綾絡のある縄文と、口縁が開く器形及び胎土・焼成等から中期末の土器と思われ、第3類aと同時期と考えられるものである。

(成田誠治)

## エ、第IV群土器

### 第IV群a類（沈線文を施文するもの）

本類は、文様構成の差異から、縱位方向に構成しているものをa類-1、稚拙な入組状を主体に構成しているものをa類-2、カギ状、斜行、平行文を施文しているものをa類-3、として分類した。

#### a類-1（縱位方向に文様を展開するもの）第197・198・224図

深鉢形は、口頭部が内反する形状が主体を占め、内反度が強いものと弱いものがある。また、胴部上半が張り出し、口唇部寄りが内反する形状のものもみられる。台付鉢形は口頭部がくびれて内反し、胴部上半が張り出し、台部上半がくびれる形状を呈する。壺形は、口頭部がくびれて内反し、頭部から胴部下半に広がる形状を呈する。口縁は、平口縁と波状口縁を呈しており、深鉢形の波状口縁で、鋭利な山形突起を有するものは、頂端部に刻みを有する。口唇部上面の刻みは、全周して押捺するものと、一部分のみ押捺するものに分かれる。

文様区画帯は、深鉢形で口頭部と胴部下半に区画帯を構成している。区画帯は2~3条の横位沈線を巡らしており、その内部に弧状、S字状、楕円形文を施文する。（第198図-8）は、口頭部と胴部の2段の文様区画帯を有する。台付鉢形は、口唇部寄り台部の上部に区画帯を構成する。

深鉢形で2段の文様帯をもつものは、口頭部文様帯に、縦位の楕円形文、胴部文様帯に格子

状文様を施文している。他は、縦位沈線、縦位の渦巻文様、縦位と横位の組み合せ、縦位で区画した後に内部に斜位、縦位の曲線状文様を施文している。台付鉢形は、胴部文様帯の、区画帯の内部に縦位の渦巻文を巡らし、その間に横位沈線を密に施文している。台部の文様帯は、横位沈線を2~3条巡らしている。壺形は、口頭部・胴部文様帯に分かれ、口頭部文様帯は山形の突起下部に縦位の8の字形の粘土紐を取り付けている。胴部文様帯には、梢円形、三角形状の文様を不規則に縦位方向に文様を構成している。

a類一2、(稚拙な入組状文様を横位方向に展開しているもの) 第88・95・225・226図

深鉢形は、口頭部がくびれて内反するものと、口唇部寄りが内反するものがある。a類一1でみられた内反度の強い形状は本類ではみられない。鉢形は口頭部が内反し胴部上半が張り出すものと底部から口縁にかけて外反するもの、口頭部がやや直線的な形状の三つのタイプがある。台付鉢形は、台部を明確に有しているもの底辺部がえぐれ、あげ底を呈する形状がある。壺形は、口頭部がくびれ胴部下半が張り出す形状である。

文様区画帯は、深鉢形で2~3条の沈線を巡らしており、その内部には、球根状・S字状文が施文されているが、a類一1ほど多様されていない。区画帯は、口唇部寄りと胴部の張り出し部に区画するものが一般的であるが、2段の文様区画帯を有する土器もある。鉢形土器は、口頭部と胴部下半に横位沈線を巡らして文様区画帯を構成している。また、文様区画帯のみられないものもある。壺形土器は、口頭部、体部、台部の三つの文様区画帯に分離している。

文様は、深鉢形が稚拙な横位方向に展開する入組状の文様を主体としており、副次的な斜位、弧状文様が組み合わさっている。鉢形は、横位方向に展開する稚拙な入組状文を主体に文様が展開している。台付鉢形は、口頭部文様帯に、横位の沈線を2~3条巡らし、その内部に縦位の弧状文様を施文している。胴部文様は、横位方向に展開する稚拙な入組状文と副次的な斜位及び曲線状の文様を組み合わせて施文し、台部文様帯は、胴部文様帯と同様なモチーフと、ほかに梢円形と円形を組み合わせた文様を施文する土器がある。壺形は、深鉢、台付鉢形のモチーフと変わらない文様であるが、副次的な文様をそれほど用いていない。

a類一3 (カギ状、斜行、平行文様を主体とするタイプ) 第88・96・228・229図

形状は、口頭部が内反し胴部上位が張りだすもの、口唇部寄りが内反するものなどa類一2と同様な形状を呈する。口縁は平口縁と波状口縁があり、平口縁が主体を占める。また波状口縁はa類一1・2の土器と比較すると波形はゆるやかである。口唇部上面の刻みもそれほど多くはない。鉢形は、口頭部が内反し胴部が膨らむものと、底部から口唇部にかけて外反する形状のものが多い。台付鉢形、口唇部がややくびれ胴部がやや直線的なカップの形状を呈する。

文様区画帯は、有するものと有さないものとがある。区画帯を有するものは、2~3条の横位の沈線を巡らして区画帯を構成している。深鉢形は、胴部上半に区画帯を持ち一定している

が、鉢形土器は、文様区画の下部が底部寄り、胴部上位、胴部下位と一定しない。台付鉢形は、口頭部、胴部、台部と三つの文様区画帯に分かれる。

文様は、深鉢形で、2～3本を一単位として施文している。カギ状文は、a類一2にみられた副次的な文様が少なく、横位方向に展開する。斜行状文は、斜行を主体としているものと、斜行を組み合わせてV字状を構成しているものもみられる。また、副次的な文様も簡略化の傾向が著しい。また、矢羽状文やカニ状文を組み合わせている土器もみられる。鉢形は、斜位の組み合わせたもの、楕円形が横位方向に展開するもの、弧状を組み合わせて曲根状文を施文するものもみられる。台付鉢形は、口頭部文様に2条の沈線、胴部文様に斜位の沈線を組み合わせたV字形を構成し文様間に円形刺突を施文している。台部文様には、すかし文様があり、文様の周縁を沈線で囲んでいる。壺形は、口頭部に弧状文様を横位に展開し、胴部文様は、弧状及び斜位状のモチーフを横位方向に展開している。また、区画帯からはみだして弧状に連続して施文するものもみられる。

#### 第IV群 b類（磨消繩文を施文するもの）

本類は、a類と同様に縦位方向に文様が展開するものをb類一1、稚拙な入組状の文様を施文するものをb類一2、カギ状、斜位、平行線文を主体とするものをb類一3とした。

#### b類一1（縦位方向に文様が展開するもの）

本類には、深鉢形、鉢形の器形がみられる。深鉢形は平行線を呈するものが多く、形状は口頭部が内反する。鉢形土器は、口頭部が外反し、口唇部寄りが内反する形状であり、口唇部寄りと胴部下半に横位の沈線を巡らして文様区画帯を構成している。深鉢形土器は口頭部文様帯と胴部文様帯に分離し、口頭部文様帯には、横位の沈線を巡らし弧状及び楕円形の文様を施文している。胴部文様帯には、縦位方向の渦巻文様を主体にし、副次的な直線及び波状の文様を組み合わせているもの、縦位に区画した後に横位の沈線との組み合わせ、縦位方向の波状文がみられる。繩文の原体は無筋L、單節LRの使用が多い。

#### b類一2（稚拙な入組状文を横位方向に施文するもの）第232・233

深鉢形、鉢形、壺形の器形がある。深鉢形は、口頭部が内反し胴部が張りだす形状で、口縁部は平口縁と波状口縁を呈している。口唇部には、波状口縁の頂端部に粘土紐を貼り付けているもの（第232図一4）と、口唇部に間隔をおいて粘土紐を貼り付けているものがある。鉢形は形状が底部から口縁にかけて外反する形状を呈する。口縁部は、平口縁と波状口縁があり、波状口縁はゆるやかな波形を呈している。壺形は、最大値を胴部の中央部にもつ小型な壺形土器である。

横位に二条の沈線を巡らして文様区画を構成している。深鉢形は、口頭部のくびれ部と胴部上半に区画しており、口頭部文様帯と胴部文様帯に分離するものと、分離しないものがみら

れる。鉢形土器は、口唇部寄りと胴部の中央部に区画を構成している。文様は鉢形が椎拙な入組状の文様を主体にし、波状の文様を副次的に施文しており、壺形には、橢円形文様を施文している。深鉢形は、椎拙な入組状文様のみの施文が多く、副次的な文様を施文していない。(第233図一1)は、口頭部文様帶にV字文様の磨消讃文を施文し、胴部文様帶に椎拙な入組状の文様を施文している。

#### b類一3、(弧状及びカギ状等の文様を施文するタイプ) 第234図

深鉢形、鉢形、壺形の器形がみられる。深鉢形は、口頭部が内反し肩部が張る形状で波状口縁を呈する。鉢形は、口頭部が内反するもの、口頭部が内反し胴部中央が張りだすもの、底辺部から口縁にかけて外反するものなど、多くのプロポーションを有する。壺形土器は大型なものと、小型なものに分かれる。形状は、胴部中央に最大値を有している。(234図一6)は、口頭部が長い長頸壺である。

深鉢形土器で胴部下半に文様区画帯を構成している。鉢形土器は、上部の区画帯を口唇部寄りと口頭部に有しており、下部の区画帯を底辺部、胴部中央及び下半と区画帯にバラエティーを有する。壺形土器は、口頭部のくびれ部と胴部下半に区画帯を構成しており、(235図一2)区画帯に粘土紐を使用している。

文様は、渦巻状文様が横位方向に展開し、その間に変化した渦巻文を施文しているもの、カギ状文様が横位方向に展開しているもの、弧状文様を組み合わせてカニ状文様を施文しているもの、斜位文様と弧状の組み合わせなどがみられる。(第233図一7)は、口頭部に撚糸圧痕を施文し、胴部文様帶に菱形文様を施文しているものである。

#### 第IV群c類(粘土紐を主体に貼り付けているタイプ) 第88・202図

本類は、Ⅲ区平坦面から多く出土している。器形は、深鉢形、壺形がみられるが深鉢形が主体である。形状は、口頭がやや強く反応し、a、b類一1の形状と似ている。口縁は波状口縁を呈するものが多い。粘土紐は、器形全体に貼り付けるものは少なく、口頭部及び口唇部寄りに限定して貼り付けられる、また、波状口縁を有する土器は、波状口縁の山形突起を中心に文様が展開する。頂端部には、鉢巻状に粘土紐を貼り付けている。文様構成は、縦位と横位の沈線の組み合わせ、弧状沈線の組み合わせ、沈線の縦位円形の組み合わせ、Y字状のものなどバラエティに富んでいる。壺形は、口頭部に横位方向に展開するものが多く深鉢形と比較すると文様のバリエーションが少ない。粘土紐は、素文のものが多いが、円形刺突・讃文を施文しているものもみられる。粘土紐の両端は、沈線でなぞられて文様を施文するものが多い。

#### 第IV群d類(無文の土器) 第88・97・198・235図

器外面に文様が施文されていない土器を本類とした。

本類の土器の器形は、深鉢形、鉢形、壺形の各種がみられ台付鉢形は出土しなかった。深鉢

形土器は、平口縁を呈し、形状は口頭部がくびれて内反度はそれほど強くないが、内反するものと、口頭部がくびれて外反するものの二つの形状がみられる。鉢形土器の形状は、口頭部がやや内反するものと、外反する形状があり、外反するものが主体を占める。口縁は、平口縁と波状口縁があり、波状口縁はやや鋭利な山形状で突起は4個を有する。壺形土器は、小型の土器が多く、大型な器形を有する土器はみられない。形状は、最大幅を胴部中央にもち全体的に丸みをもつ形状である。

口唇部の上面には、指頭を用いて押捺しているもの、竹管状工具を用いて押捺しているものがみられ、竹管状工具で押捺したものが多く、平口縁の口唇部の上面には、全周するものと、一部分のみ施文するものとに分かれる。波状口縁を有する土器は、波状口縁の頂端部のみに刻みを入れているのが特徴的である。また、口唇部の上面ではなく口唇部寄りに列点状に押捺しているものもみられる。折り返し口縁を有する土器は、深鉢形土器に多くみられる。

深鉢、台付、壺形の器種は、本遺跡で、II区斜面に深鉢形が多く、またIII区斜面では鉢形土器が多くみられ、器形毎の分布に差異がみられる。

#### 第IV群 e 類 繩文を施文しているもの（第88・193・236図）

繩文、撚糸文、単軸絡条体、撚糸圧痕を施文するものを本類とした。

器形毎に分類し、記載順序はa 深鉢形、b 鉢形、c 壺形の順で記載する。

##### a (深鉢形) 第236図一1

口頭部が内反し、胴部上半が張り出すものと、底部から口縁部にかけて外反する形状のものがある。口縁は、平口縁と波状口縁があり平口縁が、主体を占める。口唇部への刻みは、ヘラ状工具を用いて押捺しており、波状口縁には頂端部のみに押捺している。また、口唇部の上面に器外面に施文した同一原体を用いて施文しているものもみられる。口唇部の成形は、△形で丸みをもつものが多い。

文様の区画帯は、口頭部のくびれ部に横位の沈線を巡らして構成している。特に単軸絡条体を施文する土器に多くみられ、他の繩文等には少ない。文様は、口頭部には、横位の沈線、梢円形と円形の組み合わせで撚糸圧痕が一条巡っている。しかし、多くは文様を施文せず無文帶にしている。また、口頭部の下部には、繩文、無節、単軸絡条体、撚糸文を施文しており、器外面にスス状炭化物の付着が多くみられる。

##### b (鉢形) 第236図一2・3・5・6

形状は、すべて口頭部がくびれて内反し、口唇部寄りが外反する形状を呈する。口縁は、平口縁で波状口縁の土器はみられない。口唇部の上面には、深鉢形土器にみられる口唇部の刻みはみられず、繩文を施文する土器がみられる。文様の区画帯は、粘土紐と沈線を用いて口頭部文様帯を構成するものと、口頭部くびれ部に2条の撚糸圧痕を施文し、胴下半に一条の沈線を

巡らして胴部文様帯を構成するものがある。文様は、口頭部文様帶に横位の沈線を巡らし、その内部に縦位の弧状文を施文している。口頭部文様帶をもっていない土器は、単に縄文単節、無節、單軸絡条体を施文している。

c (壺形) 第236図一6

量的に少なく、形状は、口頭部がくびれて内定し、胴部下半に最大径をもつ形状で、平口縁を呈している。文様区画帯ではなく、器外面に縄文（無節）を施文しており、口頭部のくびれ部には文様を施文せず無文化している。

第IV群f類（橋状把手をもつもの）

橋状把手を有するものを本類とした。器形は、鉢形土器と壺形土器の2種がみられ壺形土器が多い。（第97図一5）は、器形が鉢形土器を呈し、口頭部が外反し、口唇部寄りが内反する形状で平口縁を呈する。橋状把手は、相対称し2個有している。文様は、無文なものと斜位文様を主体に施文しているものがある。

壺形土器は、大形なものと小形なものとに分かれる。橋状把手は、口頭部につけられ波状口縁の下部に位置している。把手の端は、横位方向に巡らされたつば状の隆起帯に貼り付けられるという特徴がある。文様帶は、口頭部文様帶と胴部文様帶に分かれる。口頭部文様帶は、把手のみで把手の上面には、沈線と刺突を組み合わせたもの、磨消繩文、縄文等が施文されているものなどがある。胴部文様帶は、胴部上半と下半に粘土紐を巡らして文様区画帯を構成している。文様は、縦位の渦巻文様を主体にし、渦巻文様の脇に梢円形及び波状文など副次的に文様を施文している。本類の橋状把手をもつ土器は、前記のa・b類一1と同様な文様構成であり、沈線文を多様している。

第IV群g類 赤色顔料付着の土器（第248図）

本類は、調査区全般にわたって分布しており、特にⅢ区斜面・平坦面からの出土量が最も多い。

器形は、深鉢形、壺形、鉢形、台付鉢形がみられ、壺形、鉢形の器形が多くを占める。深鉢形土器は、口頭部が内反し波状口縁を呈する形状である。壺形土器は、大形と小形な壺の2種類があり、大型壺には、沈線文様の施文された土器（第248図一2・7）と、粘土紐を縦位に渦巻状に施文している土器がある。この粘土紐を貼り付けた土器は、甕棺土器のモチーフと類似しているが資料が少ないために判断はできない。（第248図一19）小形壺は、口頭部が長く長頸壺の形状を呈すると思われる。（第248図一4・6）鉢形、台付鉢形は、口頭部が内反する形状が多い。また、口頭部が内反せず口唇部に向かって外反する形状のものみられるが、量的には少ない。文様は沈線・磨消繩文、粘土紐と多種であるが、稚拙な入組状のモチーフを施文する沈線文系土器が主体を占める。

赤色顔料の色調は、赤色にちかい色調、赤橙色の明るい色調、二次的火熱を受けて変色した全体的に暗褐色の色調との三つの色調に分かれる。

(塗布の位置)

赤色顔料の土器残存部分をみると、器表面にあるものと器表裏面にあるものとの2種にわかる。塗布の位置としては、器表面に塗布するものと、文様の沈線間のみに塗布する方法の二とおりの方法を用いて塗布している。本遺跡からは、前者の全面に塗布したものが多い。

第IV群h類（ミニチュア土器）第249図

小形土器、袖珍土器、手づくね土器と呼ばれているものを一括して本類とする。

文様施文の差異から無文なもの（a）、沈線を施しているもの（b）の2種類に分類した。

a、無文なもの 第249図—1～15

器形は、鉢形、壺形土器がみられる。壺形土器は口頭部がくびれ胴部が張り出すずんどう形の形状が多く、鉢形土器は、底部がくびれて内反し、口唇部にかけて外反するものと、底辺部がくびれず外反する形状のものがみられる。底面は平底が主体であるが、若干上げ底気味を呈するものもある。焼成は悪い。第249図—12は、器外面が回凸で指で外面を調整した手づくね土器である。

b、沈線を施文しているもの 第249図—16～24

沈線を施文する土器は、口頭部がくびれ胴部が張り出す鉢形土器の一部である。文様は、横位の沈線を主体とした文様構成である。（第249図—17）は、沈線と円形の刺突を組み合わせた文様である。また、（第249—2）は、底面に渦巻状の文様を施文している。

第IV群i類（蓋付土器）第249図—25

1点出土した。形状は、口頭部が直線的で下部に向かって広がる傘状の形状を呈する。文様は、口頭部のくびれ部に一条の横位沈線を巡らしており、下部に横位方向に展開する稚拙な入組状のモチーフを施文している。土器断面は、回凸で一定していない。従来いわれている切断蓋付土器（青森県1980）の断面は、ヘラ状工具で刻みを有するものと断面をヘラ状工具でなでているのが特徴で、本土器が小形を呈するなど、切断蓋付土器の蓋とは相異する面をもっている。

第IV群j類（十勝内I式以降の土器）第250図

縄文時代後期以降の土器を本類とした。遺物は、III区平坦・斜面の限られた地域から出土している。

文様要素の相違から1～4類に分類した。

J類—1（刺突文を施文するもの）第250図—4

土器は、口頭部で深鉢形土器と思われる文様は、竹管状の工具を用いて横位方向に連続して、

刺突しており、刺突の形状は細長い梢円形を呈する。

J類—2（鋸歯状沈線及び刺突を施すタイプ）第250図—3・5・6

器形は、鋭利な山形状の波状口縁を有するものと、平行線を有する器形の2形状がみられる。口唇部寄りの文様帶は、交差状に施す文様は、（第250図—3）の土器にもみられる。その下部に斜行の沈線を施すし、その交差する位置に刺突を施す。裏面の波状の先端部に6条の沈線を施す。第〇図—〇は、平行沈線で区画し幅1cmの狭い文様帶を区画している。その文様区画帶の内部には、3条の沈線を一単位として横位方向にゆるやかな弧状を施す。弧状文様の内部に刺突を施す。

J類—3（地方縄文施す後に沈線を施すもの）第250図—12

1点のみの出土である。波状口縁を有し、器厚が薄く口頭部に入字状文様を施すし、口頭部のくびれ部分に円形に刺突を横位方向に施す。文様のモチーフは、J類—2と非常に似ている。

J類—4（磨消縄文を施すもの）第250図—1・2・8・13～17

本類は、文様構成として、菱形文様、稻妻状文様、弧状文様、帶状文がみられる。器厚は薄く焼成が良好である。器外面にはスヌ状炭化物の付着がみられる。器形は、壺形土器と、深鉢形とに分かれる。（第250図—17）は口唇部上面に縄文を回転している。壺形土器は、胴部が外側に張り出す球状形を呈す。磨消縄文は充填技法と磨消技法がみられ、（第250図—16）は充填技法であり他は全て磨消技法である。

以上のように第IV群土器をa～j類と分類した。第IV群j類を除き、十腰内I式の範疇でとらえてきた土器である。今回は、本遺跡から出土した完形土器を中心にして大石平遺跡[1]の十腰内I式土器を第1～3段階に分類し土器の変遷を記載する。（第324図参照）

（第IV群第1段階）

本類は、土器の分類のa・b類—1・c類を主体とする土器である。器形は、深鉢形・壺形・鉢形の器形がある。深鉢形は、口頭部が内反し肩部が張りだす形状で、口頭部の内反度が強い土器である。口縁は平口縁と波状口縁があり波状口縁の突起は鋭利である。壺形は、橋状把手を有するものが多い。土器分類のf類（橋状把手をもつもの）は、本段階に該当すると思われる。橋状把手は、小形の壺にもみられるが、大形の壺に多く橋状手の両端は、つば状の隆起帯と接合するという特徴がある。つば状隆起帯と橋状把手との関係は、十腰内遺跡で磯崎氏が指摘し、第I群土器の壺形土器1型に分類している。（磯崎：1968）、縄文時代後期における橋状把手の初現はいまだ明確ではないが、螢沢遺跡（青森市：1979）、中ノ沢西張遺跡（青森県1976）の両遺跡から縄文時代後期初頭～前半にかけての土器と出土しており、縄文時代後期の初頭の段階から出現する。特に橋状把手は、甕棺に多く多用されるが、今回の本遺跡の調査では、第

IV群G類に壺棺に似たモチーフの土器が出土したが、壺棺と断定できるまでには至らなかった。橋状把手は、第IV群1段階では発達するが、次の第IV群第2・3段階にかけて消滅していくと思われる。口縁は波状口縁を呈するものが多く、深鉢形と似ている。第1段階の器形を概観すると深鉢形が主体で、鉢形はあまり発展せず、また、壺形土器は大形壺が多く橋状把手を用いるのが特徴である。

文様区画帯は、区画帯を有するものと、有していないものとに分かれる。区画帯を有するものは、2～3条の横位沈線及び粘土紐を巡らして、口頭部区画帯と胴部区画帯を構成している。胴部区画帯は胴部下半地に巡らすものが多い。区画帯を有さない土器は、口唇部から底辺部寄りにかけて全面に文様を施文する傾向がみられる。

深鉢形・台付鉢形の口頭部文様帯は、横位の沈線間に弧状や、円形と梢円形の組み合わせ文様で狭いの区画帯を構成するのが一般的である。第198図一五の深鉢形は、広い文様帯で縱位の卵形文様を施文し類例は少ない。壺形土器は橋状把手や、粘土紐と沈線の組み合わせであり、深鉢、鉢形土器と比較すると広い文様帯である。胴部文様帯は、縱位の渦巻文・交差状の文・縱位・縱位と斜位の組み合わせを施文しており、基本的には縱位パターンを基本としている。また、波状口縁をもつ土器は波状口縁の下部を文様の中心及び基点としている。文様手法としては、沈線文が主体であり、次に粘土紐が続く磨消繩文の手法は本段階では少ない。

#### (第IV群第2段階)

本類は、土器分類a・b類一2を主体とする土器である。器形は深鉢形・鉢形・台付鉢形・壺形の器種がみられる。深鉢形は、口頭部が内反し、肩部が張る第1段階の形状と同様なものと口頭部が張りだし口唇部寄りが内反する二つの形状がみられる。口縁は、平口縁と波状口縁を有するが、波状口縁は第1段階でみられた鋭利な波状は、みられなくなりゆるやかな波形を呈している。また、波状口縁頂端部のみに刻みを施文している。鉢形は、底部から口縁にかけて外反する形状を呈する。台付鉢形は、台部が高く明瞭なものと、底辺部がえぐれて内反し台部が低い形状の二とおりがみられる。壺形は、大形壺は少なく口頭部が内反し胴部中央が張り出す小形壺が多い。本段階の器形の特徴としては、深鉢形が主体であり、台付鉢形が発達する。また、壺形が小形化の傾向に移行していくことである。2～3条の横位沈線を巡らして文様区画帯を構成している。深鉢形は、口頭部文様区画帯と胴部文様区画帯が分離し多段化するものと、分離しないものがみられる。文様区画帯の下部は、胴部張り出し部を下限としており、第1段階の深鉢形と比較すると、文様区画帯の幅がせばまる傾向がみられる。壺形土器の区画帯も同様に変化する。台付鉢形は、口頭部文様区画帯と胴部文様区画帯に2分しており口頭部文様区画帯が狭いものと、口頭部・胴部・台部と三つの文様区画帯のものがみられる。特に台部の高い台付鉢形で三つの文様区画帯を構成するのが顕著である。

文様は、深鉢形で口頸部文様区画帯が狭いものは、横位沈線の間に縦位のS字状文様を施文しており、口頸部・胴部文様区画帯が同じ幅を持って編成しているのは、同様な文様モチーフを施文している。しかし、(第197図一6)は、口頸部文様帶にV字形の磨消繩文・胴部文様帶に沈線の入組状文と相反する文様構成で、この様な例は少ない。文様手法は、沈線・磨消繩文・粘土紐を用いている。特に沈線の中で櫛齒状文様を施文する土器は、本段階で出現し隆盛をきわめ次の第3段階にまで断続する文様であり、第1段階にみられた深鉢形で縦位方向に擦痕状に施文する技法が、櫛齒状文様に変化すると思われる。この櫛齒状文は、深鉢形土器に施文するという特徴があるが、近野遺跡(青森県1977)で台付鉢形に、中の平遺跡(青森県1975)で鉢形に施文されている。深鉢形以外に施文する例はまれで壺形に施文されていない。このことから櫛齒状文は十腰内1式の中での幅の狭い時期と、限られた器形に施文するという特徴がみられる。台付鉢形は、口頸部文様帶は狭義で横位の沈線間に縦位の弧状文様を施文しており、台部文様帶も口頸部文様帶より広いが同様な文様モチーフを施文する例が多い。胴部文様帶は、横位方向に展開する稚拙な入組状の文様である。壺形は、口頸部文様帶に粘土紐及び楕円形、弧状の文様を施文しており、粘土紐は第1段階でみられた8の字形の文様から簡略化の傾向に移行する。胴部文様帶は、深鉢・壺形の文様モチーフと同様である。

第2段階の特徴としては、器形の面で台付鉢形が多くなり、壺形が小形化する。また、器形の中で主体を占める深鉢形の波状口縁がゆるやかな波形に変化する。文様区画帯は、第1段階に比較して胴部張り出し部まで上がり文様区画帯の幅が狭い。また、口頸部・胴部の文様区画帯の幅が同じで多段化した傾向がみられる。文様のメルクマールは、横位方向に展開する稚拙な入組状文が主体であり、それに付随する斜位・楕円形の副次的な文様がある。

#### (第IV群第3段階)

a・b類—3を主体とする土器である。器形は、深鉢形・鉢形・台付鉢形壺形の器種がみられる。深鉢形は口頸部が内反し肩部が張るものや、口頸部が外反し口唇部寄りが内反する形状などは、第2段階の深鉢形の形状と変わらない形状を呈する。しかし、底辺部から口縁にかけて外反するものと、口唇部寄りの外反度が強い形状も出現し形状の面ではバラエティに富んでいる。口縁は、平口縁と波状口縁があり平口縁が主体を占める。鉢形の形状も深鉢形同様に形状が多種にわたり一定していない。台付鉢形は、台部が低いものと台部の器高が高いものがみられるが台部の高いものが多い。全体の形状からカップ形の形状が多くこの様なカップ形を呈する土器は、近野遺跡(青森県1977)木戸口遺跡(平賀町1983)から出土しているが遺跡からの出土例は少ない。壺形は、小形な器形と大形の器形が存在する。小形壺は口頸部が長い長頭壺が多い。

文様区画帯は、2~3条の横位沈線を巡らして構成している。横位の沈線には、第1・2

段階でみられた縦位の沈線を施文されなくなる。深鉢形は、口頭部と胴部文様区画帯が2分される区画帯と、2分されない区画帯の二つのパターンがある。区画帯の下部の位置は、第2段階の区画帯より更に器形の肩部寄りに上がり文様区画の幅が狭い。鉢形は、区画帯を有するものと、有さないものがある。台付鉢形は、口頭部・胴部・台部の三つの文様区画帯に分離する。特に口頭部文様区画帯の幅が狭い。壺形は、口頭部・胴部文様区画帯と2分されるものと、口頭部文様区画帯のみの2種の区画帯を有する。

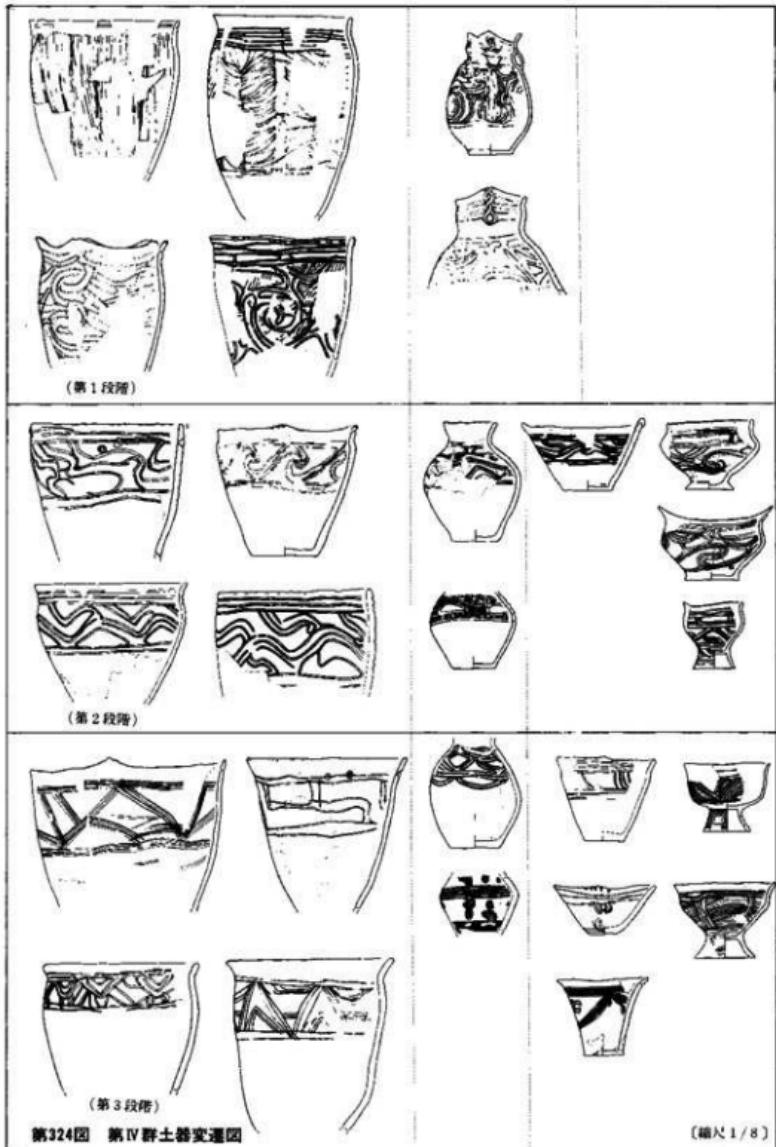
深鉢形はカギ状・斜位・楕円形・弧状文様が横位方向に展開するものが基本であるが、第2段階と比較すると簡略化の傾向が著しい。また、副次的な文様も減少し矢羽状・斜位状文がみられる程度である。文様区画帯が2分している区画帯は、上・下の区画帯とともに同様な文様が施文されている。鉢形は、深鉢形文様と同じ文様モチーフを施文するものが多いが、深鉢形で施文されたカギ状文は施文されていない。台付鉢形は、口頭部・台部の文様が簡略化して施文している。(第232図-6)は、台部にすかしを入れた文様であり他の種類は本県ではみられない。胴部文様帯は、斜位・縦位と横位の組み合わせなど直線的な文様の構図が多い。壺形は、口頭部文様帯が鉢形と同様に簡略化した文様の構図であり、胴部文様帯はカギ状・弧状文を施文し深鉢形の文様構成と同一である。

第3段階の特徴としては、文様区画帯の幅が第2段階よりも更に狭くなり、文様が簡略化され副次的な文様も減少する。

第IV群土器の第1～3段階の変遷は、土器分類のa～c・f類を中心に用いて変遷を記載した。ここでは、d・e・g～i類について検討したい。

d類は無文土器である。無文土器は十腰内1式に該当する遺跡から多く出土しており、器形は、深鉢・鉢・壺形の器形がみられ深鉢・鉢形が多い。また、台付鉢形の無文土器は出土していない。縄文時代後期における無文土器の初現は明確でないが、十腰内1式以前の弥栄平(2)遺跡(青森県1984)・外長根(4)遺跡(青森県1981)から量は少ないと出土している。十腰内1式の近野遺跡(青森県1977)中の平遺跡(青森県1975)などから大量に出土した。同時期の鷹架遺跡(青森県1981)の第14号ピットからは、深鉢形、鉢形の6個体の良好な資料がセットとして出土した。その内、3個が無文の土器で本遺跡の第IV群第2段階の土器と共伴している。今後、この様なセット関係をつかみながら無文土器を分類していく必要があると思われる。

e類の縄文は一括して本類に分類した。この粗製土器の位置づけはいまだに定まっていない。本遺跡での特徴は、縄文の原体が単節LRと無節のLの使用が多い。口頭部に撚糸圧痕を横位方向に巡らすものは、縄文時代後期初頭の牛ヶ沢(3)遺跡(青森県1984)で撚糸圧痕を鋸歯状、U形状等を施文しており撚糸圧痕が多様されているが、十腰内1式期に入ると1～2条に巡らすものに変化し器外面には施文されなくなる。また、撚糸文・単軸絡条体の施文の土器は、第



第324図 第IV群土器変遷図

[縮尺 1/8]

IV群第1段階の時期に多く使用された文様と思われる。

g類の赤色顔料塗布の土器は、本遺跡の台付鉢形・壺形に多く塗布されている。赤色顔料の塗布は、縄文時代前期（円筒土器上層b式）の大平遺跡（青森県1980）から出土しており、この土器は器外面の塗布では無く器内面に塗布されている。一般的に縄文時代後期（十腰内I式）に多く塗布される傾向がみられる。また縄文時代後期（十腰内I式）赤色の顔料の成分は、酸化鉄が多く用いられるが十腰内IV式の尻高4遺跡では水銀朱も確認されている。

j類は、十腰内I式以降の土器を含めたものである。本類は焼成及び文様施文から十腰内I式の範疇に入らないものである。しかし、磯崎氏が設定した十腰内II式（磯崎1968）で提示した6片以外の文様モチーフをもつ土器も存在するのは事実であり、十腰内III式の範疇に該当させるのも編年上無理が生じる土器である。これらの文様モチーフをもつ土器が十腰内II式に併行させることについては、鈴木氏の反論（青森県考1983）もあり、今回は本遺跡の第IV群j類が県内の、中の平遺跡（青森県1975）・近野遺跡（青森県1977）・李平II号遺跡（尾上町1980）から同様なモチーフをもつ土器が出土し、十腰内II式に併行するかについては結果を保留したい。最近この種の土器が本県で数多く出土しており再考の余地があると思われる。（成田滋彦）

#### オ. 第V群土器

本群の土器は縄文時代晩期に比定されるもので、以下、個々の特徴について述べる。

1. 調査区C W—363区に出土した。注口土器の口縁部と思われる。口唇部にB突起がめぐり頭部の雲形文は、横に流れている。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は薄く、色調は灰褐色を呈している。
2. 調査区C W—368区に出土したが、1と同一個体で、注口の胴下半部と思われる。注口取付部に向かって右側の部分で、1段大きい突起でその位置を示している。そのほかについては、1と同じ特徴をもっている。縄文は、いずれも細かいR Lである。
3. 調査区の西側で、土壤の分布が密なD H—363区に出土した。壺形土器の胴部片と思われる。磨消しの雲形文は横位に流れ、細かいR Lの縄文が施文されている。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は薄く、色調は暗褐色を呈している。
4. 調査区C V—363区に出土した。台付鉢か、鉢形土器の口縁部片と思われる。口唇部に刻目のみられる口縁部は、肩部からくびれて外反し、肩部は張って、その上部に点列文が一条めぐっている。胴部には磨消し雲形文が施文されている。縄文はL Rの縄文である。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は比較的厚く、色調は、内外面ともに黒褐色で、ヌスの付着がみられる。
5. 調査区C W—363区に出土した。4と器形その他の特徴もほとんど同じであるが、4よりやや小形である。肩部には縦型の突起が1個みられる。

6. 調査区C W—363区に出土した。台は鉢が深鉢の破片と思われる。口縁部はやや外反し、口唇部には刻目が連続してみられるが、山形突起が1個みられる。頭部には2条の細い沈線がめぐり、段を形成している肩部にも1条の細い沈線が巡っている。胴部にはL Rの繩文が施文されている。胎土には粗く、焼成は良好である。色調は、内外面ともに灰褐色を呈しているか、口縁部外面にススが付着している。
7. D—5—eの覆土に出土した。台付鉢が深鉢形土器と思われる。口縁部は直立し、肩部は段を形成して張っている。口唇部には刻目がみられる。胴部にはしの繩文が施文されている。口縁部には補修穴が1個みられる。胎土は粗く、焼成は良好である。器厚は厚い。色調は灰褐色であるが、内外面ともにスス状炭化物の付着が多く、片口形土器と思われる。
8. 調査区C X—368区に出土した。台付鉢が浅鉢形土器と思われる。口縁部はやや外反している。口唇部には細かい刻目の連続と山形突起が1個みられる。頭部から肩部にかけて、段が形成されていて、3条の沈線が巡っている。張った肩部にB突起が1個みられる。胴部にはL Rの繩文が施文されている。胎土は粗く、器厚は口縁部、頭部は薄いが、肩部、胴部は厚くなっている。色調は、内外面ともに灰褐色を呈しているが、内面にはスス状炭化物が付着している。
9. 調査区のC W—363区に出土した。鉢形土器と思われる。肩部から胴部にかけて、R Lの繩文が施文されている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。器厚はやや厚い。色調は内外面ともに黒褐色である。
10. 調査区C W—359区に出土した。鉢形土器と思われる。口縁部は外反している。口唇部には全体に斜めの刻目が巡っている。胴部にはL Rの繩文が施文されている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。器厚はやや厚く、色調は、内外面ともに灰褐色を呈しているが、外面にはススが付着している。
11. 調査区C W—363区に出土した。鉢形土器と思われる。口唇部は平坦に調整されている。全体にL Rの繩文が施文されている。胎土は粗く、焼成は良好である。器厚はやや厚く、色調は内外面ともに灰褐色を呈しているが、外面にはススが付着している。
12. 表面採集の遺物である。鉢形土器と思われる。口唇部は平坦に調整され、しかも、山形突起もみられる。全体にL Rの繩文が施文されている。胎土は粗く、焼成は良好である。器厚はやや厚く、色調は内面が灰褐色である。外面は黒褐色であるが、ススが付着している。
13. 調査区C V—351区に出土した。鉢形土器と思われる。全体にR Lの繩文が施文され、口縁部には、その上に5条の沈線が巡っている。沈線の一部に小突起がみられる。胎土は粗く、焼成は良好である。器厚は薄く、色調は内面が暗褐色、外面が赤褐色を呈している。
14. 調査区C W—363区に出土した。台付鉢と思われる。胴下半部にはL Rの繩文が施文され

ている。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は台部と底部は厚いが、ほかは薄い。色調は、内面が暗褐色で、外面は明褐色である。

15. 調査区D F—370区に出土した。壺形土器と思われる。肩部には1条の沈線がみられる。胴部にはR Lの細かい縄文が施文されている。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は薄く色調は黒褐色で外面にはススが付着している。
16. 第13号B住居跡の覆土に出土した、浅鉢形土器である。口唇部には1条の沈線がみられる。口縁部はやや内湾して、沈線と点列文が交互に施文されている。胴部から底部にかけて、細かいL Rの縄文が施文されている。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は薄く、色調は、内外面ともに赤褐色を呈している。

17. 調査区D F—345区に出土した。壺形土器の頭部である。横に突起が4個並んでいる。胎土は密で、焼成は良好である。器厚は薄く、色調は、内面が黒褐色で、外面が灰褐色である。以上、大石平遺跡(1)で出土した縄文時代晩期の土器についてその特徴を説明したが、当遺跡から出土した遺物の総量と比較すると、ごく少量である。これらから、当遺跡の縄文時代晩期についての全貌を把握することはむづかしく、出土した中での資料について当該時期の特徴を述べる。

まず、東北北部の縄文時代晩期については、これまで大洞各式に比定している。当遺跡の晩期の土器もほとんどこれらの形式の範疇に入るものと思われる。

17点の土器の、口縁部、その他の部位の文様は、沈線の状態、突起の位置とその形態、磨消し雲形文等から、その大部分は大洞C<sub>2</sub>式と想定できる。しかし、(6)は、口縁部に羊歯状文が施文されており、羊歯状文の盛行する大洞B C式に比定できるものと思われる。(7)は、壺形土器の頭部が内に傾き、肩部に突起の配列から大洞C<sub>1</sub>式と思われる。(1)(2)(3)の磨消し雲形文は、この文様の盛行する大洞C<sub>1</sub>期と比べると、雲形文の構成がやや簡素になり、しかも、横に流れる傾向があり、大洞C<sub>1</sub>式の後半から大洞C<sub>2</sub>式のものと思われる。この注口土器と、胎土、色調、文様、長めの外反する口縁部などがよく似たものは、是川遺跡、右工斎門次郎塗、土井上号、安堵屋敷、高石野の各遺跡などでも出土しており、いずれも大洞C<sub>2</sub>式に比定している。

次に、器形についてみると、当遺跡からは、注口土器(6)、壺形土器(3, 7)、台付土器、鉢形土器となって、香炉形土器、ミニチュア土器などを除くと、一応、この時期によくみられる器形は揃っている。しかし、個々の数量が少ないことはいうまでもない。

また、遺物の分布状況からみると、その大半はCX—364に集中しており、この位置はいわゆる本遺跡では土器捨場となっている北に傾斜する斜面である。ほかに(1)(2)の注口土器は、これらから西に離れたところに出土し、大形のカメ形土製品(別掲)と思われるものは、CY—351区の近辺からの出土である。CY—351区の付近には、縄文時代晩期と思われる土塙が3

基東西に並んで検出された場所である。

このように、出土土器の種類、位置、量からみると、晩期特有の捨場とはいがたく、祭祀用占地にみられる土偶、岩版などの遺物も出土していない。また、この時期の住居跡も検出されず、当該時期らしい土壤が3基検出されただけである。したがって、本年度の調査区域内に限ってみると、ある一時期に、当該時期の人間が当遺跡に立ち寄って、何らかの行動を起こして、遺物を廃棄していったものであろう。

(工藤泰博)

### 力 遺構外出土の土製品

調査Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区から出土した遺構外の土製品は、次のとおりである。

円盤状土製品296点、鉢形土製品36点、土錐15点、土偶9点(5個体分)、三角柱状形土製品5点4個体、茸形土製品5点、靴形土製品4点、動物形土製品3点、土製耳飾5点、土製装身具1点、船形土製品1点、形状、用途不明土製品12点、計296点である。これらの土製品は、遺構内出土の土製品と共に製作技法の認められたものであるが、すべてほかの遺物とともに廃棄された状況で出土したものである。次に項目別にまとめて記載する。

#### (7) 円盤状土製品 (第325図A~D、写真21)

円盤状土製品は、調査Ⅰ区から1点、Ⅱ区3点、Ⅲ区202点計206点が、基本土層の第Ⅰ~Ⅲa層から出土した。出土数量が多いため個々の実測図と観察表は第325図(A~D)と第90表、(写真21)にまとめて図化、記載した。

#### 円盤状土製品について

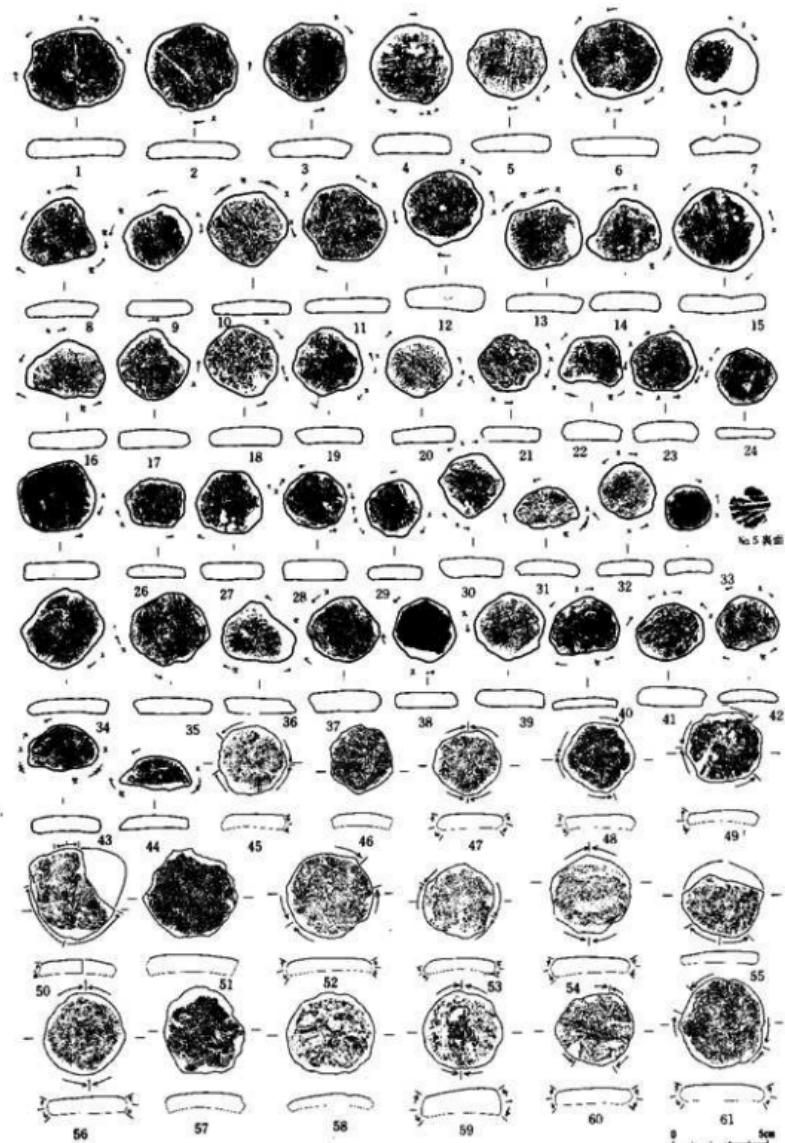
この土製品は遺構の内外から263点出土した。注目したい点は、土壤出土59点、住居跡出土2点である。この種の土製品は鉢形土器胴部片を円形に打ち欠いてから周縁をすりて円形に加工した類が多い。穿孔及び溝状の切り込み、使用痕などを残した類は認められない。多くは胴部の土器片を利用しているため、文様があるなしを問わず多少湾曲して、反りがある。

出土しま円盤状土製品は、直径2.2~5.5cm、厚さ0.6~0.9mm、重さ2~30gの大きさである。ここでは、遺構外出土の土製品のうち重量については、完形品を選び、その傾向を分析してみたところ、結果は次のとおりである。

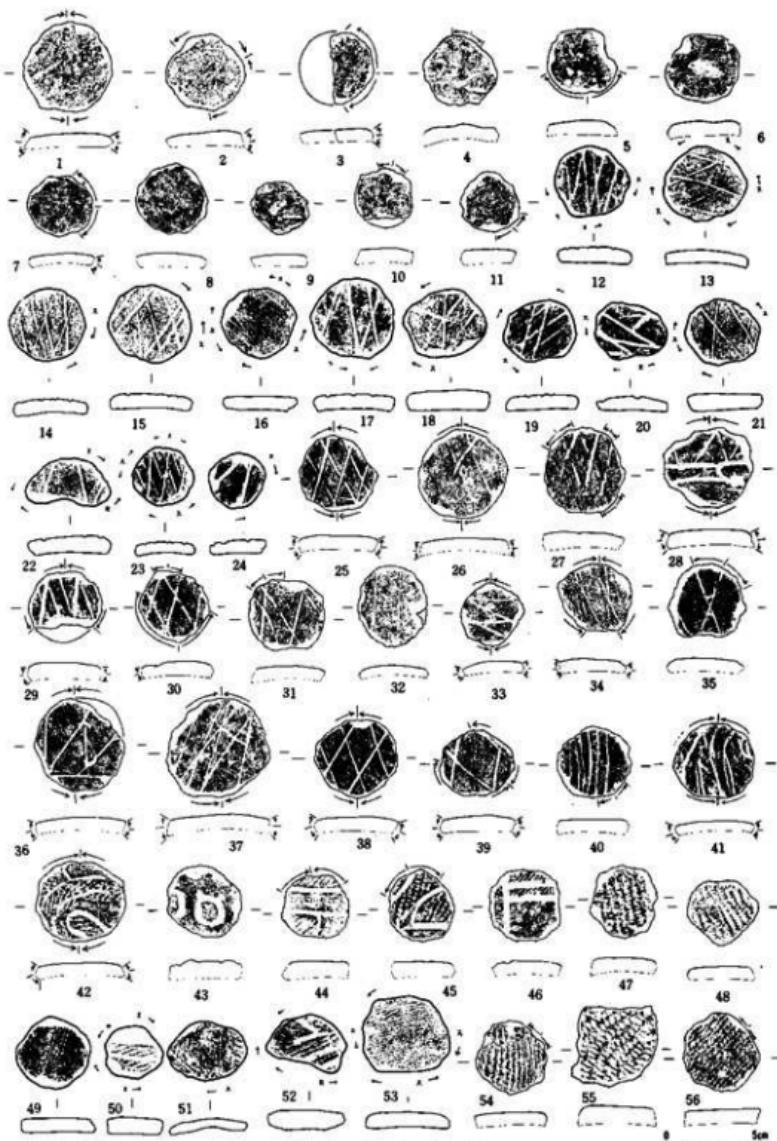
第89表 円盤状土製品重量集計表

単位: g

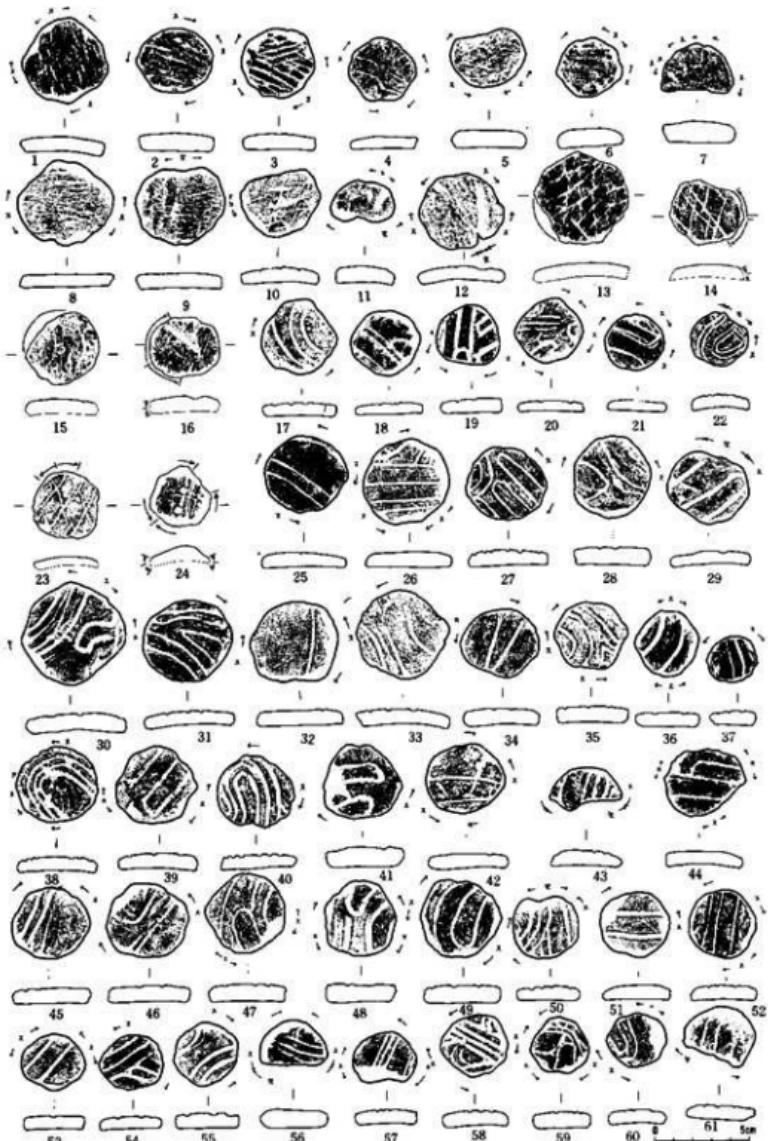
重さ	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	備考
数算	1	2	5	8	11	9	13	9	13	16	14	10	5	7	
重さ	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
数算	6	11	8	5	2	4	2	0	0	1	2	0	0	1	



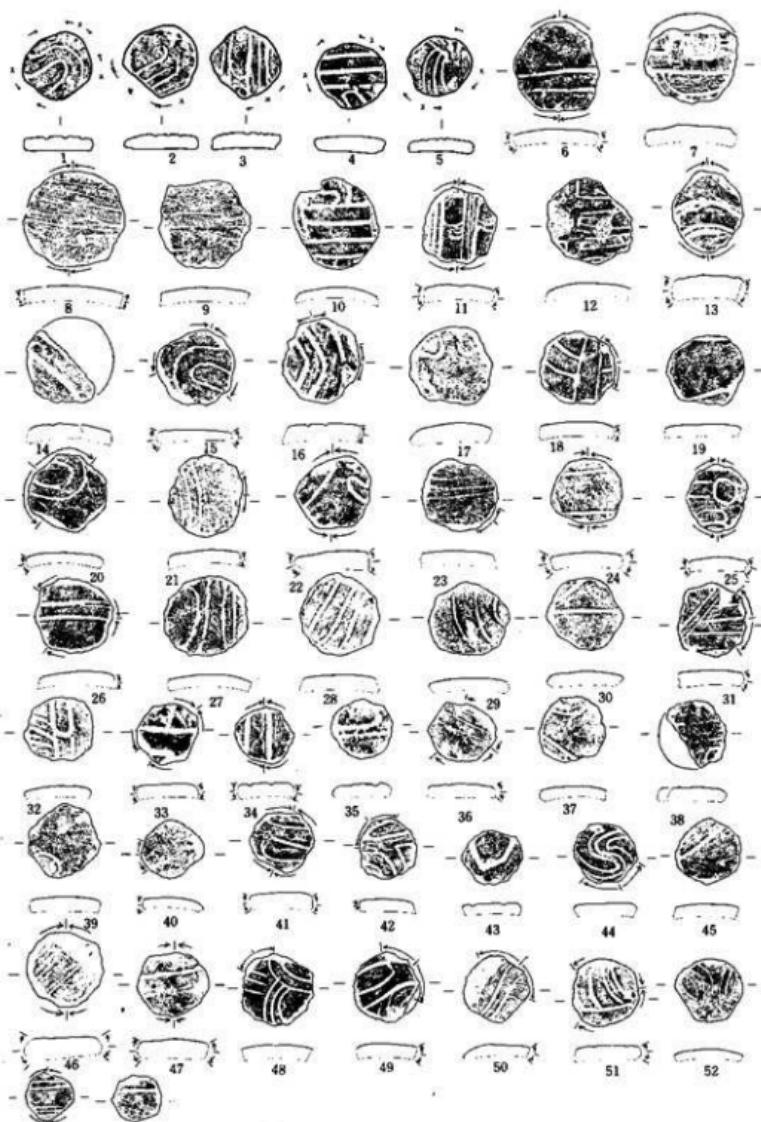
第325図 土製品実測図(A)



第325図 土製品実測図(B)



第325図 土製品実測図(C)



第325図 土質品実測図(D)

第90表 円盤状土製品計測表

遺物 番号	持 番 号	図 出 土 グリッド	層位	大きさ mm		重量 g
				長径	短径	
1	D-21	CW-363	II層	43×39	8	13.5
2	B-56	CX-360	II層	41×40	8	15.0
3	B-54	CX-362	II層	38×36	7	4.3
4	D-10	CX-362	II層	48×48	5	12.9
5	B-55	CY-359	I層	42×41	10	16.0
6	D-45	CY-360	II層	35×32	8	8.35
7	A-46	CY-362	I層	35×34	7	6.7
8	D-12	CY-362	I層	46×45	7	13.2
9	D-42	CY-362	I層	32×30	6	5.7
10	D-43	CY-362	I層	32×29	6	5.3
11	D-23	CY-362	I層	39×37	8	13.6
12	D-16	CY-362	I層	44×40	9	18.5
13	D-48	CZ-358	I層	40×38	8	10.75
14	D-27	CY-363	I層	45×42	7	13.0
15	D-8	CY-363	II層	53×50	10	29.15
16	B-46	CZ-310	I層	38×37	7	10.3
17	A-51	CZ-358	II層	46×45	9	22.3
18	B-4	CZ-359	II層	37×38	8	10.85
19	B-6	CZ-360	I層	37×37	7	10.7
20	A-57	CZ-360	I層	47×40	8	18.3
21	B-30	CZ-361	II層	37×36	8	11.0
22	C-16	CZ-363	I層	36×31	8	9.55
23	R-47	DA-357	I層	38×33	8	8.96
24	D-9	DA-358	I層	50×49	8	18.2
25	A-50	DR-312	III層	38×37	8	14.15
26	B-27	DB-358	I層	44×42	9	18.15
27	B-32	DC-343	I~II層	43×36	6	8.86
28	A-53	DD-358	I層	37×36	8	11.35
29	D-26	DD-359	I層	40×38	8	12.6
30	B-26	DE-358	II層	37×37	8	18.78
31	D-39	DE-360	I層	37×34	8	11.35
32	B-29	DE-360	I層	38×28	9	10.7
33	D-38	DE-361	I層	36×25	7	6.0
34	C-13	DE-362	I層	50×49	8	17.42
35	C-14	DE-362	I層	39×36	7	8.86
36	D-34	DF-358	II下層	30×29	9	7.16
37	A-45	DF-358	II下層	36×35	8	8.35
38	D-54	DF-360	II層	25×23	7	3.15
39	D-53	DF-360	I層	24×23	6	2.15
40	D-33	DF-360	II層	34×32	7	7.0
41	B-9	DF-360	I層	30×26	7	3.65
42	B-8	DF-361	I層	37×37	8	9.65
43	D-18	DF-361	II下層	40×38	8	12.66
44	D-40	DF-361	I層	33×31	7	5.65
45	D-41	DF-361	II下層	32×32	8	8.55
46	D-13	DG-357	I層	42×37	14	21.55
47	B-28	DG-357	II層	46×41	9	17.75
48	D-50	DG-357	II層	34×32	7	6.19
49	B-40	DG-358	II下層	38×37	7	10.95
50	B-42	DG-358	II層	48×42	7	17.0
51	A-54	DG-358	II下層	43×42	9	17.85
52	D-20	DG-359	II層	42×42	7	11.2
53	B-38	DG-359	II下層	42×41	8	16.75
54	D-49	DG-359	II層	37×34	8	4.1
55	B-39	DG-360	II層	38×36	8	11.05
56	B-25	DG-360	II層	41×39	8	13.2
57	B-36	DG-361	II下層	48×43	8	18.1
58	A-56	DG-361	II下層	43×39	9	17.54
59	A-49	DG-361	II下層	40×37	7	4.1
60	R-10	DG-361	I層	39×27	8	6.96
61	D-14	DG-361	I層	45×25	9	8.9
62	D-22	DG-361	II下層	40×37	10	14.3
63	D-11	DG-361	II下層	40×38	10	13.46
64	D-25	DG-361	II下層	35×31	8	8.15
65	R-33	DG-361	I層	32×29	7	6.0
66	B-35	DG-361	I層	40×39	7	11.95
67	A-39	DG-362	I層	31×30	8	6.96
68	A-55	DG-362	I層	38×29	7	7.9
69	B-37	DH-358	I層	53×53	9	25.76
70	D-37	DH-358	I層	37×35	8	11.26
71	D-6	DH-359	II下層	47×44	7	16.4
72	D-19	DH-360	I層	40×37	7	11.9
73	B-31	DH-360	I層	41×38	8	12.71
74	B-34	DH-360	II下層	43×41	7	9.0
75	D-44	DH-360	II下層	33×31	7	6.75
76	A-48	DH-360	II下層	36×34	8	10.85
77	C-24	DH-361	I層	31×31	9	7.25
78	B-45	DH-361	II下層	37×35	7	9.5
79	A-52	DH-361	II下層	45×44	8	16.8
80	A-47	DH-361	I層	35×33	8	8.26
81	D-15	DH-361	I層	41×39	6	11.26
82	A-61	DH-361	I層	47×45	9	19.25
83	B-7	DH-361	II下層	35×32	6	5.8
84	B-41	DH-361	II下層	42×41	6	9.16
85	DH-302		I層	51×42	9	19.15
86	D-7	DF-359	II下層	49×42	9	19.0
87	C-23	DD-355	I~II層	36×33	5	7.6
88	A-60	CZ-359	II層	41×37	8	14.1
89	B-2	DF-359	II下層	41×39	8	13.2
90	A-58	DG-358	II下層	46×43	6	14.6
91	D-37	DH-358	II上層	34×34	6	9.0
92	D-29	CX-363	II層	43×39	7	12.7
93	D-17	CZ-361	II層	43×43	10	19.3
94	B-1	CW-363	II層	48×46	8	18.3
95	B-19	CW-362	I層	39×38	10	15.9
96	A-36	CW-361	II層	42×42	14	26.4

遺物 番号	種 類 番 号	出土グリッド	層 位	大きさ		重量 g
				長辺×短辺	厚さ	
97	D-28	DF-359	II下層	43×42	8	17.6
98	D-32	DI-357	II層	36×33	7	8.3
99	B-23	DG-358	II下層	40×37	8	12.95
100	D-46	CX-362	II層	40×40	12	21.88
101	D-51	DF-360	II下層	36×35	8	10.86
102	D-39	DF-360	II下層	40×37	7	11.65
103	D-24	CW-360	II層	38×34	8	13.0
104	B-44	CW-360	II層	36×34	10	13.75
105	A-22	DA-354	I~II層	38×21	7	6.15
106	D-52	DR-361	II層	35×34	4	5.9
107	C-37	DE-360	II下層	32×31	8	7.96
108	B-5	CZ-356	II層	36×34	7	4.25
109	B-48	DE-360	II下層	37×34	7	8.69
110	D-36	CY-361	II層	36×31	7	8.29
111	D-47	CY-361	II層	38×34	10	13.56
112	C-22	DE-364	IIIa層	31×27	11	(4.65)
113	C-12	DC-253	IIIa層	46×41	11	(11.9)
114	C-7	DD-365	I層	40×26	10	10.95
115	C-6	DG-366	I層	35×32	7	8.05
116	A-1	CZ-369	IIIa層	54×43	9	22.64
117	A-43	CZ-370	表上	37×24	7	(7.25)
118	C-5	CZ-368	II層	40×35	7	12.2
119	C-35	CZ-370	IIIa層	39×36	7	10.74
120	A-38	CZ-370	表上	34×31	7	8.6
121	C-34	CZ-369	II層	41×35	7	12.72
122	D-4	CZ-368	IIIa層	38×33	7	11.3
123	B-53	CZ-369	II層	48×41	6	13.45
124	C-26	CZ-369	IIIa層	47×44	8	19.7
125	C-33	CZ-370	II層	50×45	7	19.32
126	B-18	CZ-370	II層	45×36	9	17.82
127	A-3	CZ-369	IIIa層	45×39	8	17.12
128	D-5	CZ-369	表上	35×31	6	7.6
129	D-2	CZ-369	IIIa層	39×36	7	(11.0)
130	C-25	CZ-369	IIIa層	46×42	7	15.15
131	A-2	CV-365	IIIa層	50×45	9	21.25
132	D-1	CW-370	IIIa層	37×35	6	9.3
133	A-31	CW-364	IIIa層	34×21	7	(5.72)
134	C-21	CX-365	I層	32×30	5	5.7
135	D-3	CX-367	IIIa層	39×35	8	10.45
136	A-37	CX-368	IIIa層	38×34	10	14.04
137	C-42	CX-368	IIIa層	42×36	7	11.47
138	C-3	CX-368	IIIa層	41×37	7	12.62
139	A-44	CX-368	IIIa層	38×18	6	(3.95)
140	C-41	CX-371	IIIa層	43×39	10	17.9
141	C-45	CX-371	IIIa層	42×37	8	12.8
142	B-14	CY-368	IIIa層	40×39	7	12.98
143	C-31	CY-368	IIIa層	50×45	7	18.1
144	C-27	CY-370	IIIa層	43×38	6	11.86
遺物 番号	種 類 番 号	出土グリッド	層 位	大きさ	重量 g	
145	B-16	CY-367	IIIa層	40×37	7	12.8
146	B-40	CY-371	IIIa層	43×33	7	12.2
147	A-41	CY-370	IIIa層	36×30	9	10.91
148	B-15	CY-362	IIIa層	44×40	7	10.46
149	A-11	CY-370	IIIa層	45×38	7	14.23
150	B-13	CY-364	IV層	45×39	5	12.15
151	B-21	CY-367	IV層	40×34	8	11.58
152	C-58	CY-368	II層	35×31	7	8.7
153		CY-362	IIIa層	43×39	11	20.85
154	C-2	CY-368	IIIa層	40×35	8	13.15
155	A-18	CY-368	II層	39×35	9	12.95
156	A-17	CY-369	表土	38×36	9	11.76
157	C-10	CY-364	IIIa層	42×32	6	10.1
158	C-11	CY-364	II層	33×19	8	(5.66)
159	A-21	CY-364	IV層	32×28	6	6.6
160	C-32	CY-367	IV層	49×45	6	17.0
161	C-48	CY-367	IV層	41×37	8	15.65
162	A-10	CY-367	I層	43×35	7	12.08
163	A-5	CY-367	IIIa層	42×36	7	11.75
164	A-32	CY-367	表土	30×29	7	7.08
165	A-8	CY-367	IIIa層	49×32	7	9.51
166	C-60	CY-367	IIIa層	31×28	6	6.92
167	A-16	CY-367	I層	41×28	8	(11.33)
168	C-8	CY-367	IV層	52×42	7	16.54
169	A-7	CY-367	IV層	37×32	9	(11.75)
170	C-36	CY-367	IV層	34×31	7	7.98
171	B-11	CY-367	I層	36×24	8	(7.55)
172	C-49	CY-369	IIIa層	42×40	8	15.85
173	C-47	CY-369	II層	43×40	8	15.8
174		CY-369	II層	37×34	8	12.2
175	A-20	CY-369	II層	34×31	7	9.15
176	A-14	CY-369	II層	40×34	9	(12.5)
177	C-20	CY-369	II層	36×32	4	6.0
178	C-53	CY-369	IIIa層	33×28	6	6.65
179	C-59	CY-369	IIIa層	31×28	8	7.43
180	A-29	CY-369	IIIa層	29×28	6	6.0
181	A-34	DE-364	II層	44×36	6	11.92
182	B-22	記述なし		45×20	8	8.6
183	A-27	CW-369	I層	34×33	8	10.5
184	A-35	CY-370	?	43×36	7	12.72
185	C-55	CY-365	IIIa層	35×31	6	8.28
186	A-6	CX-366	IIIa層	47×42	9	20.45
187	C-51	CX-366	IIIa層	38×35	7	10.56
188	A-19	CX-366	IIIa層	46×33	8	11.0
189	C-28	CY-366	IIIa層	41×40	9	17.9
190	C-29	CY-366	IIIa層	44×35	6	11.4
191	A-13	CY-366	IIIa層	42×34	9	15.55
192	C-52	CY-365	IIIa層	36×34	6	9.32

遺物 番号	種類 番号	出土グリッド	層位	大きさ		重量 g	遺物 番号	種類 番号	出土グリッド	層位	大きさ		重量 g
				長径	幅						長径	幅	
193	C-46	CX-365	Ⅲa種	45×40	8	16.5	200	B-24	CY-370	Ⅲa種	30×28	6	5.3
194	C-17	CX-365	Ⅲa種	41×37	6	10.5	201	C-57	CY-370	Ⅲa種	33×25	5	5.24
195	C-4	CX-365	Ⅲa種	36×31	5	6.8	202	A-15	CY-371	Ⅲa種	49×41	9	21.5
196	C-30	CY-370	Ⅲa種	55×50	8	26.88	203		CY-371	Ⅲa種	44×41	7	15.5
197	C-9	CY-370	Ⅲa種	47×38	8	17.0	204	C-18	CY-371	Ⅲa種	36×34	4	6.62
198	C-50	CY-370	Ⅲa種	35×30	6	7.9	205	C-19	CY-371	Ⅲa種	33×31	7	9.0
199	A-9	CY-370	Ⅲa種	36×29	8	10.46	206	A-24	CY-371	Ⅲa種	31×29	5	4.2

文様 無文58 (28.2%)、有文148 (71.8%)。有文のうち縄文・撚糸文14 (9.5%)、沈線文95 (64.2%)、格子状沈線文22 (15.1%)、磨消縄文6 (4.1%)、網目状撚糸文6 (4.1%)、円形刺突+沈線文2 (1.4%)、沈線+隆帶2 (1.4%)、不明1 (0.6%)、縄文の類には、縄文前期初頭の土器片を利用したものがある。その他の土器文様は、縄文後期初頭の十腰内I式の前期型式中に包括される土器片である。

円盤状土製品の径は、206例中、2cm台—3 (20%)、3cm台—76 (46.0%)、4cm台—77 (46.3%)、5cm台—10 (6.0%) である。径は、長径である。

厚さは、206例中、4mm台—3 (9.0%)、5mm台—7 (4.2%)、6mm台—20 (12.0%)、7mm台—50 (30.1%)、8mm台—51 (30.7%)、9mm台—20 (12.0%)、10mm台—11 (7.0%)、11mm台—2 (1.2%)、12、13mm台—0、14mm台—2 (1.2%) である。

重さは、2 g から29 g まで次表のように計量された。4 g 以下と20 g 以上のものが少ないが、5 g から19 g までは、万遍なく分散している (第98表)。

円盤状土製品は、有文の土器と無文の土器片を利用しているが、利用する土器片の時期によって、有文、無文の製品がつくられる。文様についても特に集中的に多様された傾向は把握できない。利用する土器の文様が、製作当時多量に用いられたものか、否かによって、文様の出現率も異なるものと考えられる。製品の径は、3~4cm台に集中しているが、重さは、相当ばらつきがみられ、規格に均一性があったとは認めにくい。使用目的、用途については定説がないのが現状である。土器片利用の円盤状土製品は、本県では縄文時代早期から晩期までの遺跡から出土している。通常、遺物包含層、遺物の捨て場から出土する例が多い土製品で出土量も多いが、本遺跡では土壤と住居跡から出土した。遺構から出土した例としては、県内では三戸郡南郷村田ノ上遺跡 (縄文後期初頭)、八戸市蘿庭遺跡 (縄文中末~後期前半) がある。

土器片を利用した土製品には三角形の類もある。また最初から円盤状に製作した例もあることから、今後はこれらの土製品との比較検討が課題となろう。

#### (4) 土錘 (第325図E、写真21)

土器片を転用した土錘は、I区から1点、III区12点、グリッド不明1点の計14点出土した。

実測図と個々の観察結果は第325図(E)と第91表にまとめてある(写真21)。

転用した土器片は、縄文時代前期初頭の芦野I群土器(ループ文)、尾駿式土器である。形態は、長方形に土器片を打ち欠いてから周縁部をすり、両長軸辺部中央に刻みを入れた類である。

第91表 土錐計測表

遺物番号	博岡番号	出土グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	器形部位	文様
				長径×短径	厚さ			
1	第325図E-12	C W-356	Ⅲ上層	54×41	12	28.25	鉢形網	結束縄文
2	第325図E-7	C X-362	Ⅲ下層	56×51	11	42.46	鉢形網	ループ文
3	第325図E-2	C W-360	Ⅲ層	70×53	8	35.5	鉢形網	縄文(L R)
4	第325図E-1	C X-358	Ⅲ層	71×55	9	36.5	鉢形網	縄文(L R)
5	第325図E-8	C W-358	Ⅲ層	47×42	8	17.66	鉢形網	縄文+結束縄文
6	第325図E-3	D I-357	Ⅲ層	64×50	11	41.65	鉢形網	ループ文
7	第325図E-5	C Y-361	Ⅲ下層	74×65	10	51.95	鉢形網	ループ文
8	第325図E-4	D II-349	I~II層	48×43	10	21.66	鉢形網	ループ文
9	第325図E-14	D E-371	Ⅲa層	36×25	9	7.35	鉢形網	無文
10	第325図E-15	小明		43×32	8	9.75	鉢形網	尾駿式
11	第325図E-13	C X-355	Ⅲ上層	45×33	10	16.35	鉢形網	縄文R L
12	第325図E-10	D F-355	Ⅲ~Ⅳ層	52×35	10	16.75	鉢形網	ループ文
13	第325図E-11	D I-355	I層	47×45	10	19.68	鉢形網	ループ文
14	第325図E-6	D R-262	Ⅲa(P-4)	74×53	9	41.70	鉢形網	ループ文

#### 土錐について

土錐と略称したが、土器片錐のことである。遺構外14点、遺構内1点計15点出土した。

大きさは3.6×3.5cm~7.4×6.5cm、厚さ0.8cm~1cm、重さ7.35~51.95gで、形状はほぼ隔丸長方形である。渡辺誠氏の分類(渡辺:1973)では、土器片錐A種に相当する。土器片を長方形に打ち欠いて、その周縁をみがき、その長軸の両端に縄掛けのために切り込みを施した類である。用途は漁網錐である。形状、重さともに個体差があるが、いずれも転用した土器は、ループ文系の芦野I群、尾駿式(春日町式相当)土器で、縄文年代前期初頭に位置付けられているため、使用年代はほぼその一時期に想定できる土錐である。この種の土錐の最古例は、草創期夏島式土器片を利用したもの(神奈川県平坂貝塚)で、縄文後期まで各地の遺跡貝塚から出土している。県内では、前期初頭の土器片を利用したものが、三沢市野口貝塚、芦野、鷹架、上尾駿、発茶沢遺跡などから出土している。漁網錐は、縄文時代のものとして土錐のほかに切目石錐

(渡辺:1973)。石錐は、本遺跡からも多量に出土しているが、それ自体から年代を把握することは困難である。六ヶ所村新納屋遺跡(2)では、縄文早期中~末葉(吹切沢式~早稲田5類)の住居跡から、切目石錐が720点も出土したが、そこでは土錐の出土例がなく、またこの時期が海進期のピークであったといわれている。そして前期初頭がそれ以降になると土錐が出現して石錐と併用された時期があることは、漁労活動の変化→捕獲対象魚類の変化→自然環境

の変化を物語っている。

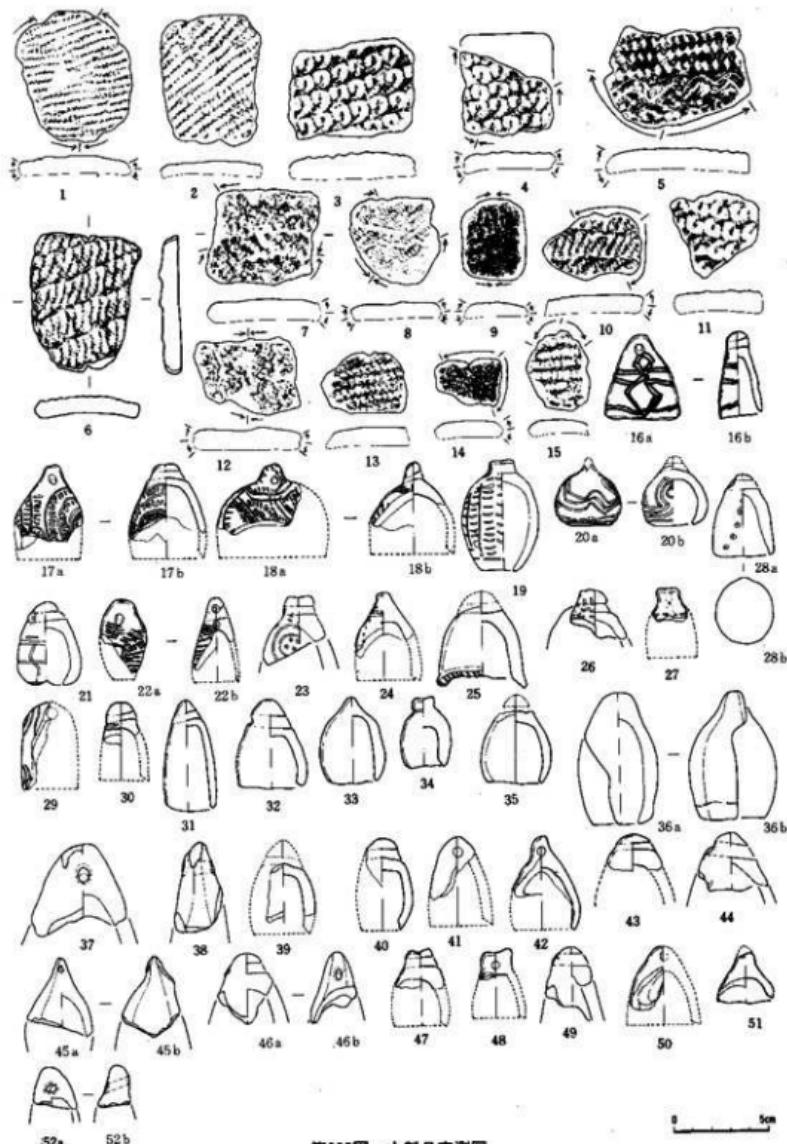
(f) 鐸形土製品 〔第325図E、写真21〕

本土製品は、調査II区から6点、III区で30点計36点出土した。出土層位は、第I～IIa層である。出土数が多いため個々の遺物については第325図(E)の実測図と第92表の観察表にまとめて記述した(写真21)。

鐸形土製品について

本土製品は、遺構内4点、遺構外37点、(形状用途不明土製品中の1点を含む)計41点出土した。これらのうち、その全体像を残した類は10点余りである。これらの土製品を大別すると、文様を施文したI群(第325図E-30、第325図E-16、第325図E-24～第325図E-18、第325図E-49、第325図E-23、第325図E-36、第325図E-21、第325図E-19)と文様を欠く素文のII群(第325図E-32、第325図E-40、第325図E-41、第325図E-22、第325図E-26、第325図E-45、第325図E-46、第325図E-52、第325図E-28、第325図E-37、第325図E-44など)に分けられる。頂端部の穿孔(貫通孔)の有無、その方向からA類—穿孔方向が周口部と並行する類(第325図E-34、第325図E-27以外)、B類—頂端部に穿孔がなく結縛用の沈線か刻みのある類(第325図E-34、C類—頂端部の穿孔が周口部に垂直な類(破片のため鐸形土製品とは断定できないが第325図E-27)D類—A～C類以外の類(穿孔、結縛用の刻み、沈線なし)(第325図E-26))がある。A類は、①頂端部のつまみ出し部の長軸方向から穿孔したか、②短軸方向によったかで①②に分けられる。①—(第325図E-32、第325図E-43、第325図E-39、第325図E-47、第325図E-30、第325図E-40、第325図E-25、第325図E-17、第325図E-45、第325図E-52、第325図E-49、第325図E-23、第325図E-36、第325図E-21、第325図E-19など)②(第325図E-31、第325図E-48、第325図E-41、第325図E-22、第325図E-18、第325図E-28、第325図E-37,)これには、円形状のつまみ出しがある場合は③となる。また、周口部が円形の類—(a)—(第325図E-32、第325図E-34、第325図E-35、第325図E-33、第325図E-49、第325図E-21、第325図E-19など)と梢円形の(b)—(第325図E-31、第325図E-39、第325図E-40、第325図E-16～第325図E-25、第325図E-29、第325図E-26、第325図E-46、第325図E-52、第325図E-37)にも分けられる。I群(有文)は、沈線文の類、(第325図E-30、第325図E-16、第325図E-20、第325図E-19)沈線文十刺突文の類(第325図E-17、第325図E-18、第325図E-24、第325図E-21、第325図E-36)、刺突文の類(第325図E-49)、周口部のみ刻み目のある類(第325図E-25)に分けられる。

この土製品の年代は施文方法とこれまでの出土例等からみて、縄文時代初頭を中心とするものと思われる。なお、本土製品の名称は、「十腰内遺跡報告書(今井、磯崎:1968)」から採用



第325図 土製品実測図

第92表 鈴形土製品計測表

遺物 番号	種別 番号	出土グリッド	場所	大きさ mm		重量 g
				長×横×高	高さ	
1	第325図 E-32	C Y-361	II 層	38×33	51	27.5
2	第325図 E-31	C Y-298	II 層	49×27	59	29.4
3	第325図 E-34	C Y-362	I 層	27×26	39	16.6
4	第325図 E-35	D F-358	II 下層	37×33	39	23.8
5	第325図 E-43	D B-359	I 層	29×22	20	
6	第325図 E-50	D H-363	I 層	24×18	35	
7	第325図 E-39	C Z-296	I b 層	25×18	40	
8	第325図 E-33	D F-359	II 下層	34×33	46	26.9
9	第325図 E-42	D F-360	II 下層	33×29	50	
10	第325図 E-47	D G-359	II 下層	24×19	23	
11	第325図 E-51	C Y-361	II 層	31×28	27	
12	第325図 E-48	表採		17×12	17	
13	第325図 E-40	D D-355	I ~ II 層	23×22	49	
14	第325図 E-30	C Y-363	I 层	18×17	28	
15	第325図 E-16	C W-302	II 層	39×22	46	13.9
16	第325図 E-41	D A-296	II 層	25×23	34	
17	第325図 E-22	C X-300	II 層	24×22	39	
18	第325図 E-25	D F-359	II 下層	47×38	46	27.5
19	第325図 E-24	C Y-362	I 層	31×19	37	
20	第325図 E-20	C X-363	II 下層	34×33	32	17.9
21	第325図 E-17	D H-357	I 層	40×35	47	19.9
22	第325図 E-18	C Y-361	II 層	48×41	37	
23	第325図 E-29	C Z-297	I 層	15×13	47	
24	第325図 E-27	D F-359	II 下層	20×19	18	
25	第325図 E-49	D A-365	II 層	31×29	51	23.4
26	第325図 E-21	C X-371	III a 層	26×(26)	59	34.8
27	第325図 E-45	C X-371	III a 層			
28	第325図 E-37	C X-368	III a 層			
29	第325図 E-19	C X-365	III a 層	20×( )	45	
30	第325図 E-44	C X-367	III a 層			
31	第325図 E-46	C W-364	III a 層			
32	第325図 E-36	C Y-368	III a 層			
33	第325図 E-23	C Z-370	表土			
34	第325図 E-52	C Y-366	I 層			
35	第325図 E-26	C Y-368	I 層		52	
36	第325図 E-28	C Y-369	I 層			

した。是川遺跡の報告書では「鈴形土製品」(保坂: 1972)、日本原始美術大系(1978)では「土製垂飾」と呼称している。用途は不明であるが、垂飾、土笛などの一種かも知れない。

#### (工) 鈴形土製品 (第325図 F, G)

本土製品は、調査II区北側から4点出土した。ほかに、II区の土壤から1点出土している。この土製品の名称は、八戸市墓塚遺跡出土の土製品でも用いたが、本土製品は墓塚遺跡出土の土製品とは形態が異なるが名称だけは踏襲した。

第325図F-1は、II区C W-300グリッドのII層から出土した。口縁部を欠失しているが、完形品に近い土製品である。全体像は、中空土偶の足のつま先部分に垂直な貫通孔があるといった形状である。全長6.3cm、最大幅4.3cm、残存高2.8cmの大きさである。

土器に例えて施文状況を説明すると、口縁部の口唇部分を欠失しているため一部不明であるが、頸部・胴部には平行沈線が走り、胴部に二、三条単位の沈線が縱走していて、文様は竪がき沈線で構成している。つま先部分中央には0.4cmの焼成前貫通孔が上から下に穿孔されてある。底面は丸底状で、念入に研磨してある。整形は丁寧で、胎土には土器と同量の砂を含ませてある。焼成はかたく、焼斑と淡橙色が認められる。重さは、約40gである。

第325図H-5は、II区C X-303グリッドのIII層から出土した完形品である。全長6.8cm、最大幅4.4cm、高さ2.6cm、口径 $2.4 \times 1.9$ cmの大きさである。無文で、全面をよく研磨して光沢が残っている部分もある。つま先の部分の中央には、製作時の貫通孔が垂直に穿孔されてある。重さは約40gである。胎土は精選したものを用いて、焼成は良好、色は灰白～浅黄橙色である。

第325図F-2は、II区C X-303グリッドのIII層から出土した。つま先部分を欠失している。残存部全長4.8（推定全長6.4）cm、最大残存幅4.1cm、高さ2.3cmの大きさである。文様は、全体の手法としては磨消繩文で、原体は撫糸（L）である。口縁部に沈線をまわして胴部には馬蹄状の文様を縱、横に配してある。底面の文様は馬蹄状文と右廻りの満巻文を施文してある。胎土は精選されたものを使用して、焼成はかたく、色は、外面が赤橙色、内面は暗赤灰色を呈している。

第325図H-1は、II区D A-302グリッドのI層から出土した。口縁部とつま先部分を欠失している。残存長4.9（推定全長5.5）cm、最大幅3.8cm、残存高3.1cmの大きさである。文様は、竪がき沈線と円形刺突文の組み合わせで、モチーフは、繩文後期初頭によくみられる文様である。口頭部と底辺部に平行沈線を一、二条まわして、胴部には馬蹄状沈線と刺突文を施文してある。底面には、馬蹄状文を3個配してある。沈線は太く、深く施文されて力強い。胎土は砂の混入のない粘土を用いてある。焼成は堅緻で、色は灰白色～褐灰色を呈している。

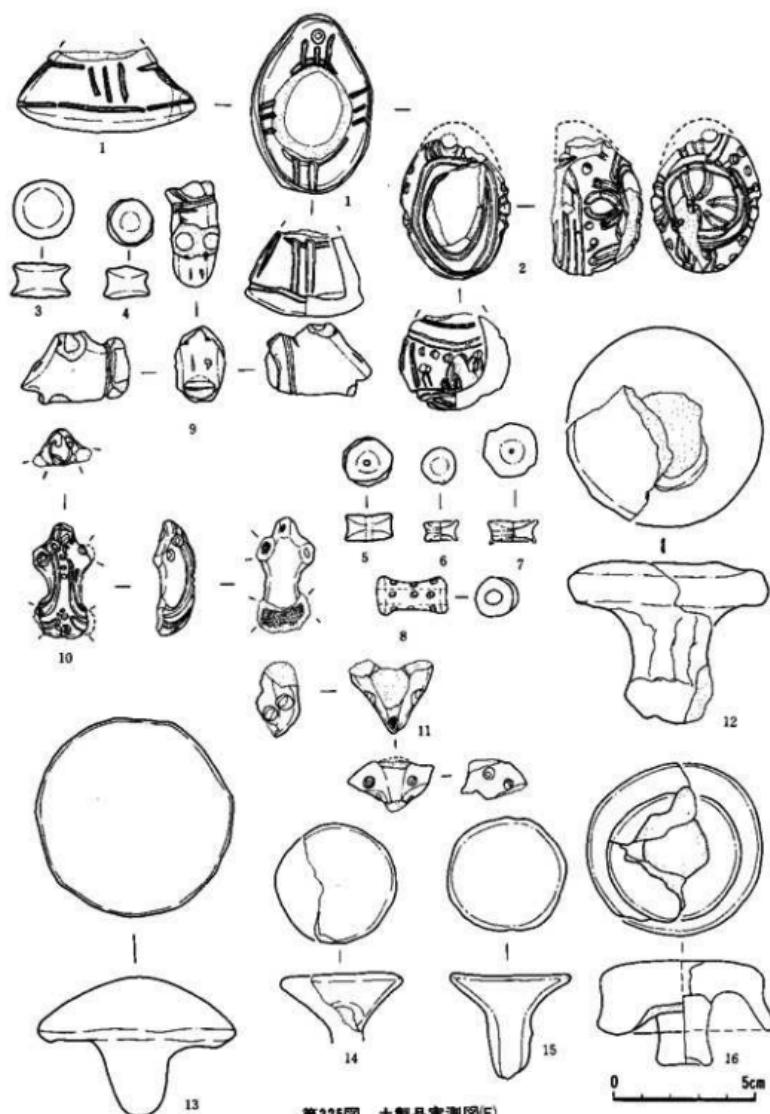
この土製品は、青森市近野遺跡（県埋文33集：1977）で1点出土例がある。名称、用途、他県の出土例などについては、これから資料を集めて比較検討したい。

#### （オ） 土製耳飾 （第325図F 3～7）

調査III区から5点出土した。この土製品は耳栓ともいわれている土製品である。

第325図F-3は、III区の南側に位置するD G-360グリッドのII層から出土した。

表面径20～21mm、耳朶孔径（耳朶に接する最もくびれた部分）15mm、側縁部の厚さ12mm、中心部中央の厚さ7mm、重さ3.1gである。形状は、臼形の薄いつくりで、赤色顔料が塗布されている。色は明赤褐色で胎土は精選したものを使用し、焼成もかたい。精製品で、A型として



第325図 土製品実測図(F)

おく。欠失部が少なく、ほぼ原形を残している。

第325図 F—4は、Ⅲ区の南側に位置するD F—359グリッドのⅡ層から出土した。

表面径16mm前後、耳朶孔径14mm、側縁部の厚さ10mm、中心部中央の厚さ5mm、重さ1.3gである。中心部の焼成前穿孔、赤色顔料の塗布は認められない。色は橙色、胎土には微量であるが砂が混じっている。焼成はかたい。B型に分類する。側縁部が一部欠失している。

第325図 F—5は、Ⅲ区の南側に位置するD G—359グリッドのⅡ層下部から出土した。

表面径17mm、耳朶孔径14mm、側縁部の厚さ9mm、中心部中央の厚さ3mm、重さ1.2gで中央に穿孔されている。色は、橙色、赤色顔料が薄く全面に塗布されてある。胎土には混入物が多く精選されたものを使用し、全体に薄く、焼成は堅緻である。AA型に分類しておく。

第325図 F—6は、Ⅲ区の南側に位置するC Z—364グリッドのIV層から出土した。

側縁部を欠失している。現表面径11~13mm、耳朶孔径10mm、現側縁部の厚さ6.5mm、中心部中央の厚さ2.5mm、焼成前の穿孔はなく、重さ0.5gある。小型の精製品で全面に赤色顔料が残存している。胎土には精選した粘土を使用しているが、多少もろく、浅黄橙色をしている。A型に分類する。

第325図 F—7は、Ⅲ区の北側に位置するC Y—367グリッドのIII a層から出土した。

表面径16~18mm、耳朶孔径15mm、側縁部の厚さ7mm、中心部中央の厚さ3mm、重さ1.5g、中心部に径1mmの焼成前穿孔がある。薄型でAA'型に分類する。色は表面が灰褐色、内面はにぶい赤褐色で、全面に赤色顔料が塗布されたものと思われるが、現在は一部にその痕跡を残しているだけである。側縁部の片側は、欠失している。胎土には混入物のない精選した粘土を使用して、焼成は極めてかたい。

土製耳飾の分類、分布、出土例等については、別稿で検討したい。

#### (カ) 土製装身具

前記の土製耳飾も装身具の一つで、本項の土製品もそのなかに含めて記述することが本来の姿かも知れないが、装飾する位置(耳飾)が異なるため別項とした。なお、形態は多少異なるが、遺構(第25号縄文住居跡覆土中)からも1点出土している。

本土製品(第325図 F—8、写真22)は、調査Ⅱ区北側寄りに位置するD A—296グリッドのⅡ層から出土した。形態は鼓状で、全長2.4cm、側縁径1.4cm、貫通孔径0.5cm、重さ2.9gの大きさである。円形の刺突文が側縁部を除いて3重に施文されている。色は、にぶい黄橙色で精良な胎土を使用して、焼成もかたい製品である。赤色顔料の塗布は認められない。

#### (キ) 土偶 (第325図G、写真22)

9点、5個体が調査Ⅲ区から出土した。

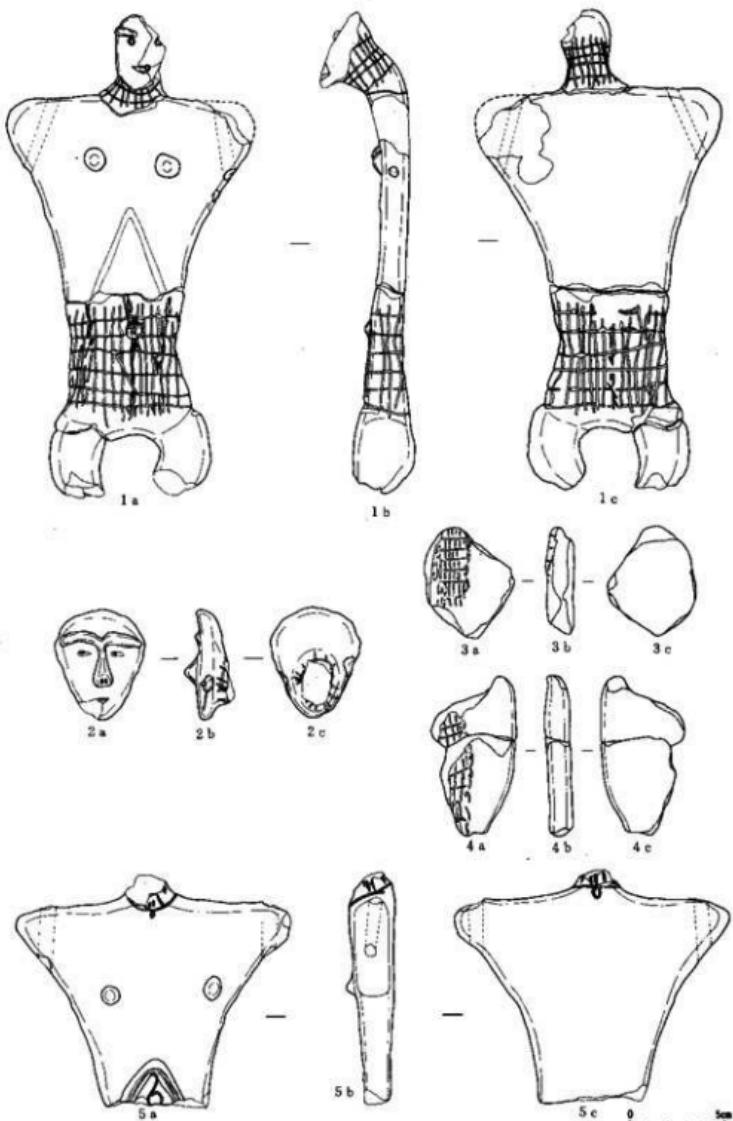
第325図G—5は、調査Ⅲ区C Y—362グリッドのII層から出土した。頭部、胴部下半を欠損している。現身長12.0cm、身幅（肩）14.6cm、身厚2.4cmの版状。頭部には首飾のような沈線をめぐらしてある。両肩から両脇に製作時の丸い貫通孔がある。両乳房は貼付けてある。肋骨と腹部は三角形の凹部で表現している。腹部正中線は唐草模様のような沈線が付けられている。表、側、背面ともよく研磨されて光沢がある。胎土、焼成とともに良好で、色は暗褐色をしている。

第325図G—2は、調査Ⅲ区D H—359グリッドのII層から出土した。頭部のみであるが、胎土、焼成、割れ口から第325図H—5と同じ個体の可能性もある。顔面はリアルな表現で、面長なつくりで、顔面の長さ6.0cm、幅4.8cm、第 図③、と比較して大きい。まゆ毛、鼻は粘土紐を貼付けて現わし、目、鼻孔、口は工具で突き刺している。頭髪は、前に垂れ気味にして、後頭部両耳の下には凹部を設けてある。頭部の沈線は、おそらく格子目状となる。表面（顔面）の色はにぶい橙色、裏面（後頭部）は、にぶい赤褐色である。胎土焼成は良好で、光沢がある。

第325図G—1は、調査Ⅲ区D H—360グリッドのII層下部から出土した。両足を欠損しているが現身長25.8cm、身幅（肩）13.0cm、顔面の長さ4.2cm、胴回り（幅）5.5cm、大腿部長さ3.0cmの大きさである。顔面は、前に突き出すタイプで小さい。胴体部は版状で長胴、脚は短かく大腿部の筋肉は盛りあがり、発達している。端的に表現すると、短頸、長頭、長胴、短足、O脚型である。顔面は全体に小さく、まゆ毛、鼻は貼付けてあるが、一部剥離している。目、口は円形の工具で刺突して、愛嬌のある表情をしている。頭部には格子目状の沈線が施文され、両肩から脇へむけて製作時（焼成前穿孔）の貫通孔がある。乳房、“へそ”は貼付けて肋骨と腹部上半は三角形の凹部で示してある。胴部下半は、衣服を示すような格子目状沈線が施文してある。裏面は、全体に文様がなく、全面に研磨痕が残り、光沢がある。多少焼斑がみられるが焼成、胎土とも堅緻、良好、明赤褐色～暗赤褐色の色をしている。

第325図G—3、4は、調査Ⅲ区に位置するD E—359、C X—365グリッドのI～III層から3片出土して2片が接合できた土偶である。3と4は接合はしないが同一個体である。胴部下半の破片で、現在身長8.0cm、身幅9.0cm、身厚1.0cm、全体を研磨した後に施文してある。文様は、格子目状文様の両側に爪形文を縦列に施文してある。文様は表面の正中線をはさんで施文して、側面、背面は素文である。全体に光沢がみられ胎土良好、焼成堅緻、赤橙色（表）と暗褐色（背）の色をしている。

これらの土偶には、縄文時代後期初頭の特徴が認められる。この時期の土偶の出土例は多いが、県内では青森市近野遺跡、青森市四ッ石遺跡（三宅：1972）、金木町妻の神遺跡、三厩村中の平遺跡、三戸町泉山遺跡、六ヶ所村千歳遺跡<sup>13</sup>、八戸市葦窪遺跡などを列挙しておく。これらの遺跡のなかで、本遺跡の土偶と形態、施文手法が若干異なるタイプが出土しているのは、



第325図 土製品土偶実測図(G)

千歳遺跡<sup>13</sup>、葦窪遺跡などがある。葦窪、千歳<sup>13</sup>の出土例では、形態が十字形土偶に近似して、全体に連続刺突文と沈線文を施したものがある。これらの相違点は、地域性を示すのか、時期的な差があるのか今後の究明を期待したい。なお、連続刺突文を多用した土偶は、八戸市長者森、深浦町一本松、岩手県貝鳥貝塚、立石遺跡、八天遺跡などでも出土例がある。千歳遺跡は十腰内Ⅰ群、一本松遺跡では大木9、10式土器に共伴（中期末葉）、長者森遺跡では中期末～後期初頭、葦窪遺跡では住居跡床面と覆土から出土して、中期末～後期中葉の時期を推定している。

土偶については諸説が発表されている。そのなかで水野正好氏の土偶祭式説（水野：1974）は注目される。「つまり、土偶祭式は、懷胎一死一再生・誕生という生の輪廻をあらわす祭りとして行われたものであるという」「新しい二つの見解が含まれている。一つは、土偶は一時に必要な数がいっせいに造られ、ときには柱や樹に吊りさげられ、時がくるとそれらがいっせいに壊された。二つは、土偶は破壊されたとき無用のものとして捨てられたのではなく、むしろ集落の各地や畠み、あるいはすでに捨てられた竪穴住居跡や使用中の竪穴住居など、集落や集落をとりまく周辺に配布されたという考え方である」（小笠原：1984）小笠原氏は解説をされている。

#### （ク） 動物形土製品（第325図F 9～11、写真22）

本項の動物形土製品は、Ⅱ、Ⅲ区から3点出土した。単独立体像でその形態を表現しているもの（A類）と土器に貼付けしていた、（装飾帶の一部として縄文土器に貼付けられていた部分）ものが本体から剥離したもの（B類）がある。B類は、便宜上土製品に組み入れたが、本来は土器の一部で装飾、文様の一部である。

第325図F-9は、調査Ⅲ区北側斜面付近に位置するC Z-369グリッドのⅡ層から出土した。A類動物形土製品である。本土製品は、犬、鹿、猪のような四脚獸とみられる動物の頭部の破片で、両耳、両眼上半、下顎を欠失している。残存部分は頭部、眼の一部、鼻孔、口の一部である。顔面の表現は、両耳が貼付けてあったようで頭部に剥離痕が残っている。眼と鼻孔は刺突で現わしているが、口は横に切り込みを入れて表現してある。頭部の付け根部分には沈線文の一部が残存している。残存部分の全長3.8cm、頭部から顎までの高さ2.4cm、顔面の幅1.6cmの大きさである。精良な胎土が使用されて、焼成はかたく、色は明赤褐色をしている。沈線を施していることと出土例から推して縄文時代後期初頭の製品であろう。

第325図F-10は、B類に組み入れられる製品である。本製品は、Ⅱ区の南側に位置するD L-310グリッドのⅠ層から出土した。土器本体から剥離しているため四肢末端部分を欠失している。全長4.1cm、頭部幅0.9cm、前肢残存部幅1.9cm、胴体部幅1.0cm、後肢残存部幅1.9cm、最大厚1.1cmの大きさである。前肢と後肢の腹部側の部分が土器に貼付けられていたようだ。

黒ずんで文様もない。文様は、沈線文と竹管状円形刺突文である。沈線文は、後肢の両側と背骨の両側及び頭部の一部をめぐっている。刺突文は、頭部、前肢、背骨、尾の部分にある。顔面の造作は判然としない。精選した胎土を用いて焼成は良く、色は淡黄橙色である。この製品と同様の手法でつくられた、やや大型の製品は、II区の土壤(旧土壤No56号)からも出土している。これらは縄文後期初頭の土偶によく用いている技法と共通する点がある。

第325図F-11は、前記F-10のほぼ北側に位置するII区CY-312グリッドのII層から出土した。B類の頭部かA類か判然としない製品である。両耳、頭頂部、下頸を欠失している。鼻が突き出して、両眼と上顎の両側に竹管状の刺突文が施されて、正面像は熊の顔面に似ている。頭部の長さ2.4cm、最大幅3.0cm、高さ1.5cmの大きさである。胎土、焼成、色調は前期F-10と類似しているが、下頸の奥の部分(頸部)が中空のためと土器の貼付文様としてはやや大きく立体的なこと、貼付痕が明確でないことからA類の可能性もある。いずれにしても縄文後期初頭か古くて中期末葉の製品とみられる。

動物形土製品の完成に近いB類(動物形、貼付、装飾)は、第9号土壤から1点出土している。これら動物形土製品については、かつて集成したことがある(県埋文84集:1984)ので、出土例などについては省略する。

#### (ケ) 葦形土製品 (第325図F-12~16、写真22)

葦形土製品は、調査II、III区から5点出土した。

第325図F-13は、調査II区の北側に位置するCW-306グリッドのII層から出土した。

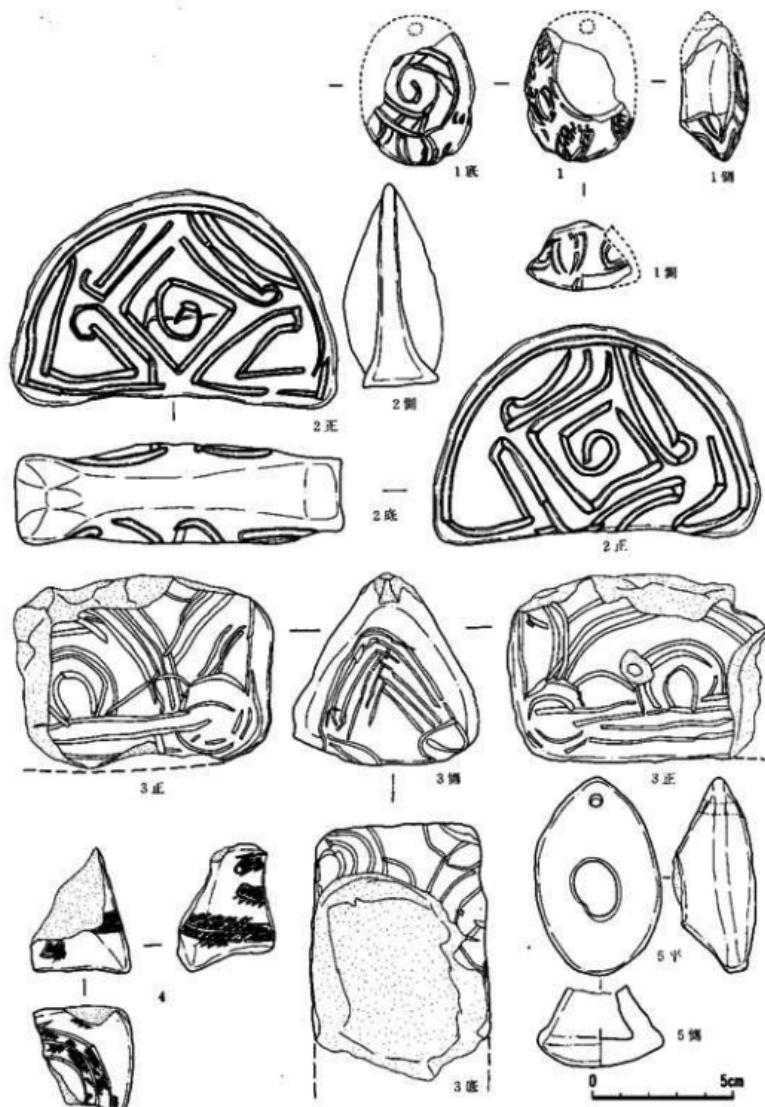
「かさ」と「茎」の一部を欠失しているが、完形に近い。「かさ」の径7.0cm、高さ5.0cm、「茎」の径3~1cm、同高さ2.5cm前後の大きさである。「かさ」は円形で内側に反り返っている。「茎」はほぼ直立している。整形は急入りで焼成はかたい。「かさ」には光沢が残り、外表面の色は、灰白色と淡黄色である。

第325図F-13は、調査II区北側に位置するCW-309グリッドのII層から出土した。

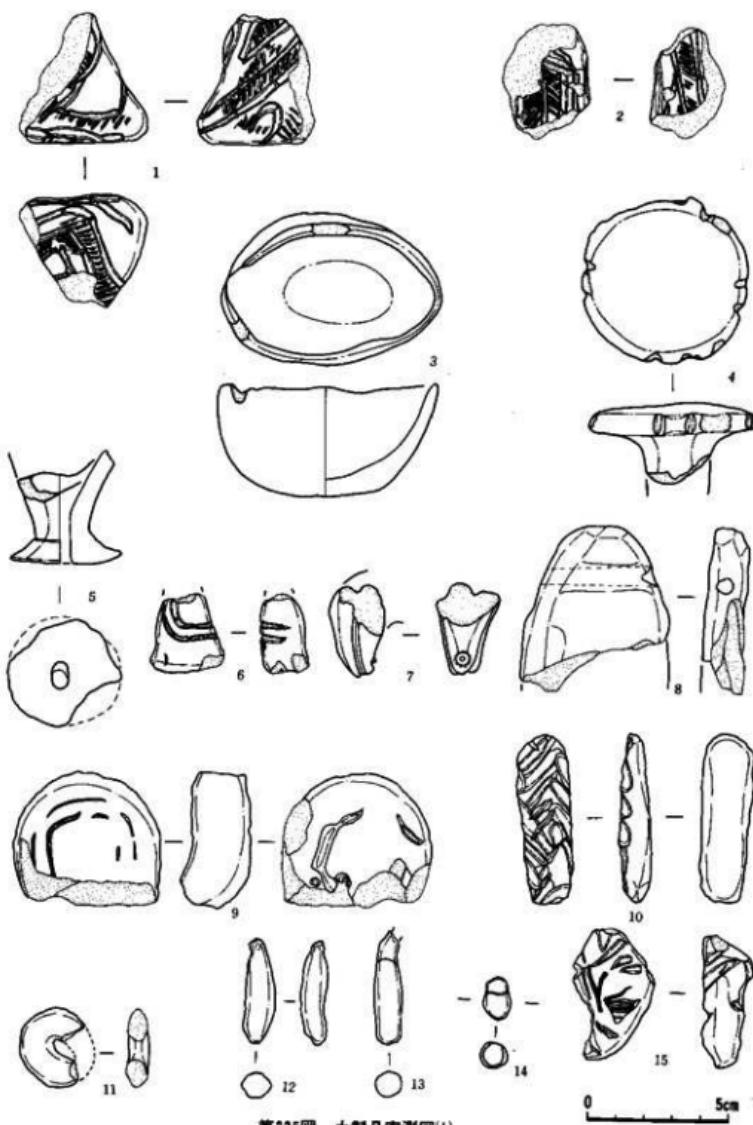
「かさ」の4分の3と「茎」の一部を欠失しているが、原形はおよそ推測できる。「かさ」の推定径7.0cm、高さ5.8cm、「茎」の高さ4.0cm、「茎」の径3~3.4cm前後の大きさである。「かさ」の反りは少ない。「茎」の「石突き」は丸くふくらんでいる。「かさ」の内側には指紋が付き、「茎」のつくりは、粘土の継ぎ目がそのまま残り、整形は粗雑であるが、焼成はかたく、色は灰白色~浅黄橙色をしている。第325図F-16とともに本遺跡の出土品では大型の製品である。

第325図F-14は、調査III区の南側に位置するDF-359グリッドのII層から出土した。

「かさ」の約2分の1と「茎」の大半を欠失している。「かさ」の径4.2cm、現高2.1cm、「茎」の径2.2cmの大きさである。高さは3.6cmほどと推定できる。「かさ」の外表面は、板状のものに



第325図 土製品実測図(4)



第325図 土製品実測図(1)

押圧したように平坦で反りがみられないが円形である。整形は丁寧で焼成もかたい。色は「かさ」の外側が明赤褐色、内側が灰白色である。次の第325図F-15とともに出土品中では小型の部類に入る。

第325図F-15は、調査III区の北側に位置するCX-366グリッドのIIIa層から出土した。

完形品である。「かさ」は円形で径4.0cm前後、高さ3.6cm、「茎」の高さ2.5cm、同径1.6cm前後の大きさである。「かさ」は外反して、「茎」は多少湾曲して先細りとなっている。現在の葺でいえば「ハツタケ（俗称）」の成長のとまった形と酷似している。整形は念入りで焼成も良好な製品である。色は、淡黄色である。

第325図F-16は、調査III区の北側に位置するCX-365グリッドのIII層から出土した。

「かさ」の約2分の1を欠失しているが、大きさは推測できる。「かさ」は円形で、径6.3cm、高さ3.8、「茎」の高さ1.8cm、同径2.1cmの大きさである。「かさ」は「T」字状に屈折して、「茎」の中ほどまで下がっている。「茎」の中ほどはやや細く、「石突き」は回状にくぼんでいる。整形は丁寧で、焼成の堅緻な製品である。色は、「かさ」の外側がやや淡い灰褐色、内面、「茎」は浅黄橙色で、出土した葺形土製品のなかで中型に分類される。

葺形土製品は、東北地方北半の縄文後期初頭の遺跡から出土している。かつてはスタンプ形としたもののなかに含まれているが、形態が葺そのものを表現した土製品である。

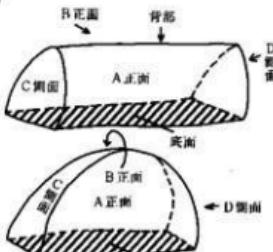
この製品は、八戸市蘿蔴遺跡では住居跡（第32A号）覆土からの出土がある。その状態は、「ほんしめじ」といわれている葺（俗称、だいこくしめじ、ほか）と酷似しているものがある。そのほか出土例は、六ヶ所村上尾駒遺跡<sup>(2)</sup>、鷹架遺跡、青森市近野遺跡、同市四ッ石遺跡、八戸市是川遺跡、秋田県大湯町中通遺跡、同県小坂遺跡などがある。

葺形土製品は、遺跡によても形態が異なって、また、リアルに表現した製品が多い。この製品も当時の植生の一端を反映するとともに食用に供することのできる葺が豊作であるよう祈願した精神的な文化遺物の一つである。

#### （コ） 三角柱状形土製品（第325図H-2、写真22）

この土製品は、調査III区から5点4個体出した。本土製品の名称については、立体土製品、三角墳形、三角柱状土製品、石冠状土製品その他いろいろ呼称されているが、ここでは前期の名称によって報告する。また、5面体のこの土製品の各部面を次のように呼称することにしたい。

第325図H-2は、III区CY-363グリッドのII層から完形で出土した。形態は、正面形が半円状、側面の断面



第326図 三角柱状形土製品呼称図

は砲弾か二枚貝のような形状である（全体はお菓子のチュウカに似ている）。底面は、反りがみられて四隅が幾分張り出して、この部分が接地するようになっている。背部～底面の高さ7.4cm、底面の長辺11.5cm、同短辺2.6～2.8cmの大きさである。重量250gである。文様は、A、B面にだけ施文されて、籠がき沈線文が美妙に配置されてある。A、B面の文様はよく類似しているが、異なる部分もある。これはA、B面の左右についても同様である。器面調整（研磨）は、文様施文の前後に念入りに行って、現状では底面の反りの部分を除き光沢がみられる。胎土には、微細な砂粒が相当混入されているようであるが、器面上は荒れていない。焼成は、きわめてかたく、各面とも焼斑もあるが、淡黄橙色の色調部分が多い。この文様の施文手法は、縄文時代後期初頭に多い。

第325図G—3は、Ⅲ区のD B—364グリッドのⅢ層から出土したが、約3分の1を欠失している。欠損部分は、背面、底面、側面である。正面形は、背部が弧状の長方形、側面形は断面形とともに隅丸の三角形である。両正面、側面、底面には沈線文が施文されている。両正面の文様は、相違点も多少あるが類似点も多い。半円、弧状、平行沈線を組み合わせた文様である。底面も同様と推定される。C面は、鋸歯状の文様を6条重ねている。おそらく欠失したD面も同様な文様であろう。全体の形状は前記G—2図に比較すると鈍重で、重量も現状で380gである。欠損部分があるため胎土、成形の一一部を観察できるが、胎土には、土器の胎土以上に細粒の砂が混合されている。成形は、まず二等辺三角形の芯部をつくり、次に二重に別の胎土を巻き付けてある。整形後施文しているがその後の磨きは軽い。焼成は良好で、色調は焼斑のため暗褐色と明赤橙色のほか黄橙色の部分もある。施文手法は、縄文後期初頭に多くみられる。

第325図G—4は、Ⅲ区C Z—360グリッドのⅠ層から出土した残片である。側面、底面、正面の一部が残存して、底面の一隅は突出している。残存部の高さ4.4cm、底面の長さ3.4×3.5cm。底面には強い反りが認められ、前記2点の底面の隅とは異なっている。文様は各面に残されているが、いずれも細い沈線の中に縄文（無節撚糸）を回転して、磨消縄文を構成している。モチーフは、平行沈線文、馬蹄状曲線文の組み合わせであるが、全体の文様は不明である。この施文手法は、縄文時代後期によくみられる。胎土は精選したものを使用して、焼成は練瓦状にかたく、色調は暗褐色～褐色である。

第325図1—1、2はⅢ区D E—358とD F—361グリッドのⅠ層から出土した残片であるが同一個体である。第325図1—1は底面のコーナーの破片であるが、側面の角（底辺部）は相当張り出している。残存部の高さ4.3cm、底面の長さ3.4×4.5cmの大きさである。文様は各面とも磨消縄文で、縄文は無節Lを回転施文している。胎土、焼成は前記3点と同様である。色調は焼斑がみられるが、黄橙色の部分もある。第325図1—2は、部位は不明である。施文、焼成、胎土から同一個体と認定した。

### 三角柱形土製品について

本土製品は、本県ではこれまで4点出土している。青森市近野遺跡(II)(県埋文22集:1975)

第93表 青森県内三角柱状形土製品出土地名表

単位:cm

資料No	遺跡名	所在地	長辺	最大幅	高さ	分類	その他、文様、伴出土器の時期
1	三内丸山	青森市三内丸山	8.3	4.7	5.4	I C	円形の貼り付け、前一後期
2	近野(Ⅰ)	青森市安田近野	8.1	5.5	4.0	I A	沈線・刺突、後期初頭
3	近野(Ⅱ)	青森市安田近野	5.6	2.5	3.0	I B	沈線・刺突、後期初頭
4	川内高校内	下北郡川内町	—	—	—	—	詳細不明
5	大石平(1)	上北郡六ヶ所村尾駄野附	11.5	2.8	7.4	(I D)	施がき沈線、後期初頭・完形品
6	大石平(1)	上北郡六ヶ所村尾駄野附	(8.5)	6.0	(6.8)	(I A)	施がき沈線、後期初頭・約4.5cm欠失
7	大石平(1)	上北郡六ヶ所村尾駄野附	(3.4)	(3.5)	(4.4)	(I E)	磨消沈線、後期初頭(小破片)
8	大石平(1)	上北郡六ヶ所村尾駄野附	(3.4)	(4.5)	(4.3)	(I E)	磨消沈線、後期初頭(小破片2個)

2点、同市三内丸山遺跡1点、下北郡川内町川内高校内1点(善田:1983)である。本遺跡出土の4点は、これに次ぐ三角柱状形土製品である。

全国的な出土例は、小島俊彰氏が、「三角構形土製品」と名づけて70例発表している(小島:1983)。岩手県八戸天遺跡では、穿孔された製品も出土している。その分布は長野、新潟県に及んでいる(小島:1983)。

この土製品と類似した石製品に石冠と称するものがある。その大きさは三角柱状形土製品の分類ではI Dと同じ位である。県内からは、三戸町泉山、八戸市蘿庭、天間林村二ツ森、青森市三内沢部、同近野(3点)、同螢沢、平賀町一ノ渡、今別町大川平、三厩村宇鉄、同中の平の各遺跡から12点ほど出土例がある。三角柱状形土製品の具体的な機能、用途はわからないのが定説のようであるが、一種のマジカルな呪術用具と解釈することができる。石冠も同様であろう。このような機能が考えられる製品は、縄文後期初頭を中心とした時期のしかも遺物を大量に出土した遺跡から出土した例が多いようである。

### (サ) 船形土製品 (写真22)

第325図 I ~ 3は、III区北側斜面付近にあるC Y - 369グリッドII層から出土した。

一見、手づくねの小型ミニチュア土器風である。口縁部は梢円形であるが一方が船首状あるいは片口土器に突き出ている。船形土製品か小型の片口土器か区別つけ難いがここでは船形としておく。口縁部の一部が欠失している。全長7.8cm、最大幅4.9cm、高さ3.9cm、底部は丸底のつくりである。内面はよく研磨されて光沢がみられるが、外面は、粘土の継ぎ目を磨消する程度の整形である。文様はまったく施していないが恐らく縄文後期初頭のものと思われる。

### (シ) 形状用途不明土製品

調査III区から12点出土した。他の土製品の失敗作品、破片で形見の不明なもの、粘土紐の残りが焼成されたような製品をまとめた。

第325図 I—4は、III区の南側に位置するC X—366グリッドのIII a層から出土した。

一見葺形土製品と似ているが、「かさ」の部分に2個一対の刻み竹管状工具を押圧したが4箇所対称的に設けてある。スタンプ状土製品のように沈線による文様などは刻みを除くか「かさ」の部分にはない。「かさ」の一部と「茎」に相当する部分は略円形で径5.9cm、「かさ」の厚さ0.9cm、「茎」の径2.9~2.5cm、残存部分の高さは2.5cmである。胎土には葺形土製品よりも砂の混入が多いが焼成はかたく、色調は浅黄橙色で、焼斑もある。

第325図 I—6は、III区C Z—361のI層から出土した。土偶の左足に似ている土製品である。残存高2.5cm、足の部分の長さ2.5cm、足の幅1.5cmの大きさである。文様は足首の前面と外側に範がき沈線が施してある。足のうらの部分は平らに押圧してある。胎土は、精選したものを使用して、焼成はかたい。色調は、明赤褐色をしている。

第325図 I—5は、III区の南側にあるD E—367グリッドのIII a層から出土した。

一見、中空土偶の脚部のような土製品残片であるが、内面の整形後、足の裏面から脚部に向けて円形の貫通孔を焼成前に施してある。脚状部分の内面は研磨され、表面の整形も土製品としては念入りであるが、全体像は今のところ不明である。残存高3.6cm、足首部分の径2.4~2.6cm、足（おそらく梢円形）3.8×3.0cmの大きさである。胎土は、砂粒が混るがこまかく、焼成も良好で、色調はにぶい褐色～橙色である。中空土偶の脚部とすれば、文様がまったく認められないことから、今後、全体像、用途などを究明したい。

第325図 I—7は、III区の北側斜面付近にあるC Y—369グリッドのIII a層から出土した。

一見、土偶の右腕のような土製品残欠である。腕状の部分は中空ではなく、断面は円形で径2.3cm、長さ3.2cm、肩部に接合するところから脇の下に沈線を施してから、腕部先端に竹管状工具による円形刺突文を側面と前面に施してある。胎土は、I—6とよく似て精良で、焼成もかたく、淡黄橙色の色調である。

第325図 I—8は、III区D G—357グリッドのII層から出土した。当初よくわからなかつたが、鐸形土製品が、押し潰されてから焼成された、鐸形土製品の失敗作品とみられる。残存高6.0cm、最大幅5.2cm、厚さ1.0cmの大きさである。頂部には製作時に穿孔した貫通孔がある。貫通孔に工具を差しこんだまま押し潰したようである。胎土、焼成は、他の土製品と変わらない。色調は浅黄橙色である。

第325図 I—9は、III区D F—358グリッドのII層から出土した。一見、土器の突起部分の形状である。残存部分は半円状で、欠失部分が外反している。残存部全長4.8cm、最大幅5.0cm、厚さ2.0cmの大きさがある。胎土は精選したものを使用してある。焼成は、練瓦なみにかたく色調は淡赤橙色である。全体像は見当つかない土製品である。

第325図 I—10は、III区D D—344グリッドのII層から出土した。一応、完形品である。粘土

紐に片仮名の「ノ」あるいは「ハ」の字状の押圧が重なりあつたような圧痕がある。全長6.0cm、最大幅1.8cm、厚さ1.2cmの大きさである。アンペラ状の敷物に落ちた粘土紐の残りを踏み潰して焼成したものか、何かの意図を持った製品か不明である。胎土は、弥生土器と似ているが、速断はできない。焼成はきわめて良好で、にぶい黄褐色の色調をしている。

第325図I-11は、Ⅲ区D C-348グリッドのII層から出土した。小型の環状をした製品の残欠である。最大径2.8cm、孔径1.0×0.4cm、厚さ0.7cmの大きさで無文である。粘土紐を環状に組ぎ合わせて押し潰したような製品で、用途不明な製品である。胎土は、弥生土器のそれと類似している。焼成はかたく、黄橙色の色調をしている。

第325図I-12は、Ⅲ区C W-349グリッドのII層から出土した。胎土の残滓が焼成をうけたような形状をしているが、くびれた部分に紐を結縛すると土錘のような土製品となる。完形品である。全長3.8cm、最大径1.1cm、粘土紐を切ったようで成形痕はない。用途の不明な製品である。胎土は弥生式土器のそれと似ている。焼成は堅緻で、色調は橙色をしている。

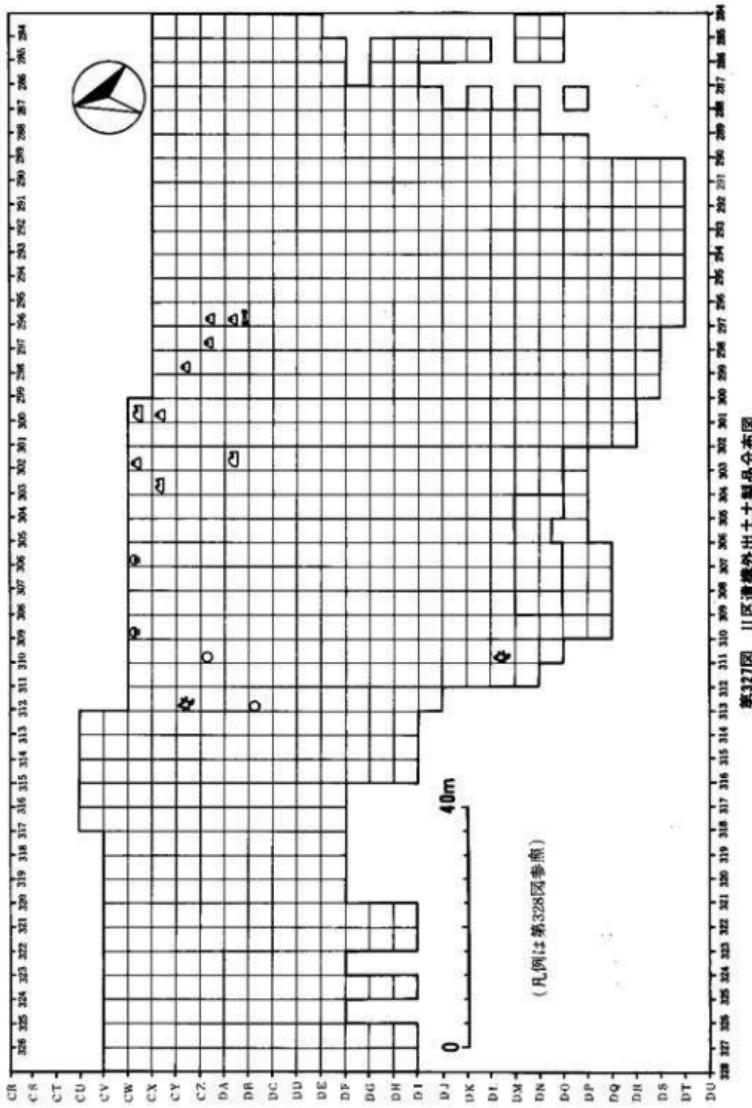
第325図I-13は、Ⅲ区D E-355グリッドのII～III層から出土した。形状は前記、第325図I-12と似ているが、くびれ部分が消失している。残存長4.0cm、最大径0.9cmの大きさである。粘土紐を切ったような土製品で、特別な成形痕はないが左手の親指、人差指、中指の3本で握ってころがすとこのような形状になる。土器の貼付けや小突起に用いた胎土が偶然、焼成されたものであろうか。これらの土製品と類似した製品は、弥生第13号a住居跡、第14、15号竪穴造構の権土、床面から出土している。胎土、焼成は、弥生土器に類似している。色調は、黄橙色をしている。

第325図I-14は、Ⅲ区D A-345グリッドのI層から出土した。完形品である。指先で丸めた大小2個の粘土粒を、雪ダルマ状に接合したような形状をして、接合部分はくびれている。全長1.6cm、最大径1.0cmの大きさである。くびれた部分に紐を結縛すると土錘となるような製品であるが、手づくねのため、速断はできない。胎土、焼成は良好で、弥生式土器のそれに似ている。色調は橙色をしている。

第325図I-15は、Ⅲ区D D-353グリッドのI層から出土した。当初から土製品として、製作したものではないようで、カヤやワラのような植物と何かが一緒に押圧されたような圧痕が残っている粘土塊である。胎土には細かい砂粒が相当混入されて、土器、土製品のなかでも特殊な形態をもつ土器（深鉢形、壺形）か土製品（三角柱形状、土偶）の胎土に似ている。焼成は煉瓦並みにかたく、色調は黄橙色である。

#### (ス) 遺構外出土土製品の分布について

遺構外出土の土製品の分布は、第327、328図に区分、グリッド別にまとめてある。また、各区分に出土土製品の数量をまとめて（第91、92表）ある。



第327図 11区遺構外出土土器品分布図

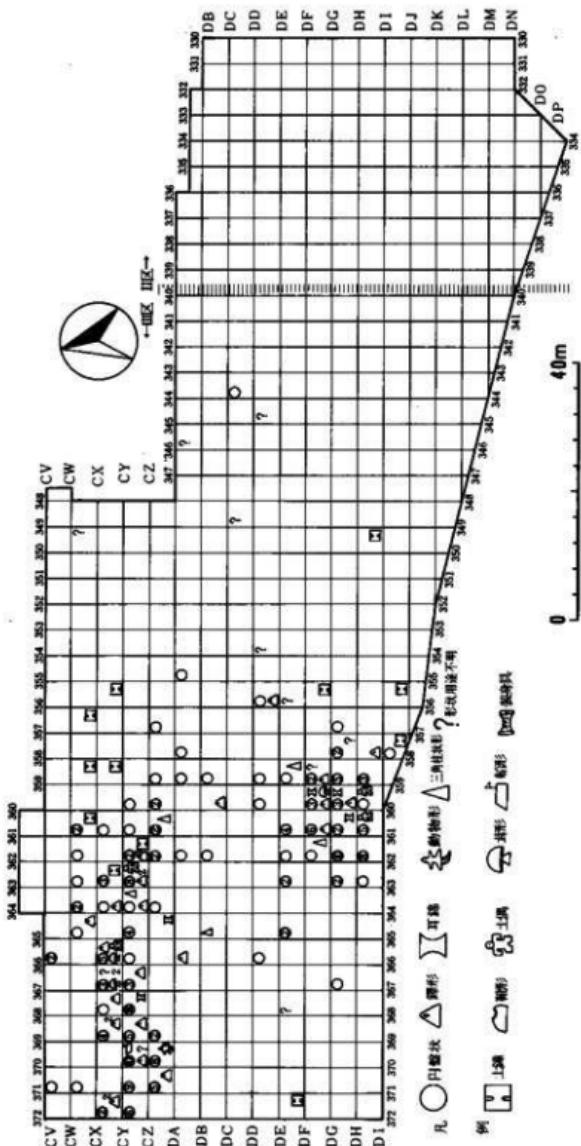


图328 四川省外出土精制品分布图

調査区毎に遺構外出土の土製品を概観すると、調査I区は、土製品の種類、数量も少なく、遺構数も少ない、II区で出土した土製品は、円盤状、鐸形、靴形、動物形、貝形、装身具の6種類で、遺構外出土土製品の5.7%を占めている。これらの土製品は、縄文時代後期初頭を中心としている。ここでは土錐（土器片錐）が1点も出土していない点が注目される。土錐は、縄文前期初頭の土器片を利用したもので、その頃この区域では、その漁具を使用する活動（漁労）が行われていなかつたか、そのような自然的、社会的環境におかれていなかつたのかも知れない。また、この調査区からは、遺構数全体の31.6%が検出されている。調査III区からは遺構外出土土製品の約93%が検出された。この調査区で注目したい点は、III区から出土していない土製品の種類である。他の調査区から出土してIII区から出土していない遺物は、鞍形土製品と土製装身具である。これらが欠除していることは、これらの土製品を伴う時期の住居跡、土壙などとも関連があるのでなかろうかと考えられる。この調査区には、出土率の高い土製品が何種類がある。円盤状(70%)、土錐(93%)、鐸形(83%)、耳飾、土偶、三角柱状形、船形、形状用途不明(100%)がそれである。このなかには日常生活とは、直接結び付け難い土製品=道具が含まれている。例えば三角柱状形、土偶、動物形、貝形、耳飾、装身具、赤色顔料の塗布されてある土器、土製品などである。これらの土製品についてその用途、機能などを具体的に説明できないが、ここから集中的に出土したことは、この付近で、これらの土製品を使用して遺棄した活動が行なわれた可能性が大きい。日常生活に使用しない土製品、道具がまとまって出土した事実は、日常生活の場所であった時期もあったが、ある時期においては特殊な道具、土製品を使用した神聖な場所、換言すると祭祀、儀式、呪術、埋葬、祈願など原始信仰、風習、行事などがとりおこなわれた領域（場所）でもあったと考えられる。

（北林）

第94表 土製品集計表

種類	遺構外出土数	遺構内出土数		計	備考
		土壙	住居跡		
円盤状土製品	206	59	2	267	
土錐	14		1	15	
鐸形土製品	36	4		40	形状用途不明土製品中？1点
靴形土製品	4	1		5	
土製耳飾	5	1	1	7	
土偶	5			5	形状用途不明土製品中？2点
動物形土製品	3	1		4	
耳形土製品	5			5	形状用途不明土製品中1点
三角柱状形土製品	4			4	
土製装身具	1		1	2	
船形土製品	1			1	
有孔円盤状土製品			(弥生)1	1	
亀形土製品		1		1	
形状用途不明土製品	12		弥生住居6・整穴4	22	
合計	296	67	16	379	

第95表 遺構外出土土製品分布比較表

( ) 内%を示す

出土調査区 内 盤 状 土 製 品	土 錐 形 土 製 品	靴 形 土 製 品	土 製 耳 飾	土 動 物 形 土 製 品	耳 形 土 製 品	三角柱 形 土 製 品	土 製 裝 身 具	船 形 土 製 品	形 狀 用 途 不 明 土 製 品	計	備 考									
											縄文時代			計						
											住 居 跡	土 壙	その 他							
I 区	1 ( 0.4)	1 ( 7.0)	0	0	0	0	0	0	0	2 ( 0.6)	1 ( 4.2)	1 ( 0.2)	3 ( 17.5)	0 ( 1.0)	0 ( 1.0)	5 ( 1.0)				
II 区	2 ( 0.9)	0 ( 17.0)	6 ( 100.0)	4 ( 100.0)	0 ( 67.7)	2 ( 100.0)	0 ( 100.0)	1 ( 100.0)	0 ( 100.0)	2 ( 40.0)	17 ( 5.7)	11 ( 68.6)	136 ( 33.0)	14 ( 50.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	161 ( 31.6)			
III 区	203 ( 98.5)	13 ( 93.0)	30 ( 83.0)	0 ( 100.0)	5 ( 100.0)	5 ( 33.0)	1 ( 100.0)	5 ( 100.0)	0 ( 100.0)	3 ( 50.0)	277 ( 93.6)	4 ( 1.0)	272 ( 96.0)	7 ( 2.0)	6 ( 35.0)	7 ( 30.0)	7 ( 64.3)			
計	206 ( 70.0)	14 ( 5.0)	36 ( 12.0)	4 ( 1.0)	5 ( 1.7)	5 ( 1.8)	3 ( 1.7)	5 ( 0.3)	1 ( 0.3)	12 ( 4.0)	1 ( 1.7)	1 ( 3.0)	296 ( 87.0)	16 ( 5.0)	409 ( 1.0)	24 ( 1.5)	6 ( 0.0)	7 ( 0.0)	0 ( 0.0)	469

\* 第327、328図の分布図中には個体数でなく成片数で記入した。

## キ 石器・石製品

## 第I群石器(剥片石器)

## A類 石鐵(第91・104・204図)

石鐵は、II区平坦面からの出土が多かった。

石鐵の分類は、有茎鐵・無茎鐵・柳葉形・アメリカ式石鐵と4類に分類し、更に細分した。

## A-I類(有茎鐵に含まれるもの)

A-I-a類 石鐵の関が基部に対してほぼ直角に近いものである。形態は、鐵身が三角形(第91図-8・第204図-4)と、二等辺三角形(第91図-1・第204図-3)に分かれる。三角形のものは、側縁が直線的で小形なつくりで、二等辺三角形のものは、側縁が外側に弧を描くもの(第91図-1)・内側に弧を描くもの(第91図-1)・側縁が直線的なもの(第204図-3)とに分かれるが、側縁が直線的なものが主体を占める。二等辺三角形のものは、鐵身の長いのはまれであり小形な形態が多くみられる。

A-I-b類 石鐵の関がやや内側に抉り込まれているものであり、先端部が鋭利でないもの(第103図-6)・側縁が直線的なもの(第103図-7)に分かれる。鐵身の形態は、正三角形と二等辺三角形に分類することができ、出土比率はほぼ同じである。基部は内側に抉り込まれているせいか、a類より茎部の長めのものが多い。厚さも薄く、剥離調整も密に行われている。

A-I-c類 本類は、関が茎部に対して鈍角をなしているものである。形態は、内側に弧を描くもの・側縁が直線的なもの・先端が直線的で茎部が外側に広がるものの三つに分かれるが、内側に弧を描くものが多い。茎部と鐵身の関係は、鈍角の角度が少なく茎部と鐵身の区別が容易なものと鈍角の角度が大きくて茎部と鐵身の区別がつかないものがある。剥離調整は、前記のA-I-a類と比較すると粗い剥離調整である。

#### A-II類（有茎鐵に含まれるもの）

茎部と鐵身の区別がつかず柳葉形を呈するものである。形態は、全体的に丸みを呈するもの（第204図-47）・全体的に丸みを呈し小形なもの・先端部が直線的で下部にしたがって広がるもの（第204図-48）の三つのものに分類することができる。断面形は、厚く菱形を呈するものと断面形が薄くレンズ状を呈するものに分かれる。

#### A-III類（無茎鐵に含まれるもの）

A-III-a類　抉り込みが浅く凹基をなしているものである。形態は、側縁が直線的なもの・側縁が外側に弧状を描き最長幅を胴部中央にもつものである。抉り込みは浅く断面形はレンズ状を呈し薄いのが特徴であり、剥離調整も密に行われている。

A-III-b類　抉り込みを持たず平基なものである。形態は、胴部中央に最長幅をもつもの・基部に最長幅をもつもの・胴部中央から基部にかけて直線的なものの三つのものに分かれる。小形なものが多く断面形が凸レンズ状を呈し厚さは薄い。

#### A-IV類（アメリカ式石鎚に含まれるもの）

形状は、下半部の両側に抉りを入れており、側縁は最長幅を胴部中央に有する、凸字形の茎部の一部は欠損している。剥離調整は粗い。

#### B類 石槍（第91図）

石槍は、石器の中で量的には少ない部類に入る。形態は、側縁部が直線的で先端部にかけて鋭利な角度を有する棒状に近いものである。断面形は三角形と菱形を呈するが、薄く小形なつくりである。剥離調整は、外縁部に粗い剥離調整を行い先端部にも密に調整を行っておらず鋭利ではない。

#### C類 石錐（第91・104・204・253図）

C-I類　つまみを有し錐部が細長くつくられているものである。形態は、つまみ部分が横方向に張り出してT字形をなすもので、剥離調整は錐部及びつまみ部に密に行っているもの（第91図-18）と、つまみ部分が梢円形及び不整形であり、錐部の剥離調整は密に行っているが、つまみ部分に錐に一次剥離調整を加えて終っているものの二つのタイプがある。本類の特徴としては、錐部の欠損率が高いことである。

C-II類　本類は、錐部が短かくつまみの部分が明瞭でないものである。本類の中のタイプとしては、先端部のみに剥離調整を行い、つまみ部分に自然面を残すもの・小形な形態で棒状を呈し、剥離調整は密に行い先端部に摩滅痕がみられる。断面形が薄手のつくりのもの、粗雑な剥離調整を行っており、先端部に著しい摩滅痕がみられる。断面形は三角形状を呈し、厚手のつくりの三つのものに分類することができる。

## D類 石匕

D—I類 横形石匕に含まれるものである（第91・104・205図）

D—I類—a類 つまみが刃部の中央にはほぼ直行するようつけられている。形態は、闇がなで肩で曲刃のものと、逆T字形で直刃のものに分類できる。剥離調整は、片面調整のみのもの・両面調整を施しているもの・刃部のみに調整が行われているものに分かれる。曲刃の石匕は、剥離調整が粗い。

D—I類—b類 つまみが中央からやや片寄ってつけられているものである。形態は、三角形状を呈し頂点につまみ部をつくりだしており直刃と曲刃がみられるが直刃の形態が多い。剥離調整は、両面調整のもの・片面調整を行っているもの・刃部のみに両面調整を行っているものとに分かれる。

D—II類 縦形石匕に含まれるもの

D—II—a類 本類は、先端部が直線・斜行あるいは丸みを帯びているものをこの類とした。刃部が平行なもの・丸みをもつものと、斜行しているものの三つに分かれる。剥離調整は、両面調整を行っているもの・片面を精巧に調整を行い裏面の先端部及び側縁部の一部剥離調整を施しているもの・片面調整のみを行うものである。両面調整を行っているが粗い調整剥離で、他の石匕と比較すると厚いつくりを呈する。断面形は、平坦なものと身の中央部が盛りあがる断面である。

D—II—b類 先端部に向かって直線的なものである。形態は、先端部が鋭利なものと、若干丸みを呈するものとに分かれる。剥離調整は、両面に剥離調整が行われているものと、裏面の側縁部に剥離調整がみられるもので、他はすべて片面調整である。

D—II—c類 本類は、欠損して身の形態が不明なもので前記の分類にあてはまらないものをこの類とした。粗い剥離調整であり、他は剥離調整が精巧なつくりである。

## E類 石箒（第91・104・205・253図）

E—I類 つまみを有さず側縁が直線的なもの

本類は、形状から、台形を有するもの・先端が丸みを有し側縁が直線的なもの・最長幅を刃部にもつ二等辺三角形状のものに分かれる。剥離調整は、片面調整と両面調整がみられる。特に片面調整は、刃部の剥離調整を精巧に行っている。断面形は、裏面が平坦で身の中央部が盛りあがる三角形状を呈する。

E—II類 つまみを有し、小形なものをこの類とした。

E—II—a類 つまみを有し先端が平行なものである。形状は、つまみ部が三角形及び二等辺三角形を呈するものが多いが、台形を呈するものもみられる。つまみ部に抉りがないもので、なで肩を呈する。断面形は、身の中心部が張り出し菱形を呈する。剥離調整は、両面とも密に

行っており精巧なつくりである。小形の類に属し利器と考えるより、祭祀用に用いたと考えられる。

E-II-b類 つまみを有し先端が丸みをもつものである。形態は、つまみ部の抉りを入れているものと、つまみ部に抉りを入れていないものに分けられる。剥離調整は、つまみ部分を両面調整しているもの・片面調整しているもの・刃部のみに剥離調整をしているものである。剥離調整はa類と比較すると本類が複雑な剥離調整である。断面形は、身部が全体的に膨らむ三角形状を呈する。

F類 スクレイバー（第91・104・205・253図）

F-I類 三角形状の剥片を利用していいるもの

先端の剥離調整は密であり、刺突あるいは穿孔具としての機能をもっていると思われる。側縁の一部分を片面のみ剥離調整を行っておりナイフの要素を含む。欠損して明確ではないが石槍の一部ではないかと考えられる。

F-II類 半月形・半円形の呈するもの

剥離調整が行われているものであるが、他はすべて片面調整であり、特に大形の剥片については粗い剥離調整である。先端部にかけて密に剥離調整を行っており、刺突の機能を含む。しかし、一般に本類はナイフに用いた石器が多い。

F-III類 円形・楕円形の形状を呈するもの

断面形は、内側が反り、外側が盛りあがる半円形の形状を呈している。剥離調整は、片側の剥離調整で裏面には自然面を残している。特に小形の剥片に自然面を多く残す傾向がみられる。機能は、剥離調整が周縁にみられることからII類と同様にナイフの機能を持つと考えられる。

F-IV類 縱長の剥片に刃部をつくりだしているもの

剥離調整は、周縁を粗く片面調整しているもの・刃部の一部を密に剥離調整を行っているものがあり、機能面ではナイフの要素を含んでいる。形状から石鎧に似ているが、剥離調整は粗い又、先端部にアスファルトが付着している。

F-V類 横長の剥片に刃部をつくりだしているもの

スクレイバーの中で量的に少ない部類である。剥離調整は、剥片の最長部に刃部をつくりだして、密に行っている。刃部以外は粗雑なつくりである。機能面はナイフの要素を含んでいる。

G類 鞄形石器（第253図-11）

形態から鞄形石器とした。層位的に不明のため、弥生期の所産かどうかは定かではない。形態は、台形を呈するものと、側縁部が直線的で刃部に丸みをもつものがある。剥離調整は、両面調整と刃部を密に片面調整を行うものがある。断面形は、薄手のつくりで湾曲しているものもみられる。

#### H類 異形石器（第91図—49）

異形石器としたものは、前記の器種に該当させることができないものを異形石器に分類した。第91図—49は、側縁が直線的で両端が突出している形態である。剥離調整は両面に施している。第91図—49は、形態が縦形石匕の形状に似ているが、つまみ部の抉り部分が明瞭でなく、身の中央部の両端は張り出しているものである。

#### 第II群石器（石斧）

##### I類 磨製石斧（92・104・206・207・254図）

###### I—I類 10cm未満のものを小形磨製石斧とした。

最長幅部を刃部にもっているものと、頭部幅と刃部幅の差があまりないものがある。頭頂面及び側面の面取りがされており、頭頂部に打痕の読形跡がみられるものもある。細身で刃部幅があまりめだたないのは石ノミの類に属すると思われる。

###### I—IΙ類 頭部・全体の形状のわかるもの

頭頂部が丸みを帯びているもの・面取りがみられるもの・頭頂部に打痕の跡が著しいものに分かれる。断面形は、楕円形を呈し最長幅を刃部に有する。特に緑色凝灰質の石斧は、側縁及び頭頂部をよく研磨している。

###### I—IΙΙ類 刃部の形状のわかるもの

刃部が弧を描かず直刃に近いものと、刃部が弧を描いているものに分類することができる。形態は、両側縁が平行している棒状形のものと、刃部に向かってやや外反するものがみられる。棒状形のものは側面の面取りが強い。

###### I—IIV類 刃部・頭部を欠いているもので身の部分のもの

断面が楕円形を呈している。両面に打痕の痕跡がみられるものである。

##### J類 打製石斧

###### J—I類 片面に自然面を残す片刃打製石斧といわれるもの

小判形・長方形であり小判形の形態を呈するものが多い。剥離調整は、周縁部及び刃部に剥離調整を行っており、刃部に密に剥離調整を行っている。

###### J—IΙ類 両刃打製石斧といわれるもの

###### J—IΙ—a類 片面に自然面を残し、一部剥離調整がみられるもの

形態は、小判形及び長楕円形の形態を呈する。剥離調整は、自然面を残す部分には側縁部及び刃部の一部に剥離調整を行っており、I類の片刃打製石斧と似ている。

##### J類 打製石斧

###### J—I類 片面に自然面を残す片刃打製石斧といわれるもの

小判形・長方形であり小判形の形態を呈するものが多い。剥離調整は、周縁部及び刃部に剥離

調整を行っており、刃部に密に剥離調整を行っている。

J—I類 両刃打製石斧といわれるもの

J—I—a類 片面に自然面を残し、一部剥離調整がみられるもの

形態は、小判形及び長楕円形の形状を呈する。剥離調整は、自然面を残す部分には側縁部及び刃部の一部に剥離調整を行っており、I類の片刃打製石斧と似ている。

J—I—b類 両面に剥離調整が行われるもの

周縁をすべて剥離調整しているものである。特に刃部の剥離調整が密である。形態は、刃部に最長幅をもち、側縁が直線的なもので断面形が薄いものが多い。敲打痕跡がみられる。

(成田滋彦)

第III群石器（礫石器）

K・L・M・N類は自然縁をあまり加工しないで使用しているもので、従来礫石器と呼ばれているものなどである。本遺跡の今回の調査では(1,082点)という多数にのぼった。これらの出土地区・分類別の内訳は第93表のとおりである。捨て場などでは全面を発掘できなかつたにもかかわらず、各類ともⅢ区に多いのが目立っている。

出土数の内訳のほかに、各類ごとの石質、L類にみられる複合する成形・使用痕についてそれぞれ第94・95表に示した。なお、この第98表の成形使用痕は、各個体の計測表の備考欄に示したものまとめたものである。また、K類・L類・N類の長幅値の関係については第329図のグラフに示した。

K類 石錘

両端に抉りをもつもので、石錘といわれ、漁網・釣用の錘や編物を編む際の錘と考えられているものである。本報告では、1端にしか抉りがなくとも、磨滅や剥離面など、石錘として使用するとき紐がけができると考えらえるものを含めた。分類は、抉りの位置・数により行った。このうち、短軸の端に抉りをもつV類が多数を占める。長軸の両端に抉りがあるI類は、II群土器の少ないⅢ区ではみられない。石質は、I類を除くとほとんどが安山岩で凝灰岩が幾らかあり、その他のものは少ない。I類は数が少ないが、安山岩・閃綠岩・砂岩・頁岩など様々な石が用いられている。長幅の関係をみるとV類は他類と比べ大きさに規格性がみられる。なお、VI d類は加工品ではないが、形態が本類のV類などによく似ていて、紐掛けなどに適しており、本類の用途のために遺跡内に搬入されたものとの考え方から石器として扱った。

L類

I類 形態は、おおむね棒状のものと卵形のようなものに分けられるが、その中間的なものも存在する。「擦り」は一端にみられるものと、両端にみられるものがある。石質は、L類は一般に安山岩のものが多いが、本類とII類は頁岩やチャートなど硬質のものが多くみられる。

また、本類には端部の癡躰がかなり広い画積のものがあり、これはI-Ⅱ類と似るものである。

II類 円盤状などの長幅の差の少ない形態のもので、その周囲に「擦り」のあるものである。一方の側縁又は相対する両側縁にだけ「擦り」のみられるIII～V類と異なり、隣り合った側縁にも不規則に「擦り」がみられる。本類のうち第209図27、第256図25などは、全周縁に「擦り」がみられ、形態の定型化がみられるものである。

横断面が三角形など角ばった形態をし、この角に当たる部分が長い稜となつて、そこ

第96表 第Ⅲ群石器集計表

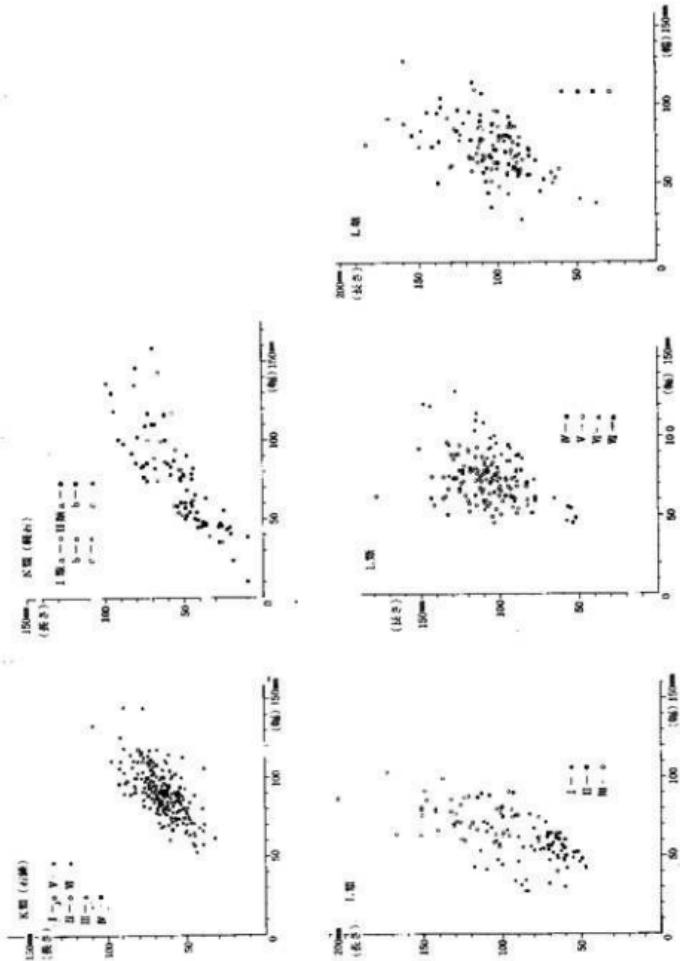
第97表 第Ⅲ群石器石質一覧表

	安山岩	凝灰岩	閃綠岩	チャート	砂岩	輝緑岩	流紋岩	玢岩	泰山岩	頁岩	泥岩	トルコイト	石英カルシウム	合計
K I	5		1		1		1			1				9
II	2	1												3
III	9	1												10
N	12	3												15
V	152	38			1									191
VI	1	0												1
VIa	2	3												5
VIb	2	0												2
VIc	11	5												16
VID	0	2												2
合計	196	53	1		2		1			1				254
	77.4%	20.8%	0.3%		0.7%		0.3%			0.3%				
L I	23	2	2	11	1		1	1		18				35
II	3	2	0	11	0		0			6	1	2		25
III	101	8	1		1		2	3		1				117
IV	11	1	1				2			1				16
V	92	9	7				0	1						109
VI	62	1	1				5		2	1				72
VI	6	2	0											8
IX	23	6	0			1								30
X	26	3	1											30
XI	35	8	0											44
XII	69	18	0		3									90
合計	451	60	13	18	5	1	10	5	3	26	1	2	1	596
	75.6%	10.0%	2.1%	3.0%	0.8%	0.1%	1.6%	0.8%	0.5%	4.3%	0.1%	0.3%	0.1%	
M I	16	2												18
II	48	2												50
III	17	7		1										25
IV	1	17												18
合計	82	28		1										111
	73.8%	25.2%		0.9%										
總計	729	141	14	19	7	1	11	5	3	27	1	2	1	961
	75.8%	14.6%	1.4%	1.9%	0.7%	0.1%	1.1%	0.5%	0.3%	2.8%	0.1%	0.2%	0.1%	

第98表 第Ⅳ群L類石器成形・使用痕複合一観表

	S	S	T	P	S	e	T	A	H	S	t	G	H	その他	2つ	3つ	計	無	統計	率
I	2	3				1	7			1			1		13	33	46	45	28.8%	
II	1	1					9								11	14	25	24	45.8%	
III	7	8			6	18	3	4			8	3	32	19	51	51	62.7%			
N	1				2	3	1				3		4	12	16	16	25%			
V	56	7	1	13	23	4	9	3		19	4	89	19	108	108	108	108	82.4%		
VI	23				11	9	2		2		8	1	37	26	63	62	59.6%			
VI	1				2			1			2		2	6	8	8	25%			
VI	3				2	9				2		1	15	7	22	22	22	68.1%		
IX	1				1	10			1		1		12	14	26	27	27	45.1%		
X					1	3					1		3	27	30	33	9.0%			
XII	10	6			9	7	3	3	2	2	5	6	2	37	26	63	64	58.7%		
統計	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)	(25)		
%	4.5%	22.4%	1.5%	2.2%	10.1%	20.7%	2.8%	3.5%	2.4%	0.9%	9.1%	2.2%	56.1%	44.7%						

図329 精三郎石器調査統計グラフ



に「擦り」のみられるもので、発茶沢遺跡の報告書で三角柱状磨石（青森県教育委員会：1982）といわれてきたものにおおむね相当する。本類はI区において多数を占める類である。成形・使用痕の複合についてみると、側縁に「剥離」を伴うものが他類に比べて非常に多い。また破損品が全体の約57%と他類に比して非常に多い。

IV類 分類規準からはV類と形態的にはほぼ共通しているのであるが、結果的にはV類より薄

手のものが多い傾向がみられた。

V類 側縁と平坦面の部分に痕跡が複合してあるもので、IV類とVI類の複合したものと考えられる。「擦り」の範囲やその強さ（平坦化の度合）は様々みられるが一般には正面形が短辺の膨らんだ長方形（□）、断面形が長辺の膨らんだ長方形（□）で、かなり定型化の進んだ類と思われる。また本類には、平坦面に「敲き」「凹み」を伴うものが非常に多く、これを伴うものが一般的なものと思われる。「擦り」は側縁・平坦面とも全体に及ぶものと一部分のみのものが、側縁のものは平面になっており、平坦面のものでは自然礫の形態がそのまま残っているものが多い。大きさは他類に比べ一定の値に集中する傾向が強い。

VI類 平坦面に「擦り」がみられるものである。扁平なものは、小形であるがM類との共通性が認められる。

VII類 VI類同様平坦面に「擦り」がみれるものであるが、厚く、球状に近いものをVI類から分離したものである。

VIII類～X類 端部・側縁・平坦面に「敲き」や「剥離」がみられるものである。このうち、IX類のII区平坦面から出土したもの（第94図-31）は、半円状扁平打製石器といわれるもの（村越：1977）に相当する。

XI類 平坦面に明瞭な凹部をもつものである。凹部の深さが浅いものはX類と近いが、2・3mm以上の深さのものを本類とした。この平坦面の凹部は、前に指摘したようにV類にも複合してみられるものである。凹部は平坦面ばかりでなく、側縁部にも伴なっているものがみられた（第94図-34）。

以上L類に含まれる各類の特徴を述べたが、次にその用途などについて考えてみたい。

I・II・VII・IX類は、端部・側縁部にあまり規則的でない痕跡をもつものである。I・II類では痕跡は「擦り」の明瞭なものもあるが、「敲き」に近い、荒いものもある。しかし、その面は平面化し、面とりされたように周りの自然面との境に稜ができるまで、「擦り」として扱った。これはI・II類は頁岩・チャートなどが多いことから考えると、I・II・VII・IX類とも同じような使用方法の結果であっても、石質の違いにより荒れる場合と平面化する場合があるのかも知れない。また、逆に別々の使用法のために異なる石質のものを選んだということを考えられるが、ここではその判断はできない。これらの類は、対象物に対して鋭い部分をぶつけたり、こすりつけたりすることにより対象物を破碎するためのものであろう。

III～V類は、側縁でのをこする作業のものと思われる。特に、III類の側縁は稜が鋭くなつておらず、また、破損率が高く、側縁の周間に「剥離」の生じているものが多いことから、かなり強い圧力を加えた作業がなされたものと考えられる。本類は、主に、縄文時代の早・前期に多いとされ、比較的その時期の土器の割合の多かったI区において高い比率で出土したことも

そのことを裏づけていると思われる。後期が主体のⅢ区においても多いが、これはⅢ類の破損率が高いことから考えると、もともと使用量が多かったためではないかと思われる。V類は、側縁と平坦面でものを擦る作業をしたものと考えられるが、側縁の「擦り」はやや荒く平面化し、平坦面の「擦り」は自然面に沿って自然面よりも滑らかな面となるものが多い。このことは、側縁と平坦面とでその作業に違いがあったためではないかと思われる。

VI類は先に述べたように、M類と似たものがあり、M類同様作業台としての用途も考えられるものもある。一般的にはV類と同様に、対象物を擦る作業に使われたものと思われる。

L類を通じて複合する痕跡についてみると、X類と共に通する「Sタ」やIX類と共に通する「eタ」「eハ」が多くみられる。「Sタ」は使用のための手掛り、「eタ」「eハ」は使用による破損か、使用の際の摩擦力を強めるためあらかじめ使用前に施された「目立て」様のものではないかと思われる。

#### M類

從来石皿・台石・砥石などと呼ばれているものを一括したものである。おおむね一面以上に「擦り」の痕跡をもつものである。「敲き」は「擦り」に伴ってみられるものがほとんどであるが、第29図34だけは「敲き」によりくぼんだ痕跡があり「擦り」にはみられない。K・L・N類に比べ破損率がとびぬけて高い。

本類のうちの、各類の割合をみると、II類が半数ほどで、その他はほぼ同数ずつである。I区ではII類が多く、IV類は全くない。M—IV類は縁をもつもので、前期中葉以降のものといわれる。(鈴木道之助: 1981)。このM—IV類は、17点のうち、他類では多数を占める安山岩のものが1点のみで、他はすべて凝灰岩のものである。これはIV類の形態をつくり出すため、安山岩より成形のしやすい軟質の凝灰岩を選んだものと思われる。

#### N類 (輕石製品)

本類の用途については浮子という考えが一般的である。しかしI類ははげしい使用には耐えられるとは考えられないし、II類は紐掛けをしたものとは思われない。この中で第213図99・第259図80がK類に似て紐掛けができるような形態であり、これは浮子として考えられる。一般にI類は左右対称な形態で、特にIc類は中軸線上に穿孔があり、垂飾などの用途が考えられる。これに対してII類は扁平でないが「擦り」のような平坦な面(緩い曲面の場合と平面の場合がある)を持っていることから、L類のVII類に似ており、この面を何かにこすりつけて使用したのではないかと考えられる。

(坂本洋一)

#### 第IV群石器 (その他の石製品)

#### O類 円盤状石製品

いわゆる円盤状石製品といわれているものを本類とした。7点出土した。周縁を打ち欠いた

ものと、周縁をていねいに擦っているものがみられる。形態は、ほぼ円形を呈し、直径5cm前後のものが多いが、のごとく小形の形態のものもみられる。剥離調整は、片面のみの打ち欠きと、両面の打ち欠きによってつくりだし、表裏面には自然面を残している。

P類 有孔石製品

有孔石製品は4点出土した。

不整形なもので一部表面を擦っている。穿孔は、片側の穿孔で貫通していない。石質はもうい石質で、穿孔が貫通していないのか疑問である。形態は、長方形で面に磨きをかけており両側を穿孔している。穿孔の際に生じた擦痕が著しく残っている。曲玉は穿孔を両側を穿孔し、穿孔の下部に溝を形成している。曲玉の中では大形の分類に属する。 (成田滋彦)

Q類 滑車形石製品

八戸市董浦遺跡では、輝緑凝灰岩製で周囲に刻みのついたものがあるが、本例と同様、外側に溝がめぐり、ほぼ同様のものと思われる。土製の滑車形耳飾と類似する。

R類 石棒

第277号土壇で1点出土した。端部のみが残存しているものである。末端や側面の一部を敲打のち擦って成形し、末端は凹面となり、側面には棱をもつ平坦面が形成されている。

(坂本洋一)

その他

なおIII区斜面から出土した泥岩の中に化石が含まれていたが、これは鷹架層中にある礁と思われ、アナダラ属の貝の化石と考えられる (注) (坂本洋一)

注 この化石についての記述は調査員佐藤巧氏の御教示によるものである。

(2) 弥生時代

ア、弥生式土器

調査区域のIII区から遺構——住居跡、窓穴遺構、土壇、埋設土器遺構など——に共伴した土器と遺物包含層から多量の弥生式土器が出土した。完形土器、復原して器形の概要を把握できる土器をあわせると40数点になる。遺構の覆土と遺物包含層からは5、500点以上の破片が出土した。その95%以上は、これまで県内では、出土例の僅かな土器群(念仏間・外崎沢式(須藤:1983))に類似するものである。従来この土器群については、遺構から出土した土器がなく、また、土器型式の内容が明らかでない。出土土器のなかには、他の型式の土器も含まれてある。

本遺跡の弥生時代の遺構から出土した土器群は、覆土中の土器であっても層位的には「共伴性」が濃く、一型式を成立させ得る資料である。これから遺構出土の土器を中心として土器型式の内容、特徴などを検討してみたい。

出土した弥生式土器の主要なものについては、すでに土器観察表の項目に記載してあるが、

その成形、調整技法、施文手法、器種などについて記述してみたい。

出土土器は、第1群と第2群に大別したが、胎土、成形、整形調整技法、焼成は一緒に述べる。

#### 胎土 成形 整形調整技法 焼成

(1) 胎土 胎土を分析していないため含有鉱物の内容は不明であるが、一般的には石英、トリディマイド(Td)、長石、シソ輝石、有色火山ガラスなどが含まれているようである。(須藤: 1982、37頁)。肉眼による観察では、第2群土器に含まれている砂粒は、自然に堆積している砂を磨りつぶして加工したような細砂を混入して整形調整し、器表面にはみえない。

第1群土器の器形が大型な類(深鉢形、壺形)の胎土には、器表面に浮き出すほど多量に、加工していない天然の細砂が混入されてある。

(2) 成形 粘土紐を巻き上げた複合痕をとどめた例は、第13号a住居跡から1点出土している(写真30)ほか、底部片では、その剥離から、成形を知り得る資料が何点かみられる。胎土の縫ぎ目は、口縁部から底辺部までは器内面側が低く、器外側が高い平行四辺形状の断面をしている例が多い。

(3) 整形調整技法 基本的には、縄文終末期(大洞A、A'式)のそれを継承している。「箇削り」は底部の工程で行った例がある。この整形技法は、仕上げの段階で消去されている。「撫で」「磨き」は仕上げの段階で多様されて、地文の「条」が消えかかっている例も多い。仕上げの技法は、全般に第1群土器は第2群土器の技法よりも粗雑である。文様の割り付けも、乱雑な類が少しみられる。

(4) 焼成 壺形土器、小型丸底土器を除いた(復原した土器の一部分にはある)ほとんどの土器は、使用時の加熱で、土器の内外面に煤状炭化物、こげ付などが、濃淡の差はあっても付着して、土器の地肌を黒っぽく見せている。地肌の赤変は、胴体下半部から底部に及んだ類が多い。図化した土器の大多数は、堅緻、良好の類に該当する。

(5) 施文・装飾手法 出土した土器群を検討するため、土器観察表にも『記載』してあるが、器形器種については、I~V類(深鉢形・鉢形・台付鉢形・壺形・小型・器種不詳土器)土器部位の呼称については、①~⑤(口縁部・頸部・肩部(胴体部上半)・胴部(胴体部下半)・底部(台部))として、口唇部は「①A」、各部位の内面については「①内」、底部の立ち上り(底辺部)は「⑤B」としてある。器形器種の判別、部位の判定、文様の全体像などを破片から推定することは、これまで出土例の多い土器群であれば、ほぼ可能である。しかし、從来出土例の少ない土器群にあっては、その判断に不確定的因素が残ることは多くの人が経験していると思う。この項は、第1群土器と第2群土器に大別して、その概要を列記する。

#### A 大石平第1群土器

施文・装飾は、一般に二枚橋式・宇鉄II式・田舎館2群・同3群土器などよりも簡素で、文様の割り付けも乱雑である。口縁部から底部、台部までのなかで、最も複雑な文様を施文する部位は、頸部から肩部までであるが、鉢形土器にあっては無文帯と沈線だけの簡素な装飾だけの類、器面全体に磨きだけを施した無文土器の類、縄文だけを施文した類などがみられ、縄文時代終末期の土器と同様、精粗の別が認められる。

本遺跡の弥生式土器は、磨消縄文と充填縄文の手法を併用して、地文に平行沈線、波状文、重波状文を、横位、縦位に連繋あるいは、重積させる技法を多様していることが特徴である。地文は、圧倒的にR Lの原体を用いているが、L R、L撫糸单軸絡条体、縱走条痕文も希に認められる。平行沈線文、波状文、重波状文は器形器種によってその太さ、幅、深さが異なっているが、この文様は装飾用の文様というよりも、地文の走る方向（回転方向）を変化させたときにできる地文と地文の重なり部分を消去するための技法である。沈線は1～10条、通常1～数条、波状文は1～3、4条重ねて重波状としている。なお、波状文と鋸齒状文は区別して用いた。沈線文と波状文を組み合わせた文様が、出土土器の基本文様である。地文は縄文と撫糸文とに区別したところもあるが、厳密な区分ではなく、報告書に縮尺した場合を考慮しただけである。

### ① 口縁部

この部位は、土器観察表には、① 口縁部、①A 口唇部、①内口縁部内面に分けて記載してある。この部位の文様、装飾は、基本的には平縁からはじまる。そして、口縁部を大別すると、次の三つの基本的形態がある。a、平縁（平坦口縁）、b、小波状口縁、c、山形小突起口縁

これに次の細かな装飾が加えられて、多彩な口縁部を造り出している。

a、平縁→地文を縱走、斜行、磨消、縦位並列の刻み目、沈線、波状文、重波状文、無文状文を組み合わせて施文している。更に外唇部を鏝状工具で、押圧か刻みを加える類、縄文原体を1～2条押圧する類がある。

b、小波状口縁→口唇部に指か、それよりも細い鏝状工具で縦位、斜位に内面まで押圧する。

c、山形小突起→口唇部に粘土を山形に貼付けて、頂部を押圧して刻み目を1～2箇所付ける類と刻み目を入れないで、細長い突起のままの類もある。

bの類は、口唇部を一周する。cの類は、2箇1対から6～8箇所付けられた類がある。aかcかは、破片では区別できない。aの口唇部は無文の類、地文を斜行、横走、縱走させた類、刺突文を一周させた類などがある。cの口唇部で小突起間に沈線を施文した類もある。aの口縁部内面には、地文を横・斜行させた類、それに沈線を1条、または、原体を1～2条押圧した類がある。これは、波状分と沈線文を配した壺形土器の類にも認められる。さらに、3個1組

の刺突文を 6 箇所に配置した類もある。口縁部内面に粘土粒を貼付けて半截した類もある。焼成前穿孔は、丸底小鉢形、小型台付鉢形に認められる。小鉢形の口縁部には、2 孔 1 対か 1 孔 1 対の穿孔した類がある。小型台付鉢形土器では、台部にも 2 孔 1 対の穿孔を設けた類がある。

#### ② 頸部

地文を磨消して無文帯（所々に磨き残しがある）をつくってから、沈線、波状文を加える類、地文の施文を省略した類、地文の縱走・斜行・横走・縞状・繩文の類、沈線のみの類、重菱形磨消繩文の類、重波状磨消繩文の類、変形波状磨消繩文の類、変形工字状磨消繩文の類、モチーフの不明瞭な磨消繩文の類、変型重菱形文の類など多彩である。この部位の繩文は、磨消手法と繩文充填手法がある。沈線の文様によって繩文を横走、斜行に変化させて配してある。頸部の地文を磨消して磨消無文帯+沈線+波状文の単純な文様をもつ器種は、長頸深鉢形の大型土器に多い。そのほか斜行の地文に結束文を横走させた類もある。

#### ③ 肩部（胴体部上半）

鉢形、深鉢形、壺形土器の胴部では、最大径の屈曲点に湾曲する部分で、通常、地文は縱走斜行に変わる基点でもある。地文だけの類、地文に重波状文・波状文・沈線を加えた類、流水工字文の類（少ない）などが施文されるが、文様の変化は少ない。

#### ④ 脇部（胴体部下半）

地文だけの類が圧倒的に多い。それも縱走か斜行の類である。鉢（深鉢か）の類には磨消して無文化した類がある。壺形土器には、1 点だけ縦位の波状文を 1 条単位で 5 箇所に施文した類がある。また鉢形土器に、縦位 3 条 1 単位の波状文と 8 条の平行沈線を配した類が 1 点ある。

小鉢で底辺部に製作時穿孔をした焼成前貫通孔をもつ土器には、底面からみると六角形をベースとした重波状文を 9 条施文した類がある。小型土器（盃形）には沈線を螺旋状にめぐらした類もある。

#### ⑤ 底部・底辺部

台付鉢形土器には、地文に沈線を付加した類がある。地文は底辺部まで施した類と磨消した類がある。底辺部の地文には一つの特徴がある。この部分だけ施文方向を変化させた類がある。胴部の地文が縦走繩文で、ここの部分だけ横走又は斜行の繩文を施文した類と施文原体を横位押圧した類があつて注目される。丸底の浅鉢（椀形？）底面には、地文を全面に施文した類と、器種器形不詳であるが、やはり丸底の土器で地文施文後変形波状文？を施した類がある。

その他の装飾として、器外面に赤色顔料を塗布した非実用的土器も二、三点ある。壺形土器内面に薄い褐色の被膜の認められるものが 1 点あるが、樹液の容器か、塗布したものであろう。装飾か土器製作上の压痕か速断できないものとして、木葉压痕（底部）が 1 点だけ認められる。現在のところ、粗压痕土器は見当たらない。蓋形土器も同様であるが、小型土器のなかには、

蓋に代用あるいは転用できる焼成前穿孔土器がある。

#### ⑥ 器形の分類

器形について、第1群、第2群の分類をしないままその多くを土器觀察表に記載した。それで出土した必要な土器の器形を大別すると、I類（深鉢形あるいは長頸壺形土器）、II類（鉢形土器）、III類（台付鉢形土器）、IV類（壺形土器）、V類（小型土器、その他の器種不詳土器）の5類型に類別できる。この5種類を次のように細分した。

I類 A(a, b)、B(a, b) C、D、II類 A(a, b, c)、B(a, b, c, d)、C、D(a, b, c, d)、E(a, b)、F、G、III類 A、B、IV類 A(a, b)、B(a, b)、C(a, b, c)、D、V類 A(a, b)、B、C(a, b)、D(a, b)、Eである。

##### I類 深鉢形土器

###### I A類 (第330図1、2、写真28~31)

a. 口縁部は軽く外反して、長い頸部は内傾気味に立ち上がる。肩部と胴部の境い目が、最大胴径となって、ゆるく内に湾曲しながら底部へすぼむ。底辺部を欠いているが、平底と思われる。現器高31.5cm、口径26cm、主要文様帶は、連繁重菱形磨消繩文である（第330図1）。

b. IAaとほぼ同じ器形であるが、最大径が口径でなく、胴径にある点が異なる。無文である。器高31cm、口径23cm、最大胴径26cm、底径6.9cmである。IAaと同様、小波状口縁である。第330図4は、肩部には繩文が縱走して、胴部は磨消してある（第330図2、4）。

###### I B類 (第330図3、6、写真28~31)

I B類a、bは、大型の破片から器形を推測した。ともに底部を欠いている。IA類よりも口径、胴径が大きい。a、bともに短い口縁部は軽く外反して、頸部は長く、外反気味と内傾気味の類がある。bの文様帶は磨消無文帶+沈線、波状文の類である。aの推定口径29.2cm、bの口径は25cmである。

###### I C類 (第330図7)

接合した破片から器形を図上復原した。I C類aの器形は、IA類と同形であるが、口縁部の形態、文様構成（磨消手法）が異なる。器高32cm、口径27cm、底径7.2cmである。

I C類bは、口縁部が短く、若干外反して肩部と同じ位の径をもち底部へ直線状につぼむ器形をしている。図上復原した類は、器高25.8cm、口径23.7cm、底径8.2cmである（第330図21）。

###### I D類 (第330図8)

口縁部だけの破片から器形を推定した。この類の破片数が多い。口縁部は、頸部から大きく外反して平縁、口唇部に押圧刺突による並列刻みをもつ。文様は地文のR Lを斜行、縱走させてある。図示した土器の口径は33cmで、口縁部内面に地文と沈線を施文している。

##### II類 鉢形土器

この器形は、I類に近似した形態をしているが、比較的小型の類をまとめた。更に小型の類は、V類に類別した。

II A類 (第330図10～12、写真28～31)

a. I類よりも短胴で頸部、肩部と胴部の割合は1対1.5くらいである。口縁部、口唇部、口縁内面の施文にも特色はあるが、主要文様帶は頸部、肩部の変型波状文で、文様構成は2段重(2単位)となっている。器高23cm、口径22.9cm、底径7.8cmである(第330図10)。

b. 器形は、II A類aと同様であるが、口唇部外縁の文様はA類aと異なる。肩部に沈線・波状文が付加されている。II A類bの主要文様は、変形波状磨消繩文(仮称)である。器高19.3cm、口径20.6cm、底径7.2cmである(第330図11)。

c. 器形は、I A類に近似し、II A類a、bよりも胴長である。口唇部に押圧刺突による刻み目がなく平縁である。主要文様帶は頸部、肩部の重波状磨消繩文(仮称)である。器高23.3cm、口径21.7cm、底径6.9cmである(第300図13)。

II B類 (第330図13～16、写真28～31)

a. II A類a、bの器形に比較して頸部の絞りが少なく、頸部と肩部の区別が判然としない器形である。頸部～肩部の文様構成は、3段重(3単位)となっている点がII A類と異なる。器高24.2cm、口径26.2cm、底径6.8cmである(第300図13)。

b. 器形はII B類aと近似しているが、波状口縁で口縁部内面にも、地文が施されてある。頸部、肩部の文様構成は、3段重(3単位)で、各段の地文、波状文に変化をもたせてある。文様は、頸部から肩部にむけて磨消無文帶+沈線、重波状文+縱位並列刻み目、地文+波状文を施文してある。推定口径19.7cmである(第330図14)。

c. 器形はII A類に近似して、口縁部は45度ぐらい外反して鋸歯状文が施文してある。頸部、肩部と胴部の比率は1対1.5で、短胴である。頸部、肩部の文様は、3段重(3単位)構成で、地文+沈線+鋸歯状文を組み合わせて施文してある。胴部、底辺部にも縱位重波状文と沈線を付加した特異な文様を構成している。器高21cm、口径21.7cm、底径7cmである。(第330図15)。

d. 器形はII B類a、bに近似しているが、口唇部に山形小突起を6個(3対か)飾付けてある。文様は地文+沈線+鋸歯状文か重波状文であるが、肩部、胴部の文様構成は不詳である。推定口径25.8cmである(第330図16)。

II C類 (第330図17、写真28～31)

a. 器形は、II A群と類似して、頸部の絞りが小さく外反気味に立ち上がり、口縁部は軽く外反している。頸部、肩部の文様帶は、2段構成で、地文+沈線+波状文を施文してある。

また、口唇部外縁には、押圧並列刻み目を飾付けてある。口径24.6cmである。

II D類 (第330図18～20、写真28～31)

a～d、II B類よりも口径が小さく、口縁部から肩部までの径に変化が少ない器形である。頸、肩部の文様構成は、3段重のようである。aの文様は、沈線、地文横走、地文+沈線、波状文である。推定口径23.7cm、器高25.8cm、底径8.2cmである。bは、縦齒状文、沈線、崩れた縦齒状文の順に施してある。cの文様は、重波状磨消繩文であるが、文様の割付けが崩れて頸部のくびれがない器形である。dは無文の類、第302図17がこの類である。

#### II E類（第330図22、23、写真28～31）

aは、前出II A～D類よりも頸部の文様帶が狭く、器形も口縁部が外反して、頸部が短く絞った器形である。頸部、肩部の文様帶は、平行沈線と地文縱走のみの単純なものであるが、口唇部外縁に縦位押圧刻み目を附加してある。器高23.2cm、口径24.2cm、底径6.1cmである。bは、口縁部と底辺部がなく、器形は不詳であるが、文様は、II E類と同様の構成であろう。

#### II F類（第330図、写真28～31）

a、粗製の鉢形に入る。I D類は推定口径34cmと大型鉢形で深鉢形に分類したが、第264図1も同じ類である。II F類とI D類は口縁部は、ゆるやかに外反した器形で共通している。本類は肩部以下を欠失して全体の器形は不明であるがI A類と類似した器形であろう。II F類aは、押圧小波状口縁、I D類は、口唇部外縁に押圧刻み目を連続的に施して、口縁部内面には地文と沈線を添加してある。文様は地文だけであるが、II F類の頸部は意識的に施していらない手法がみられ、磨消繩文を簡略化した技法であろう。

#### II G類（第330図24、写真28～31）

器形は、II C類cとほぼ同形であるが、全面無文である。無文のため、II C類cと区別した。器高は18.5cm、口径20.1cm、底径7.2cmである。

#### III類、台付鉢形土器（第330図25、26、写真28～31）

III A類、器形の全体を把握できる土器は、aが1個出土しただけである（第330図25）。V C類、V D類に台部を付けたような小型の類である。普通の大きさの類もあるようだ（III B類第330図26）が、台部だけで不明である。III A類は平縁で、胴部からほぼ直線的に口縁部に続く器形で、口縁部が幾分開き気味に反る。台裾径と口径の比率は、1対2である。出土例が少ないので決定的ではないが、III類（台付形）特有の文様があるようである。口縁部内面の地文と沈線、口縁部の縦位並列押圧刻み目がそれで、台付鉢形土器の口縁部は、先枯れ状に薄くつくられてある。III B類aは台部片で台裾径14cm、現高7.5cm。これから想定される鉢の部分は、相当大型の類になる。捺糸の地文を縞状文風に施してから、平行沈線を施してある（第330図26）。

#### IV類 壺形土器

##### IVA類（第330図27、30、31、写真28～31）

aはソロバンの玉状の胴体部に、丈の短い口頭部を付けたような器形である。胴部の真中に

最大胴径がある。器高と最大胴径が同じ、口径は底径よりもやや大きいが、頸部と底径は同じ大きさで、均衡のとれた器形をしている。胴部の文様は地文だけであるが、口唇部外縁には押圧による刻み目、頸部と肩部の接合部分には、沈線と波状文を施している。底部は、糸底状である（第330図27）。この類には、第330図30、31が類似しているが、最大胴径がIV A類aよりも高い位置にある器形で、I A類bの可能性もある。IV A類aの器高31.3cm、口径14.1cm、最大径30.9cm、底径8.9cmである。

第313図5は、口縁部～肩部の破片であるが、口唇部外縁に斜位押圧刻み目と頸部と肩部の接合部分に隆帯をまわして、さらに円形刺突文を施してある。胴体部の器形はIV A類aと同類と思われる。

#### IV B類（第330図28、32、写真28～31）

a、bとも大型の壺形土器で、aの胴体部は球状をなしている。bは不明である。aの口径は底径よりも大きく、胴部最大径を胴体部の中央に設けた土器である。口頭部には沈線、鋸齒状文、波状文などの第1群土器の基本文様のほかに連弧文が付加してある。推定器高30.3cm、口径11cm、最大径25.1cm、底径7.8cm。bの推定口径は12.2cmである。

#### IV C類（第330図33～35、写真28～31）

a～dいずれも口縁部を欠失している。IV A類、V B類よりも小型で、胴体部は、球形である。aの文様は、第1群土器の特徴をもたない。地文の直前段多条R<sup>2</sup>だけを施文してある。胴径は13.5cm、底径5.7cm。bの器形は、IV C類頭部よりも太いつくりで、頸部、肩部に一種の変形工字文を2段以上施文してある。この文様は、次のIV C類cには3段重（3単位）で、しかも、磨消繩文手法で施文してある。この文様は、第1群土器の特徴的施文技法の一つでもある。bの胴径12.9cm、底径5.2cmである。cは頭部、肩部に前記の文様と波状文を最大胴径部分には横走、胴部には縱走させて文様を施してある。この土器の頭部は、bよりも細いつくりで胴径15.6cm、底径6.8cmである。

#### IV D類（第330図29、写真28～31）

口縁部と頭部が直線状に外反して、胴体部は紡錘形で、全体は縦長の器形で完形品である。口頭部には、沈線と波状文を3段に重ねた文様がある。また、口縁部内面にも地文を施してある。製作時の1孔1対の穿孔が口頭部にある。この焼成前の穿孔は、蓋形土器と結縛するためのものである。蓋形土器はV類（小型土器）（第330図38、第316図8）に含めた。この器形は、この2点であるが、破片になると他の器種と混同しかねない小型の土器である。

#### V類

#### VA類（第330図36、41、写真28～31）

この類は、前出II類の小型を類別したもので、器形はII類と同形の土器もある。

a、この土器と同形のII類は、山形小突起の配置数（2個）は異なるが、II B類dに類似している。器形は、小突起はあるが円筒形である。文様の、地文十沈線は、II E類にもある。

bは、前出、II F類の小型土器で、ある。

V B類（第330図42、写真28～31）

この類は、底部を除くとその器形はVC類、VD類と類似している。底部のつくりが丸底状で、紐を通すことを目的とした製作時の貫通孔が、底辺部に1孔1対設けてある。口、肩部は、第1群土器の特徴である沈線+波状文、胴体部と底辺部は重波状文で、しかも磨消繩文手法で施文してある。その文様は、底部を上にした場合（別個の土器に蓋形土器のようにかぶせるこ）とを考慮したものである。器高9.6cm、口径12cm、底径2.8cmの大きさである。

VC類（第330図37～40、45～47、写真28～31）

a、bとも器高6～12cm、口径9～12cmの大きさで、II類土器を小型化した器形と文様が認められる。底部は丸底状につくられて径は小さい。aは第1群土器の文様を施文した類、bは無文の類である。小型鉢あるいはボール形の器形と呼称できる。口縁部に焼成前の穿孔（2孔1対）ある類（破片からの図上復元原のため欠失部分に穿孔されてあつたかも知れないが、）は蓋形土器の一類とも考えられるが、蓋形土器の穿孔は通常体部に設けるがこれらの土器は、口頭部に設けてあるため、一概に蓋形土器と呼称してよいか、問題点として指摘しておく。cは、口径7cm、現器高3.4cm、丸底状の底部（あるいは体部）で口縁部は先桔状に薄いつくりの土器で、VD類bの小型とも考えられるが、口縁部に製作時の穿孔がある。文様は底面まで、重波状文？を施文したようである。

VD類（第330図48、49、写真28～31）

aの器形はコップ、盃（ぐい飲み形）状で、胴体部は直線状に立って、口唇部は薄くなつて短く外反する。器高4.5cm、口径5.6cm、底径2.8cmの大きさである。文様は、地文に螺旋状の沈線を配してある。bは、浅鉢、椀、坏形土器の類とも考えられる。（その場合はVE類は、VD類に含まれE類は消滅する）丸底で、地文に変形波状のような沈線を施してある。現器高4.3cm、底径6cmの大きさである。

遺構外出土の破片のなかには、浅鉢形の底部（第316図13）、地文に横走結束文を付けた鉢形胴部（第313図31、第312図13）各種手づくね土器などもあるが、遺構覆土出土の、それらの土器を含めて、大石平第1群土器か第2群土器か、別型式の弥生式土器か判別できない土器も若干あることを補足しておきたい。また、器形についても、本書で深鉢形、鉢形、小型土器と称した土器のなかには、須藤隆氏の壺形（IV類、須藤：1982）が含まれている。また、宇鉄II遺跡の報告書（県立郷土館調査報告6集：1979）も同様である。

B 大石平第2群土器

遺構から出土して器形の概要を識別できる土器は3個ある。これ以外の第2群土器は、第1群土器とともに、遺構内覆土と遺構外のグリッドから破片で出土した。それらの器形と施文について類別する。

#### I類 深鉢形土器（第330図50、写真28～31）

I A 口縁部は短く、軽く外反して、外唇部全体に押圧による刻み目が加えている。内面に沈線が1条めぐらしてある。頸部は長く若干内傾している。肩部は幾分はり出して、胴体部は内に湾曲気味にすぼんで、底部は平底の器形である。この器形は、須藤氏らは壺形土器としてとらえている土器に相当する。文様はR Lの地文に、太い横走沈線を数条、頸部と肩部にめぐらしてある。類似した土器の出土例は、田舎館村垂柳遺跡（県埋文88集：1985）、宇鉄II遺跡（県立郷土館調査報告6集：1979）、瀬野遺跡（須藤：1982）がある。この土器は、次のII A類a土器と第4号土壤内で共伴した。

#### II類 鉢形土器（第330図51、写真28～31）

II A類a、口縁部はI A類のそれよりも幅が広く、軽く外反して口唇部の5個所に押圧による刻み目が付加されている。頸部は短く、直立して磨消無文帶である。肩部は幾分はり出している。胴体部は直線状に底部までつづいているが底部は欠失している。平底か、丈の低い台脚が付くかも知れない。地文はR Lで、口縁部と胴体部に施文されている。類似土器は、瀬野遺跡から出土している。（須藤：1982）

#### IV類 壺形（第330図52、写真28～31）

A類a、口縁部は短く幾分外反して、外唇部に押圧による刻み目がある。その内面には沈線が1条施してある。頸部は長く、直立している。胴体部は、球状に膨らんでいるが、底部は欠失して不明である。口頸部には、太い沈線と結節沈線が1条めぐらされて、胴体部にはR Lの地文が斜行・縱走している。瀬野遺跡の壺形（IV a類）に類似している器形である。

遺構外出土の第2群土器では、第III類台付鉢形（第312図1、4～6）、第313図16、35第14図5、第315図5、9～12、17、18、21、29）、第IV類壺形（第315図6）が認められる。

第2群土器は、弥生時代遺構群分布圏内にも、少量分布していたが、III区西側に位置するC Y-371、D F-370、D G-370グリッドからは、第2群土器のみが出土した点は注目される。

#### 弥生式土器の編年的位置について

東北地方北部の縄文時代晩期最終末（大洞A、A'式）から弥生時代後期末葉（天王山式）における時期の土器型式とその編年的位置付けは、伊東信雄、村越潔、須藤隆、千代肇、橋善光の諸氏をはじめとする多くの研究者が永年にわたって研究され、この時代全体の型式的変遷を把握することが可能となりつつあるが、いまだに不確定な要素も含んでいる。一般的にこの時代の型式的変遷はV期あるいは6期に区分されている（伊藤、須藤、東北考古学会：

1982、須藤：1983、1984ほか）。その研究史、地域的系譜、続縄文文化期との関連などはさておき、本遺跡出土の弥生式土器の編年的位置の概要を記す。なお、土器型式変遷表は、須藤氏の型式変遷表（須藤：1984）をベースとして一部加筆した。

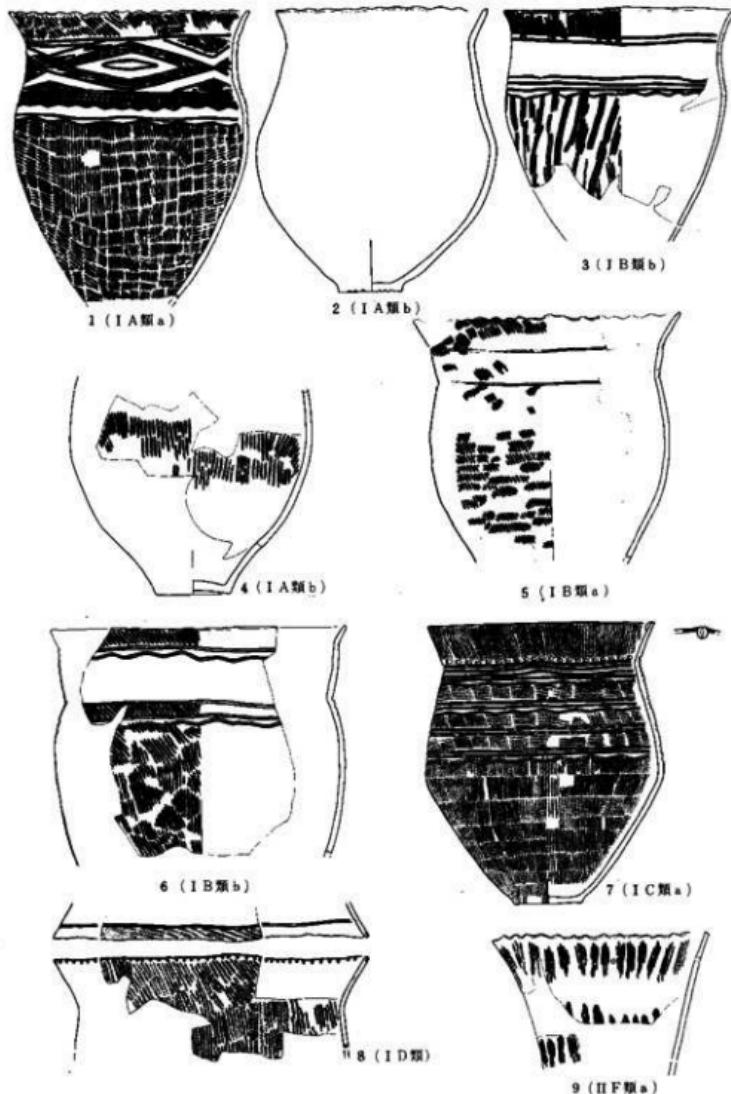
第1群土器は、從来発表された資料と文様構成、施文技法、器形器種などを対比すると、弥生時代IV期・念仏間・外崎沢式に該当するものと思われ、この土器は、「田舎館2群と3群土器の両方の特徴をあわせ持つておる、これらの2つの系統の土器群の流れが、この時期に一つの流れに融合した」と推定されている（須藤：1983）。念仏間・外崎沢[1]の、両遺跡から採集、出土した資料と細部にわたる比較検討は未了であるが、その大略はほぼ一致している（注：調査中に橋氏が指摘された）。本遺跡は、前述の2遺跡とは同じ地域（下北半島）に所在し、文化的な流れも同系統に属するものと考えられる。

第2群土器は、数量は少ないが第1群土器よりも古い時期に編年づけられている二枚橋式土器に相当する。したがってその時期は、須藤土器型式変遷表のI a期に相当する。本遺跡出土の弥生式土器は、その第2群土器から第1群土器へと変遷したことになるが、昭和59年度にも本遺跡の発掘調査が行われ、弥生式土器、住居跡が出土しており弥生式土器の型式的変遷は、さらにその時期的空白をうめることができると思われる。

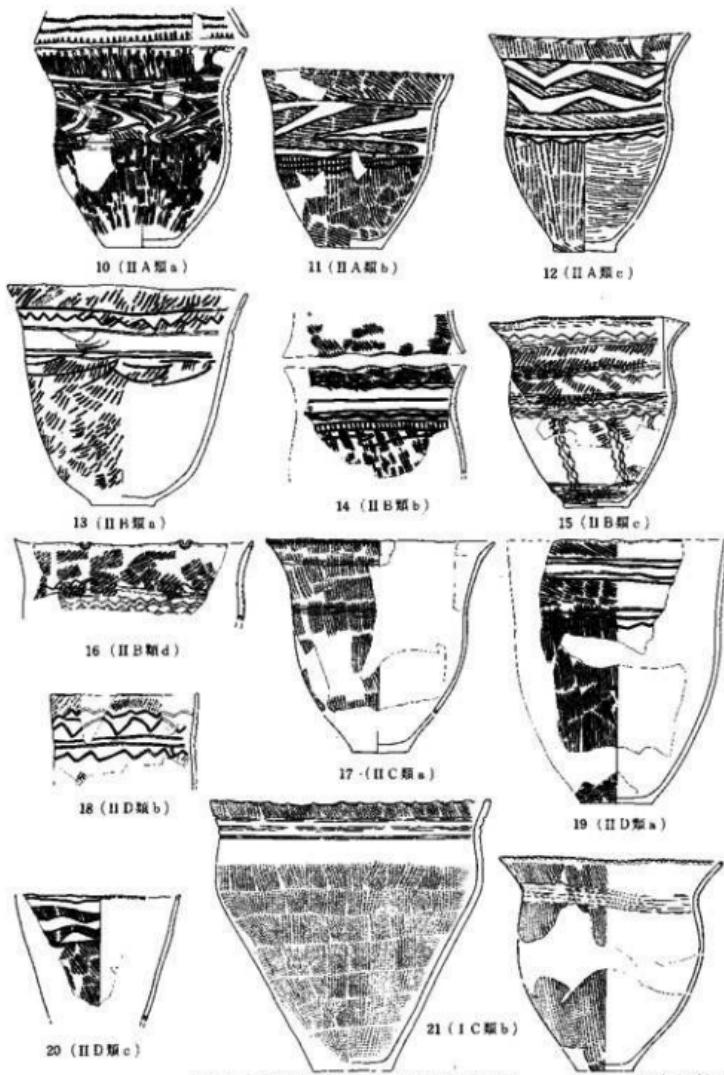
東北地方北部における弥生式土器、続縄文式土器出土遺跡地名表は、およそまとめられたものがある（須藤：1983ほか）が、本県の弥生・続縄文時代関係の遺跡地名表は第99表にまとめた。六ヶ所村内でI a期（二枚橋式）の土器を出土、採集された遺跡は、馬門、表館（54年発掘）、幸畑[1]・[3]、尾駒（渡辺：1979）、弥栄平[2]（県埋文81集：1984）の6箇所である。IV期大石平第1群土器出土遺跡は、上尾駒遺跡[2]（旧名称102号遺跡、県埋文48集：1979）、V期は天王山式土器出土遺跡で、千歳遺跡[13]（県埋文27集：1976）、家ノ前遺跡（県埋文48集：1979）、表館（県埋文91集：1985）の3箇所がある。このようにまとめると、この地方の弥生文化もほぼ時代の流れに沿った遺跡が存在したといえよう。

第2群土器（二枚橋式）は、県内二十数箇所（津軽半島東半部～下北、上十三、八戸、三戸）、岩手県北部、北海道渡島半島に分布しているが、その型式名称は異なってることは周知のことである（須藤：1983）。二枚橋式土器の特徴、土器組成、器種類型、装飾、施文要素、文様構成、調整手法、編年的位置、続縄文文化の恵山式土器との関係などについては、須藤氏らの研究成果が発表され、垂柳遺跡の発掘調査とあいまってますますそれらの研究は進展している（伊藤、須藤：1983、1984）。この頃も、それらの成果を参考にしたところが多い。第1群土器についての資料は橋、工藤竹久、葛西氏らの報文（注参照）はあるが、土器型式の内容は知られていなかった土器群であったといえよう。

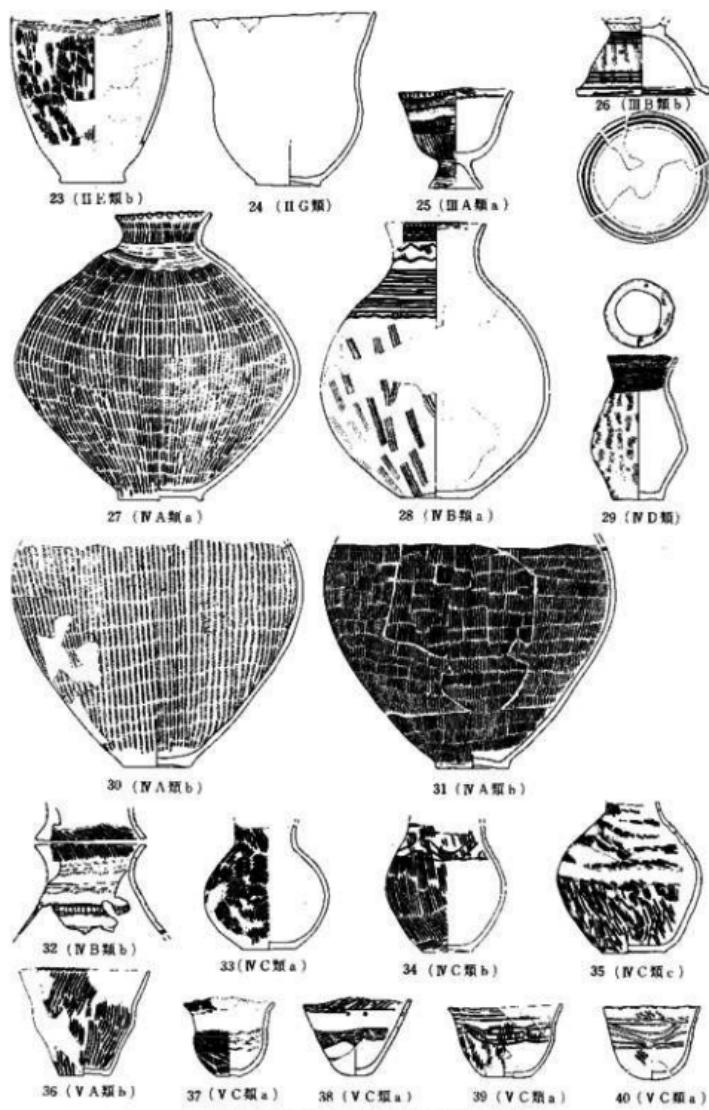
この第1群土器とよく類似した土器群は、岩手県二戸群一戸町上野遺跡から5棟の住居跡と



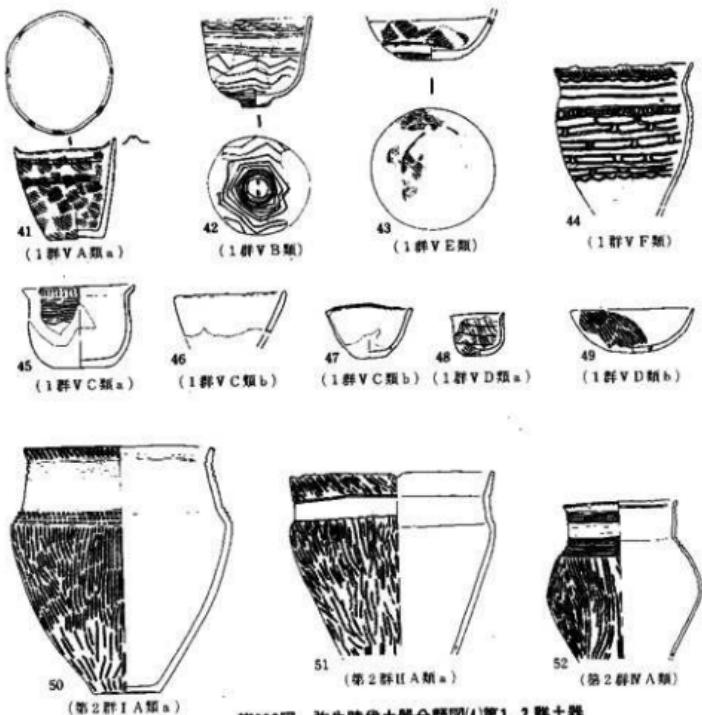
第330図 弥生時代土器分類図(1)第1群土器



第330図 弥生時代土器分類図(2)第1群土器



第330図 弥生時代土器分類図(3)第1群土器



第338図 弥生時代土器分類図(4)第1.2群土器

共伴して出土している（小田野：1983、高田和徳：1983・1984）。まだ、細部にわたる対比は未了（上野遺跡最終報告書は本年度末刊行予定）であるが、器形、文様などは、本遺跡出土のものと極めて類似性の高い土器群である。ただ、長頸の深鉢形土器は、復原された土器には含まれていない。大石平第1群第II類に類似した器形の鉢形が多く、鰐歯状文が波状よりも多用されて、文様の割付けも比較的正確な位置に施してあった。器種では沈線文のみを施した浅鉢形土器、縦文を地文に横走する綾絡文（結束回転文）を施した甕（深鉢形）、連弧文を施した壺形土器がある。壺形と鉢形では胎土の質が異なる点などが注目された。また、底部（台部）に穿孔した蓋形（台付鉢）土器とセットになる鉢形土器（大石平II B類）も出土している。石器類は、大石平遺跡では出土していない石製紡錘車、弥生時代特有の片刃磨製石斧などの類も出土しており、今後も大石平遺跡出土の資料と比較検討するうえに貴重な資料であると考える。岩手県では上野遺跡以外にこの時期の遺跡は陸前高田市山崎遺跡、下閉伊郡新里村和井内

遺跡の2箇所が知られている。後者の資料は『岩手の土器』(岩手県立博物館: 1982) に記載されてある。

秋田県の資料では、志藤沢、宇津ノ台遺跡出土資料中(須藤: 1969) に沈線による連繩重菱形文と本遺跡で波状文、重波状文と仮称した類がみられることは、この土器の分布圏の一つを示すものである。

北海道渡島半島付近では、瀬棚南川、尾白内、白坂、恵山貝塚(文献参照)などで出土している。大石平弥生式土器群II類に分類した類の器形は、ほぼこれらの遺跡と同形である。大石平弥生式土器第1群土器のうちでも、壺形(IV C類、第330図35)、鉢形(II A類a、b、c、第330図10、12)の数点は、特に瀬棚南川IV群土器と極めてよく類似していることは、北海道在住の遺跡調査担当者からも指摘されている(千代、田部、小笠原、横山、久保、石本氏ら)。

これらと同類の土器を出土している北海道の遺跡は、前記のほかに、西桔梗B<sub>1</sub>、元江別、江別太、小幌洞窟などがある。

しかし、大石平遺跡出土の第1群弥生式土器は、恵山IV期(恵山B式、南川IV群、アヨロ3類)の土器そのものではなく、多くの問題はあるが、今のところ相違点と共通点は相半ばしている。例えば、器種のなかで深鉢形、鉢形の器形は共通しているが、南川IV群には台付鉢形土器、蓋形土器あるいはこれに類似した小型土器は認められないようである。南川IV群土器にはそのIII群土器を含めて「帶縄文」(「縞縄文」)が盛んに用いられているが、大石平第1群土器ではその割合は少ない。しかしながら「縞縄文」に似せた施文技法類は認められる。峰山氏のいう「続磨消縄文」手法は大石平第1群の深鉢形、壺形、小型土器にみられ、本書では磨消縄文手法の重菱形文、変形波状文あるいは重菱形磨消縄文などとした文様が相当する。「続磨消縄文」あるいは磨消縄文、縄文充填手法と併用した波状文、レンズ状文、三角沈線連繩文、列点並列文、無齒状文、重鋸齒状文、これらを重積させた文様帶などはその文様構成、施文技法の巧拙、報告書の表現方法の差異などはあっても、恵山IV期(南川IV群)の土器と大石平遺跡の双方に認められる。また、大石平第1群土器の口縁部内面にたびたび施文されている沈線と縄文は、南川IV群土器においては類例が少ないようである。

大石平第2群弥生式土器(二枚橋式土器)は、恵山I期(有珠善光寺3層式)の土器の器形、文様構成、施文技法などと極めてよく類似している点を考慮すると大石平遺跡から出土した弥生式土器は、北海道の続縄文式土器と深い結び付きが認められる。

須藤氏は、「東北地方北部の土器型式の変遷において、分布領域を異なる二つの土器型式の系譜が存在する。A系統は、主として津軽平野を中心とした西部地域、B系統は、主として津軽半島(東半部)、下北半島から馬渕・新井田川流域にかけての東部地域においてその変遷

第99表 青森県弥生・続縄文時代遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	時期	備考	文献
1	大石平(1) (2)	上北郡六ヶ所村池原字野附			県埋文 24集: 1975、県埋文 90集: 1985
2	六原(1) (3)	上北郡六ヶ所村金内字切上場	田舎館式		県埋文 1集: 1973
3	山柳沢	上北郡六ヶ所村平沼字道ノ下			県埋文 1集: 1973
4	牛堀(1)	上北郡六ヶ所村鷹架字道ノ下	田舎館式		県埋文 1集: 1973
5	牛堀(3)	上北郡六ヶ所村鷹架字道ノ下	田舎館式		県埋文 1集: 1973
6	発茶跡(1)	上北郡六ヶ所村鷹架字発茶沢			県埋文 9集: 1974、同67集: 1982
7	表船	上北郡六ヶ所村表船字発茶沢	(一枚橋式、田舎館式)		県埋文 61集: 1981
8	尾駆	上北郡六ヶ所村尾駆	二枚橋式	(須座 I b類 完形)	県埋文 9集: 1974、渡辺: 1979
9	上尾駆(2)	上北郡六ヶ所村尾駆字上尾駆		(旧遺跡名 102号)	県埋文 48集: 1979
10	家の前	上北郡六ヶ所村尾駆字家の前	天王山式		県埋文 48集: 1979
11	千歳(13)	上北郡六ヶ所村金内家前崎	天王山式 後北式B C1	(土壤幕1基)	県埋文 27集: 1976
12	馬門	上北郡六ヶ所村治	田舎館式	種苗付	県埋文 1集: 1973 伊東: 1970「古代の日本」
13	平沼	上北郡六ヶ所村平沼			県埋文 1集の平沼か 楠: 1983
14	弥栄字(2)	上北郡六ヶ所村尾駆字衣館	一枚橋式		県埋文 81集: 1984
15	甲田沼付近	上北郡東北町甲田沼付近		(鉢木: 1978では断)	県埋文 9集: 1974
16	有戸	上北郡野邊町有戸	田舎館式		伊東: 1960
17	明持平	上北郡横浜町明神平吹越			楠: 1977
18	百日木(1)	上北郡横浜町百日木			県埋文 1集: 1973
19	(天岡林村)	上北郡天岡林村(出土地不詳)	後北C2式		鉢木: 1978
20	立蛇(たつ)	上北郡天岡立蛇 じや)	二枚橋式		春日: 「下田町誌」1979 鈴木: 1980
21	瓢(ふくべ)	上北郡下田町瓢			鉢木: 1979
22	角窓(1) (3)	むつ市城ケ浜字角窓	二枚橋式	(県遺跡地名表ほか)	橋: 1979、須藤: 1982、江坂「貝塚」32: 1951
23	大川日	むつ市城ケ浜字大川日	砂押式 一枚橋式		橋: 1977、1979、須藤: 1982、鉢木: 1978
24	金谷沢	むつ市奥内字金谷沢	一枚橋式 I a類	(故中島全氏資料)	須藤: 1982
25	江林沢	むつ市奥内字江林沢	砂押式	(須藤かわ林 I)	江坂: 1951、橋・山本: 1967 (「うそり」4)
26	大曲海岸	むつ市田名部字赤川 I - 29	念仏式、後北C式	(鉢木: 1978 では 赤用とした)	鉢木: 1978、I
27	間根	むつ市間根(詳細不明)	後北C2式	(旧大高コレクション)	大高: 1969 鉢木: 1979 - II
28	樋ノ木平(1) (宿野浦)	下北郡川内町宿野部字樋ノ木 平	田舎館式(鉢木) 二枚 橋式(須藤)	(宿野部式) I 墓と上 器4点	鉢木: 1978 I (出土品は二枚橋 式・寺田氏の所蔵は田舎館式) 江坂、村越: 1967(下北)
29	郭馬尻	下北郡川内町猪川字川代(郭 馬尻)	二枚橋式、田舎館式		同上 鉢木: 1978 須藤: 1982
30	川代			(鉢木: 1980考古風 5号)	田中忠三郎: 1981川内町教委 川代郭馬尻遺跡発掘報告書 県遺跡地名表: 1978

No	遺跡名	所在地	時期	備考	文献
31	烟	下北部川内字烟	二枚横式	(中島全二氏資料)	須藤：1982
32	二枚横	下北部大畠町大畠字大畠道	二枚横式	集落(往2 mの上坡から多量の遺物出土)	須藤：1970 考證56-2、伊東「稻作の北進」古代の日本8 ：1970
33	鳥居	下北部大畠町大畠平	一枚横式	後北C式出土	橋：1973、橋・奈良：1979 北海道考9
34	大門	下北部大畠町大門	二枚横式	後北C式	橋・奈良：1974、金子他：1975
35	焼畑	下北部大畠町奥戸字焼畑	二枚横式		黒理文：1978(遺跡地名表)
36	冷水	下北部大畠町大門字冷水	二枚横式		黒理文：1978(遺跡地名表)
37	大門半1号	下北部大門町	一枚横式		黒理文：1978(遺跡地名表)
38	八幡堂	下北部佐井村佐井八幡堂	大洞A'~田舎船式		江坂：1968、橋：1970、工藤竹久：1978、1979
39	穀谷	下北部佐井村穀谷	二枚横式	(鉄塊)器？	岩本：1971(佐井村志上巻)
40	やさ沢	下北部佐井村穀谷	二枚横式		岩本：1971(佐井村志上巻)
41	念仏閣	下北部東通村尻屋字念仏閣	大洞A'~念仏閣式		工藤：1968、橋：1968 うと う70号、1971、1977
42	大平C	下北部東通村尻屋大平	念仏閣式		橋：1972、うそり9号
43	前山	下北部東通村野牛前山	念仏閣式		江坂：1965
44	石藏	下北部東通村田屋字石舎	田舎船式		橋：1977、1972
45	ムシリ	下北部東通村尻屋	田舎船式		江坂：1955
46	浜尻屋	下北部東通村尻屋大平	後北C、D式		江坂：1961
47	白帷赤平	下北部東通村白帷字赤平	後北C式		橋：1970(古代53)
48	大平D	下北部東通村尻屋物見台1			工藤竹久：1973、考ジヤ15
49	御座(3)	下北部東通村白帷字瀬屋24~ 60、白帷字前坂下542	(志山A BないしB 式)		黒理文71集：(白鳥)1982
50	前坂下(3)	下北部東通村白帷字前坂下 162~168	砂沢式	集落2軒	黒理文71集：(三浦はか)1982
51	瀬野(黒岩)	下北部鶴野沢村鶴野沢字黒岩	砂沢~田舎船式 二 枚横式中心	二枚横式の大型住居 跡1棟 鋼板土器2 片	橋：1968、伊東・須藤：1982、 東北考古学会、瀬野道路
52	外崎洞1)	下北部臨野沢村小沢字鹿間平	念仏閣式、志山B式		瀬野沢村教委、葛西：1979
53	九艘泊岩底	下北部鶴野沢村鶴野沢字岩底 城	一枚横式(鳥海山式) 後北式C式		江坂他：1965
54	縄半	下北部鶴野沢村小沢字縄半	宿野部式、一枚横式		橋：1977
55	桂沢(2)	下北部鶴野沢村鶴野沢字桂沢			橋：1972、1977
56	具崎	下北部臨野沢村鶴野沢九艘泊 259	二枚横式、冰生後期、 後北B式~後北C1、 C2		瀬野沢村教委、福田：1984
57	郷居	十和田市郷居	田舎船式	(県遺跡地名表にな る)	八戸市教委：1960、岩本： 1978(1)
58	切田	十和田市切田沢	田舎船式	(県遺跡地名表にな る)	伊東：1960、須藤：1982
59	三川日	三沢市	後北C式		黒理文 1集：1973
60	天狗森(2)	二沢市二沢字後久保	(田舎船~念仏閣式) (長尾正義氏採集資 料実観)		
61	側古芝町	二戸郡名用町側古芝町	大洞A'式、砂沢式		江坂：1970、須藤：1982
62	野月	二戸郡名用町上名久井字野月	弥生・縄編文	出土品名用町教委	県教委地名表：1978
63	畠畠	二戸郡新郷村西越	大洞A'式		奄美國文化研究会：1979
64	荒谷	三戸郡郷郷村高守字下荒谷	(弥生前期 相当)	被籠土器ほか	県立郷郷土館展示品 市川：1984、岩本：1983

No	遺跡名	所在地	時期	備考	文献
65	島守	三戸郡南郷村島守字下荒谷		(故 音喜多富寿氏 藏)	鈴木: 1979集成Ⅰ
66	田ノ上	三戸郡南郷村島守字田ノ上	後北式		県理文 65集: 1981
67	日時	三戸郡三戸町日時	(後北式)		
68	雷平	三戸郡三戸町日時	(後北式)		鈴木: 1979 集成Ⅱ
69	市堀	三戸郡三戸町市堀	二枚横式	白付跡	須藤: 1982
70	鍛冶塙	八戸市是用			(八戸市教委: 1960)
71	新井田	八戸市新井田	念仏間式	(故 音喜多氏藏)	鈴木: 1979集成Ⅱ
72	長七谷地貝塚	八戸市市川長七谷地	二枚横式	(台付跡Ⅱ a類)	県理文57集: 1980、春日(報文 は田舎船式)
73	見立山(1)	八戸市河原木字見立山	(田舎船式)		県理文57集: 1980、春日(報文 は田舎船式)
74	是川塙田	八戸市是川字塙田	砂尻式		八戸市教委: 1981
75	是川中居	八戸市是川字中居	大洞A式・砂尻式		保坂: 1972(八戸市教委)
76	長七谷地2号	八戸市市川	一枚横式	(遺構外)	八戸市教委 8集: 1982
77	寺地	八戸市寺地	後北C式		鈴木: 1979 II
78	鶴鹿	八戸市田面木字鶴鹿		土器片、アメリカ式 石器	県理文76集: 福田1983
79	長者森	八戸市田面木字長者森	(島海山式)		県理文74集: 岡田1983
80	鶴平(2)	八戸市是川字鶴平	(特定できない)	アメリカ式石器出土	県理文73集: 1983
81	和野前山	八戸市市川町和野前山		(県教委昭和56年発 掘)	県理文82集: 1984
82	沢山(1)	青森市勝込字沢山	大洞A式・砂尻式		島内: 1969
83	矢作	青森市八木田矢作	天王山式	青森高校探査資料	須藤: 1982
84	小船	青森市大船字小船		青森市免耕測量	未刊
85	西高校	青森市新城平岡266-20		出土品等土館	県理文: 1978県遺跡地名表
86	留沢	青森市勝込字留沢	天王山式併行	土壙墓 1基	島西: 1979
87	一本松苗圃A	東津軽郡平岡町松野木 一本松	後北式		福地: 1977、平内町史
88	浜名	東津軽郡今別町浜名	大洞A式		県理文13集: 1974
89	山崎	東津軽郡今別町山崎字山崎	二枚横式		県理文68集: 1982
90	宇鉄(2)	東津軽郡二戸村宇鉄	一枚横・田舎船式	土壙墓	郷土館: 1977、1979調査研究 年報3、宇鉄II遺跡発掘調査 報告書
91	杉の沢	南津軽郡浪岡町杏内	天王山式、後北式		県理文45集: 1979
92	御里平(1)	南津軽郡高岡町御里平	田舎船式		県理文44集: 1979
93	松元	南津軽郡浪岡町本郷松元	後北式		県理文46集: 1979
94	高船(1)	黒石市高船字高原	念仏間式?		県理文40集: 1978
95	田舎船	南津軽郡山合村東山125	田舎船式		伊東: 1960, 68
96	垂柳	南津軽郡田舎船村垂柳字垂柳	田舎船式		伊東: 1960, 68 葛西: 1982縣 58年概報、55年度跡記
97	細中	南津軽郡田吉船村細中	田舎船式		県教委(地名表): 1978
98	高橋(1)	南津軽郡山合船村高橋	田舎船式	成化考	須藤: 1982 鈴木: 1978(1)
99	漬合Ⅱ	南津軽郡平賀町竹子漬合	田舎船式		
100	井沢	南津軽郡平賀町病竹字井沢	井沢式・田舎船式		葛西: 1976 鈴木、須藤
101	合戻沢	南津軽郡平賀町広船字合戻沢	井沢式・田舎船式		県教委(地名表): 1978
102	木戸口	南津軽郡平賀町尾崎字木戸口	一枚横式		県教委(地名表): 1978 鈴木、 須藤
103	鳥海山	南津軽郡平賀町字北佛田	天王山式(鳥海山式)	後北式	県理文32集: 1977(鈴木、須 藤)
104	豆の前	南津軽郡平賀町本町字北佛田	田舎船式		県教委(地名表): 1978

No	遺跡名	所 在 地	時 期	備 考	文 献
105	大光寺城跡(1) (2)	南津軽郡平賀町大光寺	田舎船式		県教委(地名表)：1978(鈴木、須藤)
106	五日市館	南津軽郡平賀町大光寺五日市	田舎船式		県教委(地名表)：1978(鈴木、須藤)
107	杉館(1)～(3)	南津軽郡平賀町大光寺宇杉館	田舎船式		県教委(地名表)：1978
108	大木平	南津軽郡平賀町大木平	田舎船式		県教委(地名表)：1978(鈴木、須藤)
109	胸泊	南津軽郡平賀町新屋	(井沢式以降田舎船式の間か)	58.8.17東奥日報朝刊	葛西、高橋：1984「胸泊遺跡」
110	原	南津軽郡尾上町大賀原	田舎船式		県教委(地名表)：1978(須藤)
111	坊姫敷	南津軽郡大鷲町若木野尻	田舎船式	(弘人・岸研室)	県教委(地名表)：1978(須藤、鈴木)
112	古館	南津軽郡碇ヶ岡村古館字蛇平	天王山式		縣理文54集：1980(須藤、鈴木)
113	大曲(1)	南津軽郡碇ヶ岡村古館字人面	天王山式		縣理文55集：1980(須藤、鈴木)
114	永野	南津軽郡碇ヶ岡駒ヶ岡字永野			縣理文56集：1980(須藤、鈴木)
115	砂沢	弘前市二和砂沢	砂沢式		芦沢：1968, 1960
116	神原	弘前市友之神原	(五所式)		福井：1971
117	清水森西	弘前市十面沢字清水森	(井沢式)		丁藤国雄：1978
118	牧野	弘前市柳ノ木字牧野76	大湖A～砂沢式		岡田はか：1981弘考古1
119	清水	弘前市清水(水源地)			
120	湯ノ沢	中津軽郡忍木町百沢	砂沢式		村越：1968
121	薬師(Ⅰ)	中津軽郡岩木町新岡	大湖A'式、砂沢式		田村：1968
122	姥ヶ沢	中津軽郡岩木町新岡	田舎船式		伊東：1960
123	五所	中津軽郡相馬村五所	五所式		村越：1965
124	大曲(Ⅱ)	内津軽郡鶴ケ沢町達石	砂沢式		田村：1968
125	舟多野(Ⅱ)	西津軽郡油町広口字家の上	砂沢式		三宅：1975か76?
126	兔ヶ岡	西津軽郡木立町兔ヶ岡	大湖A'式・砂沢式・田舎船式		縣理文14集：1974
127	葉の神(Ⅱ)	北津軽郡金木町金木字戸野			縣理文30集：1976
128	神明町	北津軽郡金木町金木字戸野	二枚横式、寧鉄式	參議：共	縣理文58集：1980

を理解できる。B系統の系譜は、恵山文化と共通した文化要素をもち、型式変遷もよく対応している」とことを指摘している。弥生文化の伝播と恵山文化の成立及びその型式的変遷、東北地方北部との関連性、両地方文化の対比、分布領域などについては、須藤氏(須藤：1982、1983)のほかに、千代、中村、菊池、吉崎氏ほかの論考(文献参照)が知られている。その中で須藤氏も指摘されているように、「恵山文化と東北北部のB系統文化は、弥生文化からの影響と推定される土器の装飾、施文手法のなかで、弥生III・IV期、恵山III・IV期の土器の主要文様帶にしばしば用いられる「鋸齒状文」あるいは波状文は、東北地方北部、あるいは渡島半島において成立したと推定されてる。」そして、「この時期の土器に限り、弥生文化の影響を受けたものの、むしろこれらの地方の独自性を保ちながら、発展した。」としている。また、「恵山IV期に盛行する「帶縞文」を充填する波状文あるいは「レンズ状文」などの文様構成は、東北地方北部のB系統の施文手法を基盤として恵山IV期にこの種の文様が成立したと考えられる。」と述べられている。これは、大石平遺跡出土の第1群弥生式土器の特徴が、両文化の交流を具

第100表 東北地方北部弥生式土器型式変遷表

時代	時期	青森県	東北地方	東北地方中部 (東部)			東北地方 (内部)	北海道・渡島・千島 (その他の)	備考
				東部	六ヶ所村	西部			
縄 時 代	牧野期	山王・喜来 大湖A'・ 阿武隈式	山王・喜来 牧野	(福浦島下) 砂沢式(前 坂下3)		牧野	(+)	(大湖A、A')	米原藤： 1984「東 北石包
文 開 期	移沢	山王・喜来 山王・喜来				砂沢式			有珠善光寺3刷式 丁・東北 輔佐安研 究会委表 資料、東 北地方に おける界 生土器の 考古学通 鑑図)
2 Ia	二枚桶・瓶 野 +	喜来・喜 木焼 (谷船式)	山王・喜来 大湖	「枚筒式 (喜来) (福浦・木平、 神明町) + 喜来平(2)	大石平第2 喜来	五所式 (喜来)	(藍本)		1 期
2 Ib	+ 山王	喜来・喜 木焼 (谷船式)	喜来・喜 木焼 (谷船式)	(福浦・木平、 神明町) + 喜来平(2)	大石平第2 喜来	五所式 (喜来)	(藍本)	喜山A式 II 内粘便B2	喜山A式 II 内粘便B2 期 アヨロ-5 15.19.27.307号土壤 同)
3 II	井沢・宇敷 日	喜来・喜 木焼 (谷船式)	喜来・喜 木焼 (谷船式)	宇敷日式 (田舎館1 群)	(井沢式) (田舎館1 群)			喜山A式 III 内粘便B2 期 アヨロ-5 15.19.27.307号土壤 同)	喜山A式 III 内粘便B2 期 アヨロ-5 15.19.27.307号土壤 同)
4 IIa	田舎館2・ 日	圓形圓式 円田	圓形圓式 円田	田舎館2-3 群	田舎館2-3 群(喜来) +	田舎館2-3 群(喜来) +	(喜来)	喜山B式 IV 内粘便B2 期 元江別、江別太、アヨロ 3類	喜山B式 IV 内粘便B2 期 元江別、江別太、アヨロ 3類
4 IIb	田舎館2・ 日	圓形圓式 円田	圓形圓式 円田	田舎館2-3 群	田舎館2-3 群(喜来) +	田舎館2-3 群(喜来) +	(喜来)	喜山B式 IV 内粘便B2 期 元江別、江別太、アヨロ 3類	喜山B式 IV 内粘便B2 期 元江別、江別太、アヨロ 3類
5 B	(念仏周)	十三塙	十三塙	十三塙 (常盤式、上 野式)	(十三塙・外 常盤式)	大石平第1 群 上尾駒(2)	+		
6 V	天王山	天王山	(天王山式)	(天王山式 =喜来?)	千歳田家ノ 前(表鉢・先 茶碗)	(天王山 大南)	+		天王山 B式 C式

体的に示していると理解してもよかろう。

第1群土器は、さらに細分類できるかどうか、もう一度検討することが必要と考えている。ここでは型式的分類よりも出土した事実関係に重点をおかなければならぬ事情もあるので、それについては、今後の課題としたい。

第2群に分類した土器は、これまでに二枚桶、瀬野遺跡の出土例が報告されている(伊東、須藤:1970、1982)。これらの土器に関する型式的内容、それに伴う文化的内容などについては相当解明され、その内容も具体的に示されてあるが、第1群土器については、これまで県内では2、3の出土遺跡が知られていただけで、その型式的内容を把握できる資料が乏しかったが、大石平遺跡から出土した弥生時代第1群土器によって、この時期の型式的内容を検討できる資料が誕生したことになる。今後、本書では多くの分類できなかった器形、文様構成、型式的内容などをはじめとする多くの問題点について、あきらかにされることを期待したい。

(北林)

#### イ、土器以外の出土遺物

遺構の覆土から、石鐵7点(第13号a住居跡4、第14号竪穴遺構1、第4、8号土壤各1)

円盤状有孔土製品1点、その他、粘土紐状土製品10点(第13号a住居跡6、第14、15号堅穴遺構各2)が出土した。石鏃については弥生時代に属するものか縄文時代のものか判然とした形狀は見出せない。円盤状有孔土製品の胎土は弥生時代の土器のそれと類似している。穿孔は製作時に両面から設けたもので土製紡錘車の紡輪の可能性もある。粘土紐状製品は、用途、機能は不明であるが土鏃にも利用できる形狀なので、さらに検討を加えたい。なお、弥生時代あるいは縄文時代に特有の石器類、管玉などは出土しなかつた。

(北林)

## 第V章 自然科学的調査

### 第1節 大石平遺跡(1)出土の炭化材

嶋倉巳三郎

青森県上北郡六ヶ所村にある大石平遺跡(1)から出土した炭化材の樹種を調査した。試料は数mmから1~2cm大の木炭片で、これらの破断面を反射顕微鏡で観察した。その結果は次のようになつた。

第101表 炭化材樹種同定表

No	出土地点	層位	時代	樹種	注
1	第2号住居跡 C-1	覆土	縄文時代後期	ブナ	
2	第2号住居跡 C-2	覆土	縄文時代後期	モミ類?	
3	第2号住居跡 C-3	覆土	縄文時代後期	ク	リ
4	第2号住居跡 C-4	覆土	縄文時代後期	ク	リ
5	第2号住居跡 C-5	覆土	縄文時代後期	アスナロ?	
6	第2号住居跡 C-6	覆土	縄文時代後期	ク	リ
7	第2号住居跡 C-7	覆土	縄文時代後期	ク	リ
8	第2号住居跡 C-8	覆土	縄文時代後期	ク	リ
9	第2号住居跡 C-9	覆土	縄文時代後期	アスナロ?	
10	第2号住居跡 C-10	覆土	縄文時代後期	(樹皮)	
11	第9号住居跡 C-1	覆土	縄文時代後期	ク	リ
12	第9号住居跡 C-2	覆土	縄文時代後期	ク	リ?
13	第9号住居跡 C-3	覆土	縄文時代後期	(不明)	粉化
14	第9号住居跡 C-4	覆土	縄文時代後期	ケヤキ?	もろい
15	第9号住居跡 C-8	覆土	縄文時代後期	ク	リ
16	第9号住居跡 C-9	覆土	縄文時代後期	ク	リ
17	第9号住居跡 C-10	覆土	縄文時代後期	ク	リ
18	第9号住居跡 C-11	覆土	縄文時代後期	ヤチダモ	
19	第9号住居跡 C-12	覆土	縄文時代後期	ヤチダモ	
20	第7号住居跡 C-1	6層	縄文時代後期	ク	リ
21	第7号住居跡 C-3	床直	縄文時代後期	ク	リ
22	第14号堅穴道構	焼土内	弥生時代	ブナ	
23	第59号土壤 C-1	3層		クルミ類	
24	第48号土壤 C-1	15層		ク	リ?
25	第2号土壤 C-1	覆土		—	般皮
26	第2号土壤 C-3	覆土		—	般皮
27	第20号住居跡大ピット	確認面	弥生時代	イチイ	
28	第1号住居跡	床直	縄文時代後期	ク	(1区1分住居)

以上をまとめると、大部分はクリ炭で、ほかにブナ炭、ケヤキ炭?、ヤチダモ炭があり、針葉樹にはイチイのほかモミ類とアスナロらしいものがある。種子殻はクルミのほかは未定にした。

## 第2節 大石平遺跡(1)出土赤色顔料並びに下地塗物質及び脂質成分の分析

小山陽造

### 〔諸言及び分析方法〕

蛍光X線分析方法による非破壊分析及び赤外吸収分析法による微量分析の手法を用いて大石平遺跡(1)第59号土壤ビット内上部から出土した赤色顔料を施した木質小片、樹皮状木質物質小片、及び同時に採取した灰黒色の皮革状物質の小片、並びに第59号土壤ビット内覆土についてクロロホルム可溶脂質成分の分析を行った。また、第11号土壤覆土から採取した赤色顔料が付着し固結した土塊小片、さらにCW304土器内付着灰黒色皮革状物質の小片についても上と同様にして赤色顔料及び下地塗物質の同定を試みた。

赤色顔料は、あらかじめ塩酸溶解及び黄血塩溶液による呈色反応で3価鉄イオンの検出等の科学的検査の後、さらに主要成分元素を確かめるため理学電気K G-4型X線分析装置を用いた蛍光X線分析による非破壊分析法で原子番号19のカリウム(K)以上の重元素と、原子番号13のアルミニウム(Al)以上の軽元素の分析を行い、今回調査した赤色顔料は、すべて酸化第2鉄からなる弁柄(ベンガラ)であることを確かめ、またその微細構造を観察しながら、試料の一部から赤色顔料の下地を塗り固めた膜状の膠質物質10mg程を剥出し、日本分光IR810型赤外分光光度計を用い、臭化カリウム錠剤法による赤外吸収分析を行い、さらに岩手県二戸郡浄法寺産くろめ漆膜と比較して、その物質同定を行った。また同じく赤外吸収分析により第8号土壤より採取した樹皮状木質物質に付着した脂質成分及び覆土に混入する脂質成分の比較分析を行った。

さて物質はその内部の化学構造の違いによって波長 $2.5\mu\text{m}$ から $25\mu\text{m}$ の赤外線領域で各々異った波長の赤外線を吸収するので、その赤外線の吸収波長(特性吸収帶)と強度の組み合いで、各々特徴のある赤外吸収スペクトルを得ることができる。特に赤外吸収分析は物質内部に複雑な科学構造を有する有機化合物の固定に極めて有力な手段であるが、天然物では、多くの成分を持った混合物の場合が多く、直接試料の赤外吸収スペクトルの帰属や強度から成分物質の同定を行うことは容易ではない。しかし赤外吸収分析法は、数ミリグラム程の極めて微量の試料を用い赤外領域で比較的吸収の少ない臭化カリウムに分散圧縮するだけのいわゆる臭化カリウム錠剤法で複雑な成分と科学構造を有する天然物の大体の成分分析を手軽に行うことが出来る有力な分析方法である。そこで今回は彩色の下地塗りに用いた膠質物質が、漆膜ではないかと思われる場合は、浄法寺産くろめ漆膜、また樹皮状物質のクロロホルム可溶成分が脂質類と思われる場合は、その試料を採取した土壤の覆土中の脂質成分と思われるものとか、いずれにしても同定すべき物質と関連のある物質の赤外吸収スペクトルの比較を試みた。

### 〔試料の観察及び分析結果〕

(1) 第8号土壤小ピット内上部 (I) 赤彩色木質器小片 (II) 赤彩色樹皮状木質物質小片 (III) 灰黒色皮革状物質小片並びに (IV) 第59号土壤小ピット内覆土の分析

#### (I) 赤彩色木質器小片

木製品の表面にあざやかな赤色顔料を施したもので彩色塗装面は極めて緻密であるが、彩色を施したときの固着物質が溶解脱出しそうなためか、また元来軽く彩色したものか、極めて脆く、水で浸した脱脂綿で軽くふきとるとくずれ落ちる程であるが、このとき脱脂綿等にしみた赤色顔料は、あざやかな色彩を帯びた極めて微細な赤色顔料である。この赤色顔料層と下地の木地面の間にやや厚めの膠質物質の下地塗りの層があり、さらに下地の木質の部分は木材の形状を止めているが、すでに腐朽しつくし、しばらく水に浸してから、かきとるようにすると容易に薄片状にくずれてしまう程脆くなっている。しかしこの赤色顔料層の下地の膠質物質の層は、水に濡れると透明感のある褐色の物質で、しかもクロロホルム等の有機溶剤や濃塩酸等の酸にもおかされずに科学的にいたって強い物質である。

この赤色顔料は予備的に行った化学的検査と、定法に従って実施した蛍光X線分析の結果、その重元素蛍光X線スペクトル（図1-A）と軽元素蛍光X線スペクトル（図1-B）にみると、酸化第2鉄からなる弁柄であることを確認した。また下地塗りの膠質の膜状物質は、赤外吸収分析の結果、その赤外吸収スペクトル（図2-B）は浄法寺産くろめ漆膜の赤外吸収スペクトル（図2-A）と比較し、よく似た物質であると考えることができる。

#### (II) 赤彩色樹皮状木質物質小片

木質の表面に膠質物質で下地塗りを施し、その下に赤色顔料の彩色を施したもので、彩色面には砂粒等を含んだ一見してタール状の物質が固着し、また下地の木質部には下地塗りの膠質物質か、また油膜か、タールがしみ込んでいるようで全体が黒味を帯び柔らかく一見して樹皮のような感じがする小片である。まず科学的検査と蛍光X線分析の結果、赤色顔料が酸化第2鉄からなる弁柄であることを確認し、さらにこの赤色顔料と腐朽して脆くなった木質部をできるだけ取り除いた下地塗りの膠質膜状物質を取り出し、赤外吸収分析を行った結果、その赤外吸収スペクトル（図3-B）はくろめ漆膜（図3-A）に近い成分の他に、さらに余分な成分を含むことを示唆するので、この試料小片をよく乾燥し、クロロホルム20ml程に一夜浸漬し、黄色の可溶成分を抽出し、これを臭化カリウム錠剤の上に滴下乾燥し、赤外吸収分析を行った結果が図3-Dに示す赤外吸収スペクトルであり、同時に実験を行った土壤覆土中に含まれるクロロホルム～メタール可溶脂質成分の赤外吸収スペクトル（図3-D）、或いはすでに調べられている大豆油の赤外吸収スペクトル（図4）や動物性脂肪の成分であるコレステロールの高級脂肪酸塩の赤外吸収スペクトル（図5-A～E）に近く、この樹皮状木質物質に含まれる余分な成分が油脂や脂肪等の脂質成分であると考えることができる。

### (III) 灰黒色皮革状物質小片

一見して動物の皮革等が萎縮固結したような灰黒色の物質で、赤色顔料による彩色や付着の跡は認められず、またクロロホルム等に浸漬したが着色物質の溶出等の変化が認められなかつた。さらにこの溶媒を乾燥し、水で洗浄し砂粒等を除くと、表面は比較的なめらかな感じがする膠質物質の膜で被われ、裏面はざらついた感じであるが、しばらく水に浸透してから、かき落すようにすると表面の膜状物質を残して他の部分は微細な砂粒となりくずれ落ちてしまう程腐朽し脆くなっている。そしてこの膠質物質の赤外吸収スペクトル(図2—C)は、この物質が、木質器の彩色下地塗りの膠質膜と同じく、くろめ漆膜に近い物質であることを示すものである。

### (IV) 第59号土壤小ビット内覆土

黄色の微細な砂質で、混入する赤色顔料や、その付着物の破片を検出することが出来ず、また蛍光X線分析の結果、鉄(Fe)の他にアルミニウム(Al)、チタン(Ti)、カリウム(K)、珪素(Si)等の多い土質である。この試料を十分乾燥してから約3gをクロロホルム～メタノール(2:1)混合溶媒100mlで1時間ソックスレー抽出を行い脂質成分と思われるクロロホルム～メタノール可溶成分の黄色抽出液を得たので、これをまず乾燥し、さらにクロロホルムに溶解し臭化カリウム錠剤の上に滴下乾燥して赤外吸収分析を行い、その赤外吸収スペクトル(図3—D)が、樹皮状木質小片のクロロホルム抽出物の赤外吸収スペクトル(図3—C)や、すでに調べられている大豆油や動物性脂肪に含まれるコレステロールの高級脂肪酸塩の赤外吸収スペクトルと似た部分が多く、この覆土は複雑な組成をもつ脂質成分を含むものと考えられる。

#### (2) 第11号土壤覆土中の赤色顔料付着土塊小片の分析

固結した平滑な面を持った土塊の表面を覆うようにして灰黒色の膠質物質の膜が極めて剥離し易い状態で付着している。そしてこの剥離した膠質膜の裏面つまり膠質膜と土塊の表面との間に緻密な赤色顔料の層があり膠質膜と一緒に剥離してくるが、その様子はあたかも赤色顔料で彩色された木質器等が埋蔵中に木質の部分が腐朽し彩色層と下地塗装が接触していた土の面に一緒に移ったような感じである。そしてこの赤色顔料彩色層は脆く、水に浸した脱脂綿等で触れるだけでくずれ落ちる程である。しかし膠質物質の膜は水に浸しておくと、しなやかさと、透明感のある褐色を帯びた膜状の物質で、クロロホルムや塩酸等にも容易におかされることのない科学的には強い物質である。そして赤色顔料は、科学的検査と蛍光X線分析の結果、やはり酸化第2鉄からなる弁柄であり、また膠質物質はその赤外吸収スペクトル(図2—D)からやはり淨法寺産くろめ漆膜に近い物質であると考えることができる。

#### (3) CW-304グリッド出土土器内付着灰黒色皮革状物質小片の分析

灰黒色皮革状物質の小片で、第8号土壤小ビット内上部より採取したものと同様の外観及び

性状を示し、また外観的には赤色顔料の付着や彩色の跡は認められない。またこの膠質物質の膜の赤外吸収スペクトル（図2—E）は第59号土壤小ビット内上部の灰黒色皮革状物質の膠質膜の赤外吸収スペクトル（図2—C）とよく符号し、やはりこの膠質膜が、くろめ漆膜に近い物質であると考えることができる。さらにこの膠質膜の蛍光X線分析の結果、図6—B、Dに示すように僅かに鉄(Fe)を含むものの、カルシウム(Ca)、カリウム(K)の含有量が多く、やはり浄法寺産くろめ漆膜そのものも蛍光X線分析の結果、図6—A～C、に示すように、カルシウム(Ca)、カリウム(K)の多いことがわかった。つまりこの膠質の膜は、現在の漆に極めて近いカルシウム分やカリウム分の多い樹液状のものであると考えることができる。

#### （考察）

まず今回の調査で検出した赤色顔料はすべて酸化第2鉄からなる良質の弁柄である。そして試料小片から剥出した漆膜と思われる膠質膜の赤外吸収スペクトルと比較に用いた現在の浄法寺産くろめ漆膜の赤外吸収スペクトルは大体一致するが、尚 $10\text{ }\mu\text{m}$ 附近に若干の相違が認められる。本来赤外吸収スペクトルは出来るだけ純粋な单一成分について、その吸収帯の帰属や強度を検討すべきものであり、日本漆は、ウルシオールを主成分として70%程含み、8%程のゴム質成分、2%程の含窒素物及び僅少量のマンニット等の糖類を含み、その他約20%程の水分からなる複合物質で漆膜はさらにこれらのものが化学的に酸化重合を行い硬化したもので、あくまで漆膜の赤外吸収スペクトルによる同定は漆の樹種、加工方法、経年変化を考慮して比較的検討を行う必要がある。また今回検討した膜状の膠質物質は、いずれも濃塩酸や濃硫酸、またクロロホルム等の酸や有機溶剤に比較的強い有機物で加熱分解したときの臭いも現在の漆膜に極めて似ている等の知見に基づいて漆の一種であると判断した。

当時すでに木器や土器の彩色に極めて良質の弁柄を用い、膠質物質としてすでに漆、或いは漆に似た組成と性質をもった樹液を用いたものと思われる。そして彩色層膠質物質はすでに溶脱して非常に危くなっているので、少量の濃塩酸に浸し加熱すると彩色層の弁柄は容易に溶解し去り、弁柄を混入しない滑らかな下地塗りの膠質膜が現れ、これを剥離するとさらに荒い下地塗の膠質物質の層が現れ木質器か土器の表面に深く浸透している。以上のことから木質器や土器等の彩色は、まず漆のような膠質物で荒く下地塗りを施し、しばらくしてから塗り重ね下地層を整え幾分乾燥したところで丁寧に彩色を施し仕上げを行うか、また時にはこの仕上げの工程をくり返し行うなどの技法を用いたものと思う。また当時すでに、このように漆が日常的に用いられていたものとすれば、漆液が土や布等にしみ硬化し、一見固化した灰黒色皮革状物質として残存することもあり得るものと思う。

また最近遺跡の土壤や土器に残存する油脂や脂肪、或いはその成分である脂肪酸等が検出され、衣食住等当時の生活を考える手懸を与えるものとして重要視されている。今回第59号土壤

覆土や第10号土壤土壌（図7）からクロロホルム～メタノール、並びに樹皮状木質物からクロロホルムによって抽出された物質は、いずれも大豆油や動物性脂肪の成分である脂質類と思われるが、これらの脂質成分が土壤の腐植等に含まれる天然の環境物質か、また当時の生活を反映する生活物質か等を考えるため、今後ガスクロマトグラフィー法等さらに有効な分析方法を活用してその成分分析を行う必要がある。

今回の分析調査を行うにあたり、浄法寺産漆膜試料の提供並びに塗加工法に関する御教示を頂いた岩手県二戸郡浄法寺町（株）うるしの丸大製造部長・廣瀬準悦氏、また蛍光X線分析及び赤外吸収分析を担当し協力した八戸工業高等専門学校技官・菊地良栄氏に感謝いたします。

#### 参考文献

- 1、伊藤清三：1979「日本の漆」東京文庫
- 2、CHARLES. J. POUCHERT:1975「THE ALDRICH LIBRARY OF INFRARED SPECTRA」ALDRICH CHEMICAL COMPANY, INC.
- 3、高木徹：1983「油脂、脂質の機器分析」幸書房
- 4、中野益男：1984「残存脂肪分析の現状」歴史公論 6月号、雄山閣

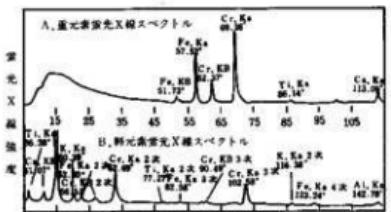


図1 第8号上塗赤色木質物の彩色顔料の蛍光X線スペクトル

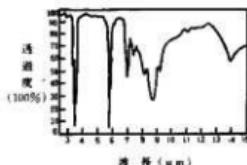


図4 大豆油の赤外吸収スペクトル

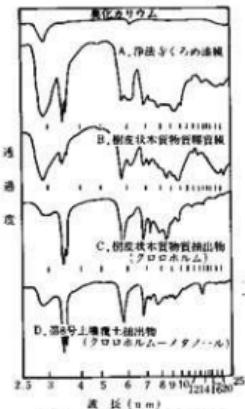


図3 漆膜及び第9号土塗樹皮状物質の赤外吸収スペクトル

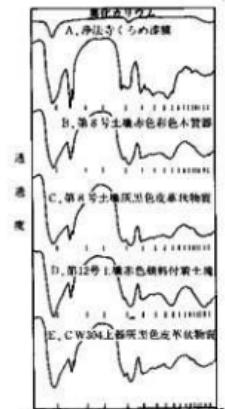


図2 漆膜及び地下塗装質膜の赤外吸収スペクトル

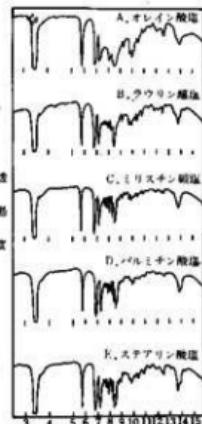


図5 コレスチロール高級脂肪酸塩の赤外吸収スペクトル

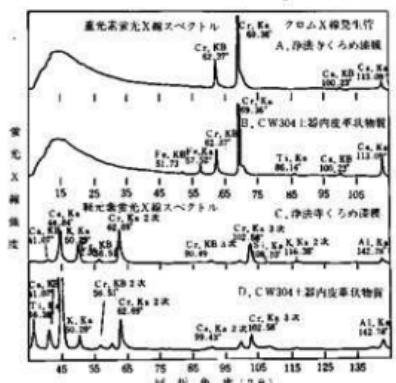


図6 漆膜及びCW304上塗内底灰色皮革状物質質膜の蛍光X線スペクトル

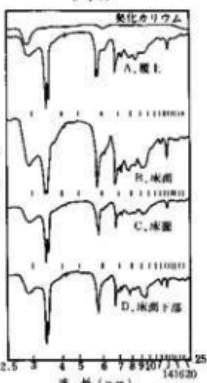


図7 大谷寺遺跡(1)第10号上塗有脂質の赤外吸収スペクトル

第331図 大石平遺跡(1)赤色顔料等分析図

### 第3節 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

木 越 邦 彦

1984年2月2日受領致しました試料についての<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限する年代値（B. P.）のみを表示しております。また試料の、 $\beta$ 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記しております。

#### 記

Code No.	試 料	B. P. 年代(1950年よりの年数)
Gak-11639.	Wood charcoal from Ooishitai site.	3310±120
	Sample No1. C-1. 6H. (旧第6号縄文住居跡)	1360 B. C.
Gak-11640.	Charcoal from Ooishitai site.	3860±320
	Sample No2. C-2. 20H. (弥生第20号住居跡)	1910 B. C.
Gak-11641.	Charcoal from Ooishitai site.	3120±190
	Sample No3. A第1A号縄文住居跡炉脇直上	1170 B. C.

### 第4節 大石平遺跡(1)出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

青森県内各地に堆積する火山灰を蛍光X線分析した結果、白頭山火山灰、十和田a火山灰、十和田b火山灰、二ノ倉火山灰などに識別できることが判明した。本報告では、大石平遺跡(1)出土火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

分析試料はNo 1 は2号土壤出土火山灰、No 2 は5号土壤出土火山灰、No 3 は弥生土壤(?)出土と推定される火山灰、No 4 は48号土壤の火山灰である。分析データは標準試料 J G-1 による規格化値で表示されている。規格化値は一種の相対濃度であることが基礎研究の結果、明らかにされている。(土壤Noは、新Noに変更した)。

図AにはRb-Sr分布図を示す。この分布図を使うのは、青森県内に堆積する火山灰はこの分布図上で別々に分かれて分布することが分かったからである。左上に○印で示した2点は白

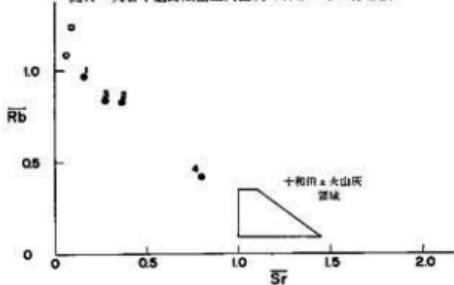
頭山火山灰である。そうすると、No 1、2、3はRb量が多く、Sr量が少ないと白頭山火山灰のもつ特性を示す。一方、No 4はNo 1、2、3とは異なり、Rb量が少なく、Sr量が多いという十和田系火山灰の特性をもつことが分かる。しかし、No 1、2、3は白頭山火山灰領域より少し右下へずれたところに分布し、また、No 4は逆に、十和田a火山灰領域より左上へずれたところに分布する。この“ずれ”は恐らく土壌などによる汚染の結果と考えられる。

図BにはK-Ca分布図を示す。この分布図でも、図Aと同じ結果が得られることが分かる。すなわち、No 1、2、3は白頭山火山灰の特性を、また、No 4は十和田a火山灰の特性をもつことが分かる。この図でも、土壌による汚染の影響が認められる。

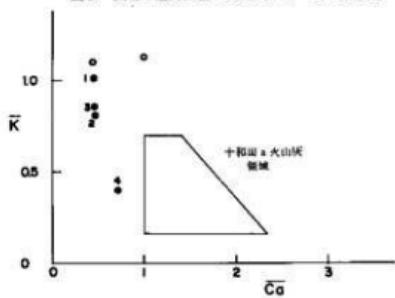
図CにはFe量を示す。No 1、2、3、はFe量でも白頭山火山灰と判定してもよい領域に分布するが、No 4はFe量が多く、十和田a火山灰領域からかなりずれて分布する。この結果はどう解釈したらよいのかよく分からない。あるいは、No 4は十和田a火山灰ではない可能性もある。

以上の結果、No 1、2、3は白頭山火山灰と推定されるが、No 4は十和田a火山灰に似ているが、十和田a火山灰と判定するには問題がある。

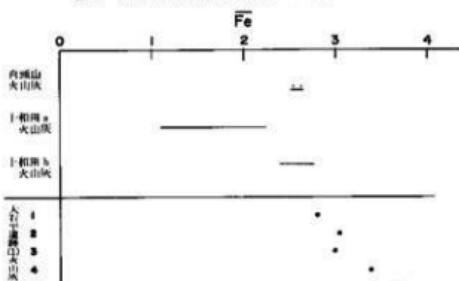
図A 大石平遺跡(1)出土火山灰のRb-Sr分布図



図B 大石平遺跡(1)出土火山灰のK-Ca分布図



図C 大石平遺跡(1)出土火山灰のFe量



第332図 大石平遺跡(1)出土火山灰螢光X線分析図

## 第5節 石器に利用された安山岩の搬入源について

佐藤 巧

本遺跡から出土した石器の岩質は、安山岩、凝灰岩、花崗閃綠岩、砂岩、泥岩、頁岩、黒曜石、軽石など多種におよぶが、これらの中で台石、敲石、凹石、石錐、石皿などの礫石器に用いているものは、安山岩が非常に多く、約75%をしめている。

石器に使われている安山岩は、肉眼的観察であるが、その岩相から大きく3種に分けられる。一つは板状節理が発達し、表面にはガス穴と思われる径1~3mmの穴が多量にみられる多孔質なもの、一つは灰褐色を呈し、1mmから大きいもので10mmにもおよぶ角閃石の斑晶が多量に含まれ、前種と同様に表面が多孔質なもの、他の一つは、灰色を呈し、肉眼で観察できる大きな斑晶はなく、表面にも前の2種に比べ、少々平滑なものである。また、石器には、川原から採集したと思われるよく円磨された軽石を使用しているもの、露頭から直接採集したと思われる棱が角ばっているものを使用しているものがある。ただ円磨されたものの中には、使用により磨耗したものもあるが、使用痕の有無により明らかに自然磨耗したものを用いているものが多くある。板状節理が発達した安山岩を用いている石器の大半は磨耗しておらず、露頭から直接搬入したものと考えられるが、一部は割れ口の周辺部が磨耗しており、川原からの採集と思われるものも含まれる。他の2種の安山岩を使用している石器は、円磨されたものを用いているものが大半で、川原から採集したものと考えられる。また、円磨された安山岩を用いているものには、搬入が容易でない、長さ約50cm、厚さ約10cmにおよぶ大きな台石も見られる。

本遺跡の周辺及び隣接地域で安山岩の分布が見られるのは、最も近いところで、遺跡北部約7kmの吹越鳥帽子を中心で分布する泊安山岩類である。泊安山岩類は、安山岩、安山岩質集塊岩、角礫凝灰岩から構成されており、下北半島頭部を中心に、南は遺跡北方約2.5kmから北は東通村朝比奈平まで南北に長く分布するものである。特に、この安山岩には板状節理が発達したもののが含まれている特徴がある。板状節理が発達した安山岩は、泊安山岩類の東部（太平洋側）に南北に長く分布するもので、県道泊一陸奥横浜間の泊から約2km西に寄った林道ぞいに露出している。露頭での本岩は、20cm平方に割れたものが大半であり、幾分風化した状態を呈している。また、分布の南端近くの出戸川、棚沢では、露頭は確認できなかつたが、川原に約20cm平方のものを中心に多くの転石が存在する。これら川原にあるものは、円磨までいかないが、割れ口の周辺部が幾分磨耗している。遺跡から最も近い距離にある老部川では、川原の軽石、露頭ともに板状節理が発達した安山岩は確認できなかつた。露頭及び出戸川、棚沢で見られる安山岩の岩相は、板状節理が発達し、表面は多孔質であり、肉眼的には遺跡から出土した石器に用いているものと同様のものである。角閃石の斑晶を有する安山岩、灰色を呈し表面が平滑な安山岩は、直接の露出は確認できなかつたが、遺跡北部の老部川、出戸川流域に転石

として中礫から巨礫、それ以上のものまで多量に存在する。これらは肉眼的観察で、遺跡から出土した石器に用いているものとほぼ同様の特徴を有するものである。また、老部川は遺跡から近距離にあり、かなり大きなものまで運搬可能と思われる。

以上のことから推定し、遺跡から出土した安山岩を用いた石器、いずれも泊安山岩類を利用しており、その搬入源は、遺跡から約10kmの範囲を求めることができる。

## 第VI章　まとめ

本遺跡からは、縄文時代早期から弥生時代までの遺物が出土した。各期をこれまでの編年型式に比定すれば、早期は、日計式押型土器群、早稲田II類、明神裏II式、住吉町下層式で、前期は、早稲田VI類、長七谷地III群、芦野I群、表館式である。中期は、円筒上層式、大木10式併行で、後期は、螢沢式、十腰内I・II式で、晩期は、大洞BC、C<sub>2</sub>である。弥生時代の土器は一応、中・後期に属するもので、北海道恵山文化の影響も強いるようである。

遺物の量が多いのは前述のとおりであるが、特筆すべきこととしては、土器の量もさることながら、土製品が多くなったことである。の中でも、円盤状土製品が多く、260余点に及んでいる。また、葺草土製品の出土もあり当时、山の幸を求めるため、祈願された所産であろう。土偶は5点出土したが、これまでには、この時期の土偶の頭部が残っている板状土偶例は少なかつたが、今回は、頭部、胴部がそれぞれ4m離れた場所からそれぞれ出土したが、いわゆる土器捨て場ではなく遺構が検出された平坦地からである。土偶の出土したこのあたりはかつて牧草地として使われていた場所で、擾乱によって、頭部、胴部が分離したものが、当時の人間が、何らかの形で使用後廻棄したものか不明である。

石器類も多く出土したが、出土層位が明確でなく、縄文時代のどの時期に伴出するかは明確でない。しかも、これらの石器の中には、弥生時代の形態によく似た磨製石斧が出土したが、ほかに弥生時代の石器と裏づけられるものはなかった。

遺物と同様遺構も多く、その中では土壙を409基検出したが、住居跡とは混在せず、限られた範囲に密集しているのは特異なことである。土壙には種々の形態がみられた。またフラスコ状の土壙の中に成人男子が一人で持ち上げられないほどの大礫が3個埋まっていたが、宗教的色彩の濃い状態と思われる。また、この遺構の検出した上層は配石遺構が検出されていることも、更にこれを濃くする要因である。

縄文時代の住居跡は16軒検出されたが、散在していて、その立地は、北側に傾く斜面苦しくは北側の湧水の近くの平坦地を占地している。しかし、住居跡のゾーンと土壙のゾーンに分かれている。軒数も少なく、小規模の集落と思えるが、この湧水をとりまく台地の北側は、未調

査で速断はさけたい。個々の住居跡をみると、炉の中で、礫を1個だけ使って、石閉戸のようにしているものが4軒あったが、他に地床戸や、長方形に石を組んだものがごく普通の形態とすれば、特殊な意図があったものと思われる。

弥生時代の住居跡は6軒検出されたが搅乱のためか壁が残っているものが少ない。住居跡は北側に湧水のある平坦地に構築された、小さな集落である。しかし、縄文時代、弥生時代とともに、北側に湧水のある平坦地を使ってることは、水資源の豊富さを物語っている。

以上は、本年度の調査について、まとめてみたが、湧水を取りまく西、北側の台地が今後調査されることによって、これまで述べてきた特徴や疑問に加筆されるものと思われる。(工藤)

## 第VII章 大石平遺跡(2)

### 第1節 調査要項

- 1、調査目的 むつ小川原開発事業に先立ち、開発予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の範囲を確認するため試掘調査を実施するものである。
- 2、調査期間 昭和58年9月26日から11月5日まで
- 3、遺跡名及び所在地  
遺跡名 大石平遺跡(2)  
所在地 上北郡六ヶ所村大字尾駒字野附
- 4、調査対象面積 15,000m<sup>2</sup> (調査面積2,864m<sup>2</sup>)
- 5、調査依頼者 むつ小川原開発株式会社
- 6、調査担当者 青森県教育委員会
- 7、調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8、調査協力機関 六ヶ所村教育委員会、上北教育事務所
- 9、青森県埋蔵文化財調査センター  
所長 工藤 泰典  
次長 古井 瞳夫 (現、公立学校共済組合浅虫保養所支配人)  
〃 須藤 昭二  
調査第一課長 新谷 武  
主任主査 一町田 工 (現、教育庁文化課埋蔵文化財班長)  
主事 岡田 康博  
調査補助員 長沼 圭一、小田川 哲彦、鹿内 尚文、鈴木 ひとみ

## 第2節 調査の方法 (第333図、写真35)

大石平遺跡2は、西から東（海岸側）へ細長く伸びる丘陵の平坦部（標高45m）に立地する。沢・湧水地を挟んで約400m南に大石平遺跡(1)が所在している（昭和58年、県埋文センター調査）。遺跡の南斜面は緩く沢・湧水地に向かって傾斜し、北側斜面は急な崖状になつており、老部川が下を流れている。

遺跡の範囲は極めて広大で、しかもこれまで調査されたことがなかつたので調査は慎重に以下のような方法で実施した。

### 1) 調査区設定

- トレンチ法とグリッド法を併用した。1グリッドは4m×4mを基本とし、それらを幾つか連結してトレンチとした。
- 遺跡は東へ伸びる細長い丘陵地なので、その平坦部を西から東へ縱断する試掘トレンチ（幅4m）を20m離して平行に2本を設置した（方向は任意である）。さらに20mおきにこれらのトレンチと直交し、遺跡を横断する試掘トレンチを6本設置した。これらのトレンチで、遺跡内の堆積土の状態を把握するようにした。
- 遺構・遺物を検出した時は、隨時トレンチを拡張して平面的な広がりを把握するようにした。

### 2) 粗掘り

- 分層発掘に心がけ、遺物の出土層や遺構の確認には十分に注意した。
- 遺物・遺構が検出されなかつたトレンチは、地山まで掘り下げ、土層の堆積状態の観察を行つた。

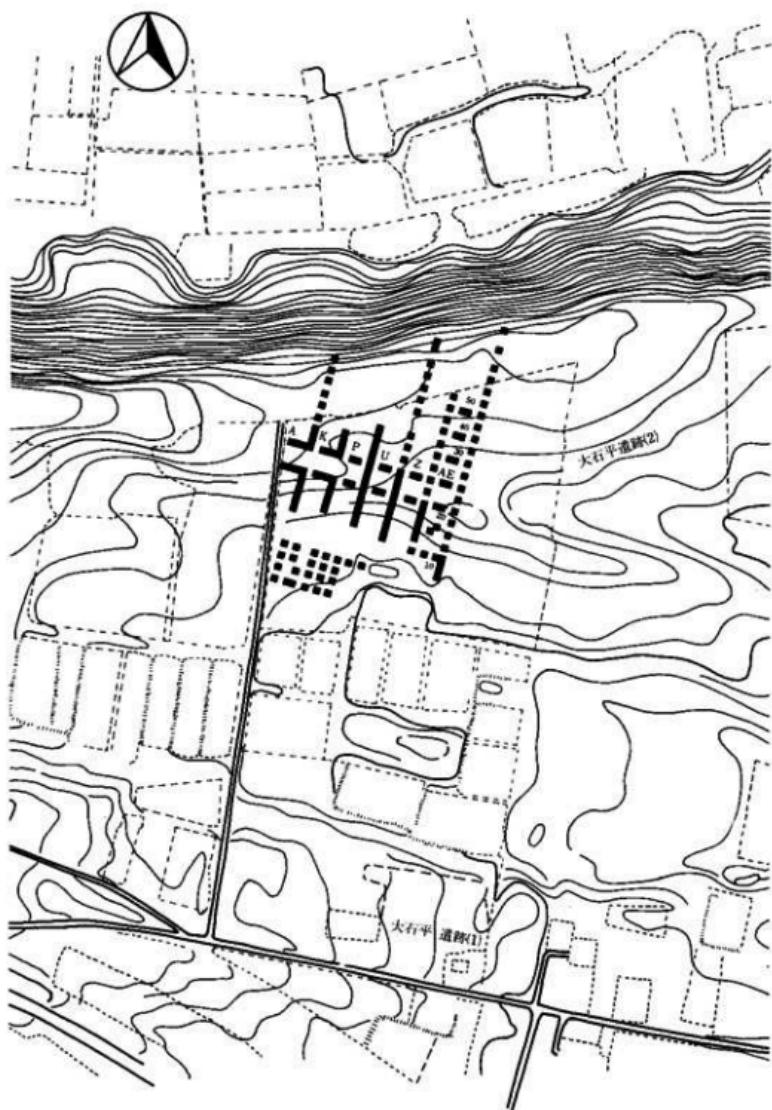
### 3) 精査

- 落ち込み、遺物が確認された時は、必要に応じてグリッドを拡張し、全体的な平面プランの確認に努めた。
- 性格不明の落ち込みは、二分法あるいはサブ・トレンチを入れ、その実態把握に努めた。

### 4) 記録

- 遺物はその出土地点・層位に・レベルを記録してグリッドごとに記録した。
- 作業の進捗状況に応じて、その都度、写真撮影を行つた。

その他の項目に関しては大石平遺跡(1)の調査の方法に準じた



第333図 大石平遺跡(2)グリッド配置図

(S = V1.2 T)

### 第3節 標準層序（第334図、写真35）

調査区域を十字に切る形で標準土層を記録した。平坦部では第Ⅰ層（表土）は厚いものの擾乱が激しく隨所にみられ、場所によっては第Ⅲ層まで達していることが判明した。また、第Ⅰ・Ⅱ層が全くない箇所もあった。斜面は南側に下るにつれて、間層が観察されるとともに湧水に出会った。以下、各層について記述する。

第1層（黒褐色土層） 7.5 Y R 3/1

表土。粒径細かく、しまりなくもろい。粘性・湿性弱い。層全体に根毛を多く含む。第Ⅱ層との境界は明瞭である。遺物が若干出土する。

第Ⅱ層（暗褐色土層） 10 Y R 2/3

粒径細かく、しまりなくもろい。粘性・湿性弱い。層上部に根毛を含む。全体に暗褐色を基調とするが、上部では黒色が強く下位では黄色が強くなり、第Ⅲ層との境界は明瞭ではない。沢に近くなるにつれて第Ⅲ層の小ブロックを斑状に含む箇所がある。遺物が若干出土する。

第Ⅲ層（褐色土層） 10 Y R 4/6

地山。粒径細かく、しまりややあり固い。粘性・湿性ややあり。遺物は出土しない。

間1層 黒褐色土層（10 Y R 4/6）

粒径細く、しまりあり固い。沢に近くなるにつれて粘性・湿性とも増す。

間2層 黒褐色土層（10 Y R 3/3）

粒径細く、しまりなくもろい。粘性・湿性とも第Ⅰ層よりやや強い。

ブロック1（暗褐色土層） 10 Y R 3/3

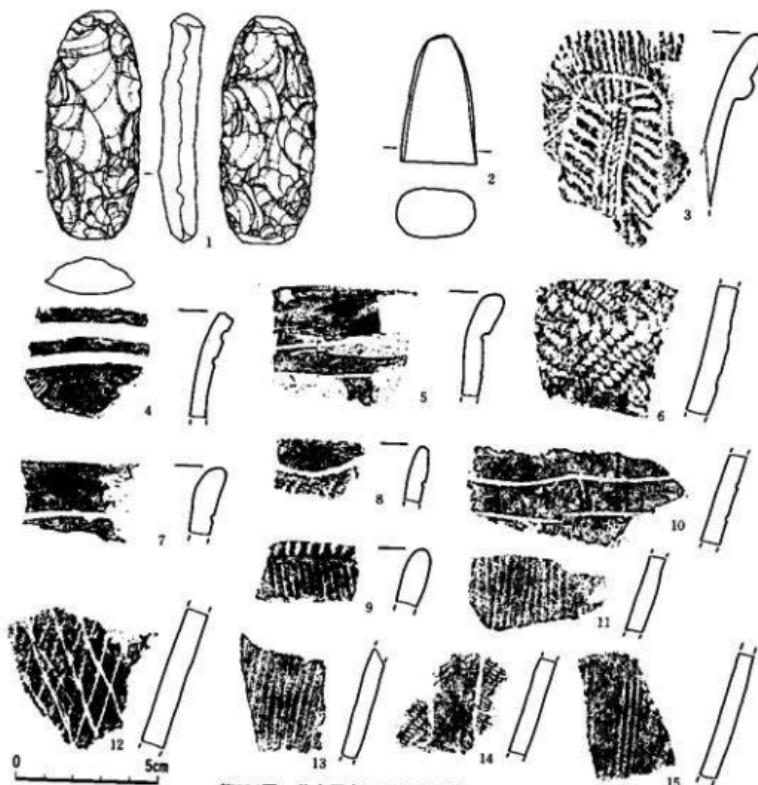
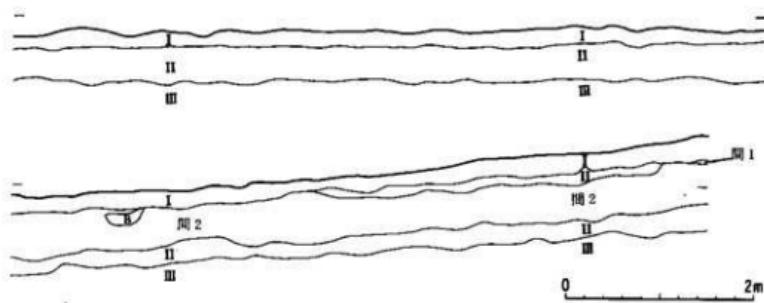
粒径細く、しまりなくもろい。他の層との境界が漸移である。

（岡田 康博）

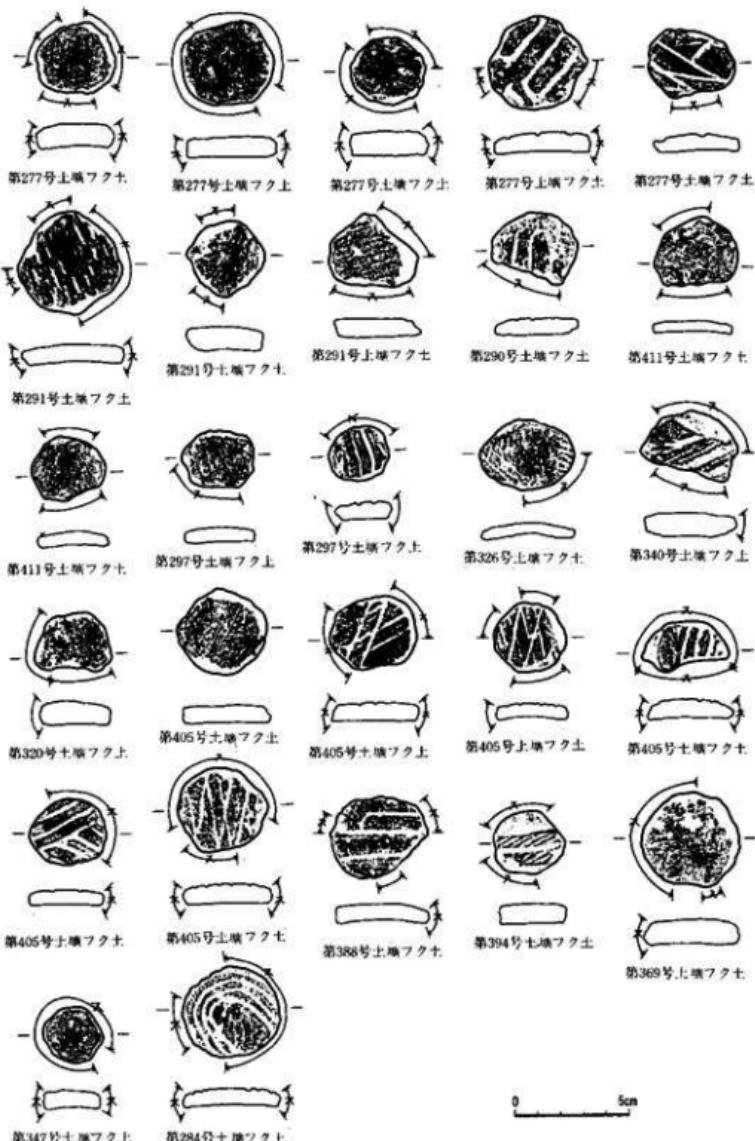
### 第4節 調査の結果

調査の結果、遺物は若干出土したが、遺構と断定できるものはなかった。遺物を出土したグリッド数は総グリッド数179（4 m×4 m）のうち、23グリッドであった。1グリッドあたりの土器の出土量は多い所で10片前後出土したが、平均して1～2片であった。同一個体と思われる破片でも接合するものは極めて少ない。石器は完形の石鏡1点と磨製石斧の基部の破片が1点出土しただけである。出土層位は第Ⅰ層が大部分で第Ⅱ層からの出土は少ない。

調査区内の土層の堆積状態を検討した結果、大石遺跡(1)の縄文時代後期の包含層（大石平遺跡跡(1)第Ⅱ層）が本調査区にはみられないこと、また、牧草地だったために、耕作用機械による



第334図 基本層序及び出土遺物



第335図 川区土壌内出土土製品拓影図

搅乱が予想以上に激しいことが解った。以下、出土遺物について簡単に記述する。

#### (1)土器

縄文時代中・後・晚期の土器が出土した。すべて破片で復原できるものはない。

##### 1)円筒上層 b 式に比定される土器 (第334図3.6)

U-46 II 層から若干出土した。波状口縁で口縁部文様帶に絡条体圧痕・原体側面圧痕、貼付隆帯をもつものである。胴部に結束の羽状縄文が施文される。

##### 2)大木10式に併行する土器 (第334図8.14)

U-46 II 層から数片出土した。沈線で区画した中に縄文が充填するものである。

##### 3)十腰内 I 式に比定される土器 (第334図5.7.10.12)

J-25 II 層、Z-19層から若干出土した。器形は深鉢である。無文地に沈線文を施文するものと網目状燃系文を施文するものがある。

##### 4)縄文時代晩期後半以降の土器 (334図4.9.11.13.15)

AD-13 I 層から数片出土した。器表に条痕文を施文するものである。(第334図-49)は弥生式土器の可能性が強い。

#### (2)石器

完形の石砲(第334図-1)がK-3 II 層から、磨製石斧の基部(第334図-2)がZ-17 II 層から出土した、石砲は背面・腹面ともに調整剥離が施され、主要剥離面を残さない。打面の反対側を刃部としている。刃部は使用のために刃潰れが著しい。磨製石斧は、表裏面よりも側縁の磨きが顕著である。

#### 引用参考文献

(岡田 康博)

- 青森県教育委員会 1973 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書  
青森県教育委員会 1973 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報  
青森県教育委員会 1974 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報  
青森県教育委員会 1974 今別町浜名遺跡、中宇田遺跡、西田遺跡、五郎兵衛山遺跡、五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書  
青森県教育委員会 1974 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書  
青森県教育委員会 1975 近野遺跡発掘調査報告書(II)  
青森県教育委員会 1975 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報  
青森県教育委員会 1975 中の平遺跡発掘調査報告書  
青森県教育委員会 1976 千歳遺跡13発掘調査報告書  
青森県教育委員会 1976 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報  
青森県教育委員会 1976 白山堂遺跡、妻の神遺跡発掘調査報告書

青森県教育委員会	1976	泉山遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会	1977	鳥海山遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会	1977	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会	1977	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報
青森県教育委員会	1977	熊沢遺跡
青森県教育委員会	1978	源常平遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会	1978	高館遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会	1978	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報
青森県教育委員会	1979	羽黒平遺跡
青森県教育委員会	1979	杉の沢遺跡
青森県教育委員会	1979	松元遺跡
青森県教育委員会	1979	近野遺跡(IV)
青森県教育委員会	1979	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報
青森県教育委員会	1979	細越遺跡
青森県教育委員会	1979	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報
青森県教育委員会	1980	碇ヶ関村古館遺跡
青森県教育委員会	1980	大面遺跡
青森県教育委員会	1980	永野遺跡
青森県教育委員会	1980	長七谷地遺跡
青森県教育委員会	1981	表館遺跡
青森県教育委員会	1981	新納屋遺跡(2)
青森県教育委員会	1981	鷹架遺跡
青森県教育委員会	1981	志民(2)、田ノ上遺跡
青森県教育委員会	1982	免茶沢遺跡
青森県教育委員会	1982	山崎遺跡
青森県教育委員会	1982	右工門次郎塙、三合山、石ノ塙遺跡
青森県教育委員会	1982	下北地点原子力発電所建設予定地内試掘調査
青森県教育委員会	1983	長者森遺跡
青森県教育委員会	1983	鴉塙遺跡
青森県教育委員会	1983	垂柳遺跡発掘調査概報
青森県教育委員会	1984	弥栄平(2)遺跡
青森県教育委員会	1984	和野前山遺跡

- 青森県教育委員会 1984 菊座遺跡
- 青森県教育委員会 1965 『四ツ石遺跡調査概報』
- 青森県立郷土館 1971 『縄文式土器のうつりかわり』
- 新谷雄藏 1977 『一本松遺跡』深浦教育委員会
- 荒川正夫 1981 縄繩文文化の編年一惠山式を中心として 北奥古代文化 12号
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 1979 『青森市螢沢遺跡発掘調査報告書』
- 相原淳一 1982 「日計式土器群の成立と解体」『赤い本』創刊号 赤い本同人会
- 荒川正夫 1981 「縄繩文文化の編年惠山式を中心として」北奥古代文化 12号
- 秋田県若美町教育委員会 1983 横長根A遺跡第2・3次発掘調査略報
- 伊東信雄 1955 東北 日本書講座
- 伊東信雄 1968 東北地方II 弥生式土器集成 本編2
- 伊東信雄 1970 稲作の北進 古代の日本 8
- 伊東信雄 1979 青森県田舎館遺跡出土の土器とその性格 長馬考古資料館考古学研究紀要1
- 伊東信雄 須藤隆 1982 瀬野遺跡
- 伊東信雄 1979 網走市大曲出土の船形土器の文様と編年の位置 北海道考古学 15
- 伊東信雄 1973 水沢の弥生文化 水沢市史 1
- 伊藤玄三 1961 「東北日本における弥生時代の基制」『文化』第25卷3号
- 伊藤玄三 1966 東北 日本書 III
- 伊藤玄三 1967 東北地方における弥生文化の問題点 東日本弥生時代遺跡地名表—東北地方
- 
- 石附三喜男 1973 「擦文式文化における墳墓の様相」『古代文化』第25卷2・3号
- 石附三喜男 1977 縄繩文式土器と擦文式土器 地方史アーマル 6
- 一関市教育委員会 1977 谷起島遺跡第一次発掘調査報告書
- 市川金丸 1973 『是川堀田遺跡発掘調査報告書』八戸教育委員会
- 市川金丸・木村鉄次郎 1984 「青森県松石橋遺跡から出土した弥生時代前期の土器」「考古学雑誌」 69-3
- 一条孝夫 1973 「縄文時代における動物遺伝体に関する一考察—特に狩獵具との関連において」
- 福島考古 14 福島考古学会
- 石本省三・菅原健史 1968 紅葉山砂丘における縄繩文期の遺跡 北海道の文化
- 石本省三他 1981 『尾白内縄文遺跡の調査報告』森町教育委員会
- 岩本義雄 1971 佐井村史 上
- 岩本義雄・天間勝也・三宅徹也 1979 宇鉄II遺跡発掘調査報告書（青森県立郷土館）

- 板橋範芳他 1979 大館市史（大館市教育委員会）
- 石橋孝夫・清水雅男 1983 「紅葉山33号遺跡発掘調査報告書」石狩町教育委員会
- 石橋次雄・後藤秀彦・管訓章・佐藤訓敏 1980 十勝川中流域の遺跡群 北海道考古学 16
- 岩手県立博物館 1982 「岩手の土器」県内出土資料の集成
- 稻野彰子 1983 「岩版」縄文文化の研究 9
- 稻野祐介 1983 「岩偶」縄文文化の研究 9
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』
- 岩手県教育委員会 1981 『東裏遺跡』岩手県文化財調査報告書第50集
- 岩手県教育委員会 1980 『岩手県文化財調査報告書第51集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII(西田遺跡)』
- 磯崎正彦 1964 「後期縄文式土器」「日本原始美術」1
- 宇田川洋 1977 「北海道考古学2」
- 江坂輝彌 1955 「縄文文化の終末とそれ以降の文化」『奥羽史談』6—1
- 江坂輝彌 1955 「各地域の縄文式土器一東北一」『日本考古学講座』3
- 江坂輝彌 1967 下北半島の先史・原始時代遺跡「下北」
- 江坂輝彌 1967 青森県剣吉荒町遺跡略報
- 江坂輝彌・村越潔 1967 下北郡川内町宿野部樋ノ木平遺跡 下北
- 江坂輝彌 1982 「円筒式土器に伴う土偶」『縄文土器文化研究序説』
- 江坂輝彌・村越潔 1967 下北郡川内町宿野部樋木平遺跡『下北—自然・文化・社会』
- 江坂輝彌・高山純・渡辺誠 1965 青森県九戸郡岩陰遺跡発掘調査報告 石器時代
- No. 7
- 江坂輝彌編 1970 「石神遺跡」森田村教育委員会
- 江別市教育委員会 1980 元江別遺跡群
- 江別市教育委員会 1980 元江別遺跡群の発掘
- 遠藤勝博 1981 「大瀬遺跡」二戸市 23集
- 大場利夫・扇谷昌康・竹山輝雄 1962 白老郡虎杖浜遺跡の発掘について 北方文化研究報告
- 17
- 大場利夫・千代繁 1966 周辺地域の情勢 北海道 日本考古学III
- 大塚初重 1974 「土壤一とくに弥生時代と古墳出現期について」『日本考古学の現状と課題』
- 大場利夫他 1963 「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』第19輯
- 大迫町教育委員会 1979 『立石遺跡』大迫町文化財報告書 3
- 大沼忠春 1980 「統縄文文化」『北海道考古学講座』みやま書房

- 小山正忠・竹原秀雄 1976 日本色彩研究所『新版標準土色帖』(5版)
- 小田野哲憲 1983「上野B遺跡」一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書—IV—
- 小笠原好彦 1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究』考古篇
- 小笠原忠久 1984「恵山貝塚」(尻岸内町教育委員会)
- 葛西勲 1969 青森市沢山1号遺跡調査概報 考古学ジャーナル32
- 葛西勲 1970「三角形岩版考」うとう 74
- 葛西勲 1972 青森県平賀町掘合II号遺跡調査報告書(平賀町教育委員会)
- 葛西勲 1976 井沢遺跡(平賀町教育委員会)
- 葛西勲 1979「第VI章 後期編」『螢沢遺跡』青森市螢沢遺跡発掘調査団
- 葛西勲 1979 外崎沢(1)遺跡(脇野沢村教育委員会)
- 葛西勲 1979 弥生式土器文化 螢沢遺跡(青森市螢沢遺跡調査団)
- 葛西勲 1982 垂柳遺跡「S 56年度遺跡確認調査報告書」(田舎館村郷土史研究会)
- 葛西勲・高橋潤 1983 「丑盛の調査(第一次)五輪野遺跡発掘調査報告書、尾上町教育委員会、調査報告書第5集。
- 葛西勲・高橋潤 1984 「駒泊遺跡」平賀町教育委員会15集
- 亀ヶ岡文化研究会 1979 新郷村畠畠遺跡の調査
- 加藤晋平・澤四郎編 1982『縄文土器大成第5巻 続縄文』
- 加藤晋平・小林達雄・藤本強編 1982『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』
- 加藤邦雄他 1983『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会
- 加藤稔 1978 山形の弥生式土器
- 金子拓男 1983「三角形土版、三角形岩板」縄文文化の研究9 加藤晋平・小林達夫・藤本強編
- 川内町教育委員会 1981『川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書』
- 神沢勇一 1956「墳墓一東日本」『日本考古学講座』4
- 北上市教育委員会 1978『八天遺跡』北上市文化財報告書 24
- 木村英明 1968 紅葉遺跡遺跡
- 木村英明 1975 続縄文時代の墓壙群の研究
- 木村英明 1976 続縄文文化の生産技術 どるめん10
- 木村忠 1981『埋甕—古代の出産習俗』
- 桐原健 1983「埋甕」縄文文化の研究9
- 菊池徹夫 1978「恵山式と江別式 続縄文文化編年試論」『北奥古代文化』第10号
- 菊池義次 1965「東日本弥生文化における葬制の問題」『歴史教育』

- 興野義一 1960 秋田県の大洞A'式に関する小知見 東北考古学 1
- 興野義一 1978 宮城県大穴遺跡の弥生式土器
- 草間俊一 1958 盛岡市史 先史期（盛岡市教育委員会）
- 草間俊一 1974 『崎山弁天遺跡』岩手県樋町教育委員会
- 草間俊一 1978 岩手県の弥生文化
- 鉾路市教育委員会 1962 「東鉾路貝塚発掘調査報告書No.1」『東鉾路』
- 工藤竹久 1968 下北半島尻屋伊間遺跡 考古学ジャーナル23
- 工藤竹久 1978 東北北部における弥生時代の諸問題
- 工藤国雄 1978 弘前市清水森西遺跡出土の続縄文式土器 考古風土記 3
- 小島俊彰 1983 「縄文文化の研究」9 縄文人の精神文化
- 児玉作左エ門・大場利夫 1953 「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第8輯
- 児玉作左エ門・大場利夫 1954 「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』第9輯
- 小林達雄 1972 「縄文土器」『日本原始美術大系』1
- 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』 93
- 小林・泉拓良 1977 「縄文土器編年表」『日本原始世界陶磁全集』1
- 米田耕之助 1983 「土版」縄文文化の研究 9
- 佐藤敏也 1969 日本における稻の初現 考古学ジャーナル 35
- 佐藤敏也 1971 日本の古代米
- 佐原真 1970 土器の話(1) 考古学研究 16—4
- 佐原真 1981 「持論—縄文施文法入門」『縄文土器大成』3
- 佐原真 1970 「縄文土器II」『日本の原始美術』2
- 斎藤忠・上野佳也 1974 「縄文時代編年表」『日本考古学の視点』
- 坂上克弘・石井寛 1976 「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録』第1冊 港北ニュー タウン埋蔵文化財文化財調査団
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式土器」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 西蓮寺健 1978 千歳地方における続縄文文化 苗別川流域における考古学的調査
- 西蓮寺健 1979 ウサクマイ遺跡とその周辺における考古学的調査
- 重松和男 1971, 1972 「北海道の古墳墓について」『北方文化研究』第5号、第6号
- 白石市史編さん委員 1976 『白石市史 別巻 考古資料篇』
- 昭内昭男 1983 「4 施文原体貝殻文」『縄文文化の研究』III

- 設乗博己 1983 「土製耳飾」縄文文化の研究 9
- 須藤隆 1970 「青森県大畠町二枚橋遺跡出土の土器・石器」『考古学雑誌』第56巻第2号
- 須藤隆 1973 土器組成論 考古学研究 19—4
- 須藤隆 1974 青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について 日本考古学・古代史論集
- 須藤隆 1976 亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立 考古学研究23-2
- 須藤隆 1983 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」
- 須藤隆 1984 「東北古代稻作に関するシンポジウム発表資料」東北稻作史研究会
- 鈴木克彦 1978 青森県の弥生時代終末期の土器 考古風土記3
- 鈴木克彦 1978 青森県の弥生式土器集成 I 考古風土記3
- 鈴木克彦 1979 青森県の弥生式土器集成 II 考古風土記4
- 鈴木克彦 1980 青森県の弥生式土器集成 III 考古風土記5
- 鈴木克彦 1981 青森県の弥生式土器集成 IV 考古風土記6
- 鈴木克彦 1982 「風韻堂コレクション、岩偶、亀形土製品、土器片利用の円板」調査研究年報  
7 青森県立郷土館
- 鈴木克彦 1983 「青森県松石橋遺跡出土の弥生式被龍土器」考古風土記 8号
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識III縄文』
- 鈴木保彦 1984 「集落の構成」『季刊考古学』第7号
- 芹沢長介 1958 縄文土器 世界陶磁全集 1
- 芹沢長介 1960 石器時代の日本 (筑地書館)
- 芹沢長介・林謙作 1965 「岩手県蛇王洞窟」『石器時代』第7号
- 芹沢長介編 1979 岐下聖山遺跡
- 橋善光・山本一雄 1967 青森県むつ市江桜沢遺跡調査概報うそり
- 橋善光 1968 下北半島の縄文土器に後続する土器 北海道考古学 4
- 橋善光 1970 青森県佐井八幡堂の弥生式土器について 北海道考古学 6
- 橋善光 1971 「青森県尻屋念佛間の弥生式土器について」北海道考古学 7
- 橋善光 1972 「下北半島の弥生中期後半以降の土器」北海道考古学 8
- 橋善光 1974 「青森県の弥生式土器文化」「うそり」11号
- 橋善光・奈良正義 1974 青森県大間貝塚調査概報 考古学ジャーナル 99
- 橋善光 1977 下北古代文化
- 橋善光 1979 むつ市城ヶ沢大川目遺跡 むつ市文化財調査報告 5
- 橋善光 1979 入門講座 弥生土器 北東北1~4 考古学ジャーナル 160、162、166、168  
号

- 橋善光 1982 「下北半島の古代における北海道系土器の遺跡」 北奥古代文化第13号
- 橋善光 1983 濑野遺跡発掘調査報告書、脇野沢村埋蔵文化財調査報告書第2集
- 田中国男 1972 「弥生式・縄文式接触文化の研究」
- 武田良夫 1978 岩手県における弥生式土器について 考古風土記 3
- 高橋正勝 1975 後北式土器実測図集
- 高橋正勝・上田亜佐子・直井孝一・園部真幸 1979 江別太遺跡
- 高橋正勝 1979『江別太遺跡』江別市文化財調査報告書
- 高橋正勝 1980『アヨロ 恵山文化の墓』白老町教育委員会
- 高橋正勝 1981『元江別遺跡群』江別市文化財調査報告書
- 高橋潤 1976「鐸型土製品について一考」うとう、82、青森郷土会
- 高橋和樹・内山真澄・加藤邦雄・土田亜佐子 1976 濑棚南川遺跡(瀬棚町教育委員会)
- 高田和徳 1984「上野遺跡—昭和58年度発掘—」岩手県一戸町教育委員会
- 田村誠一 1968 薬師II号遺跡 岩木山
- 田村誠一 1968 大曲III号遺跡 岩木山
- 千代肇・加藤邦雄・佐藤雅治 1977 西桔梗(函館市教育委員会)
- 千代肇 1956 北海道奥尻島遺跡調査概要 考古学雑誌 41-2
- 千代肇 1962 弥生文化の北方伝播とそれをめぐる課題 考古学研究 33
- 千代肇 1962「弥生文化の北方伝播とそれをめぐる課題」『考古学研究』第9巻1号
- 千代肇 1964 北海道縄文文化編年の新資料について 日本考古学協会第30回総会発表要旨
- 千代肇 1965「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯
- 千代肇 1976「フゴッペ洞窟人の南進」『どるめん』11号
- 千代肇 1978 弥生時代における恵山文化 北奥古代文明 10
- 千代肇・石本省三 1981 尾白内、北海道森町教育委員会
- 千代肇 1984「続縄文文化」「続縄文時代の生活様式」考古学ライブラリー 25, 29
- 千代肇 1974「西桔梗」函館圏流通センター建設用地内遺跡調査報告書」函館圏開発事業団
- 坪井正五郎 1906「日本石器時代人民の耳飾」東京人類学会雑誌 21-241
- 坪井清足 1978「武器装身具」『日本原始美術大系』5(47頁中段)、講談社
- 角鹿扇三・二本柳正一・佐藤達夫・渡辺兼庸 1960「早稻田貝塚」『上北考古会報告』1
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972『常呂』東京大学文学部
- 東京大学文学部常呂研究室編 1977『岐阜第三遺跡』
- 東京大学文学部 1982「考古学資料図録」vol. 1、63頁下段、J007
- 名取武光 1933 北海道江別兵村に於ける堅穴式墳墓の発掘報告 考古学雑誌 23-11

- 中村五郎 1973 北海道南部の続縄文土器編年 北海道考古学 9
- 中村五郎 1978 東部・西部弥生式土器と続縄紋土器の編年—福島県の資料を基準として—
- 中村良幸 1979「立石遺跡」岩手県大迫町教育委員会
- 成田滋彦 1981「後期の土器、青森県の土器」縄文文化の研究 4
- 名久井文明 1971「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』第57巻第2号
- 名久井文明 1974「北日本縄文式早期編年に関する一試考—青森県三戸町寺の沢遺跡出土遺物について—」『考古学雑誌』第60巻第3号
- 名久井文明 1979「北日本縄文時代早期編年に関する一試考(II) 北海道早期後半の吟味」『考古学雑誌』第65巻第1号
- 直良信夫 1968「狩獵」法政大学出版局
- 長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5 昭和51・52・53年度』
- 二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 1957「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻第2号
- 二本柳正一・佐藤達夫 1961「六ヶ所村出土早稲田第五類土器」『上北考古会報告』1
- 二本柳正一・佐藤達夫 1961「六ヶ所村尾駒出土の土器」『上北考古会報告』2
- 新村出編 1980「広辞苑(第二出版補訂版)」岩波書店
- 西村正衛 1965「埋葬」「日本の考古学」
- 野村崇 1965 北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡 石器時代 7
- 能登健 1983「土偶」縄文文化の研究 9
- 能登町教育委員会 1984『真駒遺跡発掘調査概報』
- 林謙作 1962「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号
- 林謙作 1965 東北 日本の考古学II
- 林謙作 1976「亀ヶ岡文化論 東北考古学の諸問題」
- 花泉教育委員会 1971「貝鳥貝塚」草間俊一、金子造昌編
- 平山久夫 1970 山内清男先生と語る 北奥古代文化 3
- 平山久夫編 1975 「北奥の古代文化」
- 藤本英夫 1969「小坂環状列石墳墓」小坂町教育委員会
- 藤本英夫 1971「北の墓(学生社)」
- 藤田亮一 1979「第10章歴史時代第3節遺構外出土遺物」『螢沢遺跡』青森市螢沢遺跡発掘調査団、第356図3は、土師器として扱われたが、時期的には不明な点もあると

報告している。

- 藤村東男 1980「岩手県九年橋遺跡出土の土製耳飾について」『萌木』15
- 藤村東男 1981「岩手県九年橋遺跡出土の円盤状石製品について」『萌木』16
- 藤本強 1983「墓制成立の背景」縄文文化の研究 9
- 北陸中日新聞社 1983「円形に並ぶ巨大木柱根」真鶴遺跡中間報告 9月8日号
- 保坂三郎 1972「是川遺跡出土遺物報告書」八戸市教育委員会
- 菅田実 1983「三内丸山遺跡出土の三角柱状土製品」遺址3
- 馬目順一 1975「1974年の考古学会の動向—弥生時代（東日本）」『考古学ジャーナル』108号
- 峰山巖 1968 恵山式土器 北海道考古学 4
- 三宅徹也 1972「四ツ石遺跡出土遺物から（一）」うとう 78
- 三宅徹也 1975「青森県西津軽郡深浦町吾妻野II遺跡の出土土器について」青森県立郷土館調査研究年報1
- 水野正好 1974「土偶祭式の復原」『信濃』26—40
- 水野正好 1984「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号
- 南久和 1982「金沢市チカモリ遺跡」『考古学ジャーナル』203号
- 三橋公平編 1983「南有珠6遺跡」噴火湾沿岸貝塚遺跡調査報告1、礼輔医科大学解剖学第二講座
- 南川遺跡調査団 1976、1983 漸棚南川遺跡
- 宮城県教育委員会 1982 青木畠遺跡（弥生前期～） 宮城県文化財調査報告書第85集
- 村越潔 1965 東北北部の縄文式に後続する土器 弘前大学教育学部紀要 14
- 村越潔 1968 湯ノ沢遺跡 岩木山
- 村越潔 1968 薬師I号遺跡 岩木山
- 村越潔 1971「円筒土器文化」
- 村越潔 1977「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』
- 村越潔 1982「青森県考古学関係文献目録」
- 森田知忠 1967 北海道の続縄文文化 古代文化 19-2
- 盛岡市教育委員会 1983『大館遺跡群—昭和57年度発掘調査概報』
- 山内清男 1933 日本遠古之文化 IV 縄紋式以後 ドルメン
- 山内清男 1964 縄文式以降の文化 日本原始美術 I
- 山内清男 1964『日本原始美術 I、縄文式土器』
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄文』先史考古学会
- 山本輝久 1977 縄文時代中期末、後期初頭の屋外埋甕について（下）信濃29—12

弥生時代研究会 1979～1982「初」1号～4号。

横山英介・石橋孝夫 1975、1976『ワッカオイ 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書』

石狩町教育委員会

吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎 1979「聖山」七飯町教育委員会

渡辺兼庸 1968 尾上山遺跡 岩木山

渡辺誠 1970「縄文時代における埋甕風習」考古学ジャーナル 40

渡辺誠 1973 縄文時代の漁業(雄山閣)

渡辺誠 1979 図版解説 青森県六ヶ所村出土の弥生式土器 古代文化 31-2

渡辺誠 1982「縄文時代の甕棺」考古学ジャーナル 208



# 写 真 図 版





I区調査前 (N→)



I区調査前 (S→)



II区平坦 (S→)



II区西半部 (N→)

写真1 I、II区近景



II区東半部 ( $N \rightarrow$ )



II区斜面 (W→)



II区斜面 (NW→)



### II区斜面 (SE→)



### III区平坦 (SW→)



III区平坦 ( $w \rightarrow$ )



### III区西半部 ( $E \rightarrow$ )



山区基本履序



II区基本層序

写真2 II、III区遺物、造構、基本層序



↑ III区平坦、斜面 (E→)

III区 (W→)

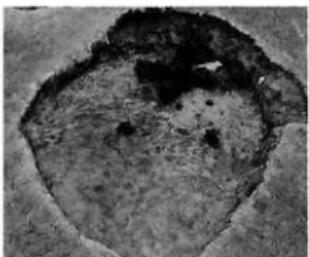


III区完掘 (W→)

↓ III区斜面遺物出土状況



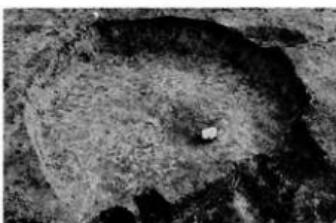
写真3 III区遺構遺物出土状況



第2号竪穴住居跡



第3号竪穴住居跡



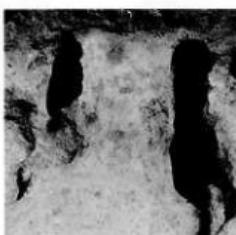
第4号竪穴住居跡



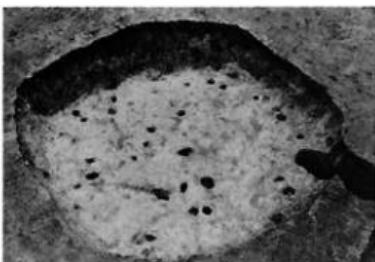
第4号竪穴住居跡炉



第5号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡出入口



第6号竪穴住居跡

写真4・縄文時代竪穴住居跡(1)



第7号竪穴住居跡



第8号竪穴住居跡



第9号竪穴住居跡炉



第10号竪穴住居跡



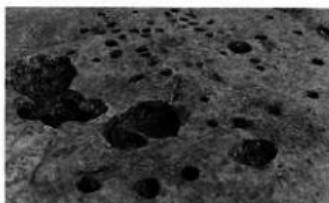
第14号竪穴住居跡



第15号竪穴住居跡炉



第15号竪穴住居跡



第16号竪穴住居跡

写真5 繩文時代竪穴住居跡(2)



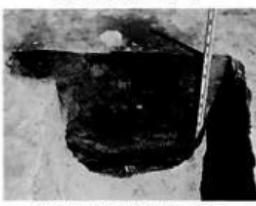
第1号屋外炉



第11号土壤 S→



第59号土壤 S→



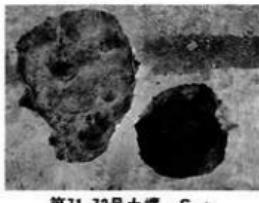
第59、60号土壤土層 S→



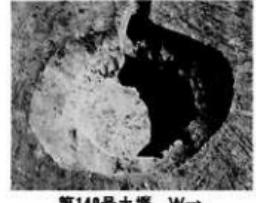
第84号土壤 S→



第89号土壤 S→



第71、72号土壤 S→



第140号土壤 W→



第141号土壤 E→



第152号土壤 E→

写真6 繪文時代土壤(1)



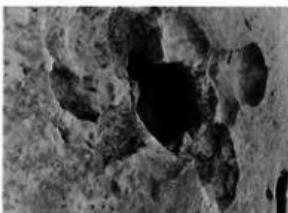
第168号土壤 N→



第184号土壤



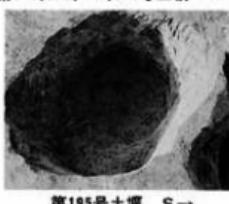
第184、185、186号土壤 E→



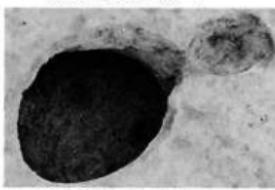
第184、185、186、187号土壤 E→



第189、190号土壤 N→



第195号土壤 S→



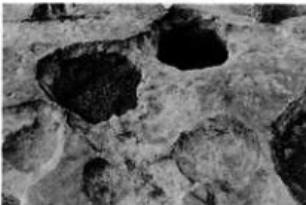
第197号土壤 E→



第211号土壤 E→



III区平坦土壤



第211、216、219号土壤 E→

写真7 漢文時代土壤(2)



第365号土壤



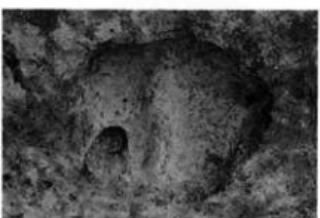
第310号土壤



第371号土壤



第331号土壤



第372号土壤



第362号土壤

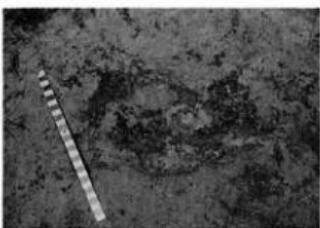


第313号土壤



第313号土壤

写真8 楊文時代土壤(3)



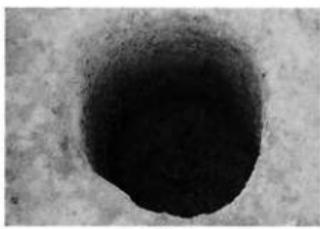
4号柱穴



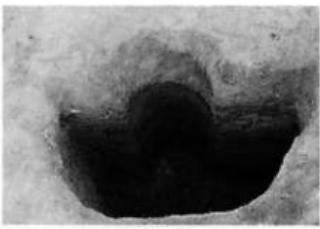
4号柱穴



4号柱穴



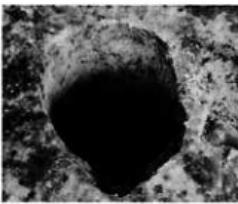
3号柱穴



3号柱穴



3号柱穴



3号柱穴



6号柱穴

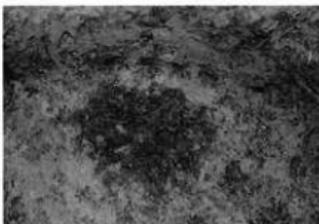
写真9 縄文時代柱穴跡(1)



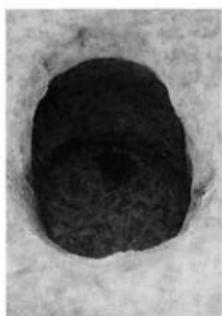
6号柱穴



柱穴跡全景



3号柱穴底面



1号柱穴  
(305号土壤と切り合い)



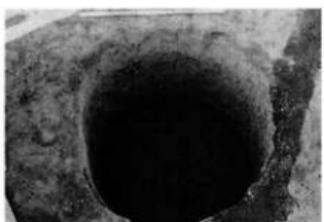
1号柱穴



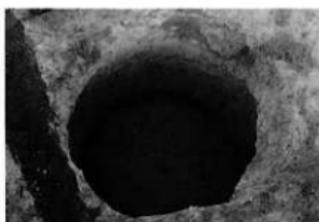
2号柱穴



2号柱穴

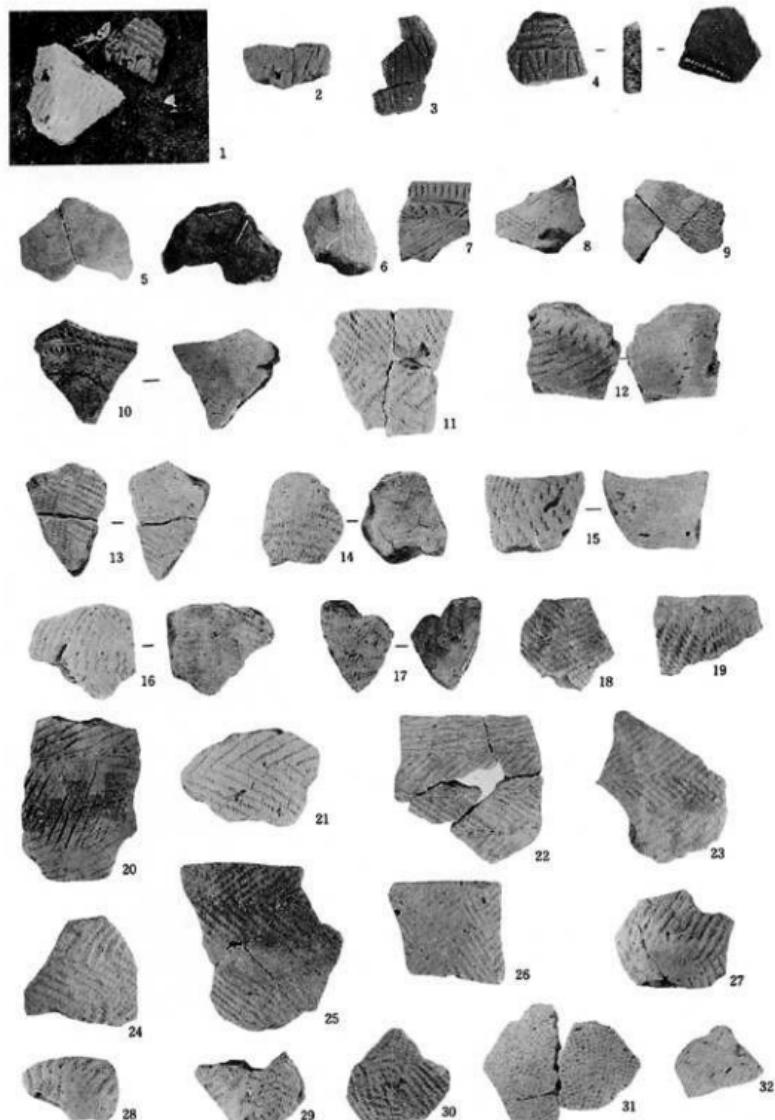


2号柱穴



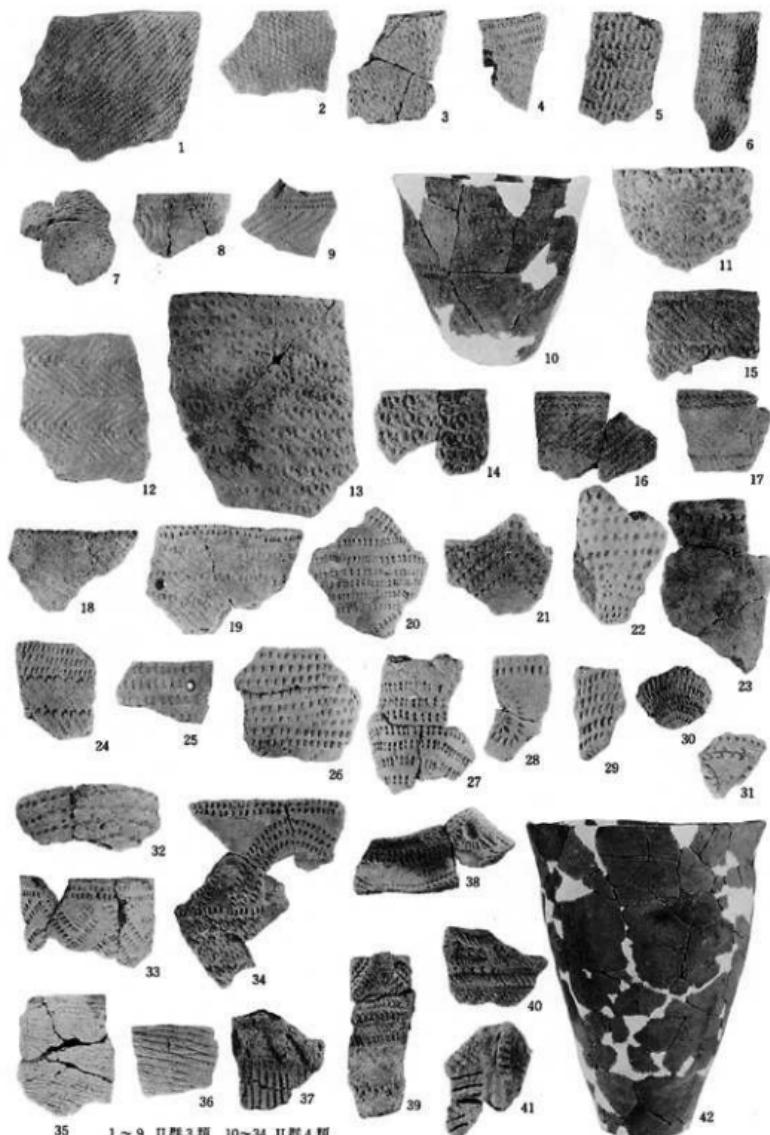
4号柱穴

写真10 繩文時代柱穴跡(2)



1~4 I群1類 6 I群3類 10 I群6類 20 I群7類 5 I群2類  
 7~9 I群4類 11~19 I群7類 21 II群1類 22~24 II群2類 25~32 II群3類

写真11 繪文時代第I, II群土器



1 ~ 9 II群3類 10~34 III群4類  
35~36 II群5b類 37 II群5c類 38,39,41 III群1類 40 III群2類 42 III群3類

写真12 縄文時代第II、III群土器

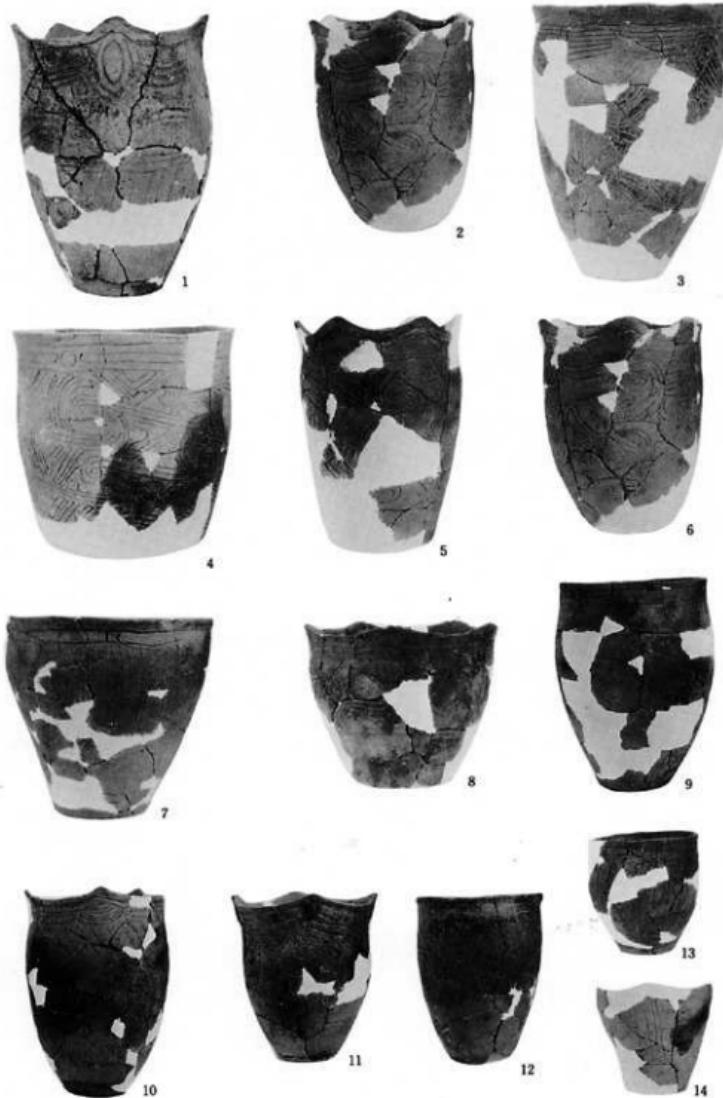


写真13 桶文時代第IV群土器(1)

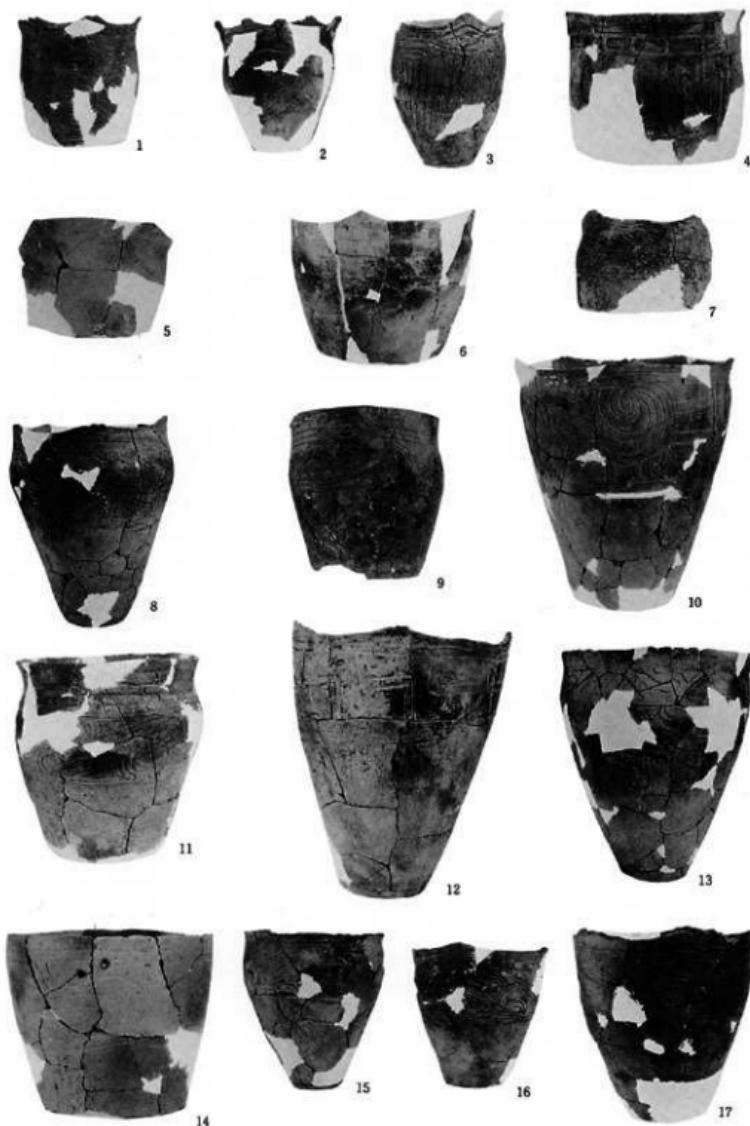


写真14・縄文時代第IV群土器(2)

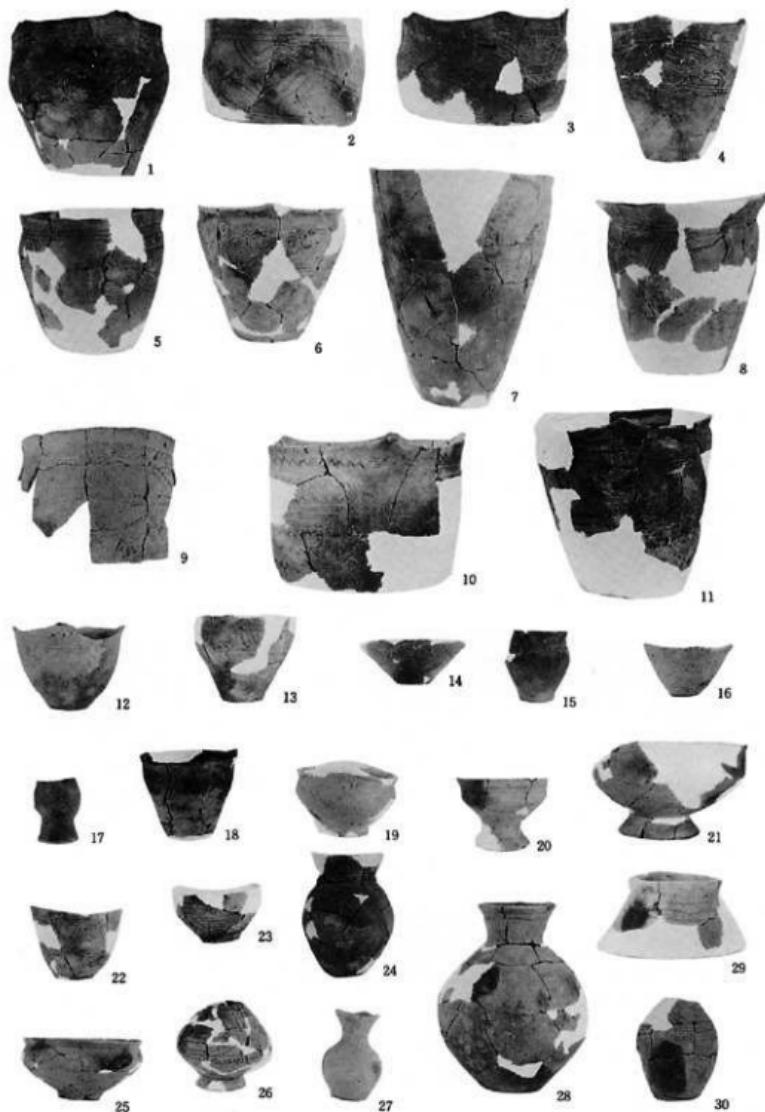


写真15 繩文時代第IV群土器(3)

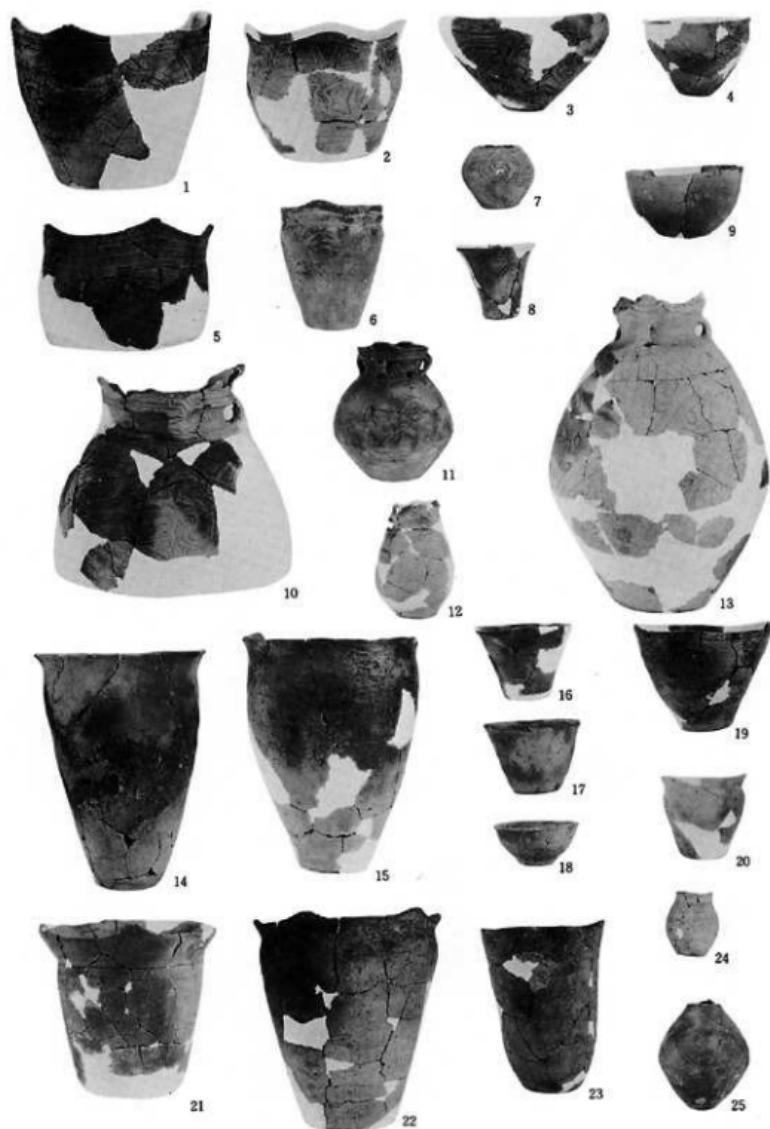
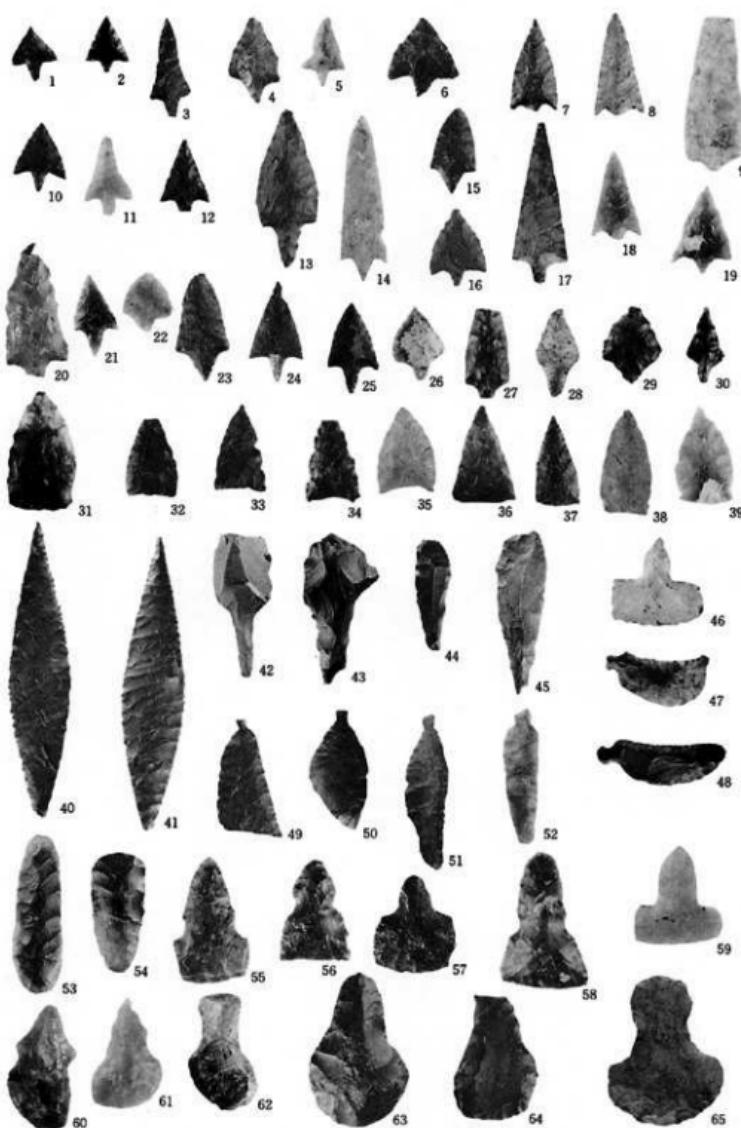


写真16・縄文時代第Ⅳ群土器(4)



A類 1~39、B類 40~41、C類 42~45、D類 46~52、E類 53~65  
写真17 石器(1)

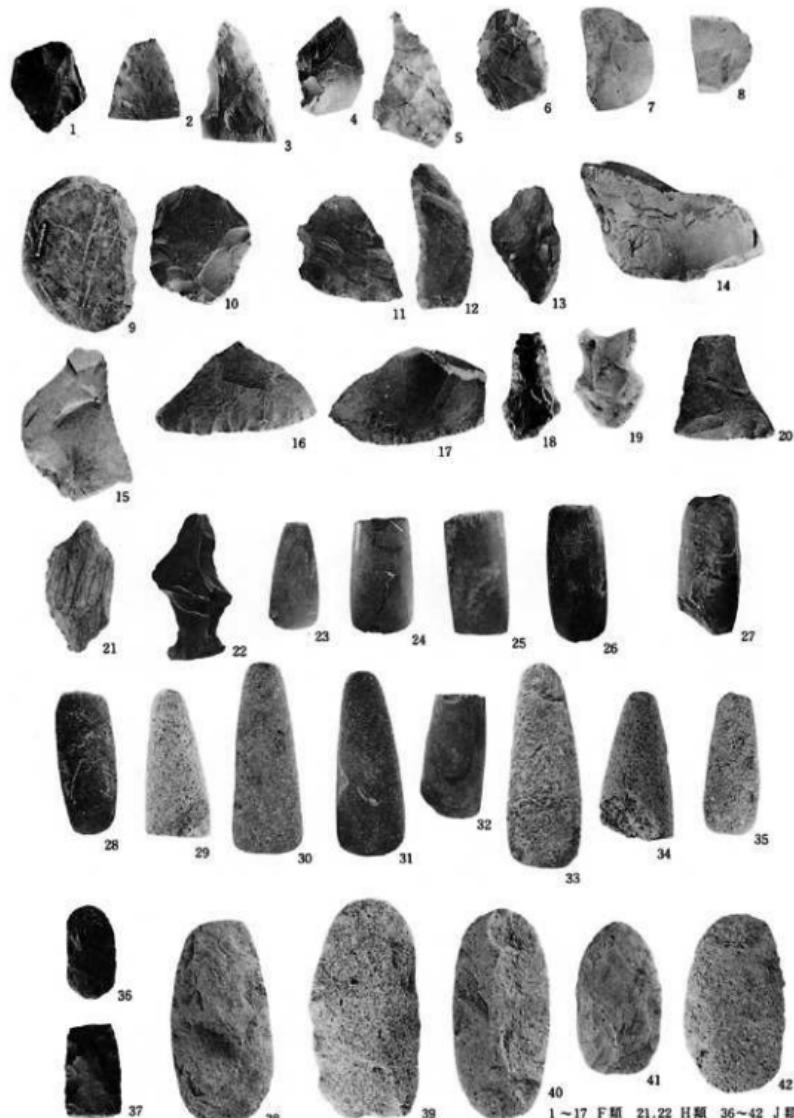


写真18 石器(2)

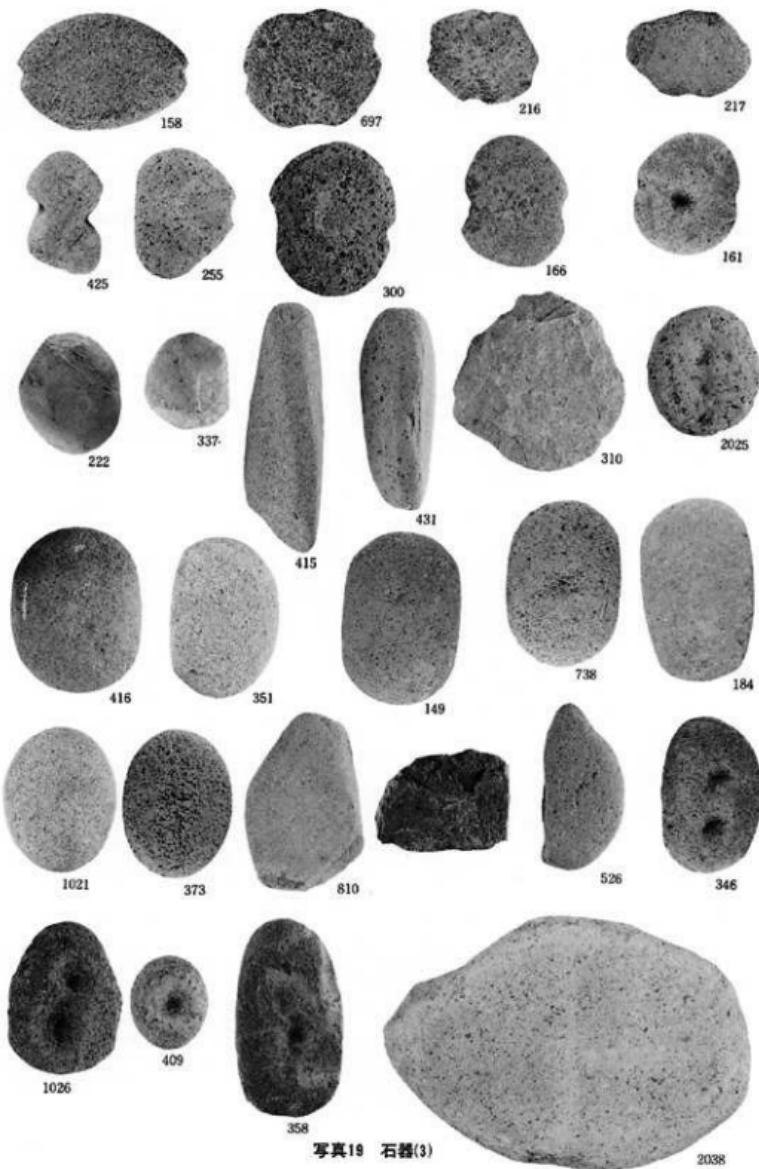


写真19 石器(3)



写真20 石器(4)

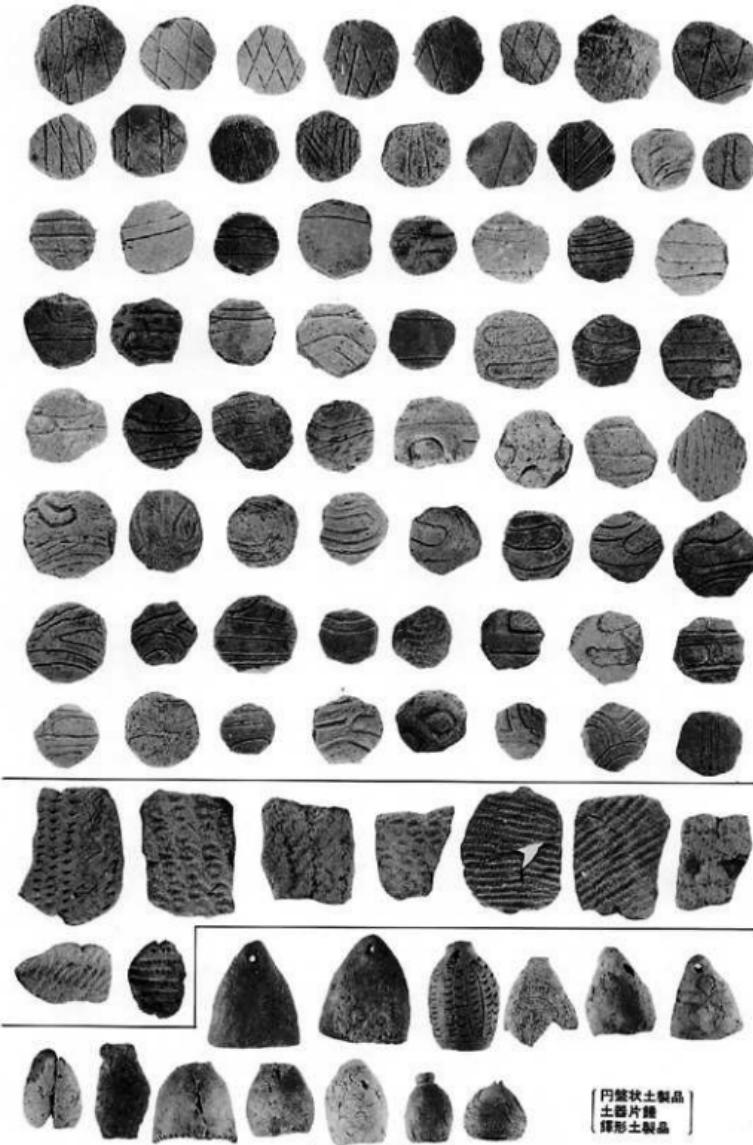


写真21 土製品(1)

〔円盤状土製品  
土器片體  
鋤形土製品〕

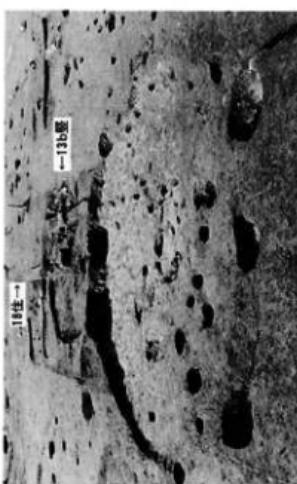


写真22 土製品(2)

第13号 穹穴住居跡遺物出土状況 (NE→)



第13号-a 穹穴住居跡完掘 (E→)



第13号 穹穴住居跡完掘



写真23 弥生時代穹穴住居跡(1)



第20号 穹穴住居跡発掘



第21号 穹穴住居跡発掘



第20号 穹穴住居跡発掘土出土状況



第21号 穹穴住居跡発掘

写真24 弥生時代穹穴住居跡(2)



写真23号 墓穴住居跡地積土 (E→)



写真23号 b 墓穴遺構ヒット内出土物



写真25 墓穴住居跡 (S→)



写真25号 b 墓穴遺構先端 (E→)

写真25 弥生時代墓穴住居跡・墓穴遺構



第14号竪穴造構遺物出土状況（E→）



第14号竪穴造構内ピット出土遺物（S→）



第15号竪穴造構完掘（E→）



第15号竪穴造構遺物出土状況（E→）



第16号竪穴造構完掘（E→）



第16号竪穴造構遺物出土状況（E→）

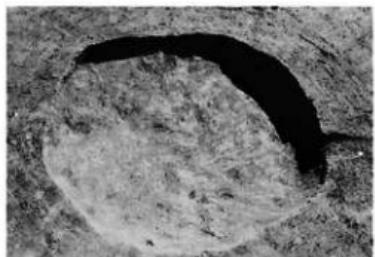


第21号竪穴造構完掘（E→）



第21号竪穴造構内ピット出土遺物（E→）

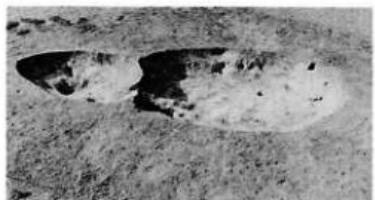
写真26 弥生時代竪穴造構



第4号土壤完掘



第4号土壤堆積土・出土遺物



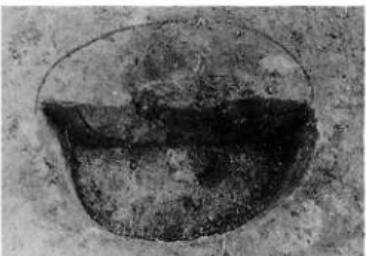
第7号土壤完掘 (W→)



第7号土壤出土遺物 (W→)



第8号土壤



第9号土壤



第9号 烧土



第3号 埋設土器造構

写真27 弥生時代土壤・埋設土器造構

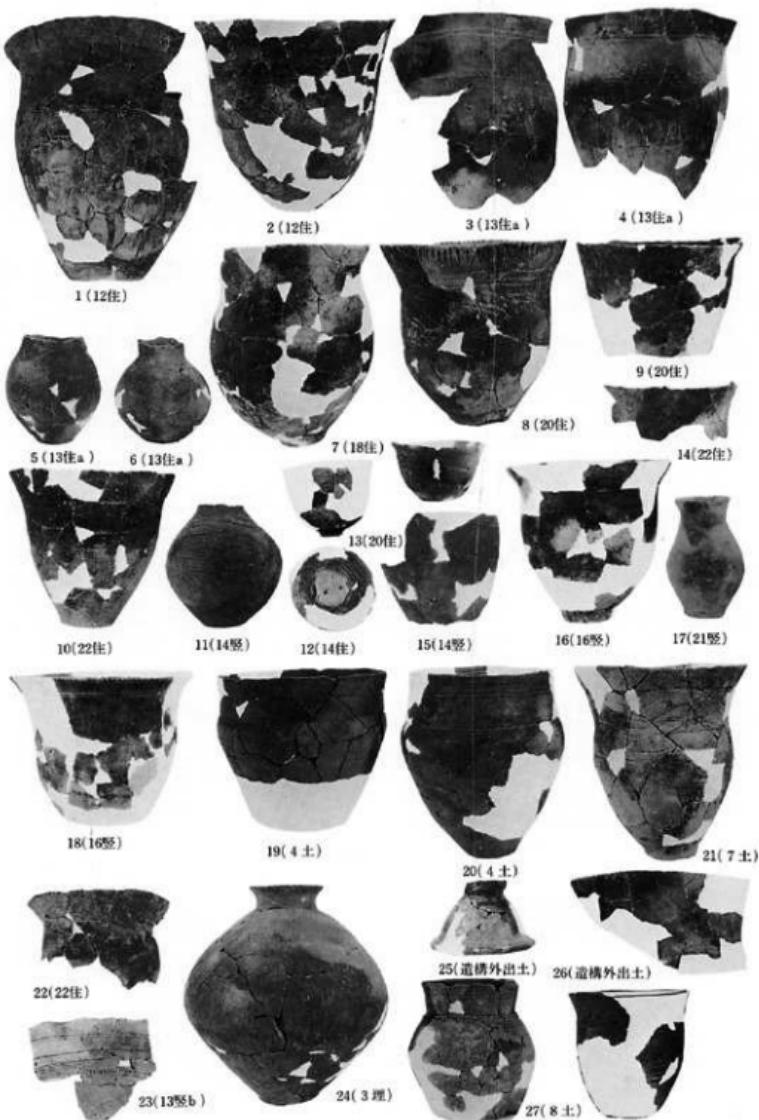


写真28 弥生時代土器(1)

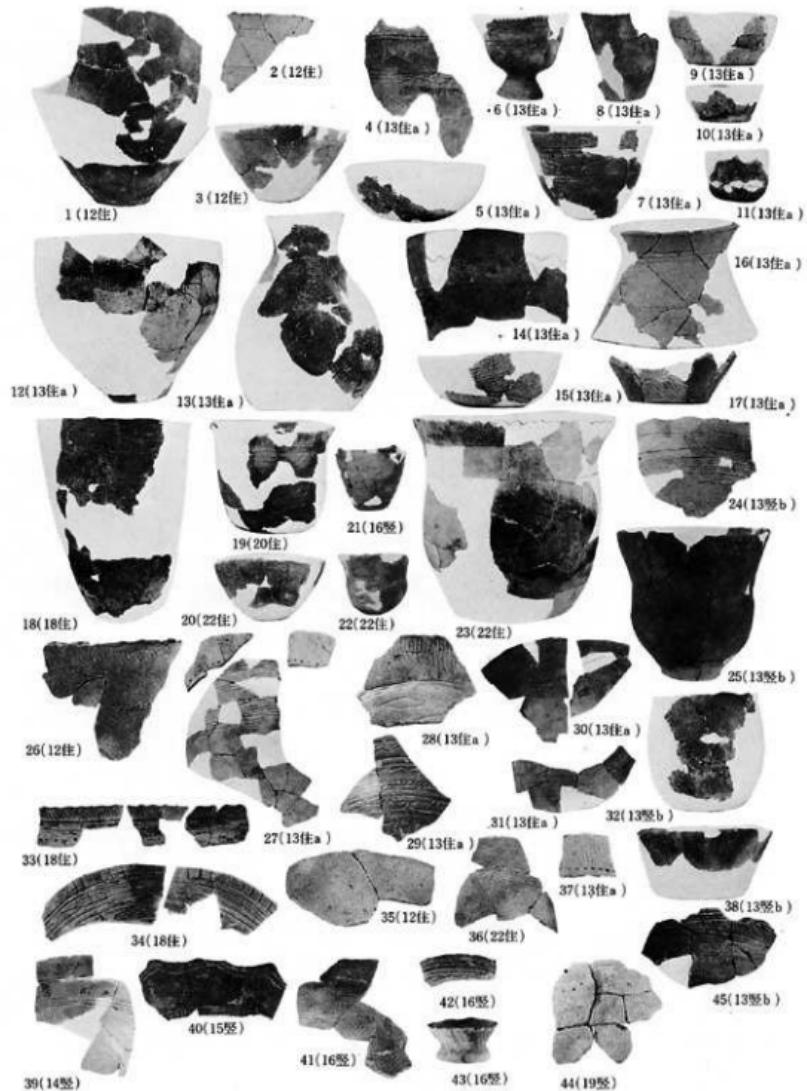


写真29 弥生時代土器(2)

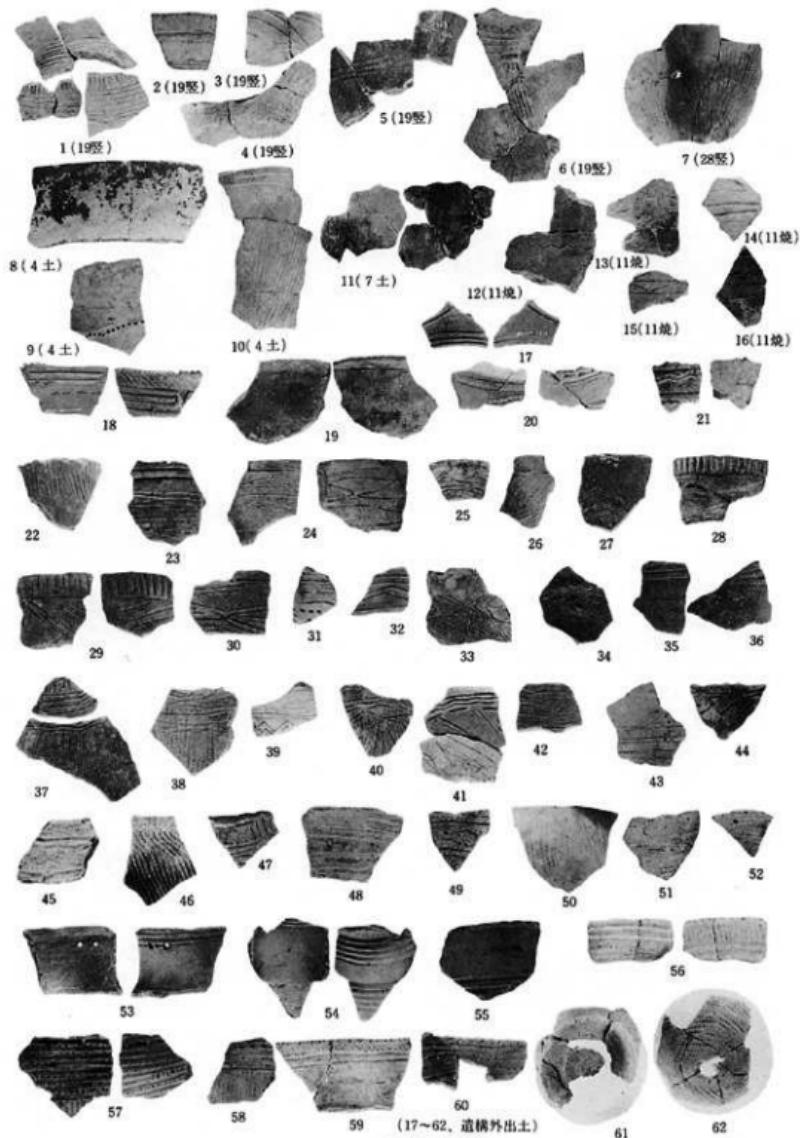


写真30 弥生時代土器(3)

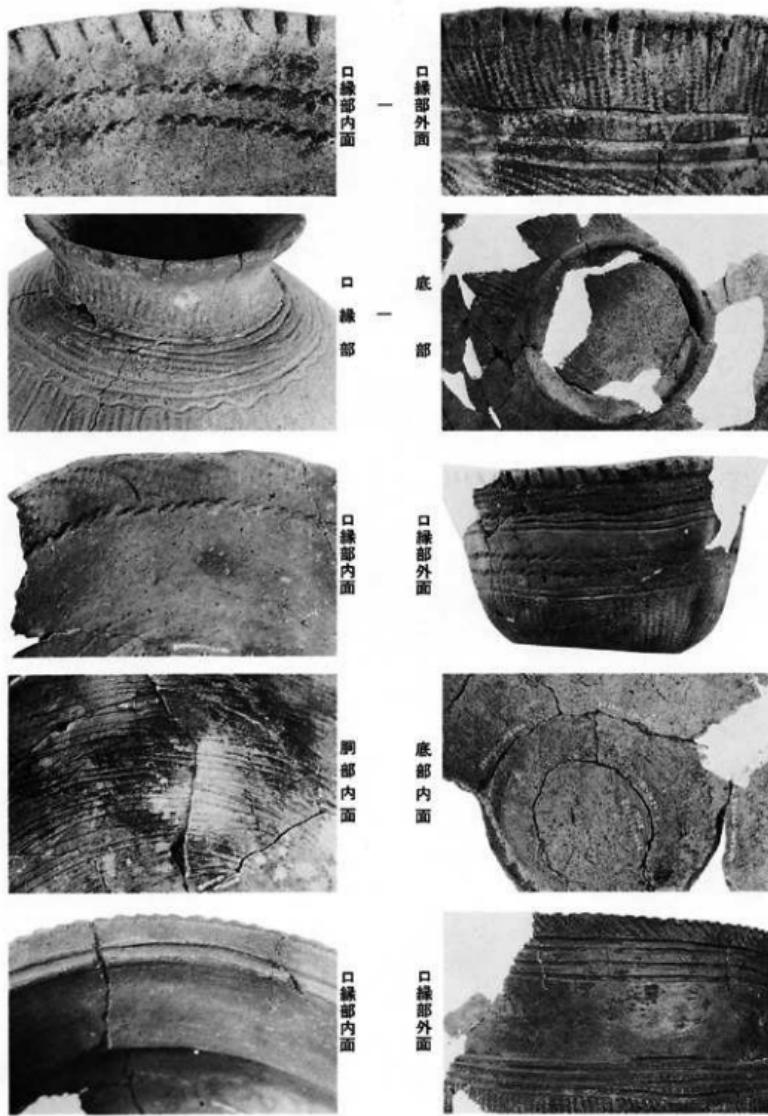


写真31・弥生時代土器(4)細部

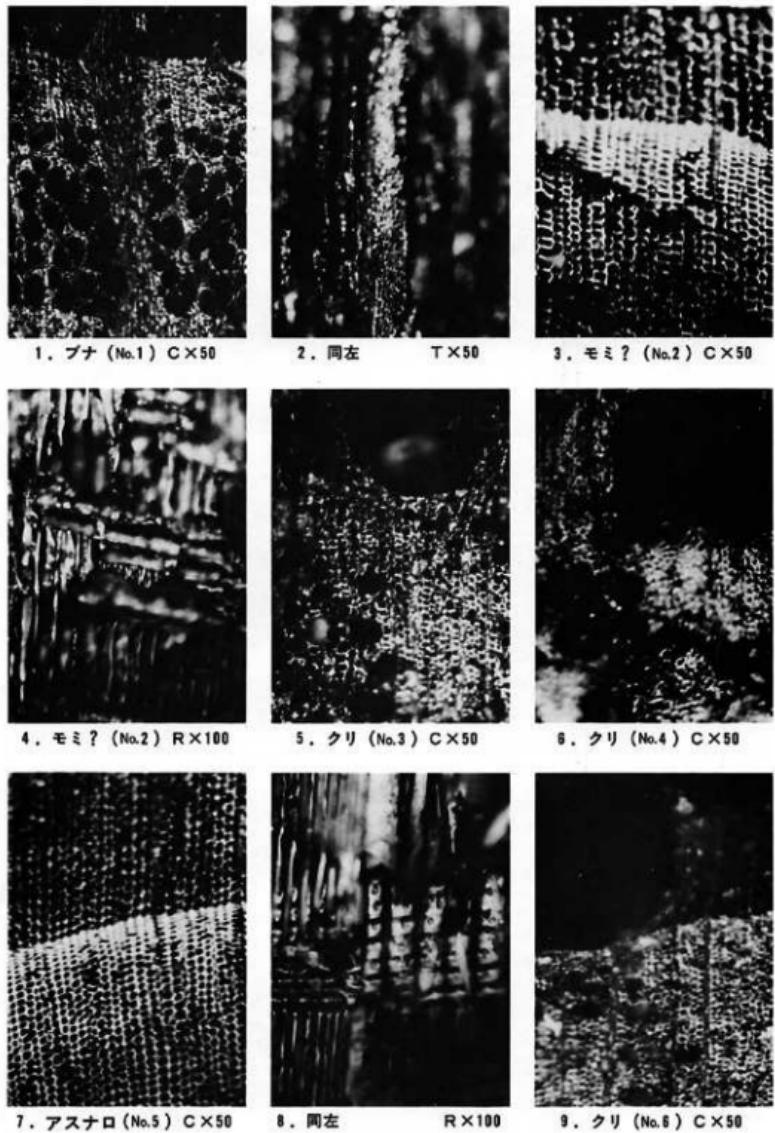
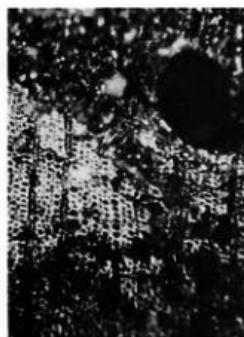


写真32 大石平遺跡(1)出土炭化材(1)



10. クリ (No.8) C ×50



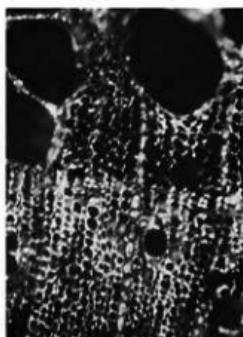
11. アスナロ (No.9) C ×50



12. ケヤキ? (No.14) C ×50



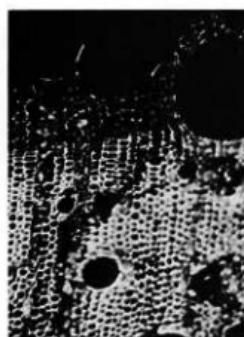
13. クリ (No.17) C ×50



14. ヤチダモ (No.18) C ×50



15. 同左 T ×100



16. ヤチダモ (No.19) C ×50



17. 同左 T ×100



18. クリ (No.21) C ×50

写真33 大石平遺跡(1)出土炭化材(2)



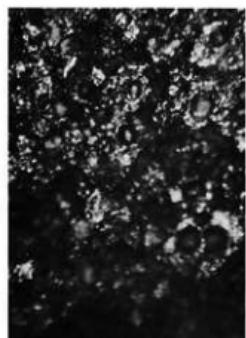
19. ブナ (No.22) C ×50



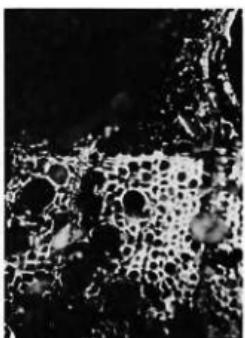
20. 同左 T ×50



21. クルミ殻 (No.23) ×100



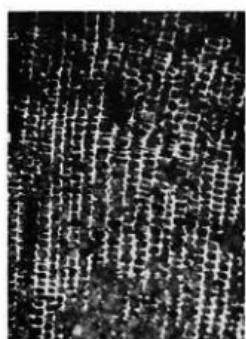
22. 疎? (No.26) ×100



23. クリ (No.28) C ×50



24. 同左 T ×100



25. イチイ (No.27) C ×50



26. 同左 T ×100



27. 同左 R ×100

写真34 大石平遺跡(1)出土炭化材(3)



大石平遺跡(2)遠景



試掘区域全景

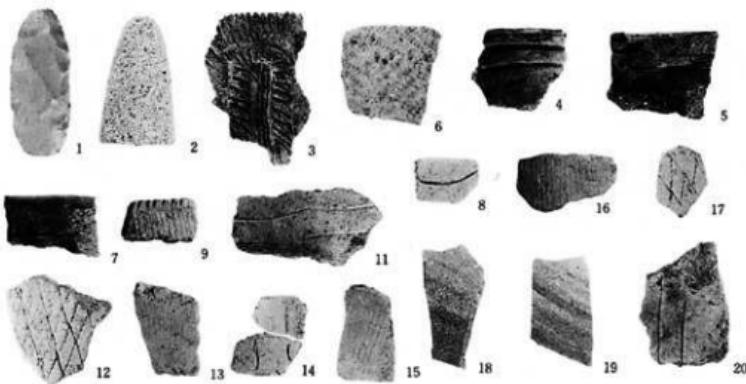


写真35 大石平遺跡(2)調査区域遠景・全景・出土遺物



---

青森県埋蔵文化財調査報告書第90集  
**大石平遺跡発掘調査報告書**

—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—

発行日 昭和60年3月30日

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
発 行 〒030 青森市大字新城市内152-15

印刷所 青森凸版印刷株式会社  
〒030 青森市港町三丁目6-21

---